女鑑

第十五年
第六号



女鑑 第十五年 第六號 目次

口繪

加納子爵の家庭



（加納子爵は舊一宮藩主なり目下大日本體育會々長及赤十字社監事を勤めらる
山高帽を被れるは則ち子爵にして其傍なるは令夫人、其他は令息及令孃なり）

三笠艦長伊知地海軍大佐及看護婦



（其一）



滿洲の演劇（雜錄欄參觀）

（其二）





滿洲の婚禮

（中央なるは新婦なり）

世界各國美人風俗



佛國女優

ラテン型美人

英國上流美人

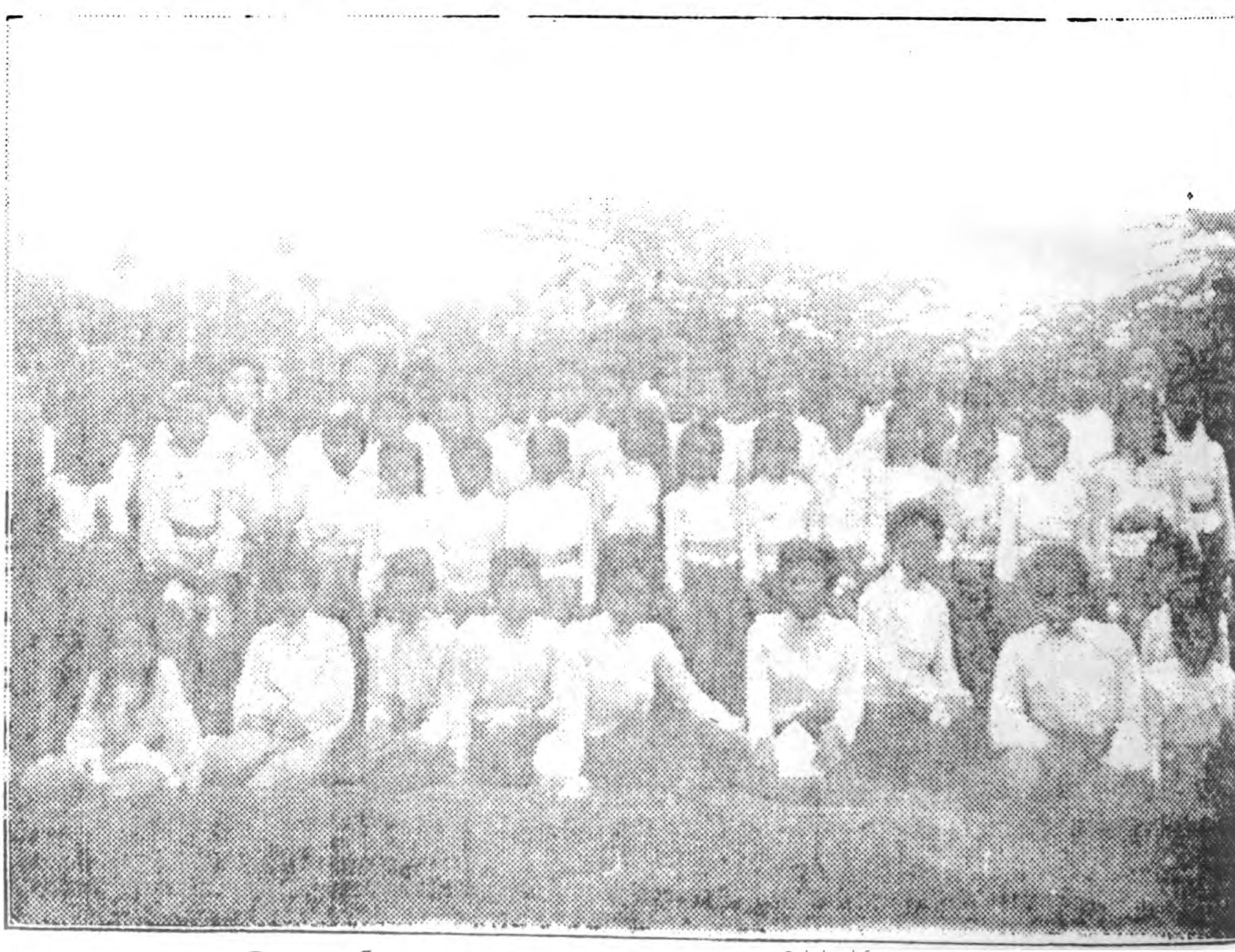
スカンヂナビヤ美人

米國美人

二十年前の東京女學生

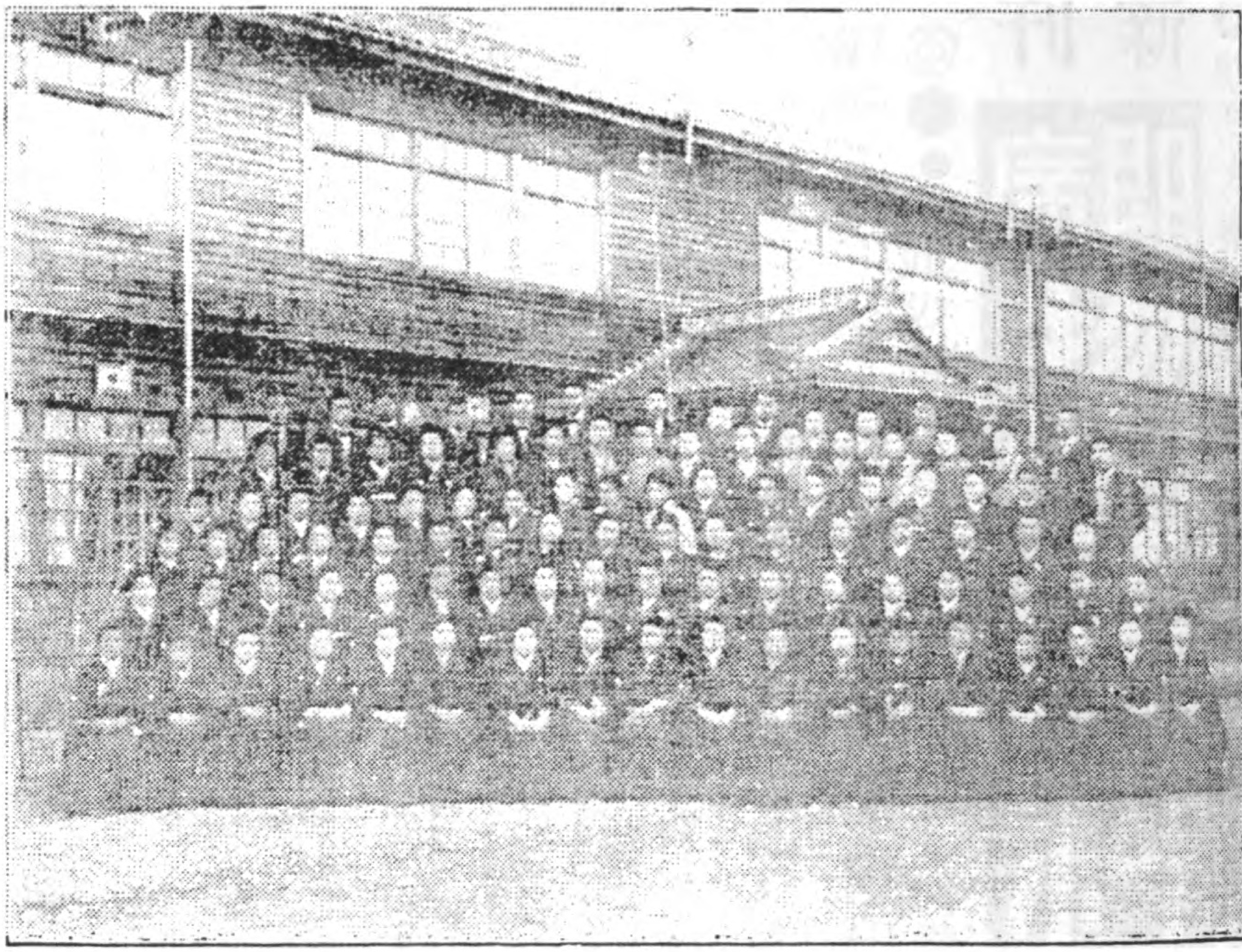


暹羅國盤谷府クィンスクール職員並生徒

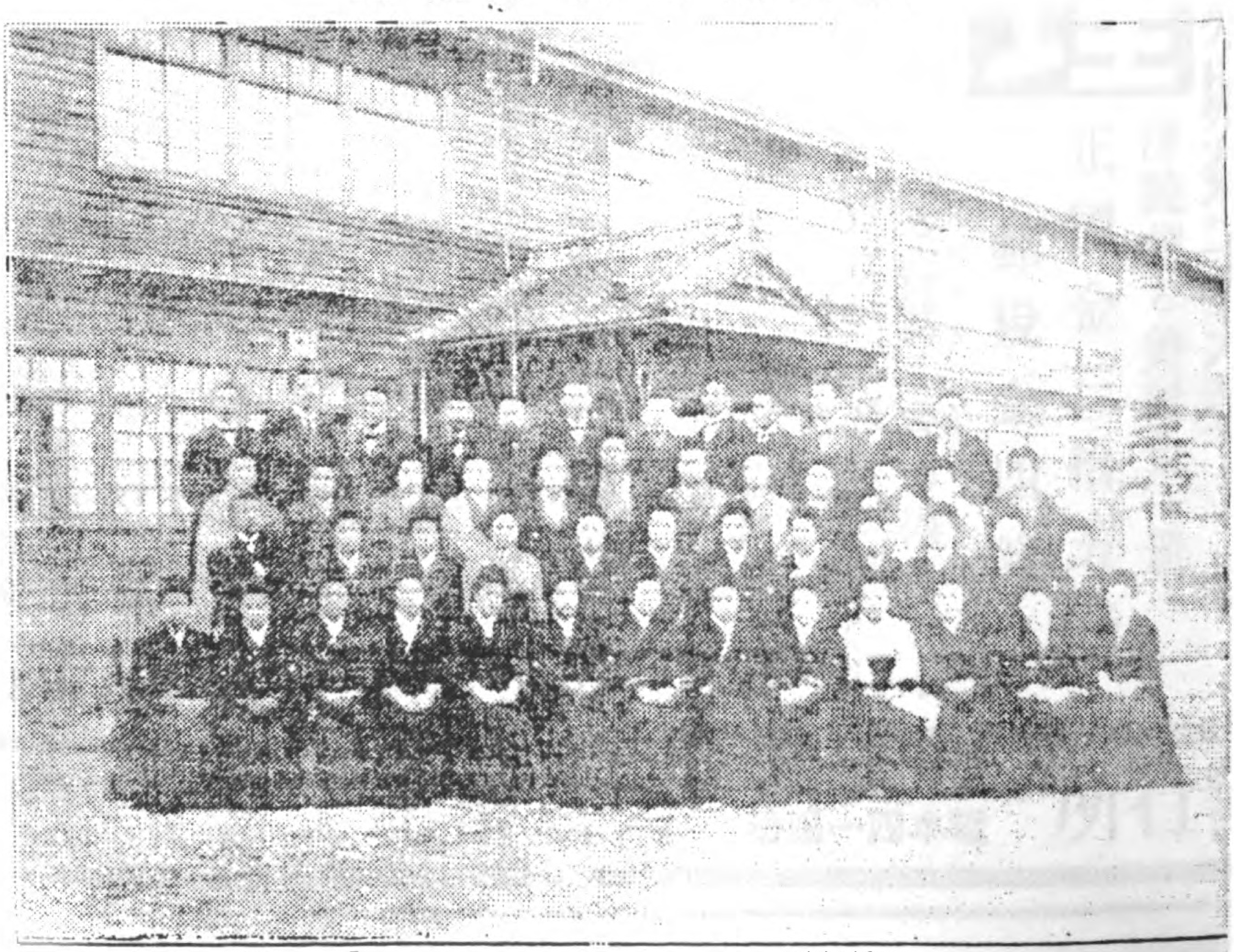


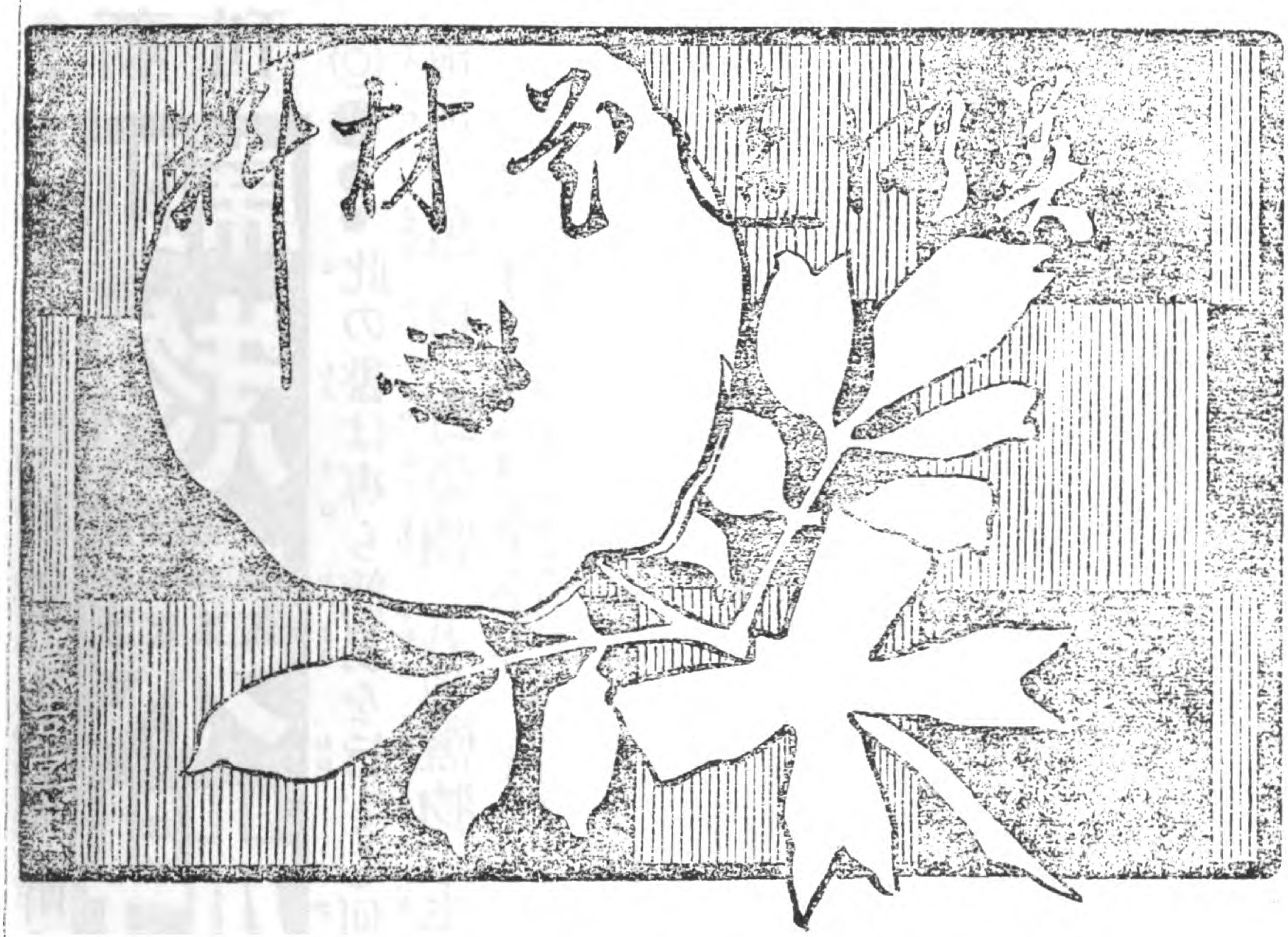
（圖中の日本婦人は中島とみ子河野せい子安井哲子及田邊領事夫人なり）

長野縣上田高等女學校卒業生



同上補習科卒業生





舶來
薄絹

夏期斬新材料

シホン

各種

夏向きの造花材料として最も適當に且つ眼新しき本品を發賣致候へば御入用の方は本雑誌名を書き添へ郵劵五錢を送られ度し見本及本品にて製作せる造花の寫眞版共進呈可仕候

日本女子大學校御用
共立女子職業學校御用
日本女子美術學校御用

造花器械
造花用繪具各種
摘み細工原料
花蕾原料
根掛原料
刺繡用金原平金類
和洋リボン各種

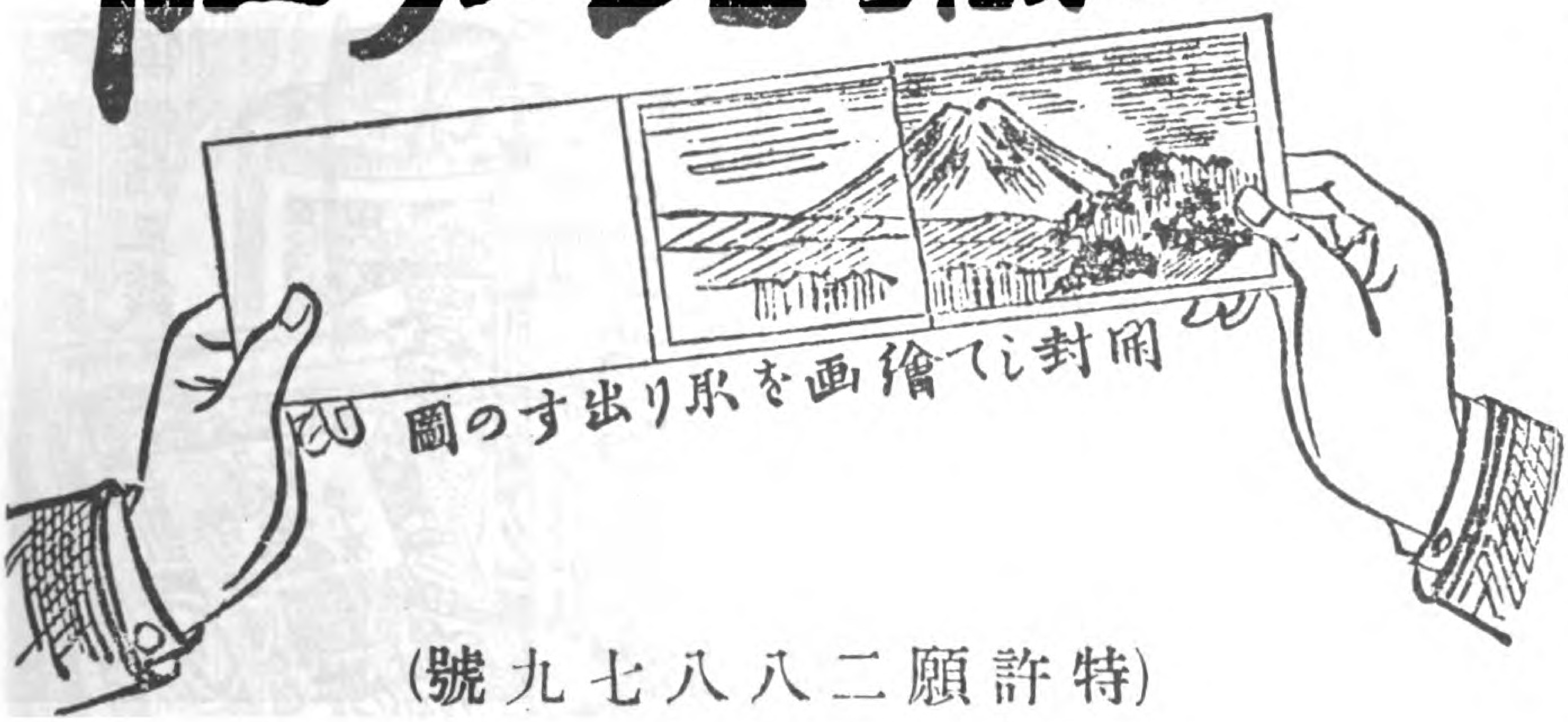
定價表御入用の方は
往復はがきにて申込の事

東京日本橋區横山町
一丁目十六番地

天野卯兵衛商店

（特電話浪花一六四三）

新發明ビレーフート



(特許願二八七九號)

新發明ビレーフート

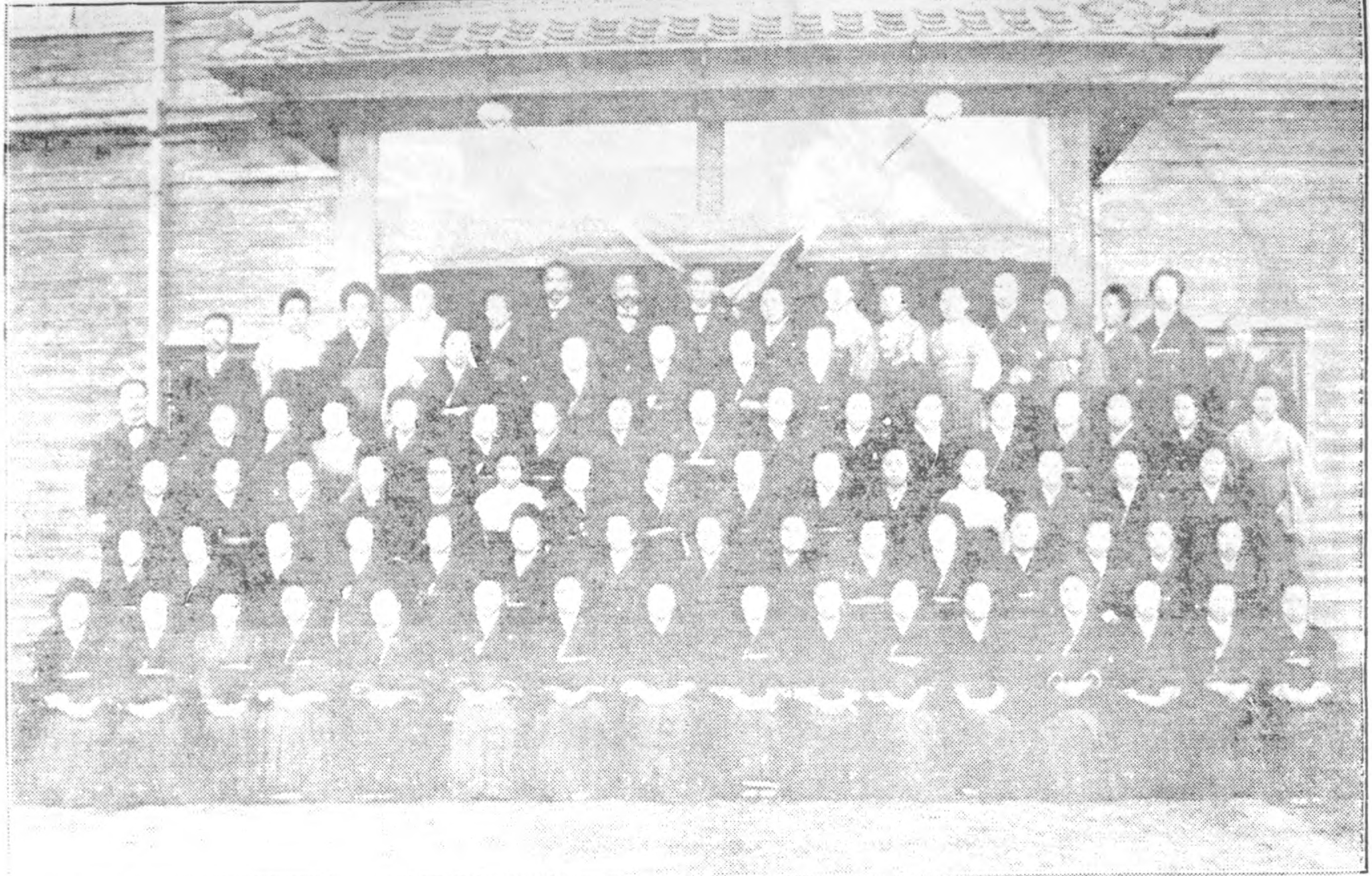
描巧優美 繪畫挿入

ビレーフートは交際家の一日も缺くべからざる新封筒なり
ビレーフートは優美高尚精巧秀麗なる繪紙入の新封筒なり
ビレープートは紀念繪保存として最も適當なる新封筒なり
ビレープートは外征將士を慰むるに唯一無二の新封筒なり
ビレーフートは各種の繪書を交換するに至便の新封筒なり
ビレーフートは繪葉書より以上の趣味ある絶好新封筒なり
ピレーフートは本邦固有の美術思想を發揮せる新封筒なり

第一號	寫眞版	六枚壹組	定價拾貳錢
第二號	着色寫眞版	六枚壹組	定價拾五錢
第　號	寫眞ドー版	六枚壹組	定價拾錢
第四號	細密日本畫	六枚壹組	定價四拾五錢
第五號	古代近世美人	六枚壹組	定價四拾五錢
第六號	絶景水彩畫	六枚壹組	定價卅五錢
第七號	明治座川上演劇王冠	六枚壹組	定價拾五錢
第八號特別製	明治座川上演劇王冠	六枚壹組	定價貳拾錢
第九號	觀櫻美人	六枚一組	定價拾錢
第拾號	藤花美人	六枚一組	定價拾錢

東京市日本橋區馬喰町壹丁目
製造賣捌元 中村封筒部
電話浪花二千百六十二番

群馬縣立高等女學校第四回卒業生並職員



女鑑兼題投稿優等者



松本久壽惠子

袖[illegible]の[illegible]

五月まつ
花たちばなの
香をかげば
むかしのひとれ

宮里三木枝子書

根治確証

わきが

必ず全治し決して再發或は他病に變ぜず速に用て苦惱を脫せよ

丙價七拾錢乙價壹圓卅錢甲價特製貳圓五拾錢

本劑を塗擦すれば主成分は皮膚及び肉の組織に吸收せられ其組織にある毒素を潔清驅逐し惡臭を根底より全滅せしむる作用を有する最近發見の特種の新劑にして如何程頑固劇烈の難症も甲價特別製を用いよ

毛のはへる

有力なる最新液にて毛をはやしたき人早く試みられよ●ぬけ毛落毛を止めはへぎわうすき人●まゆ毛●口ひげ●婦人こまあたりのはげ●あるべき所に毛なき人用ひよ毛髮增生す頭などにはげのあるのは見苦しき者也

定價壹圓卅錢特製貳圓送料拾四錢本品は原品をベグネスと稱する現今最も賞用せらるゝ

名方

色の白くする バントロン浴液

本劑は貴紳淑女粹士間に大高評を博し殊に愛用せらるゝ最新流行の秘方奇劑にして本劑を塗擦すれば主性分の力に依り皮膚は次第々に新陳代謝を盛ならしめ皮膚を漂白するを以て如何程色黑き人もB印特製を用ゆれば白色艶美の容貌となる

男女共交際上最も必用の品なり●A印壹圓B印特製壹圓十錢送料十三錢

月やくをろし

メツルヒン此藥は子宮を痛めず如何ほど長き月經とまりも必ず下ります又二三月位のは壹劑も用ゆればすぐ下ります猶二三ヶ月以上のとまり及び血塊には特製を用ひよ速に流す本劑は効能極めて烈強なるも毫も身體に害なし又月經不通月經不順より起る子宮血の道を全治し惡血古血を一掃し驚くべき効驗あり

藥價半劑六拾五錢壹劑壹圓貳拾錢貳劑貳圓參拾錢特製參圓五拾錢送料拾錢郵券代用一割增

●專賣所 東京本郷湯島四丁目十四 オリエンタル

於內外博覽會名譽大賞及金銀牌受領

元和二年創業

ヒゲタ印醬油

HIGETA SHOYU

THE CELEBRATED JAPANESE SAUCE

TRADE MARK

Patronised by the Imperial Household. Awarded First Class and Gold Medals and Grand Prize at the various International Exhibitions held at home and abroad

The Oldest Establishment of its kind in Japan. Founded in 1616 by the ancestors of the present proprietor

G. TANAKA

Choshi, Chiba-ken, JAPAN

宮內省御用達

ヒゲタ印醬油

千葉縣銚子港 田中玄蕃釀造



薬價
半週分 二十五錢
一週分 四十五錢
二週分 八十五錢
三週分 一圓二十錢

月やく閉止

三四ヶ月の月經閉止も二廻分にて必ず通ずる不思議の効あり

月やく遲延

常に月經閉止を苦慮するより神經性にて月經閉止を來し亦は遲延れることあり此藥を一廻分も用ちゆれば直ちに通下す

血の道にて頭痛眩暈し 目かすみ、逆上して顔面潮紅する人亦は常に月やく過少にて肥滿たる人處女十五六才にして月華なき人等は毎月持藥として此藥を用ゆれば**子宮病**月やく閉止、遲延、過少を患ふことなく通利を快よくし**血の道を根治**し身體強壯に**容貌爽快**ならしむること此藥特有の偉効なり

本舖 東京市日本橋區藥研堀町四十三 藥劑師**高木與八郎**

同 校長正木直彦序文
東京美術學校教授島田佳矣
校卒業生野口俊尾 共著

女子技藝 編物模樣圖案

全五册石版極彩色大和綴美本
定價 ●松の巻金四拾錢●櫻の巻●藤の巻各金五拾錢●菊の巻●梅の巻各五十五錢 郵税各貳錢

本書は毛糸、絹糸、木綿糸等にて書模様を編み或は刺繍するに必要なる圖案即ち下繪を集めたるものなれば女子技藝に於て教育上參考上必要携書なり

本書の著ある所以は從來此類の歐米各國に於て盛に出版されしものあれども其意匠圖案の様式風趣は直ちは我邦工藝の風致に應適せざるのみならず價格の點に於ても不廉にして一般に普及する能はざるを以てなり

本書は著者が専門獨特の意匠を以て多年歐米の圖案を研究參考し前項の欠點を改善せし者にして我邦に於ける編物圖案の嚆矢唯一の書なり

發兌元 東京京橋區築地二丁目 **國光社**



第十五年第六號



現時婦人界の二大問題

現時の婦人界に於て、漸やく汎濫の勢を逞うしつゝある、暗黒なる二大潮流あり。厭ふべき奢侈の競爭と、愚なる戀愛說の流行とは則ち是れなり。驕奢なる物質的文明の進步は、自然に無益なる奢侈の風を增長せしめて、幾んど極りなからしめ、野卑なる情慾的戀愛の流行は、名を戀愛の神聖に假りて、淫靡の俗を煽動し、亂倫無道の行ひを挑發して、怪しむなきに至らんとす。

奢侈は外患なり。大擧して外より攻め寄する强敵の如し。戀愛は內亂なり。陰謀を縦まゝにする叛賊に似たり。それ內憂外患

交々臻るときは、强大なる國家と雖ども、猶ほ防禦の策に苦しまざるを得ず。況んや纎弱なる女性の身を以て、内外に强敵を控へて、敗を取らざらんとするの困難なるは、寔とに推知すべきにあらずや。現今の婦人界なるもの、それ何を以て之を禦がんとするか。

奢侈の風は、自から戀愛の情を縱まゝにせしめて、淫蕩怠惰の習慣を養成し、戀愛の情は次第に奢侈の風を增長して、驕奢遊逸の風俗を釀生し、兩々相待ちて、個人の品性を墮落し、社會の風紀を壞亂し、國家の紀綱を動搖せしむ。其の發端を尋ぬれば、たゞ一の華麗なる衣裳のみ。男女兩性間に於ける性情の發現のみ。而して其の及ぼすところの結果如何に想到すれば、關係の至大なると實に斯の如し。一爝の火も一たび過てば、高殿廣閣を燒きて、灰燼に歸せしめずんば已まざるなり。況んや乾燥せる家屋の火を迎へ烈風の之を煽揚するに於てをや。

近ごろ坊間に流行し始めんとする、かの

元祿模樣

といへる華奢なる意匠が、衣服の上に形はれて、次第に流行界に歡迎せられつゝあるは、偶々その一例を示すものにあらずや。

百年昇平の餘を承け、人は花を尋ねて、胡蝶と浮かれ、武士の魂と重んせられし兩刀は、腰を飾るの具となりて、また兵馬の古昔を思はず、面に紅粉を彩りては、編笠の下に落英を賞し、寛濶の優姿を月影に映しては、歌舞の街に出入し、ひたすら豪奢を競ひたる元祿時代が、衣服裝飾に華美艶麗の流行を現した

るは、時勢當然の反應といふを得べしと雖も、我國の今日は、全く之と相反對せる時代なり。兩刀は鞘を脫して、敵兵の頭を斷たんとす。爭でかまた面に紅粉を彩るものと、寛濶の優姿を月影に映すものとあるべけむや。之を公けにしては幾億萬の巨大なる軍事費を要するあり。之を私しにしては恤兵、獻金、救助等の諸費の殆んど數ふべからざるありて、厘毛の微もまた慢りに費やすべき時にあらず、何ぞまた豪奢の流行を趁ふの餘裕あるべけんや。殊に昨日は戰場より送り還されたる負傷兵の擔架に呻吟せるを迎えてその艱苦の狀を想ひ、今日は名譽ある戰死者の靈を弔いて、遺族の爲に一掬の涙を濺ぎたる同情厚き貴婦人令孃等が、昇平時代の產出たる淫猥華麗の風俗を學ばんとするが如きは、余輩その何の心たるやを解せざるなり。

或論者は元祿年間を以て、德川時代文明の最盛時期なりとして、之が復興を唱へ、短見淺識の徒輩又た之を唱和するを見るは眞に憫笑すべきなり。蓋し元祿の時代に於ては美術工藝の進歩は盛んなりき。繪畫彫刻の精巧、陶器、漆器の美は之れありき。しかも是れ外觀皮相の見に過ぎざるなり。一たび其の裏面を覗ふときは、國家衰亡の兆は、早くもあらはれて、一方には、國庫の缺乏となり、物價の騰貴となり、貧民日に增して、巷に饑渴の叫聲を聞き、一方には、風俗頹廢し、風紀紊亂し、士氣沈淪して、殆んど同復すべからざるの狀勢を露はせり。若し明相新井君美の孜々弊政を改革するなく、賢主吉宗の銳意弊風を一掃するなくば、德川氏の滅亡は、明治の初年を待たざりしや明かなり。若しかゝる時代を以て文明と呼びかゝる事をしも文明の賜ものといふべくば、予輩は寧ろ野蠻ならんことの個人に取りても、國家に取りても、甚だ安全幸福なるを感ぜずんばあらず。

勤儉と貞操との譽れ高き谷子爵夫人が、この頃ろ京都に於て、某新聞記者に語りたるところを聞くに甚だ時勢に剴切なるものあり。夫人は京都の有志婦人が申合せたるが如くに、みな木綿の黒紋付を着て、救護事業に熱心せるを賞讃し、更に東京の婦人會が、之と趣きを異にして、質素儉約を主旨とするに拘はらず、殆んど

美服競爭

の有樣あるを慨嘆して、戰後の我國は、國事益々多端なると共に、國費もまた愈々重きを加ふべきが故に婦女子といへども、極めて質素儉約の風を守りて、國家の爲めに盡すところなかるべからずと言へり。予輩は今日我國の婦人が、戒むべく、守るべきは、洵に此にあるを疑はざるなり。

元祿模樣が流行の兆あるに先だちて、久しき以前より、我國文藝上の流行となれるは、淫猥陋劣一見嘔吐を催ほすべき

元祿文學

の再興是れなり。しかも之に加ふるに、西洋小説の極めて野卑なるものを飜案し、巧みに時代に相應する粉飾を施こして、少年少女の性慾的嗜好に投ぜんことを求む。少年たる者、少女たる者焉んぞ歡んで之を迎えざるべき。而して之を歡迎したる後の結果如何は更に言を待たざるべし。試みに元祿時代文學の代表たる西鶴、其磧、自笑等の著作を繙いて一讀せよ。文句の纎巧なる、文章の綺麗なるは、之れあらむも、

風俗風紀の上より觀察してよく擯斥せざるを得べきか。而して今の文學といふものは、之を燒直して、極端なる西洋趣味を加え、今日に通じ得るやう、行はれ得べきやうに細工したるものに過ぎざるなり。こゝを以て姦淫を行ふものを辯護して、これを壓制なる結婚の罪なりとなし、墮落せる男女の淫行に理窟を付けて、自然の傾向なりといひ、甚しきは夫妻相背き、親子互ひに爭ひ、人倫紊れ、家庭治まらざる狀態を描きて、之をその當人の罪とせず、却つて現代社會の罪惡なりといふに至る。假りに是等作者の志ざすところは、社會の事實を有のまゝに寫して、裸體的眞理を傳播せんとするにありとするも、之が讀者たるものは、爲に過られざるを得ざるなり。されば其の眞意は何邊にあるも、及ぼす所の結果は、姦淫を勸め男女の品性を墮落し、家庭の純潔を汚し、平和を破るものなりといふも、決して辯解の辭なかるべし。而して尙之にも越えて、一層赤裸々なる極端の議論を爲す者は、

戀愛の神聖

を唱道する徒輩なり。其趣旨戀愛の神聖ならざるべからざるを說くにあらずして、戀愛其ものを以て、直に神聖なりといふにあり。已に神聖なれば、自由ならざるべからず。已に自由なれば、毫も他の干涉を容るべからず、たゞ我が情の馳するところ、意の向ふところに隨つて斷行せんのみといふが如きは、克己自制の精神に乏しき、薄志弱行の少年少女に取りては、此上もなき都合よき敎訓ならずや。この論者はまた戀愛を以て、婦女の生命なりとなし、戀愛を失ふたる婦人は、その生命もまた同時に失ひたるものなりといふ。戀愛とは斯の如く重んずべきものなるか、必要のものなるか。且つ戀愛は必ず貞操と相伴いて、終

始一貫するものなるか。舊き戀愛を廢て丶、新らしき戀愛に入るが如きことは全く之れなきか。若しありとすれば。之をしも尚神聖といふべきか、生命といふを得べきか。抑も又戀愛は、野卑なる思想と相伴はざるか。而して野卑なる思想は、不潔なる行爲の媒介たらざるか。予輩はすべての戀愛を以て高潔なりと信ずる能はざると同時に、すべての戀愛を以て盡く不潔なりとは斷言せずといへども、戀愛の何たるを解せざる、否な解するも之を度外視せる男子が往々偉大なる功業を奏するが如くに、婦人も亦戀愛以外に崇高なる思想を抱き、個人としての德性を高め、高尚なる快樂を享受し得べく、且つ一層進みては、他人に對しても、社會に對しても、價値ある女性的行爲の發展を爲し能ふべきものなるを信ずるなり。故に予輩は或一派の徒輩の唱道せる戀愛説ほど愚にもつかぬものなしと思へども、甘言の耳に入り易きは、獨り古への暗君庸主のみならで、世間一般の常體なれば、さなきだに情思燃ゆるが如き妙齡の女子に向つて、戀愛の甘きと蜜の如くなるを敎ゆるの結果の眞とに恐るべきものあるを憂ふるなり。

されば奢侈と戀愛とが、蕩々の勢を以て、現時の婦人界に氾濫せんとするも、人生の弱點に於ける自然の傾向といふべきか。若し等閑に付し去らば、一切の婦人界を擧げて、慘憺の禍を受けずんば已まざるべし。奢侈は外敵なり、其害恰かも虎狼の如し。之を防禦する難きが如くにして却つて易きものあり。戀愛説は内亂なり。其禍猶ほコレラ病的バチルスに似たり。其源を淸うし、其本を塞ぐにあらざれば、之を杜絶するに難し。而して兩々相待つて、害毒を流すは、乃ち相均し。若し一を防ぐも、一を殘すが如きあらば、よく全滅の功を擧ぐる能はざるべし。女子教育者たる者、若くは世の先覺者たる者、速かに思を盡し力を致すところなくんば、予輩は恐る、之が災害を蒙むる者の、啻に婦人社會のみならざらんことを。



日本婦人に關する二大迷想

日本女子大學校教授　村井知至

第一の迷想

偖第一の日本婦人に關する迷想は、何であるかと云へば、即ち、女子は必ず男子に嫁す可きものと云ふ思想であります。

此の思想は、深く日本人の腦底に、染み込んで居つて更にこれを疑ふものもなく、また非難するものもないのであります。

昔の日本に於ける女子敎育などは、皆この思想に基いて出來たもので、殊に彼の女大學などを見ますと、劈頭第一

夫れ女子は成長して他人の家に行き舅姑に仕ふる者なり

てふ文字を以て敎を說き、全篇女子は必らず男子に嫁す可きものとしての訓戒の外、別に女子に關しては、敎へて居ないやうであります。

是れは單に昔の敎育ばかりでなく、今日の女子敎育も、多くはこの思想を以て基礎として居ます、今日は僅かに女子敎育が盛大になり、從つて、各地に各種の女學校を設立せられました、これ實に、喜ぶ可く祝す可き事に相違ありません……併し其これを經營する人々につき、女子敎育の方針、目的を、たづねてみますと、皆な、

我が校は賢母良妻を作るを以て主義とす、

と答へるのであります、是れ、正しく女子は必らず男子に嫁す可きものだと云ふ思想を以て、女子教育の本領として居るのであります。

更に進んで、社會の思想は如何かと云ふと、我が國の社會は、未だ獨立の生活を營なみ、獨身以て事業に從事すると、云ふやうな婦人を歡迎せず、斯かる婦人を、尊敬せざるのみか、却つてこれを擯斥する傾向があるのであります、斯かる婦人の、社會に出でん事を奬勵せずして、むしろ妨害せんとするの傾向がある、女子は嫁して人の妻たるにあらざれば、之れを廢物視するの感情は、女子に關する我が國人一般の思想であります。

これから推して見ましても、女兒を有てる兩親が其娘の結婚を心配する念の強いなどは、更に怪しむに足らないのであります。

彼等が其娘の、未だ心ない頃から、結婚を急ぐも亦無理ではありません、彼等が其娘のために、計畫する所は皆結婚のためだと云ふも過言でない、或はまた、其娘が、所謂年頃になつて、良縁がない時などの如き、彼等は非常にこれを悲しみ、此の上なき耻辱の如く感ずるの傾向があります。

古來の教育已に斯くの如く、現今の教育も斯くの如く、又た社會の思想も、兩親の感情も、已に斯くの如くでありますから、女子自身の自覺も亦、この迷想に陷るのは、實に止むを得ざる次第でありませう。

凡そ、普通の女子で、結婚を苦にしない者は殆んどありません、或女學生が話して居るのを聞いた事がありますが、彼等は即ち、

今は、お茶や、お花の免許状位では、いゝうちに嫁けませんからねえ、

と云ふやうな事を、云つて居つた、これ女子が今日教育を受くるのは可成良縁の機會を多くせんがためであると云ふことを暗に意味した言葉だと思ふ、實に現時日本の女子の多くは、斯くの如き思想を有つてるのであります、否社會が斯くせしむるのであります、事實の上に於て社會が女子に斯る思想を抱かしむるのであります。

御覽なさい、偶々獨立の生活を希望するものがあつても、兩親と社會とは、これを許るさないではありませんか。

要するに、この思想は封建時代、野蠻時代の遺物でありまして、我國人が今に斯る思想を持てることは文明國に對して我國の大なる耻辱であります。

西洋の婦人などは、斯くの如き思想を有つて居るものはありませんし、また其兩親が彼等を教育するにしましても、其目的と云ふものは、娘の才能を發達せしめ、完全なる人物とせやう、と云ふのでありまして、結婚すると否とは敢て問ふ處ではありません。

婦人も亦成る可く完全なる教育を受けて、天賦の才能を磨き、其長所のある所に從つて、社會につくしたい、との精神の外何もない、併し偶々意氣投合する人に逢ひ、結婚の機會が來たならば、敢て結婚することも辭しない……但し結婚を以て、女子唯一の目的とはして居ないのであります。

私共、苟しくも文明の空氣を呼吸せるものは、須らく舊時の迷想を捨てゝ、女子を人間と觀じ、人間として教育し、人間として社會の各方面に歡迎す可きであります。

今日の女子教育の如きは、いさゝか其方針を考へねばならぬかと思ひます、良妻賢母を作ると云ふ事は別言すれば、即ち女子を男子のために教育するといふのでありまして、若し女子教育に、斯かる目的があ

るとすれば、男子教育の目的も亦、良夫賢父を作る事としなければならない、凡そ教育の目的と云ふものは、男たると女たるとを問はず、人間を完全にするに外ならぬのであります、實にこれです、教育の目的はこれであります。併し女子を女子として教育するは元より必要である、女子は、男子と其性を異にし其長所短所を異にして居ますから、女子としての特長を益々發揮して、社會にこれを貢献せしむると云ふとは必要であります。

苟しくも、女子に、この種の教育を與ふるならば、社會は、兩手を上げて門戸を開き、女子を歡迎し、其技量を、働かす可き機會を、自由に與へねばなりません、一方に於ては、女子を教育しながら、社會が彼等に働く可き機會を與へなかつたなら、これ實に殘酷の極と謂はなければなりません。

だから私は、一方に於て女子に、眞の教育を施こし、女子の才能を發揮せん事を希望すると同時に、他方に於て、社會が女子を歡迎し、女子に位置を與へ、機會を與へ、其事業を奬勵するの必要を感ずるのであります。

爰に至つて、始めて、女子の幸福が確立せらるゝのであります。今日の日本婦人の幸福と云ふものは、全く僥倖的で、即ち偶々良縁あつて、良き人に結婚し、よき家庭に嫁すれば幸でありますが、不幸にして俗に謂ふ惡縁であつたなら、それこそ生涯の不幸であります。

教育なき、卑しき醜業婦と云へども、一躍して權門富豪の令夫人となつて榮華を極め、教育あり實力ある婦人と云へども、生涯頭角を顯はす事が出來ない、といふやうな境涯に沈むものもあります、これ日本婦人の幸福は良人に賴つて定まるからであります、實に不安心の極ではありませんか。

之れに反し、社會が實力ある婦人を歡迎し、尊敬して、自由に働き得る機會を與ふるの時が至つたなら

ば、その時こそ、女子の幸福は確定するのでありまして、この幸福を與へざれば、洵に殘酷です。

これ女子の幸福なるばかりでなく、社會の幸福であります、今日の如く、女子を只男子のために敎育し結婚のために敎育し、女子も亦これを自覺し、婦人の才能を圓滿に發達させる事をなさず、大に發揮す可き才能を抱ける婦人をも家庭に葬り、社會に貢献するの機會を與へなかつたならば、天下社會のため非常の損失と謂はなければなりません。

彼の勞働者や、或は其子供等の内にも、幾多の英才がないでもありませんが、貧困のために彼等の英才は、空しく埋められて、其花を咲かしむる事の出來ないのは、實に社會の大なる損失であります、……更に婦人獨特の天才を發揮して、これを社會に用ゆる事をせず、結婚なるもの丶ために、其才華の世に顯はれずして終るのは、社會の不幸これより大なるものはありますまい。

斯う云ふと或は人が、

婦人を斯く敎育する時は結婚するものが益々減少し所謂「オールドメイド」が增加し、人口の繁殖上大に恐れがある

と云ふかもしれません、然しながら、それは無用の憂慮であります。

結婚は自然の法則によつて、自然に行はれ、決して絕ゆるの憂はないのであります、假令之れを國家の法律で禁じたとても、到底止むる事は出來ないのであります、人の自然を知り、人情の眞を解するものは、決してこの憂慮を抱かぬでありませう。

よし又、一時オールドメイドの增殖を見るもこれ喜ぶ可き事で、憂ふ可きではありません、結婚する女が少ければ、男子は妻を娶るにしても、今迄のやうに妻を得る事が容易でない、すると、つまり男子は女

子を大切にするやうになつて、自然女子の位置、相場は、これに由つて高くなるのであります。

第二の迷想

次に私が日本婦人に關する第二の迷想と云ひますのは、女子は必らず男子に從ふ可きものとする事であります。

此思想は、封建時代に於て大に尊重せられました、試に女大學を御覧なさい、

「婦人は別に主君なし、夫を主人と思ひ敬ひ愼みて事ふ可し、――總じて婦人の道は人に從ふにあり、――夫の敎訓あらば其仰せを逆く可からず、疑はしき事は夫に問ひて其下知に從ふ可し、――女は夫を天とす、返す〴〵も夫に逆いて天の罰を受く可からず。」

とあります、何と云ふ言葉でせう、何と云ふ敎でせう、實に婦人を見る事、全く男子の奴隷としたのであります、男尊女卑の極致を示したのであります。

星移り物換り、今日は斯かる野蠻的思想は大に消滅したとは云ふもの丶、弊習の久しきなほ其面かげをとゞめて、女子は男子に順ふ可きもの、絶對に順はねばならぬとの思想は、殆んど我が國人の自覺なるが如く感せられます。

日本の婦人は、高尙である、優美であると、外國人から賞讃されますが、實にこれ、日本婦人の美德であり、また得色でもありませう、私は無論これを損する事を好みません、併しながら、屈從を以て優美と誤解せられしば〳〵これを奬勵するものがあります、學問をすれば、女子は生意氣になると云ひ、敎育を授くれば女子は粗暴になると誹るが如きは大に用心して聞く可き言葉であります。

社會の多數は、未だ優美と盲從との區別を解せず、頻りに女子に順柔を強ゆるの傾向があるのでありま

す。

女子自身も亦、其思想が極めて卑屈であります、「女子は男子に順ふ可きもの」てふ事は、動かす可からざる眞理の如く思つて居る、だから、一度嫁すれば、假令如何なる正當の理由があつても、去る事を恥とし、如何なる逆待をも忍ぶを以て女徳だと誤想してるのであります、打たれても、蹴られても、如何程の逆待を受けても、唯命これ從ふと云ふ女徳がどこにあるでせう、これは人でなく、全く奴隷の道でありませう。

素よりこれは、敎育なき、或は敎育の足らぬものゝ思想でありますが、私は少しく敎育ある婦人についても、あまり感心しない點があります。

其良人との間柄を御覽なさい、全く受動的であります。
僕であつて共働者でないのです。

夫に同情を表する事は出來るけれど、夫の同等なる友人として、自働的思想を抱く者は、殆んどないのであります、夫婦は主從でない、君臣でない、そんな關係のものではないので、眞に無二の友人であり、相談相手でなければならぬのであります、かくてこの家庭は圓滿に平等に、不平なく、罪なく、面白くゆけるのであります。この點から考へて見ると、日本に眞の夫婦が幾人ありませうか。

要するは、日本婦人は未だ全く奴隷の境を脱して居ません、黑奴の自由、白奴の自由を叫んだは昔の事で、今日は、女子の解放を社會に絕叫せねばならない、今は其時であります、然しこれは、女子諸君自らにも責任があります、若し女子に、自信自重の念がなかつたなら、遂に男子のために輕蔑せらるゝ事は爭ふ可からざる事實であります。

女子は尙ほ、多くの敎育を受けなければなりません、充分の敎育を受けて其才能を發揮せねばなりません。

學問が女子を生意氣にするなど〻云ふことを恐れてはならぬ、生意氣になるのは、即ち生學問の弊であつて、眞の敎育を受くれば受くる程、深く學べば學ぶ程、益々謙譲の心を生ずるものであります、生意氣になるとは、生學問の事で、敢て意とするには足らない、また恐るゝに足りません。

女子諸君は、才を磨き、智を磨き、且は腕を磨いて、男子に依賴せずとも、衣食を全ふし得る人とおなりなさい、これ諸氏のために、また社會のために、切に希望する處であります。

男子に賴つて衣食しなければ、到底自ら生活の出來ないと云ふ間は、男子の輕蔑は決して、決して免かるゝ事の出來ないと云ふ事を深く記臆していたゞきたい。

更に進んで諸君は思想の修養を要します。日本の女子の最も大なる缺點は

自働的思想と獨創的思想

の乏しき事であります、例へば、人の話を聞いて、これを解する力は充分にありましても、自ら意見を立つるの力に乏しき、或はまた、文學で云へば、よく源氏物語を讀み、土佐日記を解する力はあつても、自ら文を創作する力に乏しいなど、これ皆、女子の大なる短所を現はしたものであります。

女子がこの境を脫して、大に進歩し、獨創的思想を得るに至れば、言はずして、願はずして男子の尊敬を惹く事は、それこそ火を睹るよりも明かであります、凡そ實力なくして位地を得、實力なくして權利を得、品位なくして尊敬を得るなどは、到底不可能の事でありまして、この地位、權利、尊敬を得んためには、また相當の實力を養はねばならぬ、この實力あらば誰人もこれを尊敬しないでは居ないのであります。

斯くしてこそ、嫁しては眞の夫婦の交際を見るを得るのであります。即ち理想的家庭に於ける夫婦の眞情を解する事が出來るのです、理想的の家庭に於ては、夫婦は主從の關係を保つ可きものでない、必ず、友人の關係であらねばなりません、この友人の關係を保つには、唯愛ばかりではいかぬ、敬するの念も含まれねばなりません、敬意のない愛は亂れやすく、敬意なき夫婦は破れ易いのであります。

この男子の尊敬を受け、男子の友人たる資格をつくる事は女子の幸福ばかりでなく、又大に男子の幸福であります、同等者の交ほど愉快なものはありません、女子が男子の尊敬を惹く時機到らざる間は、男子の道德確立も實に覺束ないのであります。

西洋諸國を御覽なさい、婦人は、男子と對等の交際をなし、男子の道德頗る强固なる境にあるのは、全く婦人に人としての價値があり、男子が女子を尊敬する念の深いからであります、これに反する日本のさまは、實にはづかしい事であります。

或人は云ふかもしれません。

そんな婦人が增加すれば離婚の數が增加するではあるまいか

と、然しこの恐れも亦無用であります、否却つて、正反對の結果を見る事が出來ます、凡そ愛想がつきて離婚するなどゝは、夫婦の間に尊敬の念が欠げてるからであります、前にも云つた樣に、敬意なき愛は亂れ易いのであります、愛と尊敬の存する時は、夫婦の情、常に減ずる事はないのであります。

要するに、私は女子諸君に望みます、女子は男子に盲從するを以て女德と誤解しないやう、くれぐれも望むのであります、奴隷的服從は決してなす可きものではありません。

私の理想は、男女同等に社會に重んぜらるゝ時を來す事であります。

私の希望は、同等なる男女の市民、同等なる男女の家庭を見る事であります、私は實にこれを理想とするものであります。

戰捷と女子商業

嘉悅孝子

空前の大戰爭を幸にも全捷……で終るに相違御座いませんのですから、その戰後經營も中々容易な事では御坐いますまい。

殊に實業の方面に於いては最も大なる發展を見る……否爲んければならん……事で御坐いませう、けれども男子の方々が盛に貿易をおやりなさるとか、また銀行や會社をお創めなさるとか、或は又何か事業をお起しなさるとしても、内に居る者が例に依て例の如くで、家庭を整理する事が出來ぬやうでは、外に於いても到底大事業が出來る筈のものでは御坐いません、尤も家庭を整理すると申しましても色々で御坐いますが、何にしても是非無ければなりませんのは、確實な經濟思想かと思ひます、これは敢て實業家の家庭と許り限つた譯では御坐いません、如何なる家庭を整理するにしましたとて此思想が有りませんでは、充分に其良人をして後顧の憂ひ無からしむるといふ事は出來ますまい、左樣で御坐いますから私は何にしてもこの完全なる家庭の整理者を作るといふ事は、戰捷後の日本には唯に一家經營の上に於いてのみならず國家經營の上に於きましても、決して輕々に看過すべき事ではないと思ひます。

女子に商業教育……と申しますと世間では單に銀行會社の事務員とか、計算員とか、其樣な者許りを養成

するかのやうに受取られる様で御坐いますが、決して左様許りでは御坐いません、つまり確實なる經濟思想……といふよりも寧ろ圓滿なる常識を發達せしめて完全なる家庭の整理者、即ち慰藉者を作るに在るので御坐います、早い御話が今度の様な戰爭の場合に、男子の方がお出征なさるとしても、先づ第一に内に殘つて居る者を心配して居らるゝやうでは充分なる働きを望む事は出來ますまい、將來日本では女子の職業を卑みまして上流になればなるほど、兎角男子を力にして居る風習で御坐いますが——否決して獨身主義を執れと申すのでは御坐いませんが、此樣な事では實際家庭を整理して其良人を慰籍する事が、出來ぬ許りでは御坐いません、若しも其力とする男子に先立たれましたり、又捨てられましたり、別れねばならぬ樣な事が出來ました場合には、どうも節を守るといふ事が……自身の主義で御坐いましても、殘念ながら生活の點から既に出來兼ぬると云ふ樣な事で御坐いますから、女子の獨立力……と申しますと可笑しう御坐いますが、つまり自分一己で立派に子弟を教育して行ける力が無ければなりませんといふので御坐います。

近來は皆樣が大分女子教育に盡力されますから、その程度も大に進歩して參りました……のは誠に悦ばしい事で御坐いますが、此點に至つては、未だ〳〵足りぬ處があるかと思ひます、假りに何處かの女學校出のお方が斯樣な不幸な境遇にお會ひになつたとして御覽なさい……今度の戰爭などでは私の知つて居る御方にも大分御坐いますが……全く帶には短し襷には長しで、急に教員などにも成れませんし、然らばといふて事務なども執れませんし、又資本が有りましても所謂女學生氣質で何の商賣も出來るものでは御坐いませんから、有る中は何もせずに遊んで折角の資本も失くしてしまふと云つたやうな譯で、裁縫か編物などのお出來になるお方は、先づ其方の教員にでもならるゝ位のもので御坐いますが、是れとてもさう

さう澤山必要なものでは御坐いません、此間も尾崎さんが日本の女子は男子と苦を倶にするけれども樂は倶にせぬと云ふて笑はれましたが、全くの事で他家へ縁附きますれば縁附きますやうに、縁附きませんければ縁附きませんといふて、地位が底くければ底いほど、高ければ高いほど、常にその心配といふものは日本の女子の胸から絶ゆる事がありません、つまりその獨立の力が無いからで御坐いませう。

左樣で御坐いますから、從來の日本の女子は男子を離れては全く一箇の不具者で御坐います、さう申しては如何で御坐いますが、斯樣な事では學校が第一目的として居る良妻でも賢母でも御坐いませんかと思ひます、勿論家庭を整理し、其良人を慰籍する事などは思ひも依らぬ事で御坐います、能く皆樣がスヰートホームと申しますが、實社會を離れて理想の家庭が作られる筈のものでは御坐いません、けれども此獨立の力が有りますれば、他家に縁附きましても、縁附きませんでも、地位が底くゝとも高くとも、又前申したやうな境遇にお會ひになつても、決して心配が御坐いません、常に好望で愉快で、實に幸福に世の中が送つて行かれます、左樣で御坐いますから、內氣は元來日本の女子の特性で御坐いますけれども、商業敎育などを受けた女子は、思想が旣に左樣なつて居りますから、快活で話が早く解つて、實際活動的人間となつて居ります、今迄は自分の身の賴少ないのに反し、何處かに光明を認めて參りますから、自然世の中が面白くなるので……つまり從來の悲觀的なのから樂觀的人間となるので御坐いませう。

矢野さんなどは、女子の商業敎育は、餘り高尙にして狹くするより、可成底くして廣くする方が好いと申されますけれども、夫れでは矢張何んだか物足らぬ樣な氣もしますし、其れに女子の普通敎育も此頃では大分普及して參りましたから、私などは其樣に簡易にする必要がないかとも思ふて居ります、殊に近頃はその需用……と申しますと可笑しう御座いますが……つまり望手も漸々多くなりまして、今度彼の女子商

業學校の卒業生なども、専攻科に十七人、特別科に廿三人御坐いましたが、其内三井物産へ二人、横濱火災へ四人、岩井商會へ二人、日米商會……是れは未定で御坐いますが、白木屋、小松屋などからも望まれまして、夫れ〳〵皆入れましたが、其外外交官や事業家の内でも、新智識ある御方々は、御妻君にと望んで來られた向きも、又一家の會計にと望んで來られた向きも有りました樣な事で、社會の進歩に伴ふて今後は只に銀行、會社許りではなく、諸官省殊に遞信事務などは益々多く女子を採用する樣に成る事かと思ひます、殊に彼のタイプライターの樣なものは、全く男子の方々が爲さる程の仕事では御坐いません。此タイプライターは、歐米では大底婦女子の仕事と定つて居りますので、三井物産などでも是迄一人隨分好い給料で居りますが、どうしても女子の方が好いと申して、今度も大變に望んで參りました、全く男子の方々は斯樣な事に頭腦をおつかひなさらずとも、未だ〳〵適當な……否爲さらなければならん事が澤山ありますから、我々女子は或る程度迄、即ち出來得る點迄は今日の男子の職務を補はねばなりません、今度の戰爭などでも……斯樣な事は私共には解りませんが……若しも今度永く續く樣な事に成りましたら、我々女子も男子の方々をして盡く其方面に力を注がしむる覺悟で無ければなりません、左樣なりましたら女子も是迄の樣に手内職許りではなく、遞信事務を始め、銀行、會社、商店の事務、速記、タイプライター、また〳〵種々の方面に働かんければならん樣になりましせう……否硝鉛の戰爭は繼續しませんでも、實業といふ大戰爭が依然繼續……といふよりも殆んど新たに開かるゝので御坐いますから、女子たるものも亦大に活動せんければならん時機と思ひます。

兎に角此戰爭に依つて日本の女子は、正に大なる活動期を與へられたので御座いますから、私は此の商業思想を養成するといふ事が一家經營の上に於きましても、將た又國家經營の上に於きましても、戰捷後の

發展には決して缺くべからざる一要件かと思ひます

男女混合教育

某氏談

過る日、多年敎育界に盡瘁されて其の後宮内省に奉仕して居らるゝ去る官人を訪ふたが、談偶ま女子敎育の事に及ぶと、大いに男女混合敎育を皷吹された、時節柄參考となるべき面白き點も多いから少しばかり書いて見たのです。（記者）

◎元來、男女は兩性相俟つて社會組織の要素となつて居るものである、決して個々別々に分離して往くことは出來ないので、謂はゞ社會は、男子の剛健な性質と女子の柔和な性質が、互ひに相融化して、其の圓滿を維持して居らねばならぬものに外ならぬ、だから、男女の間は必らず眞面目に親密に接觸し得るやうに幼時より敎育して置かねばならぬ。

◎處が、今日の日本の有樣は何うであるか、手近い話しが、男子の多い集會席に一二の女子が混じて居るとするに、女子は話し相手のない爲めに始終手持不沙汰な上に、男子の方から進んで相手になつて與れるものゝない爲めに、早く其の集會の終るのを待つやうな傾きがある、女子の集會席に男子の僅か混して居る時も亦た然りだ、これは何の爲めであらうか、謂ふまでもなく、男子と女子とが社會に立つて接觸し得べき適當な敎育が施してないからである。

◎然らば、其の敎育は何うしたら好いか、これは勿論敎育家の研究に値する問題なのである、自分が今から二十年の昔、岡山の或る學校を監督して居た時に思ひついたのが、男女混合敎育である、それで其の當

時は少壯な血氣に任せて、それを直ちに監督して居る學校に試みやうとまで思つたのだが、併し機會のなかつた爲めに其の儘になつて居た固より之を試みるに就ては、學校其もの丶設備其他に就ても熟考せねばならぬ。

◎極些細なことではあるが、先づ便所の設備についていふても、男女混合なれば大便所と少便所とを區別せねばならぬのみならず、場合によりては使用の區劃も定めねばならぬが、女子のみなれば大便所だけでも事は足りるといふもので、これと同じく總ての設備の上に愼密な注意を要するのは勿論である、だから此の議論を公けにするには、多くの調査もしなければならず、多くの思索も費さねばならぬが、それがまだ出來てない故に、今日の處、麗々しく名前を署して、自分の意見は斯く〲であると、世間に公表することは出來ないが、男女混合教育の必要といふことは、自分の久しい間の素論であるのだ。

◎勿論、まだ實行もせぬ先きから、其の結果の判るべき道理はない、只だホンの想像に過ぎぬといはゞいふべきであるが、男女混合教育の結果は極めて善美なるものであらうと思ふのだ、鳥渡した譬へが、君が代の合奏にしても、女子は女子だけ、男子は男子だけで、別々に唱ふよりも、男女混合して合唱すると、聲の高低淸濁に自然の調和が出來て居て、頗る趣味を感ずるではないか、これが何よりの證據なので、男女兩性の調和は萬事の上に善い方の結果を來すに相違ない。

◎此の道理であるにも拘らず、兎角、男女兩性が相接近すると、性質潔白なものは異性を厭ふの傾きがある、即ち女子は男子の傍を早く去りたい、成るたけ相近づかぬやうにしたいと用心をする、男子も亦た女子の傍に長く居るのは窮屈でならぬといふ感じを起してこれも匆々に逃げ仕度をする、左もなくして、其の性質の劣つたものが接觸すると、忽ち兩性の間に醜聲を漏すやうなことになる。

◎これは何の爲めであるか、東洋古來の習慣が男女兩性を餘り甚だしく離隔して居る、即ち男女七歳にして席を同じふせずといふ風で、家庭に在ても、社會に在つても、兩性相近かぬのを以て倫理上の一の信條のやうに心得て、互に接觸することをして居らぬ、だから、一旦其の制限が除れて自由が利くやうになると、直ぐに前にいつたやうな二樣の反對した現象を呈するのだ。

◎自分は見掛け通りの至つて朴訥鈍野な木强漢で、これで女子の友達が多いといふは、實に自分ながら怪しいやうにも思ふが、實際女子の友達が多いので、親戚よりも兄弟よりも親しくして居る人もある、全體女子は天性至つて親切なもので、心を傾けて面倒も見て吳れるし、又、事に臨んでは頗ぶる熱心に働らくもので、到底男子では覺束ないと思ふことでも、女子で立派に成し遂げることが少なくない。

◎自分は女子と交際して其の利益を享けて居る一人であるから、斯ういへば女子に諛言を贈ると譏るものがあるかは知らぬが、それは女子との交際の味を知らぬもの丶僻見なのであつて、眞面目に、邪慾の心なく、親しく交際して居さへすれば、事々に其の證據は見られるので、少しも疑ふには足りないことである現に、慈善的事業の勸誘とか、傷病兵慰問の奔走などには、爭へない事實があるではないか。

◎故に自分は飽くまでも男女混合教育を主張して、男女間の交際を閑熟ならしむると共に、兩性互ひに助くる利益を受けんことを望むのであるが、これについては今日の我國では、まだ〳〵危險なやうに考へて居る人のないでもないらしいが、自分には説があるのだ。

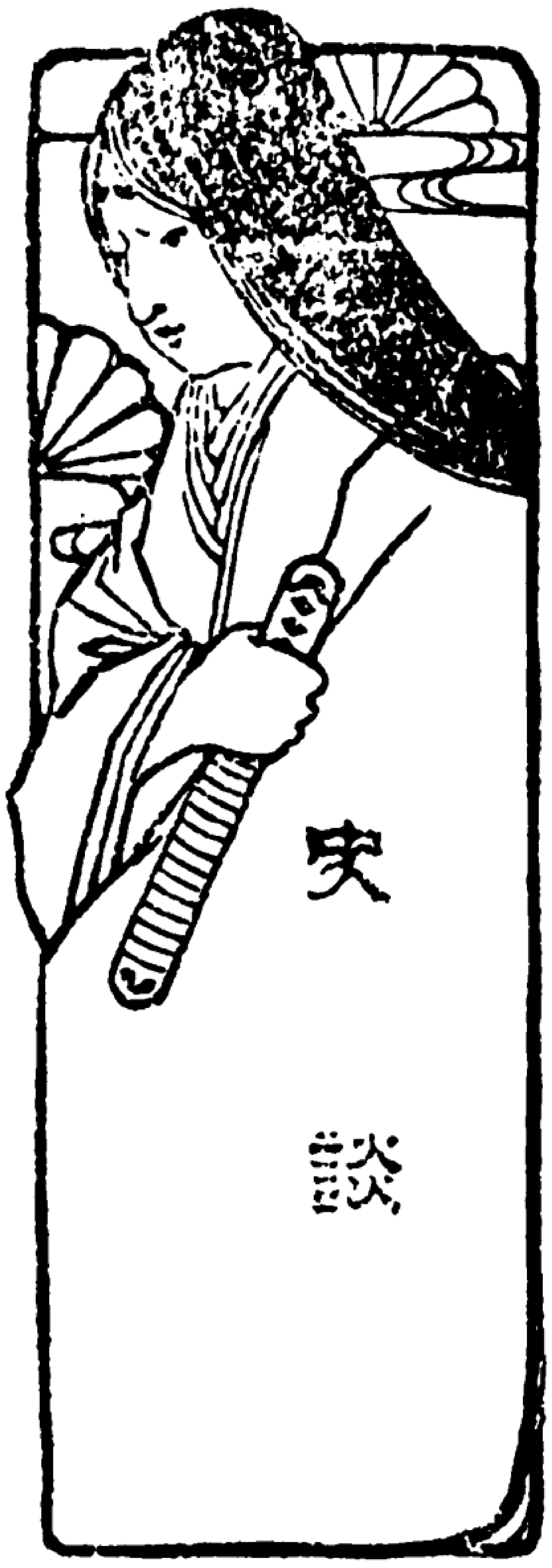
◎生物といふ點からいへば、人も鳥も獸も變つたことはない、然るに鳥や獸は其の情慾を遂する爲めには親子の別もなければ兄弟の別もないが、人に在つては其樣なこと……親子相犯し兄妹相犯すなどのことはない、して見ると、これも其の幼時よりの敎養一つで、如何やうにもなること丶信じられる。

◎然るに、其の大切な教養は怠たつて居ながら、一方には男女七歳にして席を同じふせずなど、嚴格な教條を施くのは、畢竟、其の教育方法が眞正遺憾のない程度にまで進んで居ないからのことである、小學校でも、家庭でも、充分の監督をすると同時に、専ら倫理上の心の教育を怠らずに、兩性は決して卑猥に接近すべきものでなく、徹頭徹尾純潔無垢に交際すべきものであるといふ觀念を、深く心の奥底に刻み込んで、凡ての男女兩性の間を親子か兄妹かのやうに思はせて了へば、決して危險なことも何もないのである。

◎見玉へ、男女兩性の交際が至つて自由であるにも拘らず、彼の亞米利加などには間違のあつた例しが少ないではないか、勿論、これには社會の制裁といふものが、程餘効力を持つて居るでもあらうが、併し、自然的の教育といふものが出來て居るからなので、其の自然的の教育といふのも、元來は男女間の潔白な交際を幼時から仕込んだお蔭に外ならぬ。

◎何うかして、日本の男女兩性も米國のそれのやうに仕込んで、そして生長してから後になつても、立派に双方の融和の出來るやうに、又た間違ひのないやうに、米國あたりのそれよりも、汚れのない男女交際をして、社會組織の上に益するやうにしたいものではないか。

◎今日のやうに、唯男女交際を漠たる議論の上にのみ唱道して、一足飛びに歐米に擬似やうとしても、目的を達するとの出來ぬ許りか、飛んでもない事柄や、噂が起るのは必定で、之が爲めに、男女交際の道が、全く杜絶されないまでも、反對の聲に塡めらるゝもまた必然である、故に根本的に兩性交際の道を、無垢純粹な幼年時代から、吹き込むといふことにするのが、最も必要であらうと思ふ、これが則ち予の男女混合教育を主張する議論の大體である。



小楠公

文學士 大町桂月

萬人の學ぶべき人物の標準は、それ賢にして正直なるにある乎。孔子是也。諸葛孔明是也。和氣清麿是也。菅公是也。楠公父子亦是也。

楠公、智は一代を空しうし、誠は萬世を貫く。我歴史上の一大偉人也。小楠公は、父の智をうけたり。誠をうけたり。その勇をも受けたり。之に加ふるに、母の情をうけたり。腕はよく鬼を挫き、目は涙に富む。武士は、物の哀れを知るもの、即ち是也。小楠公は十一歳、櫻井驛に父と訣別せしより、二十三歳四條畷に討死するまで、十三年の生涯、太だ短けれども、その爲す所、言ふ所、すべて詩的也、殊に悲劇的也。鎮西八郎ありて、保元の世をかざり、悪源太ありて、平治の世をかざる。小楠公ありて、南北朝の天地、爲に寂寞ならざる也。

父に比して功勞の少なかりきといふことなかれ。退いて靜に時勢の前後相違あることを察せよ、又一身の境遇如何を察せよ、さる學者想像して曰く、小楠公は肺病なりきと。とにかくに身體の病弱なりしは事實也。而して血性の小楠公、むなしく病床に臥して、父の遺訓に背くは、その堪へ得ざる所也、四條畷に討死せし心根を思ひやるだに涙也。討死の期早しなどいふものは、これ涙なきの人のみ。嗚呼、わづかに二十二三歳の一青年が、南朝の運命を双肩に負ひ、譽田林に、瓜生野に四條畷に、よく孤兵を以て大軍に當り、智をつくし、勇を振ひし事蹟は、萬古歴史の上に生命あり。楠公の子たるに耻ぢざる也。

小楠公は、余の最も欽慕する一人也。されど、如何せむわが鈍筆は、竟に小楠公の面目を發揮する能はず。記し來りて自ら耻づ。地下の英靈、願くは恕せよ。

第一 南樹蔭

幾度繰りかへされても、なほ新しき生命あるは、偉人の傳記也。和氣清麿、菅原道眞、楠公父子の如きは、いつまでたちても、國民の儀表也。余こゝに小楠公を眼目として、楠父子の誠忠を紀せんとするも、實に欽慕の餘に出づ、また陳腐なるを顧みざる也。

、源氏三代にして滅びしより、北條氏陪臣を以て天下の政權を掌握することゝに九代、必ずしも朝廷を蔑にし奉るにもあらずといへども、同族二人を洛中に置き、之を兩六波羅と號して、西國の政治を掌らしめ、兼て京師の警衞に備へし以來は、朝廷の權威、何時ともなく減退して、徒らに虚位を擁するに過ぎざるに至り、地方を見るも、また九州は鎭西探題に隷し、關東はもとより鎌倉に直屬して、諸國至るところ、守護重くして國司輕く、地頭強くして領家弱く、武家の勢力年と共に隆昌に赴き來りしかば、承久以來歷代の聖主、常に王權恢復のことに叡慮をめぐらされしかども、時未だ到らずして、空しく默止し給ひしこと、年久しきに亘りしが、後醍醐天皇、英明の資を以て位に即き給ふに及びて、始めて宿志を果し給ひ、大業漸く就るを見るに至れり。

後醍醐天皇は、鎌倉最後の執權北條高時其職に就きし後二年、寶算三十一を以て、花園天皇の讓を承けて、位に即き給ふ。居常意を政事に留めて、勵精治を圖り、閑あれば儒臣と經史を討論して、古今の興亡成敗の跡に眼を注がれ、夙に回天の大志を懷きて、殊に庶民の喜憂に慮を寄せ給ひぬ。即位後二年にして大旱あり。甸服の外百里の間、苗全く枯れて餓莩野に滿ちしが、天皇聞召して、躬ら帝德の足らざることを嘆かれ、朝餉の供御を止めて飢民に施されし上に、檢非違使別當に仰せて、當時富裕の輩が利殖の爲に蓄へ積める米穀を點檢し、假屋を建てて、直を定め之を賣らしめられぬ。又下情の上に達せざることを憂ひて、新に記錄所を置き、親ら出御ありて訴を聞召し、理非を決斷せらるゝの掟を定め給へり。

其後更に二年にして、鎌倉征討の機漸く熟し來りぬ。即ち所謂無禮講の催ありて、愈よ美濃の人土岐賴貞、多治見國長に、先づ六波羅襲擊の密勅を下されしも、不幸にして事洩れ、兩將は立ろに殺戮せられ、議に與りたる藤原資朝、源俊基等は鎌倉に拘致せられしが、高時はなほ滿足の色なく、將に進んで

廢立を謀らむと企つるに至りしかば、天皇誓書を賜ひて之を諭し、纔に事疑むを得たり。之を初めとして、朝廷と鎌倉との軋轢は日々に甚しく、其翌々年なる嘉曆元年の夏、帝、皇子護良親王を愛して皇太子に立てんとせられしも、高時詔命を聽かず、親王に迫りて薙髪して出家せしめ、後伏見の皇子量仁親王を以て皇太子とし、風雲益す險惡に向ひ來れり。

河内國金剛山の西麓に、楠正行が呱々の聲を擧げたるは、即ち正に此年なり。父正成は齡既に三十三、莊に楠樹多きを以て、楠を氏として世々、邑を河内に食み、今日に至るまで功過未だ一も世に知らるゝに至らざりしが、私かに活眼を開きて、北の方皇居を拜し、東の方關東を望めば、一世の混亂將に近く目睫の間に迫り來らんとするの勢あり。身を挺して軍馬の衢に馳驅し、命を鴻毛に比して、皇運を資くべき機會、蓋し遐からずして到來すべきことは、疾く既に之を看破して、靜かに風雲を觀望し居たりしが、時恰かも正行が我家の冢子として生れ出でければ、天の之を授くる偶然にあらざるべきを信じ、之が敎育薫陶に就ては深く思を致し、懇ろに妻に言ひ含めて哺育の任に當らしめたりき。

元德二年正行五歳の年、後醍醐天皇、高時の橫暴日に益す甚しきを疾みて、大塔宮護良親王と日夜東伐を議し給ひ、傍ら圓觀、文觀等の名僧を宮中に召し、中宮御產の祈に託して、高時呪咀の祈禱を修せしめられしかども、不幸にして追々に事、關東に泄れ聞えければ、高時の憤怒凄じく、先づ僧都を虜にし來り、之を拷問して粗ぼ實を得、各これを流竄したり。斯の如き耳新しき出來事を、正行は寢物語に父母より聞き嚙りて、朧ろけながら天下の大勢を辨ふるに至りしが、翌元弘元年、正行の六歳となりし年には、更に驚くべき一大事こそ、正行の家へは降り來りけれ。そはいふまでもなく、正成がはじめて後醍醐天皇の召を蒙りし事なり。

此年高時は二階堂貞藤等を遣はし、兵を率ゐて京師に入らしめ、斷然廢立を行はむとして、先づ車駕

を六波羅に移さむことを圖るに至りぬ、よりて年の八月二十四日、天皇は神器を奉じ、夜遁れて南都に赴き、二十七日に笠置山に幸せられ、而して詔を大和、河内、伊賀、伊勢に傳へ、難に赴かしめむとし給へど、時運非にして、思ひしよりも四方勤王の者少く、召して謀るべき良將もなし。天皇いたく宸襟を惱まさるゝ中、一夜奇しき瑞夢を得給ひけり。紫宸殿の前庭に一大樹聳え、南方の枝葉欝蒼として最も繁茂せり。ふとみそなはせば、樹下に南面の座を設け、百官衣冠を正して、左右に居流れ居れりしばらくありて丱角の二童子、走り出で來りて御前に跪き、彼方の御座を指して泣く〳〵奏上すらく、『今や普天の下、率土の濱、聖体を容るべきは唯この一座あるのみ』と、聞召し終りて覺め給ひぬ。不思議なる夢かなと、つら〳〵御考への末『木南に傍ふは楠なり、意ふに將に楠氏なるものありて、出でゝ朕をして再び南面の位を正さしめんとするにはあらざるか』と御占あり。試みに寺僧快元を召して、之を問ひ給へば、正しく楠正成と申すもの、河内に在る旨對へ上げゝれば、帝は夢兆即ち是なりと思召されて、直に藤原藤房を遣はして、之を召寄せられし也。

正成一朝、思ひがけもなく詔命を拜りて、感激に禁へず。盥嗽沐浴して、妻子に身の光榮と責任の重大なることゝを語り聞かせ、急ぎ行在に詣でければ天皇藤房をして『卿今命に應じて來れるは朕の深く欣ぶところなり。今日の事は一に卿を煩はして、以て慮を慰めむと欲す。卿それ策あらば、靜かにその見るところを開陳して、朕が意を安せしめよ』との詔を傳へしめ給ふ。正成再拜して對へて曰ふ樣、『逆賊暴虐、天地いかでか容れ申すべき。天討加ふるところ、竟には勝たざることなかるべく覺え候ふ。案ずるに東夷の性、勇にして謀なし。若し力を以て爭はゞ、或は敗あるべきも、謀を以て之を屈するは、即ち與し易からむ。されども一成一敗は兵家の常態にて候へば、時に一たび小衂に逢ふも、苟く

も臣にして生を存するあらば、希くは聖慮を勞したまはざらんことを。」と奉答し、辭し還りて金剛山の西麓、赤坂に城を築き、之を官軍の根據に充つるに決しぬ。城は方二町ばかり、南西北の三方は平地にして、且守るもの漸くわづかに五百人に過ぎざれども要害極めて堅く、一朝行在、守を失ふことあらば駕を此城に迎ふべき備を第一に整へたり。此時西の方備前、備後には、兒島高德、櫻山茲俊等あり、遙に旗を揚げて應援せり。

此城纔に工を竣りて待つ間もなく、京都六波羅の鎭將北條仲時以下、諸國の兵を催して、笠置の行在所を攻め圍みしも、拔けず。高時更に大佛貞直、足利高氏等を遣はして、關東の兵十萬に將として、進み攻めしめしが、到底容易に陷るべき色を顯はさず乃ち謀を回らし、陶山義高等五十餘人、北の方觀音谷より藤葛に縋りて上り、雨の夜に乘じて、行宮の眞近に至り火を放ち、內外鼓噪相應じて肉薄せしかば、是に於て官軍遂に支へ得ず。帝は潛かに圍を出で、正成の赤坂城に幸せんとし給ひしも、高間山に至る途中、貞直等追て之を捕へ、擁して六波羅に遷し奉り、是より先き、高時の擅立したる新帝量仁親王に、神器を傳へられむことを請ふに至り、帝は止むなく僞器を以て之に授けられたり。親王以下文武百僚も、同時に多くは執へられしが、護良親王獨り吉野に逃れて後圖を劃し給ひぬ。

やがて敵は勢に乘じ、轉じて赤坂に逼り、城の小なるを侮りて、深き謀略もなく直に攻め上りしが、正成の設けたる伏兵の爲に、倏ちにして千餘人を斃され、甲を脫き鞍を解きて潰走し去りぬ。是に於て敵もこは容易ならぬ勁敵とや見たりけむ、持久の策を講じて、圍むこと數重、正成の奇策妙計は、是時を幕開きとし、愈々出で、愈々敵を苦ましめたり。先づ一層の外牆を作り、索縄を之に懸けて牽引し置き、敵の四面より爭ひ登るを俟ちて、一時に索を斷ち外牆と共に顚覆せしめ、而して連りに巨木石を投じて七百餘人を壓殺し、次に敵勢楯を被りて競ひ進

み、鐵搭を陣に鉤して壞たんとするに乘じ、城中よりは長柄杓を以て熱湯を沃ぎ、總勢完膚なきまでに傷爛せしめて之を殺す等、一として敵の荒膽をひしがざるはなし。

敵はもはや、普通の戰略を以てしては困難なるを慮り、兵糧攻めの計を取ることゝせり。正成方は如何にせむ、倉卒の築城にて、實は兵糧の貯へ乏しきを以て、正成一策を案じ、風雨晦冥咫尺を辨ぜざる夜に乘じて、城内に二大坑を穿ち、塡むるに死屍を以てし、薪を其上に積み、一卒を留めて刻を候ひて火を放つことを命じ置き、衆を數組に別ち、潛かに敵營を拔けて逃走せしが、敵は其謀計に出でたることを悟らず、火の起るに及び爭ひて城に入り、坑中の焚屍を見、正成亦自殺したることゝ輕信し、圍を解きて關東へ引上げゝれば、其隙に正成は即ち金剛山に隱れて再擧を企て、十一月には出でゝ三河に行きて、關東の虛實を窺ひ、大に劃策するところありき。

明くれば元弘二年、高時の橫暴は益々甚しく、終に車駕を隱岐に移し、親王公卿をも多く遠竄に流すに至りぬ。兒島高德が途中駕を奪はむとはかりて得ず、「天莫レ空二勾踐一」の句を庭樹に彫り殘して、立ち去りしは即ち此時の事にして、是に至りて風雲漸く惡く、所在の官軍皆解けしが、正成は年のはじめ三河より歸り來りて、直に吉野に往き大塔宮に謁し、着々として其策を回らして、四月に赤坂城を恢復し、餘威河內、和泉を徇へて、その勢稍張り、京畿またやうやく動くに至りぬ。

一日正成、天王寺に入り寺僧に請ひて、上宮太子未來記なるものを見る。曰ふところ『人皇九十五代に當り、天下一たび亂れて主安からず。此時東魚來りて西海を呑み、日西天に沒すること三百七十餘日西鳥來りて東魚を食ひ、其後海內一に歸すること三年、獼猴の如きもの天下を掠むること三十餘年、大兇變一元に歸す。』とあり。正成手を拍て妙と叫び、欣然として衆に謂て曰く、『讖文所謂人皇九十五代は

即ち今上にあらずや、東魚は蓋し相摸入道高時也、異日兵を起して關東を滅ぼす人出でむ。日西天に沒すとは、主上隱岐に在すを指す、闕に還り給ふは、當に明年の春にあるべし』と。兵勢爲に大に振ふ。此冬正成千早に城きて之に據り、赤坂は平野將監に守らしめたり。

明くれば元弘三年、後醍醐帝は二月二十四日に、源忠顯とひそかに隱岐を出で丶、二十七日伯耆那和港に着き給ひぬ。地頭名和長年迎へて車駕を護り、船上山に上りて追兵を防ぎ、近國の將士を招き寄せ兵威大に振ふ。畿内の方は如何にと見れば、高時大兵を發して吉野、千早、赤坂を攻めしが、赤坂先づ陷りて、平野將監出で降り、次に吉野破れて、護良親王は南に奔り、村上義光は戰死せり。是に於てか賊軍大擧して千早に集り、兵數實に百萬と號して雲霞の如くに攻め寄せ來りぬ。

千早城は東西溪に臨み、南北峯を負ひ、斗拔數千仭、周回一里ばかりの堅城なり。敵は衆を恃んで深慮なく、初日直ちに蟻附して迫り來りしが、著しく敗亡して死傷算なく、十二人の吏、三晝夜數ふるもなほ悉すを得ざりき。城には泉五道ありて、旱魃にも涸る丶憂なきのみならず、正成は雨水までをも貯へて非常に備へ、持久の策を講じて怠らず。敵は、或は外より汲み來るものにあらざるやを疑ひ、兵三千を派して東溪を守らしめしが、此方は正成、そのや丶懈るを窺ひ、拂曉兵を出して擊て之を走らせ、旗幕數張を得て翌日これを城に揭げたれば、敵は、果して憤忿して、兵五千を以て溯り來つて取かへさむとするを、城兵は近づくを待ちて、にはかに起りて木石を投げ付け〳〵、殆んど之を壓殺し盡しぬ。

その他或時は正成、藁人形數十を作り、一夜之を城外に配置し、鼓譟して敵を誘ふに、敵は昏霧に乘じ、競て迫り來りければ、また例の巨岩を投じ、わが一兵をも損せずして、敵の八百餘人を斃し、尋で敵、飛橋を作り之に騰りて城中に入らむとするをさはさせじと、喞筒を以て橋に油を注ぎ、炬火を投

げて燒き斷ちしかば、いかでか一人として助かるものあるべき。深谷に陷りて焚死するもの數千人、臭數里の外に及べりとぞ。此の如き正成の妙計、愈よ出でゝ愈よ巧みに、殆んど今は攻むるに術なく、全く陷落の望なきを見て、敵は徒らに焦慮するのみなりしが、また〳〵近郡の民兵、護良親王の令を奉じ

敵の糧道を絶ちしかば、敵は大に狼狽して遂に逃走相踵ぐに至り、五月十日といふに圍み全く解け敵軍みな潰走せり、相持することゝに五閱月なりき。

是より先き三月、新田義貞は義兵を上野國に興して、はるかに正成に應じたりしが、五月に至り、兵を武藏に出して關東の將士を麾き、五月八日を以て大擧鎌倉を攻め滅ぼして、高時以下を誅戮し、將軍守邦も薙髮して、鎌倉將軍の系統こゝにやうやく終を告げぬ。然れども果して之を王政の古に復し得べきや否やは、未だ俄に判じ難きものあり、妖雲暗澹として天の一方に蟠れるは、それ何の兆ぞ。

足利高氏は、此年四月までは高時の幕下にありて官軍を苦め居たりしが、炯眼、はやくも高時の餘命いつまでも續かざるべきを察し、恐るべき大志を起して、ひそかに逃亡し、出でゝ丹波を徇へ、遠く伯耆の後醍醐帝に書を上りて、歸順の意を致し、言ふところ懇懃をきはめて、大に帝の御心を動かし追て翻つて源忠顯、赤松則村等と兵を合せて六波羅を攻め、金剛山の圍解くる前三日、即ち五月七日を以て遂に六波羅を陷いれ、而して帝の還京を待ちたり

是に於て、同じき月の二十三日、車駕船上山の行宮を發して東に還り給ふことゝなれり。よりて正成は六月二日、駕を兵庫に迎へしに、帝叡感斜めならず、親しく之を勞らひ、大事速かに就るに至れるは卿の力與つて多きに居るとの詔を賜ふ。正成、一にこれ陛下の稜威に因るに外ならざる旨を答奏し、勅によりて前驅の任にあたり、鹵簿肅々、闕に歸りたまふ。間もなく論功行賞ありしが、高氏はかねて歎を后宮に通じ、巧みにこれを籠絡して、意を己れに傾けしめ、且扈從の公卿に對しては、六波羅陷落じ

て、京師の秩序舊態を破らず、公卿百官安んじて邸にかへるを得たるは、一に高氏の誠忠によると吹聽して之を欺瞞し、斡旋頗る力めたりしが、其結果にや、論功行賞の列序には、高氏最上位に置かれて、治部卿となり、武藏、常陸、下總の守護に任ぜられ加ふるに偏諱を賜はりて尊氏と稱せり、正成は即ち檢非違使左衞門尉を拜し、攝津、河內の守護に任ぜられ、其他新田義貞以下、賞與差あり。この時護良親王は、ひそかに目を注ぎて、尊氏の禍心を包藏することを看破せられ、內奏して之を誅せんことを請ひしも允されず。千古の偉業玆に全く頓挫して、世は再び戰亂の衢となるに至りしは、眞に千秋盡きぬ遺恨なりけり。

翌年建武と改元あり。王政復古の基礎、ともかくも成るを見しとは雖、熟ら觀察するに、政は正を缺ぎ、賞罰には濫私多く、早く既に人心離散するの傾向歷然たるものあり。正成私かに憂悶に堪へず、機を見て一再ならず、藤房に由りて諫を進めしも、不幸にして用ゐられず。偶ま五月には千里の馬の獻上ありしにことよせて、藤房また極諫せしも聽かれず、藤房ために悒々樂まず、十月に官を捨て、身を隱し、十一月には尊氏、護良親王を讒して鎌倉の土牢に幽閉し、風雲再び險惡に赴き來りぬるぞ是非もなき。

（つゞく）

○流行のリボン

都と云はず鄙と云はず婦人に西洋風の結髮が流行するに連れてリボンの需用は近年著しく增加し其種類も亦多きことなるが今の流行物と云ふは繻子目紋、透し、杢目等にして就中杢目の最も廣く持囃され又其色にも種々樣々なるがあれど昨今最も需用の多きは鶯茶、菫、小豆、茶色等とし少女向は矢張赤にして國旗、櫻など所謂時局摸樣の紋を現はしたるもの大流行なりリボンは其幅四吋より半吋まであれども廣く行はれつゝあるは一吋より一吋半までのものにて今頃より夏季に掛けては透しもの需用最も多しとかや

雜録

東關紀行講義（五）

文學士　境野天華

此の山もこえおりて湯本といふ所に泊りたれば、深山おろしはげしくうち時雨れて谷河漲りまさり、岩瀬の浪高く咽ぶ暢師房の夜の聞きにも過ぎたり。彼の源氏物語の歌に泪催す瀧の音かなといへる思ひ寄せられて哀れなり。

それならぬ頼みはなきを故郷の夢路ゆるさぬ瀧の音かな

●●●暢師房。　白樂天の詩に六月灘聲如猛雨、香山樓北暢師房。とあるのから引いて來たもの、谷川の水の流れ激しく音高いところを云つたもので、暢師と云ふのは白樂天の友人、文暢と云ふ僧侶。

●●●●●泪催す瀧の音。　源氏物語若紫卷に出てゐる歌、吹きまよふみ山おろしに夢さめて、泪もよほす瀧の音かな」と云ふ歌を引いて書いたもの。

（通解）　箱根山を越えてしまつた處に湯本の宿と云ふのがある、此處に一夜の宿をかりた。深い山の中の事で、山から吹く風が強く、雨も降り加はりてしぐれて來たので、谷川の水嵩が増し、漲れて川瀬の上を流るゝ浪が岩に激して音高く咽せんでゐる、彼の白樂天の詩に見えて居る、文暢と云ふ坊さんの部屋の前を流れて居る溪川の音が、夜闇に響いて聞えたといふのもこんなにひどくはなかつたらうと思はれる、また彼の源氏物語の中の歌に瀧の音が山おろしの風に吹かれて音高く聞えるのを聞いて何時かしらず、心寂しさに泪ぐまれ

て來ると云つてゐるのもこんな時の思を述べた歌であつたらうかと思ひわたつた。

遙々と故郷を離れてこうして來てゐると只何時も心にかゝりて、いつも其の事ばかりを賴みにしてゐるのであるが、それもこう谷川の水の音が騷がしくては眠りつかれぬので嬉しい故郷の夢も碌には見る事が出來ぬ。

北の宿を立ちて鎌倉につく日の夕つ方雨俄かに降りてみかさもとりあへぬほどなり。いそぐ心のすゝめられて、大磯、江の島、もろこしが原などきこゆる所々をも見とゞむる暇もなくてうち過ぎぬるこそいと心ならず覺ゆれ。

（通解） 此の湯本の宿を出發していよ／＼鎌倉に着くと云ふ其日は夕方頃になりて、笠も取上ぐるひまもないほどの俄かの雨に出逢つた。今日はいよいよ鎌倉に着くと云ふので前の方へばかり氣は引かれて足を進めたのであるから大磯も、また江の島ももろこしが原（片瀨川の東方一帶）のと云ふ名所々々も能く見てゆくひまもなく、只通り越してしまつたのは殘念の至りである。

暮るゝ程に下りつきぬれば、なにがしのいりとかや云ふ所にいやしの賤が庵をかりて留まりぬ。前は道にむかひて門なし。行人征馬すだれのもとに行ちがひ、うしろは山近くして窓に臨む。鹿の音、蟲の聲垣の上に忙はし旅店の都にことなる狀かはりて心すごし。

（通解） 丁度日沒頃になりて鎌倉に着いた、それから何とか云つた谷（鎌倉は山多き所で山と山との低地を谷と名けて居る、例へば扇が谷松葉が谷と云はんが如き）合にある見すぼらしい賤が伏屋を借りて其處にしばらく足を駐むることゝした。家の前の方は直ちに街道になりてゐる、家には門

なく、街道を通りて往く旅客や、旅客を乗せたところの馬やらが軒につるしてある簾の所を行きちがふてゐるのが見られる。又後の方は直ぐ近くに山がありて窓にのぞき込んで居る。鹿の聲も、蟲の音も直ぐ近くの垣の本にせはしなく鳴いてゐるのが聞こえる。此の旅の宿の有様は萬事都の郷里とは異つて何から何迄様子が變つてゐて、實に悽愴の感を起こすを禁じ得ない。

かくしつゝ明し暮すほどにつれ〴〵もなくさむやとて和歌江の築島、三浦の三崎などいふ浦々を行きて見れば海上の眺望哀れを催して、こしかたに名高くおもしろき所々にも劣らず覺ゆ。

さびしさはすぎこし方の浦々も
　一つ眺めの沖のつり舟

玉よする三浦の崎の波間より
　いでたる月の影のさやけさ

（通解）此様なありさまで日一日と送りてゐた、充分時には寂しく詮方なくも感じたので、其の無聊の思を慰むる爲めに、思ひ出して、此の邊の名所と云はるゝ和歌江の築島（現今飯島が崎と呼ばれてゐる所で歳月の變遷は昔の島を陸續きにしてゐる）やら、少し遠い所では三浦半島の尖端三崎の方へも出懸けて見た。何處も何處も見るに面白い所で道中で見た名所の名高い好い景色にも劣らぬほど面白く感せられた。

旅の身には何一つ寂しく見えぬものはない、道中で見た所の浦の景色も此處の浦の景色も同様でありて、沖の方を何處から何處へ行くのであらうか、釣りする舩が心細く見える。

月の光が浪に流れて、渚へ玉を打ちよせて居るやうである。三浦崎の廣い浪の間からさし出た月、其のさす影の爽かに涼しいことは又格別である。

そも〳〵鎌倉の始めをまうせば、故右大

將家と聞え給ふ。水尾の帝の九の世のはつえをたけき人に受けたり。去にし治承の末にあたりて義兵を擧げて、朝敵をなびかすより恩賞頻に隴山の跡をつぎて、將軍のめしを得たり。營館を此の所に占め佛神を其の砌に崇め奉るより此の方いま繁昌の地となれり。

隴山の跡。漢の將軍李廣が故事、李廣は隴西の人、しば〳〵匈奴を征して功を建て恩賞を受けた。隴山は其の家のあつた所。

（通解）　元來此の鎌倉に初めて覇府を開いたのは誰であるかと云ふに、最早死んでしまはれた右大將源頼朝は即ちそれである、此の頼朝は水尾天皇（清和天皇のこと、源氏は清和天皇より出づ）の九代の末裔になりてゐて武門の家柄に生れたのである。平氏の一族が暴横を極めたとき即ち治承の末に平家追討の勅旨を奉じて義兵を擧げ、朝敵平氏（平氏を指して朝敵とは云ふべきとでない、然し此の紀行の作者は鎌倉時代の人であるから、こう書いたもので宛も彼の李密と云ふ人が其の陳情表の中に三國の蜀を僞朝と書いたのと同じことである）を討ち滅ぼし從へた其の勳功によりて頻りに恩賞を被むりたことは彼の漢代の將軍李廣とも比すべきほとで、遂に征夷大將軍に任ぜられ、其の本營幕府を此の鎌倉の地に定め、諸佛諸神を其所此處の地に建立し、鎭座したので此の地は其の以後俄に繁華の巷となりたのである。

中にも鶴が岡の若宮は、松柏の緑いよいよ茂く、蘋蘩の供へ缺ぐることなし、陪從を定めて四季の御神樂怠らず、職掌に仰せて、八月の放生會を行はる。崇神のいつくしみ本社にかはらじと聞ゆ。

蘋蘩。蘋は水草、蘩は蓬の類共に、神前に捧ぐる供物。

●●●放生會。今も諸神社にて行はれて居る。放生とは生物を放つと云ふことで、此の事の起りは戰爭等の爲めに多くの人を殺ろしたので其のつぐのひの爲め馬等の生類を放したのが今も習慣となりて殘つてゐる。

(通解) 神社佛閣の數ある中で、取り分け鶴が岡の若宮八幡は立派なもので周圍に生ひ茂りて居る松、柏の類は其の葉の緑年一年と濃くうるはしくいよ〳〵此の宮の光彩を添へてゐる。又神前には何時も蘋蘩の供物がありて、神前に奉仕する神職の人達は四季折々の神樂を怠りなく奏し、また其の時になれば、何時も役人達に仰せて八月に一度は、放生會を行はるゝ事になりてゐる。此の若宮八幡を官から尊信される事は本社(男山八幡宮)に少しも違つた所はない。

二階堂は殊に勝れたる寺なり、鳳の甍日に灼き、鳧の鐘霜にひゞき、樓臺の莊嚴よりはじめて林池のありかにいたるまでことに心とまりて見ゆ。

●●●二階堂。二階堂が谷にあつた永福寺と云ふ寺のこと。

●●●鳳の甍、鳧の鐘、鳳凰の形をなした寺の瓦、鳧の鐘とは周禮の中に鳧氏鑄レ鐘とあるところから鳧の鐘と云ひ來りたもの。

(通解) 數多寺院のある其の中にも二階堂か谷にある永福寺は殊に立派な宏大なもので、鳳の形をした瓦を持た棟はきらぎらと日の光に照り輝き、また朝な夕な撞き出す鐘の聲は霜冴ゆる空に響き渡ると云ふ有樣である。一躰に寺の建築が樓と云はず、臺と云はず、思を凝らして造られてゐて、其の莊嚴で立派なことは更にも云はず、また其の周圍の林や池の在り場所までも何處と非難の入れ場もないほど至り盡くしてゐるので殊更感嘆讃美の思に堪へぬ次第である。しみじみと心に銘へる。

大御堂と聞ゆるは石巖のきびしきを切りて道場の新なるを開きしより禪僧庵

をならぶ、月おのづから紙窓の觀をとぶらひ、行法座をかさぬ。風とこしへに金磐のひゞきをさそふ。しかのみならず代々の将軍以下造りそへられたる松の社、律の寺まち〳〵にこれ多し。

●大御堂。大御堂が谷にある勝長壽院のこと賴朝の建立するところ。

●道場。清淨なる境界、佛道修行の場所の意、寺と云ふも淸舍と云ふも同義。

●紙窓の觀。觀は寺觀の義、紙窓ある寺と云ふ意、禪庵のことを云つたもの。

●行法。座禪の行、修法。

(通解) 大御堂と云はるゝ御寺は其の始め、石や巖のひどく重なり合つてゐたのを切り開いて、佛道の爲めに新に、建立せられた寺院であつて、其の以來、彼方此方に禪僧の庵が立て連らねられてゐる。月は自ら去來して禪僧が座禪庵の紙の窓を照らし(とぶらひ)其處に禪定の行法に凝りていよ〳〵悟達の境に入らしめる。其處に吹き通ふ風は永久に鐘や磬(石の樂器)の響と調子を合せていよ〳〵人の心の無明を破らうとつとめる。只これしきでなく、代々の鎌倉將軍によりて次第々々に建て增された所の松の林に包まれた神のみやしろまたは八重律生ひ茂るあたりの御寺の數はこゝに一々數へ立てられぬほどで其處此處に散在して居る。(まち〳〵にこれ多し)。

(次號完結)

米國婦人の同情

米國人の日本贔屓なるとは屢々聞く處なるが此程一人の老女紐育なる我領事館に來りて領事に面會を求め今回の戰捷に付深く我國に同情を寄する旨を述べ且つ戰死したる我軍人の寡婦孤兒の救恤資中に加へられたしとて米貨千五百弗(我三千零二十二圓六十六錢)の寄贈方を申出でたり依りて領事は其老女の姓名を問ひたるにこは何處までも匿名にて取扱はれたしとて其姓名を告げず其貨幣を差置きたるまゝ立ち去りたりとは眞に奥床しき限りと云ふべし而して右の金額は先月本省に到着したりと

漢文講義

阿井笛村

少女殪狼　菅晉帥

田頭村百姓女幾美、年十四、從レ母采レ薪、欻有二一狼一突出、母驚仆、狼坐二其上一、女急拔二一杙一、力擊中二其背一、狼僨二澗中一、女掬レ水含レ母、氣息漸蘇、乃掖而還、里人聞レ之、提レ槍入レ澗覓レ狼、狼已逸、怏然欲レ歸、忽聞二荊棘中咋咋作一レ響、視レ之則狼脊梁折不レ能レ起、蛇行欲レ去、便刺斃レ之、曳而歸、夫一擊殪レ狼、多力丈夫、尚且不レ能、況於二細嫩女子一乎、救レ母之誠、凜貫二天地一、方二此時一、不三自知二其爲一レ稚、射レ石飮レ羽、誠有二其理一也

（讀方）田頭村の百姓の女幾美、年十四、母に從ひて薪を采る、欻ち一狼有りて突出す、母驚き仆る、狼其の上に坐す、女急に一杙を拔き、力擊して其の背に中つ、狼澗中に僨る、女水を掬して母に含ませ、氣息漸く蘇す、乃ち掖して而して還る、里人之を聞き、槍を提げて澗に入り狼を覓む、狼已に逸す、怏然として歸らんと欲す、忽ち荊棘の中咋咋として響を作すを聞く、之を視れば、則ち狼の脊梁折れて起つこと能はず、蛇行して去らんと欲するなり、便ち刺して之を斃し、曳きて而して歸る、夫れ一擊にして狼を殪すは多力の丈夫も尚且つ能はず、況や細嫩の女子に於てをや、母を救ふの誠、凜然として天地を貫く、是の時に方り自ら稚たることを知らず、石を射て羽を飮む、誠に其の理有るなり。

（譯解）備前の國に田頭村と云ふ所がありまして其村の百姓の女に幾美と云ふ十四歲の少女がありました、或る時母親に從て山中に薪を採りに往きました、欻有二一狼一突出母驚仆狼座二其上一すると

欻ち一疋の狼が突けに出て來ました、母親はそれを見るか否や懴きて仆れて仕まいますと、狼は其の體の上にのぼり上りて今にも一口に咬み付かんとして居ります、女急抜二一杙一力撃中二其背一女は手急くそこらにありたる一本の棒杙を抜取りまして、力任せに撃ちました處がそれが狼の背中に中りまして、狼僨二澗中一狼は澗の中に僨れ込みました、女掬レ水含レ母氣息漸蘇乃掖而還‖そこで女は水を手に掬み取りまして母の口に含ませ、介抱する中に漸くと息をふき返して蘇がへりましたそれから母を掖して家に連れて還りました、里人聞レ之提レ槍入レ澗覓レ狼‖處が里の人たちが其の話を聞て、槍を提げて澗には入りて狼を覓しましたけれども、狼已逸快然欲歸‖狼は已やどこへか逃げて仕まつて見へませぬ故、快然と力を落して歸らうとしました處へ、忽聞二荊棘中咋咋作一レ響‖思ひがけなく荊棘の中で咋咋と響く音が聞えました、視レ之則狼脊梁折不レ能レ起蛇行欲レ去‖何だらうかと之を視ますと（○視の字は物を氣を注けて見ること）彼の狼が脊梁を折つて起つこと不能、蛇の樣に腹で以てずり行ひてそこを立ち去らんとして居るのであります、便刺斃レ之曳而歸‖便で槍で以て刺斃して仕まひまして、曳きずつて歸て來ました、夫一撃殪レ狼多力丈夫尙且不レ能況於二細嫩女子一乎‖（これよりは作者の言辭であります）、夫れ只の一撃で以て恐ろしき狼を殪すと云ふことは、力の多れたる丈夫で尙且もなか／＼不能ことである、況してや細嫩き女の子であるものを並大抵の事で能きる筈はない、全く母を救けようといふ一念の誠が天地を貫ひたからである、方二此時二不三自知二其爲一レ稚‖此の塲合に方りては、自分にも其の僅か十四歳計の稚ひ少女であるとは全く知らない樣に成て居たのである　射レ石飮レ羽誠有二其理一也昔の話に遙かの向ふの方に一疋の虎が居ると思て、矢を射掛けたが、其の虎と思つたは石であつたのに、其の石が其の矢の羽をまで飲み

かくす程に、箆深く射こまれたと云ふ事があるが一念と云ふものは恐ろしきもので、これも誠に其の道理がないとは謂はれぬ、一念巌も透すと云ふのはこの事でありませう。

烈女阿富　森田益

烈女名富、僦㆓居内久寶寺街㆒、以㆑鬻㆑紙爲㆑業、父歿、遺孤四人、女其第二也、一夜、賊數人突入、擧㆑家皆逃、獨女與㆓長兄仁三郎及弟吉藏㆒在、賊挺㆑刀刧㆑兄、問㆓財所㆑在㆒、時女甫十歳、以㆑身蔽㆑弟、出㆓所㆑蓄星金㆒、乞㆑赦㆑兄、賊怒、刀背連擊㆑女、女委㆓身刀下㆒曰、殺㆑妾赦㆑兄、無㆑兄如㆑家何、辭氣悽惋、賊相顧感嘆引去、後賊被㆑捕自招、市尹召㆓女及兄㆒親問㆓其狀㆒以聞㆓大府㆒、大府賜㆓銀十錠㆒旌㆑之、實嘉永元年七月十九日也、距㆓遇㆑賊之日㆒百有餘日、

（讀方）　烈女名は富、内久寶寺街に僦居し、紙を鬻ぐを以て業と爲す、父歿し、遺孤四人あり、女は其の第二なり、一夜、賊數人突入す、擧家皆逃ぐ、獨り女と長兄仁三郎及び弟吉藏とのみ在り、賊刀を挺して兄を刧かし、財の在る所を問ふ、時に女甫めて十歳なり、身を以て弟を蔽ひ、蓄へし處の星金を出して、兄を赦さんことを乞ふ、賊怒りて、刀背もて連りに女を擊つ、女身を刀下に委ねて曰く、妾を殺して兄を赦せ、兄無くば家を如何せんと、辭氣悽惋たり、賊相顧みて感嘆し引き去りき、後ち賊捕へられて自ら招す、市尹女及び兄を召し親しく其の狀を問ひ、以て大府に聞す、大府銀十錠を賜ひて之を旌す、實に嘉永元年七月十九日也、賊に遇ひし日を距ると百有餘日なりき。

（譯解）　此の烈女の名は富と申して、大阪内久寶寺街と云ふ所に僦居して、紙を鬻ぐのを家業として居ました、父なる人は歿りまして、遺孤四人女其第二也＝遺孤の子供が四人ありましたが、富女は其の第二番目の子であります、一夜賊數人突入擧㆑家皆逃＝然るに一夜のこと、賊が五六人突けに

這入て來ましたところ、擧家の人には驚き恐れて皆な逃げ出して仕まいまして、獨だ此の富女の長の兄の仁三郎と、弟の吉藏の三人のみ殘て居ました、賊は刀を挺きもちまして兄の仁三郎を刧かし財の在り場所を問ひ尋ねました、富女は此の時甫か十歳でありましたけれども、以レ身蔽レ弟出二所蓄昼金一乞レ赦レ兄＝己れの身を以て弟吉藏を蔽ひまして、かねて自分に蓄て居た所の小粒銀を取り出して、それを賊の前に差出してどうか兄上を赦して下さいと乞みました、賊怒刀背連擊レ女＝賊は中々其の位の事では承知せず、怒りて刀の背を以て連りに富女を擊ちました、女委二身刀下一曰殺レ妾赦レ兄無レ兄如レ家何＝富女は少しも恐るゝ氣色なく其の身を刀の下に委して、さあ〳〵妾を殺して兄上をばどうぞ赦して下さい、若し兄上がお死なりなされたときには、此の家を如何して立てませうぞと曰して、辭氣悽惋＝其の辭と云ひ、其の氣しきと云ひ、如何にも悽惋く見えました故、賊相顧感嘆引去＝そこで賊どもも互に顏を顧せ感嘆して引き去て仕まいました、後賊被レ捕自招＝其の後此の賊が召し捕られました處、自分の方から久寶寺町の紙屋に押入たと云ふ事を招しました、市尹召二女及兄一親問二其狀一以聞二大府一＝そこで市尹（今の府知事の如きもの）が富女と兄の仁三郎を召び出して、親しく其の時の狀を問ひ調べますと、賊の申立と少しも異ひませぬ故、以聞二大府一＝そこで其の事を幕府へ聞へ上げました、大府賜二銀十錠一旌レ之＝幕府に於ても大そう感心して銀十錠と云ふ御褒美を賜りて、富女の烈よき行を旌はされました、夫が實に嘉永元年七月十九日の事でありましたが、此の日が、距二過賊日一百有餘日＝賊に出過た日から百有餘日目でありました。

富女の事につひては、他にも多くの傳が殘つて居ますが、橋本晩翠と云ふ人の記事文に依りますと、其の時三人の强盜が戶を破りて這入て來まして、母親は錯愕いて後口の戶から走り出で隣の家に救を乞ひ、仲兄の一次郎と云ふのは紙苞の中に隠れました、賊は刄を露し仁三郎に迫て、衣類や財の

有り所を言へと劫しますと、仁三郎は僞り對へて余は小厮ですから、そんなものは知りませぬと曰ふと、賊はいくら汝が小厮でも知らぬ理はないと怒聲つけました、すると阿登美は急ひで私の蓄へ置たる荷包の中から粒銀一つ二つを取り出して、それを仁三郎の前にさし屆けて、阿兄これで以てお謝りをなさいと曰ふと、賊は其の言辭の中に阿兄と稱ふたのを聞咎めて、益々怒り益々迫て、奴蹤吾を詐り居るな惡き奴ではある、速かに金の有り場所を告ぐればよし左もなくば、屠殺して仕舞ぞと曰はれて、阿登美は一生懸命右の手に弟吉藏の手を確かと取り、左の手にて賊の裾を牽きて、盜どの今夜若し此の阿兄が死んだ時には、明日から誰が我の家の經紀をしませうぞ、蘐ぞ兄さんを助けて其の代りに吾身を殺して下さいと、且つは諭し且つは泣きて曰ひました、其の辭といひ其の氣色といひ厚欵こもりて見えましたので、逭がの賊も大に感心して竟に何も取らずに立去りました其後賊が召捕りに成て、其の事を自首しました故

寡女を初め家人を召び出して問ひ尋ねると、悉く賊の申立の通りでありました故、市尹が大に嘆賞されて、乾菓子一器を縐紗帊に縱んで、而かも奬辭を副へて下された、これは表沙汰の御褒美でなく、市尹の一己の賞品と云ふ印であります、其の後で更に官から白金十錠を賜りて御褒賞に成りました、これは異數の計らひらしくあります、其の日は嘉永元年七月十九日で、此の日官にては彼の三人の賊を町中引廻しの上お刑になりましたが其の引廻しの途中内久寶寺町の阿登美の家の前を通る時に、賊は憮然かへつて嘆息して、余も是まで數限りもなく人の家に剽掠たが、此の家の女兒の樣な人には嘗も出遇た事がないと曰ひました、此の言を聞ひて人皆阿登美の健氣なる行を、感じ嘆めぬ者は無かつたと云ふことであります。

此の文も其の大樣は前文と異つた所はありませぬ唯後の方は事柄の記し方が詳細くありまして、話としては稍々興味が多いかと思はれますから重複を厭はず、參考として併せ載する事としました。

英文雜錄

慶應義塾大學講師
宮森麻太郎

MISCELLANY IN ENGLISH AND JAPANESE.

I. A Dog in A Furoshiki.

A girl had just entered an electric car at the station of Ochanomizu. She was about sixteen years old and had a charming countenance beaming with smiles, and her hair was done up in a graceful style. She held on her lap something packed in a large *furoshiki* of purple silk crape, and was smiling a significant smile. Her beauty and her strange package had attracted the attention of the other passengers. To their surprise, the purple *furoshiki* began to stir and they were still more surprised when a small dog had pushed his head out of the *furoshiki*. The event excited them to laughter and noise; upon which the girl blushed and hid the pup in the *furoshiki*, though the latter was struggling to get out. The conductor coming before her, she asked for two tickets with a smile. "Two tickets! my young lady," said the conductor with a dubious look, "I suppose you have no companion? you want a return ticket, don't you?" "No, I want two ordinary tickets." While she was so saying, the dog again pushed her head out of the *furoshiki* and gazed at the conductor, as if the animal were saying, "Why, I am her companion." The conductor understood what the damsel meant but said, "You can get two tickets, but I am sorry to say no animals are allowed in a car." But the dog's innocent look and the maid's gracious smiles were irresistible. At last the conductor said smiling, "Well, lady, here are two tickets for you."

風呂敷の中の小犬

お茶の水の停留場より電車に乘込める娘あり。年齢十六歳許容貌美麗にして愛嬌は溢るゝばかり髪は優美に結ひ居れり。膝の上には紫縮緬の大風呂敷に何やらん包みたるを抱へつゝ仔細あり氣に莞爾々々(ニコニコ)笑ひ居たり。娘の美貌と其奇妙なる風呂敷包とは他の乘客の注目を引きたり。偖も不思議なるかな紫の風呂敷は搖き出しやがて一匹の小犬其の中より頭を擡げしかば乘合の人々は笑ふもあり騷ぐものあり娘は顏打赤めて犬をば風呂敷の中に隱したくれども犬は飛び出さんとして頻にもがきけり。其の時車掌來りければ娘は笑ひながら切符二枚下さいと言へば車掌は怪訝の面色にて『二枚入りますか貴娘は御一人で御座いませう往復切符ではありませんか』と念を推せば『イーエ通常の切符二枚ですよ』と答ふ其中小犬が又もや風呂敷の中より頭を突き出し

車掌を見詰め『私は此嬢様の連れですよ』と言はねばかりなり車掌は『縦令切符二枚お買ひなさッても御氣の毒ですが動物を電車に乘せる事は出來ません』と言つたれども犬の無邪氣なる顔附と娘の愛嬌ある笑顔とに我を折て遂に笑ひながら『ヨロシウ御座いますヘイ二枚切符を差上げます』

II. Exercise in Translation from Japanese into English.

前號和文英譯の解答

1. Where will you spend the coming spring vacation?
2. I will visit the hot springs at Hakone.
3. Why is the 25th of December a holiday in Europe and America?
4. Because it is Christmas.
5. The 22nd of February is the birthday of George Washington, the first President of the United States of America.

和文英譯課題

1. 東京には女子の大學がいくつありますか
2. 唯一箇あります
3. 何處にありますか而して何と云ふ學校ですか
4. 其は小石川區にあります 而して女子大學と申します
5. 成瀬仁藏氏は女子大學の校長です
6. 何年前に其學校は設立されましたか
7. 七八年前設立されました
8. 教師の多數は婦人です
9. 成瀬校長は何學科を教へますか
10. 氏は修身と日本歴史を教へます

III. Practical Letters.

Inviting a Lady to a Luncheon.

5 Sakurada Cho,
Azabu,
May, 1, 1905.

My Dear Miss Sanderson:—

If disengaged, will you come to lunch with us on Monday next, at 1 o'clock? We shall be very pleased to see you.

Believe me,
Sincerely yours,
Alice Wood.

午餐に婦人を招く文

拜啓次の月曜日午後一時に午餐差上度候間同日に御約束無之候はゞ何卒御光來のほど奉待上候此段御案内申上候

アリス、ウード拜

サンダーソン様

Answer to the Above (Acceptance).

3 Tatsuokacho, Hongo,
May 2,1905.

Dear Mrs. Wood:—

Please accept my thanks for your kind invitation to lunch on Monday next. I have much pleasure in accepting it.

Sincerely yours,
Mry Sandersor.

同上返事(案内に應す)

御手紙拜見仕候處来る月曜日午餐に御招き被下誠に難有存候御案内通り參上可仕候

メリー、サンダーソン拜

ウード令夫人様

Answer to the Invitation (Regrets).

Place, Date.

Dear Mrs. Wood:—

Thank you very much for your kind invitation; but to my great regret, I shall not be able to come to lunch with you, as I have promised to go to Koganei to see the cherry blossoms with some friends on that day.

Believe me,
Sincerely yours,
Mry Sanderson.

案内を斷る文

拜復来る月曜日午餐に御招き被下誠に難有存候得共同日は友人數名と小金井觀櫻の約束致居候ゆへ殘念乍ら參上仕兼候

IV. News of the Day.

The Russo-Chinese Bank Purchases Steamers.

According to the Jiji's Shanghai correspondent, the Russo-Chinese Bank has purchased the steamers Wuchang and Taiwan.

露清銀行滊船を購入す

時事新報の上海通信員の所報によれば露清銀行はウーチャン號及臺灣號の二滊船を購入せり

T. H. Prince and Princess Arisugawa.

A report has been received here to the effect that Their Highnesses Prince and Princess Arisugawa, now on their way to Germany, arrived at Aden on the 29th ult.

有栖川宮兩殿下

獨逸國へ向け御渡航中の有栖川宮兩殿下には先月二十九日アデンに御着相成りたりとの報知當地に着せり

The "Shanghai Times."

A Shanghai telegram to the S. C. Morning Post of Hongkong states that the Shanghai Times has been sold to the Russians. It was the property of Mr. Frank Maitland.

上海タイムス

在香港モーニングポースト社に着せる上海電報によれば露人は上海タイムスを買收したりと云ふ同新聞はメイトランド氏の所有物たりしなり

Rojestvensky's Fleet.

Rojestvensky finally left Kamranh Bay on the evening of April 26.

・ロゼストウエンスキー艦隊

ロゼストウエンスキーは四月二十六日遂にカムラン灣を出發せり

Russia in Central Asia.

Russia has decided to construct a railway from Tomsk to Tashkend.

中央亞細亞に於ける露國

露國はトムスクとタシュケンドとの間に鐵道を布設するに決せり

King Edward's Visit to France.

King Edward has left Marseilles for Paris, amid a great popular ovation.

英王の巴里行

英王エドワード陛下は民衆の大歡迎の內にマルセーユを出發し巴里に向へり

RUSSIAN LOAN.

London, April 28.—Russia is making efforts to float another loan, of 10 million sterling in Germany.

露國公債

四月廿八日倫敦發電露國は獨逸に於て一千萬磅の公債を募らんと努め居れり

RUSSIAN NAVAL PERSONNEL.

London, April 29.—It is reported from St. Petersburg that Rojestvensky while at Madagascar engaged sailors of different nationalities for his warships.

露艦隊の水兵

四月廿九日倫敦發　セントピーターよりの報によればロゼストウエンスキーは馬島滯留中各國の水夫を雇入れて軍艦の操縱に從事せしめたりと云ふ

EARTHQUAKE IN SWITZERLAND.

London, April 29.—An earthquake occurred in Switzerland to-day.

瑞西の地震

四月廿九日倫敦發電　今日瑞西國に地震ありたり

SITUATION IN POLAND.

London, April 30.—The strikes in Poland still continue.

ポーランドの模樣

四月三十日倫敦發　ポーランドに於ける同盟罷工は今日尙繼續せり

澤柳普通學務局長の夫人を訪ふ

琴伴女史

▲お住居

ぽッぽッと沙埃を吹起てゝ、軍國招魂祭の參詣人を困しませた昨日の風も、浮世に積つた萬丈の紅塵を吹き拂つたと見えて、今日はまた麗かな好天氣、門々の、日の御旗も何となく、勇ましく、戰場の露と消えた、勇士の魂が、宿つたやう、處々に昇天の勢で風を孕んだ鯉の幟と共に、尙武の勢ひを顯して、誠に穩かな端午のお節句。



傳通院の何とやら云ふ坂を登り切りますと、左手の角、有名な大黑天の向側に、高い黑板塀で圍ふた大建物、門の前には大きな常盤木の緑の色深く、礎動搖がず雲に聳えて居ります、此れが澤柳氏のお住居で、門を這入りますと躑躅、讓葉、松ひばなどが人待顏に招いで居りました。

廣い玄關の柱に有る、傳鈴を押しますと、暫くして肉付の豐かなお女中が出迎へられ、それから可愛ひ妨ちやまがお二人、嫣然やかに私の顏を見てニコニコと笑はれました。

▲お座敷

玄關から、上りますと、直ぐ左手の、ドアを開いて

此方へとの案内に、先づ通つて夫人をお待ち申しました。

十疊の座敷は、和洋折中の建方で、絨毯を二重に敷き詰められた眞中には、美しい花形の、テーブル懸の掛つたテーブルを圍んで、庭を前にした方には、來客のと見えて五脚の椅子、それに向き合ひまして立派な椅子には、彪の皮が掛つて居ります、多分御主人御夫婦ので御座いませう。

其後には、寢臺が一脚、客の椅子の後の一間の床には、西洋本箱が据えられて、和洋の書籍が、一寸の隙もなく詰められてあります、

又油繪がお好きと見えまして、景色畫の額が二個相對して掛つて居ます。

御主人の机と見ゆるのにも上に本が載せられて、椅子が屬いて、部屋の隅に押し付けられてありましたが、其傍の小さな床には、寫眞ブックが置かれてありますのは、來客にとての御用意と存じました。

▲お庭

苔の衣ならぬ、緑の芝生を、一面に敷いた夢の景色のやうな上を、二人の坊ちやまは、白い小さな、麻裏草履で蝶のやうに、遊び戯れて居られまして、青葉の枝垂梅の後へ隱れたり、又躑躅を圓形に刈り込んだ前へ立たれて赤い奇麗な花を手折られたり、老松の幹に寄り掛られて熊笹の心を取られたり、實に繪にかいたエンゼルの姿でも見る樣に、恍然として居りますと「髪を束んで居りましたのでどうもお待せ申しました。」と優しく會釋して「さあ何うぞ」と、云はれながら、椅子に寄られましたのは、則ち澤柳夫人で、

▲御容子

の内氣らしい極く地味な中に、凜とした高尚な處のあるを御見受け申しました、夫人は純粹の江戸ッ子育で未だ女學校に通つて居られた十八の春、當家の御主人に嫁がれた此方、お二人の御舅姑に、よく事へられ、お子達の教育に心を持ひられて、居られるのです。

▲家庭訪問

當節は雜誌等にも誠に美しい、家庭が見えるやうで御座いますが何うして……宅などは、私が行き屆きませんものですから……お尋ねになりましても、別にお話申やうな事も御座いませんで……本當にお恥しう御座います……ほゝゝ却つてお載せなさいますと襤褸が出る位のもので御座います。

▲家庭の改良

誠に良い方法だ、と存じまして、私も少しは皆さんのお眞似でも致し度いと、存じますが……矢張り年寄りなどが、御座いますと、さう〱思ひ通りにもまゐりませんで………。



夫人は膝を見詰られて、又言葉をつゞけられました

宅でも外國から歸りたてには、外國の家庭は大變に良く整頓して居るから、是非あゝしろなどゝやかましく申しましたが、なか〱實行が出來ませんもので御座いますから、此頃ぢやお最う何んとも申さないので御座います。

▲お子達も乳母なしに

惣領が男で、十四になりますが、只今は最うお茶の水の附屬中學に通つて居ますし、又二番目が女で竹早町の小學校の四年にまゐつて居りますので、留守の間は餘程樂になりましたが、其の下二人とも男で、家こ荒れて居りますので、仲々用事も出來ないので御座います。

夫人は庭に餘念なく遊んで居られる坊ちやまを見ていられましたが、それに朝等も少し寝坊を致して居りますと、お客が多勢見へるので、困るといふ譯ではムいませんが、自然早起をするとになるのです。

▲起臥の時間

外國などでは、臥ります時間には、何んなに泣いても必ず休ませ、起る時間には眠むがりましても必ず起すさうで御座いますから、私もそんな善い習慣を附けたいと存じまして……實行しやうと致しますと自然泣聲が年寄の耳に這入つて叱られると云ふやうな風で……それに子供を泣かせます事は、餘り心持のよくないことで……それでも、外國のやうな建物でゝも、御座いましたならば、泣聲が聞えないで、宜しう御座いませうが……何うも實行が六ケ敷う御座います。

▲裁縫

是れも時間を定めて致したいと存じますが、種々と臨時の仕事が出て參りますので、思ふやうには參りません……下女を對手に、大概毎日致して居りますが、何時迄經つても、此れでお終ひと申します事はなく、後から後からと、追はれるので御座います。

▲割烹

夫人は一寸小首を傾けられまして、

はい、大した事も致しませんが、毎日では隨分困りきるので御座います。何か珍らしいお菜でもと存じまして、たま〳〵新しい事を致しますと、大變な御馳走が出來まして……此間も軍人が、十七人程宿つて居りまして、三月の十七日から、五月の三日迄居りましたが、賄は宅の前で出來て居ますものの責めて夕方斗りでも、一品か、二品の、御馳走を致したいと、存じまして、彼れ此れと考へますと、一日、何んにも爲ないで其れに斗りかゝつて居るので、御座いました、其方々の仲には今でも御手紙を下すつて、お禮を被仰る方が御座います。

▲衣服

夫人は私の問に、可笑しさうに、嫣然に笑はれまして

宅でも別に關はないと、申すのでも御座いませんが矢張り頓着しない方で御座いませう、餘り華美な服裝も致しませんし、贅澤も致さないので御座いますと仰やいましたが、此時の夫人のお召物は、紫紺色の襦袢の襟に、瓦斯二子の着物、羽織は紬の割合に微細い縞物でした。

令息達は、紺飛白に白いヤラコの胸懸を懸けて居られました。

▲御主人の氣樂

夫人は、また微笑まれて、宅では少しも關はない方で、金錢の出入から、子供の事に至る迄みんな私が致すので御座います……一體如何でも、良いと云ふ方で御座いますから、それに私も何方かと申しますと、餘り頓着しない方で御座いますから、子供の敎育などは、外の皆樣方のやうに立派には出來ないので御座います、孃などもお茶の水の學校へ、參りたいと申して居りますが、近い方が良いと存じまして……それに小學校はまあ何れでも良いと申やうなもので……………。

▲芝居寄席

人込の所は大の嫌なので御座いますので芝居は勿論寄席等にも遂に參つた事は御座いません……それに子供の敎育を致して居ります内は、そんな處に參りますのは餘り宜しくないと存じまして……。」

▲交際

内氣な御容子の耻し氣に下を打向れまして、濱尾さんなどの奥樣は御交際もお上手で被居いますし、藝などもよくお出來なさるやうですが、私等は人樣にお目に係るのは大嫌ひの方で御座いますから、つひ此の御近所にも知つてる方が御座いまして、宅などは度々參りますが、私は一度も上つた事は御座いません。

▲避暑

餘り遠方などには旅行を致しませんが、子供達は……私の實家が大磯に御座いますので、毎年其處へ參ります、宅はどちらへとも限らず、ちよく／＼出かけます、と仰しやいました、お忙がしい樣に、お見受け申しましたので、これで御暇申しました。



家庭における露帝

敵國露西亜の皇帝ニコラス第二世は實に氣の毒な人である、滿洲に出してある兵隊は戰ふ毎にきつと敗れ、內亂は國內の重なる都市に起り、無政府黨は最近に伯父ウラジミル太公を暗殺したばかりか、帝の身の周邊にも恐ろしい刺客が常に附纒ふて居り、一日も安心は出來ないのである、併しその家庭にあつて、露帝は如何にも圓滿なる夫、慈愛深き父であつて、暇閑な時には畫を描き自分の好きな繪を書いて靜和な生涯を送つて居らるゝそうで、曾て自分は何故露帝などになつたのであるか、質素な英國の田舍紳士の家に生まれて、出來る事なら世界一の讀書家になりたいと言つて歎息せられたと云ふ話がある、非常な子煩惱の方で、四人の皇女の方は、勿論、殊に昨年誕生せられたる皇子アレキジスを可愛がる事は頗る厚い、此皇子も曾て身體虛弱で、到底育つまじとの評判もあつたが、現在皇子に謁見するの榮を得た者の話に依れば、父君に似て茶色の眼を有つて居る丈夫な小供であるそうだ。

昨年の基督降誕祭には、ツアースコエ、セロ町の防

火用の森林へ、一人の林務官を連れて行つて、親ら降誕祭の壇上に飾る祭木クリスマストリーの選擇に出掛けて行つたそうで、其樹を装飾するのは、皇后のつとめであるが、其の樹に梯子を掛けて、之れに上つて其頂上の枝へ黄金の球（是れは露國の皇室で四十年以上もクリスマストリーに用ひたるもの）を吊るしたり、電氣ランプを容れた支那提燈を飾り付けるのは、皇帝親らせらるゝのである。

露帝は毎朝目覺めると、直ぐ未だ身仕舞をせぬ内に皇子が、青色の搖籃の内に臥せつて居る部屋の入口の戸を叩いて、アリオシヤ坊（皇子の呼名）の今日の機嫌は奈何ぢやと、必ず尋ねるのが癖であつて、何にか面白からぬ事があつて、氣がクサ〳〵した時などには、早速皇子の搖籃の傍へ行つて、無心な幼兒の顏を打眺めながら何にも彼にも凡て自分の困難なことを打ち明けて仕舞つて、氣を紛らして居る、此間もサアジャス太公の横死の報を聞いた時などには直樣育兒室へ駈け入つて、其搖籃に寄り掛かりながら、坊や今惡い奴等が御前の大伯父さんを殺して仕舞つたよ、此次の番は誰れだらうか、と言れて吐息ついて居られたと云ふ事である。

露帝は素人畫家としては、可成上手の方である所から、皇后と二人して此最愛の皇子の姿や、其動作等を始終縮圖に取つた物が、五六百枚から集まつたので、是れを合作の小兒畫帖に仕立てゝ、日夕之を眺めて樂んで居らるゝ、所が去年の冬であつた、宮内省の屬官で、ヴラソツフと云ふ奴、紐育の某新聞社から、千圓の賄賂を貰つて、其新聞の日曜附錄の材料にする爲め、此スケッチを一枚盜み出さうとしたのを、目付けられたと云ふ話もある。

歐羅巴唯一の專制君主たる露帝は、なか〳〵其臣民の安寧幸福を計つて、其社會の改良發達などには、力を盡さうとはしないのであるが、其家庭に關しては、非常に進歩的の考を有つて居らるゝ、昨年ペイターホッフに到着すると、早々に皇后が、是れ迄使用して居つた古風な寢臺を罷めて、英國出來の輕る

い專賣特許の眞鍮製の新式寢臺と取換へ、此寢臺の上で皇子は降誕せられたのである。露帝は非常な神經質で極く些細な出來事にも直きに吃驚し、其上に迷信家であつて、卜者の言葉などを善く信ずる事は、人の知る所である、數月前の事であつた、ツアーコエセロの宮殿で、政務を執られたとき、その机の上に置いてあつた皇后から誕生日の紀念として贈られたる置時計が、偶然とまつたので、早速侍從を呼んで次ぎの室の時計の時を尋ねさした處不思議にも同じ時刻にとまつて居つたので、非常に氣に掛けて、早速蒲洲の野



にある總督アレキシーフに打電して、露軍に何か不吉の事起らざりしやと尋ねたと云ふ事である。
又數年前の事であつたが、露帝が海外觀光の途に出で給ひし折、其著しい神經質から種々の奇談を演じた内に、英國外務省の或高官が、露帝と食卓を共にした節、偶々給仕が露帝の背後で、三鞭酒の口を開いた其物音を聞いて、露帝は驚愕の餘り、失神して一時は殆んど人事を辨せざる程であつたと云ふ事である、併しニコラス二世は、自分の弱點の充分惡い事を知つて居る所から、他人迄自分の眞似をすることは斷じて許さない。
嘗て皇后にヤロスレブの著名なる魔術師から、皇子降誕を保證する呪符を贈呈した處、幸ひと皇子の降誕せられたので、皇后は此魔術師に感謝狀を送らうとした處、斯くと聞き知つた露帝は大に怒つてその呪符を皇后の手より引奪つて足下に踏にじりながら、叱つたそうだ、又皇后の衣裳室の壁上に、災難除の御守に、劍先形の牧草を吊るして置いたのを見付けて、其取除を命じたり、皇子の乳母モンロー夫人が、皇女達の御相手になつて、惡魔に關する伽話しを聞かして居つたのを聞いて、此迷信的饒舌婆めと叫んで免職させたと云ふ話もある。
皇后アレキサンドリヤ、フエロドロビナの家庭にありての仕事は、普通人の婦と少しも差異はないので晝夜共に一寸とも氣の休まる時は無い位で、露帝及び小供達の健康とか、其快樂とか云ふものに氣を付けて夫を慰め、其勇氣を鼓舞するに勉めて居る、其の心勞は實に一方ならぬのである、毒殺されはしまいかと、始終案じて居る夫に對しては三度々々の食事も一々吟味せねばならぬ、近侍の者でも油斷は出來ぬので、夫の身體の世話を一々せねばならず、又裁縫師、洗濯婦、理髮師を監督せねばならぬ、其上に皇子のすべての世話は自分で悉くせらるゝので、是迄は些細の事は、奴僕の手に任したのであつたが此頃では召仕の者を一切其搖籃の傍に寄せ付けぬ事にして居る、是れは全く露帝が自分一身のことより

も、此皇子の身上を非常に心配して居るからで、此長く待ち望んで居つた皇子にして、一朝逝去の不幸に遭はんか、保守黨の者迄に其反抗を招くのみならず、內亂は國內到る所に蜂起し、露國全國を擧げて混亂の巷に變ずるの恐れがあるから、宮廷に出入する者は一々其背後に、探偵が附いて居つて其探偵に又探偵がつけてあるのである、露國有名の卜者クレシン氏は、明年における露帝の身の上を占なつたことがあつた、その卜方によると、正月には病氣に罹つて、公務を廢するに至り、三月には戰ふ可き澤山の敵を得て其行路には幾多の困難橫はり、身體の危害を免がることはかたい、四月には干戈相交へ貔貅を戰はし、鮮血を濺らした所に長旅をする、七月には病氣にかゝり、多くの困難と危險に遭過する、それで紀元千九百十二年は其生涯中で一番不幸な時で其後の生涯は、總て暗黑の裡に葬むらると云ふ占をしたさうだが、此占を露帝が信じて居るか否かを知りたなら面白いことであらう。

對敵の觀念

子爵　成瀨正雄

予は客臘の犬山壯年會本部月次會（本部は子爵邸內に設けらる）に於て『對敵の觀念』なる演題の下に意見を逃べたこともあるし、また本年正月用にとて同會が作製したる歌留多百首中へも『天か下國家は愚か個人でも常に維持せよ對敵の念』なる句を詠んで置いた次第であるが、予が所謂敵とは最も廣義の意味に解したる敵である。されば之を通俗に相手と解するも差支ないのだ。この對敵の觀念を國家に就ていふときは、戰時砲火の下に相見ゆる相手方にのみ限つたのではなく、平時に於て我に對して敵意を挾む國を始め、常に好意を以て我を遇する國も外國は總べて皆わが敵である、片時も油斷すべからずとの意にて、予は今の塲合大に國家對敵の觀念を養成

せんことを望まざるを得ないのである。

對敵の觀念を個人に就ていふときは、未知の人は言ふまでもなく、知己親友を始めとして親でも子でも兄弟でも姉妹でも自身以外の人はすべて皆我が敵である、片時も油斷すべからずとの意にて、予は個人對敵の觀念もこれを涵養するの要を認めるのである個人の敵中には最も親しかるべき親子兄弟姉妹夫婦等ありて、是等をも敵と思へといふに至りては、聞く者その何の謂たるを知らずと嘲くであらうけれども、予が之を敵視せよとの眞理は炳乎として明らかである。親として子を愛すればとて、之を待つこと寛に失して油斷すれば、子なる敵の爲めに乘せられて迷惑を來たし、甚だしきに至りては家名に係はるやうな曲事を仕出かさぬとも限らぬ。これは畢竟子なる敵に對して親が油斷をする應報である。また子にして親を甘く見てかゝり、その行動親の怒りにふれ、親をして不快の念を抱かしむるのは、子として謹慎の良性を缺ぎ、詰まり油斷の結果親なる敵に對して義務を怠たるのである、また兄弟姉妹の如きも互に迷惑を掛けて不快の念を一方に生ぜしむるは、用意の未だ至らざる結果であつて、寔に心外の至りである。

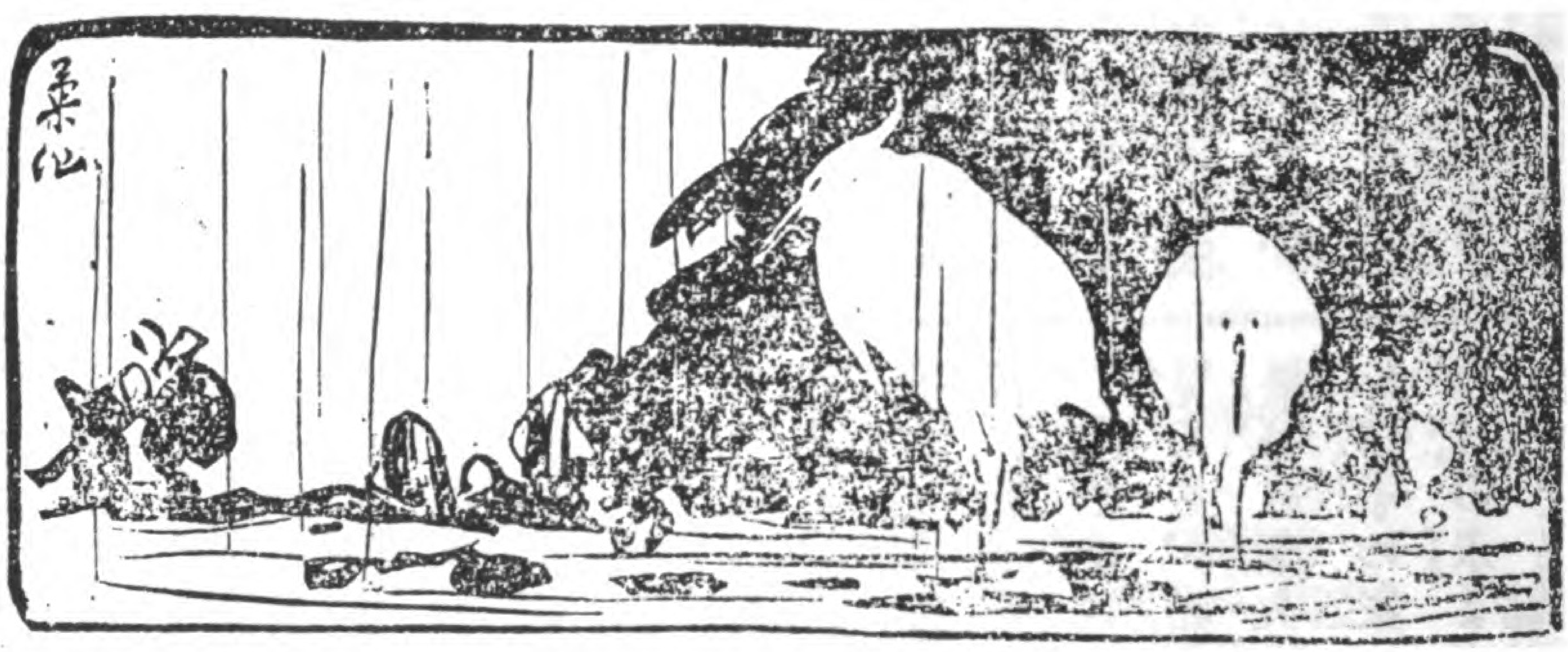
次に夫婦の如きも亦た然りである。夫妻は以前は全く他人なるも、結婚によりて一旦夫婦となれば、最も親密なる關係を有する事となる。されどその親密なる關係に對しては双方共に尤も嚴格に警戒を加へねばならぬことゝ信ずる。なぜなれば、若し夫たる者妻に對して油斷を與へ、その不注意なる點につき寛假容忍度を過ぐるときは、妻は自己の失態を念頭に置かないやうになつて、不注意に不注意を累ね、終には夫の爲めに不快不利なることを屢々演ずるやうになるのだ。さうなると夫は以前妻を娶らざりしときの獨身生活の遙かに愉快なりしを思ひ、妻帶離を訴ふるやうになるかも知れぬけれども、これは畢竟夫自身が妻を待つに用意宜しきを得ざる報いといふべく、自ら求めて妻なる敵に侵撃の隙を與ふるの

で、其愚笑ふべきである。また妻の方面よりいふときは、毎に油斷なくその本分を盡し、夫なる敵をして小言を口にせしむる間隙なきまでに、萬般の言行に警戒を加ふることを忘れてはならぬ。女の淺墓なる考にて、爲さずともよき事を爲し言はずともよき事を言ひなどして、却て夫又は自己の威信を損ずるが如きは愼むべき事である。

予は先頃妻を迎へたのであるが、此妻なる敵に對して豫じめ對妻策を考へた。それで先づ結婚式の當日に於て、予は妻に對して最も嚴格にかういふ事を宣言した

予は汝を敵と見て片時も油斷せざる覺悟なり、汝も亦予を敵と見て片時も油斷すること勿れ、

また之と同時に宣告してかういふ事を言ふた。



汝は今日始めて予が家に來れりと雖も爾來日尙ほ淺しと云ふを口實にして言を構ふるの陋態を演ずべからず嘗て聞く露帝は旅順口に於ける露軍の艱苦甚だしきを思ふの餘此地に在る將卒には特に其勤務一ケ月を一ケ年と算じて進級昇格せしむる事と定めたりと予は今之に傚ひ汝が予の家に在る一日を一ケ月と算し以て汝が予の妻としての進境最も速かならんことを望む

而して又妻の言行の當否は直ちに夫の名聞に關するものなるが故に、予は予が理想を彼れに鼓吹し置くことを必要と認め、また一日も早くこれを鼓吹し置くの急務なるを思ひ、時々有益なる講話を聞かせるのであるが、その際には予が宿望たる着袴を勵行して、子弟

の禮を以て相見ること、定め、また折々作文を課して思想を鍊磨せしむることなどもある。要するに予が妻は今や妻としての教育期に在るものであつて、如上の指導の結果、將來果して幾干の効果を收め得べきや否やは、尙ほ若干の幾月を經過したる後にあらざれば判りかねるのである。

我邦の婚姻（三）

林　恒山

鎌倉幕府の創立せられてより、我日本國は玆に武家政治と云へる一種不思議なる政體を現出せり、是れ實に以降七百年間幕府政權を執るの制を創始せるものにして、我國史上の一大變遷なり、彼大寶令と云へる法典も漸く全國を羈絆する能はざるに至りて、斯一種不思議の武斷政治を見るに至りしこととて、大寶令の制度書册に殘れるも、實際に於ては殆んど其迹を絕ち、僅に北條泰時が賴朝以來の施政によりて定めたりといふ貞永式目といへる簡單なる綱目ともいふべきもの、要領を擧示せるに過ぎざるものあるのみ。

此時代に於ける婚姻に關する事柄を見るに、前記の貞永式目中には唯だ諸家所領の讓與及び與奪に係るものあるのみにして、其他の事は一も規定せられたるを見ず、是れ武家政治の簡易を尙べるにもよるべきか、又婚姻に就ての習俗は未だ俄に變易せざりしもの、如く、諸書に散見せるものによるも、婚姻の仕方は依然男子より、女子の家に至りて行ひ、後に我家に引取りし習慣の行はれたるなるべく、又王朝時代に於けるが如く、常に外戚即ち母方の權威增長して政治上にも大關係を生ぜるの例尠なからざりしを見ても、婚姻の及ぼせる所至大なるを推知すべく、是等は漸次後世の如く婚禮といへば、嫁取即ち女子を男子の家に迎ふるの習慣を爲せる源因となり、此時代の末よりして馴致せるものならんかと思はる、然れども此武家制度の結果ともいふべき、嫁取とい

ふ語の全然婚禮を意味し、聟取といへば聟養子の名と轉ずるに至りしものは、足利氏即ち室町時代に至りてなるべく、是れ亦婚姻に於ける習俗の一大變遷にして、其玆に至りしものは、一は聟養子といふ事の始まりしにも由るべし、聟養子は始は己が女子に聟を養ひたるにて、實子と養子とを並置せるもありしを、後には實子なくして、女のみ持てる父母の聟を迎へて己が家を相續せしむるの名となり、(此事尙後に述ぶべし)此聟養子には成るべく勇士を好みたるより、最初より男女子の間に、何等の關係なきもの、即ち見ず知らずのものにても、父母の心によりて定められたるもあるべく、又女を嫁するにも漸く男女の愛情に由らずして、父母の意思に因つて定めらるゝ風を生じ、武士に二言なしといふの敎訓より父にして婚姻の事を承諾して之を食むを不二の恥辱としれば、其女を強いて父の言に從はしめざるを得ざるものもあり、女も亦孝道によりて父母の言に從ふ、斯る道徳主義よりして、一方の男女間の愛情によりて、婚姻するが如きは、勢之を顧みるに暇なきに至れるものにて、是れ亦武士尊重時代の結果なりといふべきか。

此足利時代に至りて最早婚禮といふと、嫁取といふと同一事となりたる時の習俗儀式は、後世即ち今日に至るまでの婚禮の儀式慣例の基礎にして、當時將軍家を始め、其他諸大名などの家にて行はれたるものは、後世の摸範となり、或は古實など丶稱へて、儀式家の尊重せる所なるが、今之を詳述せんには、一小篇の許さゞる所なれば、其大略を述べんに、先づ姫君の裝束即ち衣裳は、下着には練衣の紅梅等を用ゐ、(夏は丸生絹の腰卷)上着には幸菱の紋、白の打掛、同じ小袖を用ゐるを例とし、胸に守をかけて乘輿せり、其行列は隨行の婦人は皆乘輿し、一番に大上﨟、二番に小上﨟、次に姫君、三番に御局、四番に中﨟頭、五番に中﨟等十一番までは定れる例ありて、其他の乘輿は次第に拘らずして之に續けり、其供侍は三騎或は五騎を常とし、遠路なる時は七

騎とせるの例あり、乘輿に隨ふ、輿添、輿舁等の人夫は、一様に十德を着して白布を帶とす、又當日輿に隨へる調度に行列の次第ありて、一番貝桶、（合貝即ちはまぐり貝を入れたるものにて、戀わすれ貝とて、婚禮第一の具とす）次に色直の長持（後に在り）其次に御厨子、黒棚、荷唐櫃、長櫃、長持、屏風箱行器等とし、此外左したるものならざる品は、大抵豫め運送し置くなり、此行列の嫁方の門を出でし後、門火を焚くの習慣あり、又聟方にては、途中迄で迎への人を出し、輿の請取渡を行ふ、是れ請取方より其由を渡方の供侍に告げ、相方太刀折紙にて一禮し、此時乘輿の立方、貝桶及び輿の渡方等作法あり、（此貝桶を輿より先にする等古實として後世に口傳等の秘事と爲せるものなり）斯くて此行列の聟方の門を入りて後も門火を焚けり。

さて聟方にて、室内の裝飾は、是も種々あれど、必らず二重瓶子、置鳥等を飾り、床間の立花には、一瓶の中に二本指向はせて立て、花輪も亦相對せしめ

栓に用ゐる木も、常盤木を以てす、姫君入りて所謂三々九度の盃酌は聟方の侍女臈と、姫君に隨行せる上臈とにて之を行ふ、其時の献立にも様々あれど、餘りくど／＼しければ略す、當日より三日間は嫁君を始め隨從の上臈等は何れも白小袖を着し、三日目に至りて他の色の衣服を着す、之を色直と稱す、此日舊姑一家の人々に對面の禮あるなり、是等は皆後世にまで婚禮の式を基礎として、下々に至るまで之に倣ひて行ひたるものなり、假令省略して、其儀式固より貴賤貧富によりて同じからずとするも、模範を茲に採れるは一なり。

右に述べたる婚禮の儀式は、當時將軍家及び最も高貴なる諸大名等の家に行はれたるものなるが、武家には、自ら質素の風習遺れるより、相當に高祿を食める士分にても、其妻女に乘物を用ゐずして、嫁入の道中は麻のかつぎを着て、負木と稱するものに腰掛け、後向けに人に負はれて行きたるものなり、其他のもの〻何れも徒歩せるは言ふ迄もなし、是れ亦

地方によりては、後世にまで遺れるものなり。

當時中人以下に在りて、男子間に行はれたる惡戲あり、之を水掛祝といふ、去年新婦を娶りたるものあれば、此年の首に、友人等の金銀箔を押したる水手桶に銀箔を押したる柄杓數本を造り、又酒肴を用意し、各衣裝を飾りて、新聟の家に至り、宴飲の後聟を庭上に誘出して水を浴せかくるなり、此起源は永祿の頃松永久秀の姪女を其寵臣某に嫁せし時より始まれりと云へるが、又昔よりの習俗にして、白河天皇の時中宮賢子入內後間もなく御懷胎ありたれば其翌年正月關白藤原師賢（中宮の父）參內して不意に天皇に水を打掛け奉りしに、天皇驚き呆れて御言葉もなかりしが、侍座の辨內侍靜にこれ去年中宮の御ひどまりの料に、殿の祝はせ賜へるなりと奏せられしかば、天皇も興じ笑はせたまふと云へり、是れより始まりて足利時代には、下々にまで移りて漸く盛に行はるゝに至れるなり。

此男子の惡戲にも勝りて、忌はしきは女子のさうとう打といへる事（さうとうといへる語は騷動の意か又相當の意か詳ならず）此時代より戰國時代に至りて、最も大袈裟に行はれたり、是も王朝時代の後妻打より來るものなるべきか、或は之をも後妻打ともいへり、併し王朝時代の後妻打と云へるは前にも記せる如く、同時に妻たるもの丶間に行はれたるなれど、此時代の後妻といへるは後世の後妻或は繼妻といへるものにて、妻を離別して後に他より娶りたる新妻をいふなり、即ち妻を離別して後、數日間若くは一ヶ月も經ぬに新妻を娶るものある時は、其離別せられたるもの丶捨置くべきにあらずとして、企て行ふものにて、已が方にても勇力ある女子數人を撰み、之に親類よりも達者なる女子をすぐりて應援とし、其人數は二三十人、多きは百人にも上り、身分相應に人數も集まれば、茲に使者を遣して、御覺可有之候、さうとう打何月何日何時に可參、女持參の道具は何々を用候と申込み、新妻の方にては、或は、驚入候御詫言可申と挨拶するもあれど、又之

を甲斐なし一代の恥辱なりとして、成程御尤に候心得相待可申、何日何時待入候など返答するもありて、此使者のみは男子にて勤むるも、其他は一切女子のみにして男子は手出しせず、彌々其日の時刻となれば、離別せられたる妻は乘物にて、其他は徒歩にて供し、くゝり袴、襷をかけ、亂髮にて冠物或は鉢卷などし、手に手に木太刀或はしなひを持ち、（木太刀は怪我多ければとて大抵しなひなり）押越せて門を開かせ、臺所より亂入して打合ひ、當るを幸に鍋釜障子等をも打毀し、凡の時刻を考へて、新妻の仲人、先妻婚禮の時の侍女﨟など出でゝ、言を盡して扱ひ歸すなり、戰國尚武殺伐の世なりしより、其氣風の女子にも移りて、自ら閨房の勇氣をも鼓舞し果ては其行の靜淑を缺げるのみならずして、太平の世なりせば、男子とて無法の擧動、亂暴の振舞と誹らるべきを、女子にして敢てするが如きは、斯る時代の餘弊とはいへ、亦淺ましき限りなりとこそいふべけれ。

此時代即武家執政の時代に至りて、最も注目すべきは、上代の多妻主義は漸く衰へて、一夫一婦の風とはなり、妻といへるものは一人より外になきに至れる事なり、此點よりすれば、女子の幸福は上代より進められたるが如きも、爰に他の方面よりすれば一層不幸の位置に陥れるが如きものあり、そは女子をして政略或は外交ともいふべきものに使用せらるゝに至れる事是れなり、女を人に與ふるに、所謂人質を意味するものあり、或は女を與へて其人の心を繋ぐに用ゐ、或は其家の乘取策とし、或は兩家聯合の楔とせるなど、戰國時代に至りては之を以て普通常態とせられ、其最も必要なる手段なりし丈、女子の不幸を顧みるに遑あらずして、斯る必要にせるものなれば、其必要の關係の有無によりて勢易避の變わるを免れず、昨日の味方にして今日の敵たらんか、與へたるものは奪はざるを得ず、縱令然らざるも、忽ち敵人として疏ぜられ、男子よりするも、夫婦の愛情も、己が存亡のためには見捨ざるを得ざるに至り、

女子よりすれば、最愛の夫を捨て丶再び他人に見えざるを得ざるものあり、是れ戰國割據時代に至りて最も女子の不幸の地位に陷れるものなりしなり、前にもいへる如く、我邦の多妻主義なるものは血統を重ずるより來りたるものなるが、此時代に至りて、一夫一婦の制とはなれるも、此政略上等より來れる妻の外、又妻たるものあらざるより、勢妻の外に側女、侍女などを生じ、一夫一婦は表面にして依然多妻主義は裏面に存在し、唯々妻と并立すること能はざる云はゞ權位共に一等を下れるものとなりたるまでにて、尙是れより後に起れる多妻主義の再興ともいふべきもの丶命脈を維持し來りたるものなり。

此に尙ほ婚姻の事に就き注目すべきは、前記の婚姻を政略視せられたるの結果、此時代に婚姻に關せる法律とも見るべきものなきの間に、所謂群雄中には婚姻政略に就てのみ、縱令一地方に行はれたる法度なりとはいへ、往々東西共規を一にして、英雄の視る所相反せざるは、臣下をして隨意婚姻するを禁せるの一事なり、身分により許下を得ざるものは相婚する事を得ず、少なくとも屆出を爲すずして相婚することを得ざりしなり、是れ或は敵と婚して相通ずるの虞あり、又同じ部下にても相結托して如何なる事を企つるやも知るべからざるの恐ありて然るものなり、爰に至りては男女間の愛情問題の如きは、全然地を拂ひ、此風下々にまでうつりて、婚姻は一に命令的に行はれ、男子には尙撰擇の權を認めたるも女子には一の權利をも是れなきの習俗慣例を生ずるに至りたるが、蓋し時勢の然らしむる所、亦已むを得ざるものといふべきか。

米國公使の日本稱讃

在東京米國公使グリスカム氏は本國の國務省に送れる最近の報告に於て日露戰爭に於ける商船の損害に言及し先づ日本人が商船の或は露國々旗を懸すもの或は戰時禁制品を輸送せるものにして未だ曾て之を擊沈せし例なきを明言し尙露國人が九隻の日本汽船及四隻の帆船を拿捕せずして擊沈したると日本人が自己の汽船十七隻を旅順口に沈め露國商船廿三隻を拿捕したることを對照して日本の態度の公明なるを稱讚する所ありたり（華盛頓通信）

家政と化學

梅の舍主人

近頃臺所道具として、追々評判の宜しいのはアルミニユーム鍋で、是まで便利のものと持噺されたセトヒキ鍋も、之が爲に需用が次第に廢るやうですが、一般の臺所の樣子を見まするに、前者は多く當世流の家に採用されて居り、後者は大抵普通の家に重寶せられて居るやうであります、當世流の奧さんは高等の教育を受けて居らしやるから、家事とか家政とか申す學問も十分御研究遊ばして、セトヒキは何なもので其成分や性質が臺所道具として衛生上差支が有るか無いかと云ふ細い節々までも見定め遊ばして、セトヒキの有害をお認めになり、偖こそ之を臺所の外に逐拂はれたのでありませう、成程今日の家政學や、家事教科書などを見れば、明らかに「瀨戸引鍋は鐵板に硅酸鉛を引いて造りたるものなれば其使用の際に鉛毒を溶解して我等の衛生に害あるものなり、斯る危險の器具は決して之を用ふべからず云々」と黑々しう書き記されて厶います。シテ見ると學校の先生も其通り敎へられるので、生徒は、其の敎へを守りて、家政の上に應用して、セトヒキを斥け、アルミニユームを迎へることになると思はれます。況してアルミニユームの美はしさは、セトヒキの見そぼらしさに比して頭底お話にならぬのみならず、其實用の上に於ても、重さが輕く鍋底のパチンと撥せるやうな心配も無くて、ソレハ〳〵都合の善いものでありますからお豐な御家庭向には、至極結構な器具ですが、價が高いので生活の低い臺所では、欲いと存じましても、ツヒ儘になりませんので少々は有害でも不體裁でも、我慢をしなくてはなりませんが、扨てこの當世流の奧さんのお考は、十分學理に適うて居りませうか。またセトヒキで辛抱する家は、不仕合を喞つべきものでありませうか。是れ輕々しく斷定を下すことの出來ぬ

▲一つの疑問

として、篤と家政學を根本から研究したいと思ふので厶います。ソレに付て一つ面白いお話を承つたことがありました。……去る外國人が、我が女子教育をお調べに入らしやついました折何れの學校にも家政科と云ふ學科のあることを御覧になつて、大層便利な學科と御感心なさいましたさうでありますか。其お國には斯る便利な家政學とか家事科とか申す學科が厶ませんとのお話で、お國土産にもがなと、御丁寧に其の内容を吟味されました。然るに其御研究の結果が、一學科として體裁の備はらぬもの、唯々名前の美はしいものと云ふことになつたので、痛く失望されたと云ふことでありました。……高がコンナ學科ゆゑ、餘程細かに研究を致しませんと、却て識者の笑を招くのみならず、學ぶ者ソレ自身すら活用の道を失ふやうな奇觀を呈するに至りませう。所でかゝる奇觀に陥つた實例はたゞに二三に止まらぬのでありますが、前に陳ました彼のセトヒキ鍋とアルミニーム鍋との見解の如きも、其の



一つであらうと存じます。今序を追うて

▲アルミニユーム鍋の利害

から、セトヒキ鍋の得失を化學の上より解釋致さうと思ひます。却説このアルミニユームと申す金は、長石や、粘土や、明礬などの成分を爲して、岩石土壌の中に廣く含まれて在るものでありますが、是等のものから、容易く製錬し難いので、近頃に至るまで中々價の貴いもので厶いました。然るにツヒ近年になりまして工業化學の發達と共に、電氣を用ひて廉價に拵へ出すやうになりました。亞米利加は其の製出が最も盛んでありまして、亞鉛の價より却て廉い位なさうであります。我邦では未だ其製造が出來ませんので、悉くアメリカより供給を仰がなくてはなりません。從て其輸入されたのも昨今で、之が應用の道も尚は幼稚なので厶ます。即ち坊間に鬻ぐ所のものを見ましても、鍋、皿、鉢、湯呑、辨當箱などが重もなるもので、亞米利加や、歐羅巴のやうに此金の特性を發揮せる、裝飾品とか、携帶用の器物を作るまでの進歩を見ることが出來ないのであります。別けて此金は、銀や銅のやうに接合せる細工が出來ませんから、唯々型に入れて押し展ばすより、外に細工の仕方が無いので、初りの中はホンの簡單なものを拵へるより仕樣がないのであります。かやうに缺點こそあれ、其美はしい銀白色は氣中に曝さるるも光澤を失はず、其重さは至て輕いが上に、其質が硬くして、然も延性や展性やに富んで居ますから、十分に機械さへ備はつた曉には、我邦とて決して歐米に負けない立派なもの、便利なものも造り出されるでありませう。アルミニユームのことはこれで大略お解りになりませうが、その又アルミニユームが、果して毒なものであるや否やが分らね、アルミニユーム製の鍋が、實用の上に何程の値を持て居るものであるかも、判定を下すことが出來ません。此一點こそ一入御注意を申したいところで則ち「アルミニユームは無毒無害の金屬なり」です。それ故アルミニユーム鍋は、臺所道具として申分の

無い結構なもの、調法なものと申さなければなりませんが、一歩を進んで研究いたしますれば、此のアルミニユームと申すものは、食鹽とは至て仲善ので若しも此二つのものを一所に置くときは、早速結び付いて仕舞ふのであります、其上に更に熱の力を加へますと、一層結び付く働きが速いもので、六ケ敷申せば、化學的作用即ち化合の力が早くなるものでムいます。ソコで食鹽の成分を調べて見ますれば、鹽素とナトリユームと申す二つのものが結び付いて居るもので、此二つのもの丶化合したものを俗稱では食鹽と申し、學問上の言葉では鹽化ナトリユームと申します。此鹽素とか、ナトリユームとか、アルミニユームとか云ふものは、最早何な方法に依りても二つに分けることが出來ません。全く物の成立の本家本元即ち物質の成分と申すもので、此成分たる鹽素、ナトリユーム、アルミニユームなどのやうなものを、名付けて元素と申します。此元素の數は七十種もありまして、ソレが樣々に結び付いて天地の萬物を拵へて居るのであります。其結び付く有樣を一目に表はすために、各々の元素にソレ〲符號を定め置いて、數學の式を以て之を書き現はして居ります。例へば、鹽素は其原名(Chlorine)の頭字の二字即ちClと、アルミニユームは、AluminiumのAlを、ナトリユームは、NatriumのNaを取つて、其符號と致しますので、Clとあれば、鹽素の一つのこと、Alはアルミニユーム、Naはナトリユームの一つのこと丶考へれば、更に差支がありません、今食鹽を式に表はさうとすれば、其成分たる鹽素即ちClに、ナトリユーム即ちNaを一所に寄せれば可いゆゑ、nacl と記せば一目して食鹽たることが知られるのであります。故に、AL+Nacl は、食鹽とアルミニユームと結び付たことを知り得るでありませう。玆に一つ御注意致したいのは、ALの一つの元素は、NaClの三つの元素とでなければ化合することが出來ませんから、正しく書すとAL+3Naclと表はさねば可けません、之で食鹽とアルミニユー

ムとの化合い様を明瞭と申し上げることが出來るのみならず、兼て研究の疑問を決定することが出來ることになりました。即ち此二つのもの丶化合物は

▲鹽化アルミニユーム

と云ふ一つの新しいものを拵へる上に、其外様々な働きを爲すもので、之を一目に表はせば AL＋3NaCl＝AlCL3＋3Naと云ふやうなものになるのであります。ザット此式を分り易いやうに申すとAl＋3Naclは、アルミニユームに食鹽を加へたカタチで、ソレが忽ち化合致しまと、AlcL3 即ち鹽化アルミニユームが出來まして Na 即ちナトリユームは分離いたすや否や、水に働いて之また別な新しいものに變つて仕舞ふものであります。却説茲に新たに現はれた所の鹽化アルミニユームこそ、眞に鬼の首とも申すべき材料で厶いますれば、確と此物の性質を調べましたなら、鹽化アルミニユームの何物であるかゞ判然すると共に、アルミニユーム鍋の利害も自づと定る次第でありませう。が、餘り管々しいてとは省略するとして、唯鹽化アルミニユームは毒物であると云ふことを、記憶して頂きたいのであります、愈々鹽化アルミニユームが毒物であることが定りますれば、アルミニユーム鍋でお菜を煮る時はおしたじの鹽と鍋そのもの丶アルミニユームとが化合して、鹽化アルミニユームなる毒物を拵へるのであります。シテ、此毒物は煮わげたお菜の上に染み付いて、ソレを召し上がられたお方の體内に入り込むで遂に不測の害を起すことも亦必然で厶いませう縱し不測い害は生ぜずとも、目當其害を受けぬにもせよ、幾年月を經る中には、追々其體を傷ふに至るは免れがたいことであります。ソレから今一つ申し上げたいことは、鹽とアルミニユームとが結び付いて新しい變たもの、即ち鹽化アルミニユームが出來るために、鍋其物のアルミニユームは、ダン／＼減て行きまして鍋の内面に蝕が生ずるので遂には役に立たない廢具にならなければなりません。斯様に種種の缺點を數へ上げれば、前にいふた當世流の奥さ

んのお考はトント値を失ふのみならず、なまじな家政學の爲めにお手をお燒き遊ばすやうな滑稽を招かれた次第ではありませんか。次に

▲セトヒキ鍋の利害

はドンナもので厶いませうか。果して今の女學校で敎ゆる家政學の中に述べてあるやうに有害のもので厶ませうか。此の疑を定めるにも矢張化學の上から詳しく說明すると善いのでありますが、餘り砂でも嚙むやうな面白くないことの長いのは御退屈で厶いませうから、カヒ摘んで一言申し上げませう即ち鐵板に硅酸鉛をひいたセトヒキ鍋は、家政學の示す如く其使用の際に鉛毒を溶解するに違ひありません。鉛毒の激しいことは今更申し述べるまでもありませんが、此硅酸鉛をひいた鍋はモハヤ數年の昔に於て其發賣を禁止されて居るのであります。今日坊間ではソンナ有毒のものは一枚も賣て居らないではありませんか。ソレを敎科書だけで、今頃時節後れの事柄を講修して居るとは、呑氣至極の沙汰で厶ませう。今日吾々が使用して居るセトヒキ鍋は、ズット改良せられた硅酸カルシウムと云ふ無害なものを代用せしめて居るので厶ます。サア、かうなつて見まするとアルミニユームとセトヒキとの鍋が、其利害得失の上にシカとした方針を立てることが出來まして、臺所道具の撰定や、取扱に眞の活用が行はれるのであります。して、此心を益々押し廣げさへすれば、彼の死んだ學習を振り舞はさずして、生生とした有利な家政を營むことが六ケ敷ないので厶います。近來女子敎育の勃興と共に家政〳〵と八ケ間敷申しまするが、理科の素養の薄弱な家政學ほど迂遠にして然かも危險なものは少からふと思はれます。デ、家政を修むると共にかく親密の關係を有する化學の研究を忽せにせず、兩々相待つて生きた學問の上に、實際役に立つ應用の材を養ふのが、何より大切なことゝ思ひます。

(をはり)

簡易なる看護法

醫學士　淺間烈夫

▲病者看侍の心得　病者及び傷者を看侍するものは元より萬事に注意せねばならぬものですが、別けて夜間に發汗して、次で感冒に犯されたり、或は種々の排泄を怠つたり、或は用藥の度を失ふたりしてはならぬ。而して看侍の任に當るものは、決して牀側を離れないで、常に病者の容體を注目して居らねばならぬ。

▲病室及び臥牀　病室は家屋中なる可く東南、南若しくは西に面し、閑靜なる明き處が第一に適當です而して、病室は極めて清潔にして置かねば、病の爲めに惡しきことは云ふ迄もない次第です。

諸の排泄物は決して暫くも病室内に留めおいてはならぬ（醫士が殊更に貯藏を命ずる時は例外）又尿器溺器は、毎回直に必ず洗ひ流して、少許の石炭酸水を注いでおく方がよい。

病室は明朗でなければならぬ理由は、第一日光は人身に於ての體力を活潑ならしめ、榮養を旺盛ならしむるものです。けれども光力の餘り過劇なのも亦害があるから、帷幕を垂れて其度を節しなければならぬ。尤も眼病者には却て暗黑な室が適當です。

臥牀は成る可く室の中央に設け冬季などは餘りストーブに接近してはならぬ。而して褥布は地質は別に選ばぬといへども、可成洗濯し易きものがよい。時々臥牀の位置を變へ、褥布の績襞を伸し、枕を反轉するなどは大に病者を安慰するものです。

▲就褥と換褥　臥牀を整理するには、先づ褥を叩いて、藁或は綿を平らにして滿面凹凸のないやうにし、その上へ被衾を積襟なく敷くのです。病者は横臥するも、亦仰臥するも、其意に任してあるものですが、要するに身體を水平にし、稍々頭部を高くし、呼吸の困難でないやうにせねばならぬ。

病者を就褥せしむるには、先づ其常衣を脱して、病衣に換へ、そして殊に傷者は可成その傷處の動搖を

防ぐことに注意せねばならぬ。故に始め先づ健康側より之を脱がしめ、或は傷處に當る部は、剪を以て衣服の一部々剪開くのです。又寒き時は病衣を暖めてから常衣を脱がしたり、萬事注意せねばならぬのです。

病者の身體に汚穢た所があれば、直に淨拭とらねばならぬ。そして又創口などは滅多に手などを觸れてはならぬ唯其周圍を石炭酸水を以て丁寧に拭ふのです



病者を牀上に平臥せしめるには、二三人を要する。そして、今假りにこれを甲乙丙に分ち、甲は一手を病者の項の下より斜に送りて、他側の肩頭に至り、他手を一方の肩に當て、病者は兩手を以て甲の看護者の頭を繃ちて固持し、乙は一手を腰の上部の下に、他手を臀下に深く送り、丙は衣服の裾で足を包み、之を支持し一齊に擡上げ、徐歩して外牀の上に安放するのです。

次に換褥するには、先づ新牀を整理して、臥牀の足元におき、一人の看護者は病者の一側に立ち、寢衣の裾を引いて、能く足を包み、膝を稍々屈出め、其他は就褥の時のやうにして新牀へ移すのです。若し病者が人事不省で、自ら看護者の頭を纏ふことが出來ないときは、更に一人の看護者をして頭首を保持せしめるのです。

重傷者若くば重病であつて、換褥し難い者といへども、時々褥布を取り換へねばならぬ。

△病室の温度　病室の温度は常に平等にして、餘り

冷熱の變化なきやうに注意せねばならぬ。故に冬日煖爐は缺く可らざる者なれど、之を用ゐる時には、餘り熱しないやうに溫度を測つて、大凡攝氏十八度乃至二十度にしておかねばならぬ。そして、煖爐の近傍と日光の直射する所を避けて、二個の寒暖計を備へ、常に溫度を一定にすべきであります。

煖爐を焚く時は、室中の大氣乾燥し、塵埃飛揚して大に呼吸の害となるものですから、常に煖爐の頂上の水盤、若くは器皿に水を盛て安置し、水蒸氣を飛散せしめねばならぬ。又室中が甚だしく乾燥した時は、少量の水を室内に撒きてもよい。又夏日炎暑の候にて、家内煩熱なる時は、日光及び風向に背きたる窓戸を開くか、或は又冷水、氷塊を入れた大盤を牀邊におくのです。

▲病室清氣法　人身の健康と疾病とに拘らず、一定量の清良なる空氣を得て、生命を保續する者ですから、室内の空氣を汚穢せぬやうに注意せねばならぬ室内の空氣を汚すは、重に衆人の群居、許多の燈火病者の蒸發氣等より來るものですから、かゝる不潔の敗氣を驅逐して、新鮮の清氣を迎へ、所謂換氣法を行はねばならぬ。

換氣法には、二樣ある、一は自然換氣法と謂ふて、窓戸の間隙或は壁床の氣孔を滲透して、空氣の交代するもの、一は人工換氣法というて、煖爐を焚きて室内の空氣を暖めて逸散せしめ、或は窓を入口と相對するものを開くのです。

此時可成直接に病者に風の當らぬやうにせねばならぬ。

▲浴法　浴法とは、水で以て身體の表面を浸し或は水蒸氣若しくは熱空氣を用ゐることがあるが、これは單に身體を爽快ならしむる目的なのと、或は治病の目的とするものとある、入浴は朝或は夕がよい。が、空腹の時或は飽食の後、若くは勞働後には直に入浴してはならぬ。

全身浴とは、身體の全部を浴湯中に沒するを云ひ、局處浴とは、身體の一部分のみを浸すのを云ふ、又

更に之を分ちて、半身浴、臂浴、手浴、足浴等とする、又尋常の浴法の外に灌水浴、雨浴、蒸氣浴及び熱氣浴等あります。

病者浴中に在つて疲勞し、或は眩暈する狀ある時は入浴の時間(時間なども醫師に相談すべきものです)を短くし、次に茶、葡萄酒等を與へて元氣を鼓舞させるのです。

入浴了る時は、乾きたる綿布若くは浴衣を以て、手早く身體を拭ひ乾かし、衣服を着せ、臥牀に復せしめ、被衾を被ふか、或は毛布で以て充分に纏包すべきものです。

通常家庭に於て看護する病人に、半身浴をさせることがある。これは病者盤中に坐して水面の心窩或は臍部に達するを度としてある。又一種座湯と稱して浴盤を用ゐて臀部のみを浴させる法もあります。

手浴臂浴は、創傷炎症等に行ふもので、醫士の命に從うて、溫湯冷水若くは藥劑を加ふるものを用ゐるものです。

足浴及脚湯は、溫湯に食鹽、灰或は芥子末等を加ふことがあるもので、これは重に夜間臨床に行ふものです。

灌水浴には、冷水或は溫湯を用ゐる、これは病者が浴盤中若しくは微溫浴中に在るを、看護者が病者の頭上(醫士の命ずる所より)に灌ぎ注けるのです。

雨浴は水を劇しく注けて、雨狀となすので、病症に隨うて、冷水なり、或は熱湯を用ゐるのです。

▲消毒法　消毒法とは空氣中に浮游し或は諸種の物品に附着する病毒を驅逐する法です。凡て疾病は多くは肉眼で見えない、所謂バクテリヤの所爲で、此等の生活物が、諸般の汚物中に於て、最も能く發育增息し、次で水、空氣、飲食、衣服等諸物に傳播するから、是非とも之を撲滅するやうに、此消毒法を行ふのです。

で、創傷及びこれに觸れしむる物品又は繃帶等は悉く石炭酸水を以て洗滌してから使はねばならぬ。

看護者の傳染病或は傷者を取扱ふには、其前後に

は、必ず衣服及び手指に充分消毒法を行はねばならぬ殊に手指に皹を生ずる者は、膿汁及び其他の汚物が之に侵入して、膿汁を起すとがあるから、宜しく先づ石鹼水で充分に洗ひ、石炭酸油（オレーフ油と石炭酸と合はしたもの）を擦り込み、更に石鹼水で洗ひ去る方がよい、又爪は常に短く切つて、毛刷で以て爪下及び爪縫を摩擦して、汚垢を去らねばならぬ。

衣服に消毒法を行ふには、攝氏百度以上に熱し、頻りに叩きては塵埃を除去するのです。けれども通常家庭にては、消毒室の設けもないから、火爐又は日熱に暖めても可い、これを加熱消毒法といふのです襦袢寢衣等は、先づ石炭酸水を灌ぎ、次に暫く熱湯或は灰汁中に漬し置きて、洗濯するのです。又痘瘡窒扶的里亞、虎列刺、窒扶斯等の如き猛劇なる傳染病者に用ひたる衣服等は直に格魯兒石灰水、石炭酸水、皓礬水、或は格魯兒亞鉛水等の如き强力の消毒藥に浸すこと十二時間乃至三十六時間にして洗濯するのです。（但し加熱消毒室ある時は、高熱蒸氣にて消毒するか、或は又格魯兒薰法若くは硫黃薰法といつて、薰べる仕方をするのです）

褥布、外褥及び被衾等は、熱湯或は石炭酸水で數時間煮て消毒するも可なりと雖も、斷然燒却するのが安全です。

毛革毛布及び毛氈の類も、攝氏百十度の熱氣で消毒するか、或は硫黃薰法を用ひるのです。又絹布書籍の類も百二十度以上の高熱で消毒するのです。

室内を消毒するには、壁、天井、床等は總て灰汁、格魯兒石灰水或は石炭酸水を散灌して洗ひ落し、諸所の間隙には、悉く消毒藥を侵入せしめ、壁、天井は、石炭酸一分を石灰百分に和たもので以て拭ひペンキ塗りの處は皓礬水で拭ひ、次で窓戶を密閉して薰法を行ふのです。これには則ち二法あり、一は格魯兒薰法とて、格魯兒石灰一分を磁皿に盛りて室の中央におき、之に鹽酸一分半を注ぎ、十二時間放置して、窓戶を開放し、大に空氣を通ずるのです。

而して、室中格魯兒の臭氣あるときは、小皿に硇砂精を少許盛りて室中におくのです。乍ち消散する者です。又一は硫黄薫法といふので鐵製の小皿中に硫黄を盛り、之を砂を盛れる大皿中におき、硫黄に少許の「アルコホル」を注ぎ、火を點して、これも亦十二時間おくのです。便所の糞池には石炭酸石灰（石灰三十分に適宜の水を加へて泥となし粗製石炭酸一分を加へたもの）を數々撒き入れるのを最良とす。又尿器等は先づ石炭酸水で洗ひ、更に少許の石炭酸水を注ぎおく方がよい。又便所及び其附近の所では時々少許の硫黄を紙片に捻じて、紙捻子となし、火を點じて絶えず薫じおくが最も宜い消毒法であります。

▲消毒藥　石鹼水は、粗製軟石鹼十五匁を微溫湯百匁に溶解して製するのです。

加里滷汁は、粗製加里五匁を水百分に溶和するのです。

硫黄は薫法に因て亞硫酸となして用ふ、則ち硫黄を紙捻に包み或はその一塊を皿に盛りて火を點じ、窓戸を密閉しおく時は、自ら亞硫酸瓦斯を生じて、室中に滿つるものです。

格魯兒瓦斯は格魯兒石灰一分を磁皿に盛り、鹽酸常醋或は稀硫酸一分半、或は二分を注加する時は、乍ち此瓦斯を生ず、大室を薫ずる時は大凡二百六十匁の格魯兒石灰を要するのです。

格魯兒石灰は、格魯兒瓦斯薫法となし、或は百倍の水に溶解して散灌し、或は壁床等を洗拭するに用ゐます。

昇汞水　此品も劇毒ですから、每次必ず醫士の命を俟つて用ゆべきものです。則ち一千倍の水に溶解し固封して毒物標を附して貯ふるのです。そして、手指洗滌に用ゆるには、更に五倍乃至十倍の水を加へて稀釋するのです。

石炭酸水　是は水百分中精製石炭酸（溶したもの）三分或は粗製品十五分を和して製するのです。

▲病者の飮食物　總て食物は穀肉果菜等種々の物を混ぜて用ゐる方が宜しい決して一つ物ばかりを用ゐ

てはならぬ。而して又食物の品種及び分量は男女、年齢、氣候等に隨つて異なつてゐるけれども、要するに其調理法を餘程吟味せねばならぬ、そして又滋養になつて消化し易いものでなければならぬのですまづ粥、肉漿汁、鷄卵、牛乳等であります。今その食物に就ての二三の注意を掲げておかう。

米粥は尋常お粥の製する法に隨ひ、大約一時半許徐かに煮熟するが宜しい。又之に牛乳を加へ速に火より下し製する者を乳粥と名け、頗る善良な食物です。又豆粥は甚だ滋養に富んでゐるので、これは鹽藏牛肉、又鹽藏豚肉二百匁を細かに刻み、之に水二升二合を加へ煮て、次に皮を去りたる豌豆或は白豌豆二合五勺を入れ、胡蘿蔔一二片を加へ三時間許煮るのです。

肉漿汁は、牛肉又は犢肉二百匁を一升六合(割合)の水に入れ、文火にて徐々煮ること二時間許、其間時時水面に浮上する滓を掬ひ去り後、靜定する上清の液を分ち貯へる、又急に之を製するには、牛肉三十五匁を細かに刻み、適量の水を加へ、猛火を以て煮沸し篩過にするのです。

鷄卵は生のも煮たのも、消化の度略ぼ似たるやうなれども、胃弱い病人は、半熟が一番よろしい、これは鷄卵を沸湯中に入れ、三分乃至四分にて取り出し直ちに冷水に投ずるのです。

牛乳は諸種の滋養分を混じて居るものですから、最も滋養力のあるものです、但し暫時貯ふる時は酸敗することがあるから、乳汁中に少許の重炭酸曹達若くは「サリシール」酸を加へて之が腐敗を防ぐことがあります。

肉類は煮炙共に猛火を用ひて、急に製する方が宜しい、これを緩緩にやる時は硬くなつて消化し難いものとなる、且つ味を損するものですから、注意せねばならぬ。これが調理よく行屆く時は生肉よりも消化し易い、且つ生肉は動もすると「トリヒーネ」と名くる小蟲が居るから、可成丈炙して用ひた方が宜いのです。

次に嗜好物例へば香料、酢、醬油、食鹽、砂糖、脂油等の如く、食物に加味して用ふる者、及び酒、茶珈琲等は、病症に隨つて利害わるから、醫師に聞て後のことゝせねばならぬ。

水は健康の者も選ばねばならぬが、別て病者には大なる影響を及ぼす故、非常に注意して可成清淨なるものを用ひなければならぬ。



重症者に、飲食物を與ふる時には、先づ口中を漱がして後與へるのです。（これ脣及舌を冷水で濕す時は、大に食慾を振起するのですから）そして食後又口を漱がすのです。

▲體温及び其測定法　體温は身體健康なる時は、大約攝氏三十六度半より、三十七度半の間に在て、一晝夜間に於て少許の増減をなすと雖も、其差は攝氏一度を超えることはない（夕に増進し朝に減退する）けれども、重病者殊に熱病者に於ては、常度を超えて四十度より四十一度半に至ることがあるが、かゝる時は看護の者は醫士に報知して大に注意すべき時なのです。

體温を測るには、體温器を深く腋窩に入れ、臂を屈曲して、胸肋に壓し付けて、大約十五分時乃至二十分間にして體温計を拔き取りて、度目を檢し而して温度表へ記入して醫氏の診斷する資料とするのです。通常體温を測るには、朝夕二回なれども病症に由ては、數回（三時間又は四時間每等に）に測ることがあるのです。又病症に由ては體温を測るに、腋窩の外更に肛門或は陰腟中に於てすることがある、是等は三四分で撿するので、通例腋窩よりも温度の高きもの

です。

▲脉搏、呼吸及び其測定法　脉搏は心動の反應であつて、通例體温と共に増減する、但し大人では、一分時間に六十五搏乃至七十五搏を平脉とするが、小兒は稍數が多い、極老の人もさうです。又熱病の人は、八十搏乃至百五十搏に至ることがあります。脉搏を測定するには、腕關節の上部拇指に偏する一側の内面に一手の指を當て、他手に時計を取り、七分時間或は半分時間に搏動する所の脉搏を數へ、之を赤色の鉛筆で、（體温は青鉛筆を使ふものですから）脉度表へ記入するのです。

▲病者睡眠及び其介抱　睡眠は、精神及び體力疲勞を補ふに必要なるものですから、可成病者の睡眠不足なきやうにせねばならぬ。（健康者といへども六七時間の睡眠を要す）睡眠の時芬香ある花卉を寢室におくは害あるものです。又燈火は暗くし、温を低くすべきものです。

▲發汗介抱　汗は皮膚の汗腺に由て、血中の水分を泌別して排出するものです。而して、之を誘起する者は、日熱、室内の熱氣、勞働、神經機能亢進、内外藥用及び病性機轉等です。

病者の發汗を促すには、温湯（菓實の搾り汁にても）或は藥湯を服せしむるので、又外用方に單なる熱湯或は芥子末灰汁若くは食鹽を加へたる温湯で以て、脚湯全身浴を施し、或は蒸氣浴、濕布纏包法を行ふのです。これを行ふには朝時が最もよい。そして、發汗中は輕軟なる衣類を用ゐ、或は裸體のまゝで厚毛布で、身體を纏包するのが、最も宜しい。で、發汗し終はつたならば、褥中で乾布を以て身體を拭ひ、病衣を温めて着せ、感冒を防ぐのです。

▲咳嗽介抱　咳嗽は通例喉頭、氣管、氣管支及び肺臟等より生ずる排泄物即ち痰を略出する爲に發するものです。けれども亦時としては排泄物なくして咳嗽する乾咳といふものがある。で、衰弱せる患者咳嗽を發する時は、看護人は必ず一手を額にあて、他手に唾壺を取りて、之を口前に保つのです。そして

かゝる衰弱せる者は枕を高くして半臥の位置にする方が宜しい、そして又痰は一々吐き出さして、決して決して嚥み込してはならぬのです。そして痰に血など混つてゐる時は、之を保存して醫師に撿せるのです。

▲嘔吐介抱　嘔吐とは胃中の内容物或は腸中に在る者(膽汁或は糞汁)の逆流して、口より出るので、此際氣管中の粘液或は膿汁を排出するものです。病者は、嘔吐を催す時は速に衣帶を寛解て其窘迫を除き、大きなる受器を口前に保つて吐き出さしむるのです。そして吐氣を催す病者では、餘り室内を温暖に過してはならぬ。

吐劑を與ふるには、可成空腹の時を選び、稍々吐氣を催すやうになつて微温なる白湯茶或は稀き肉羹汁を與へて嘔氣を促す、初めは可成吐氣を忍ばしめ、遂に堪え難きに至つて、一時に吐き出させるのです此時看護者は、一手を病者の前額に他手を後頭に當て、頭首を固持して、其低垂を防がねばならぬ、吐出して了へば冷水を以て含漱をするのです。

▲上圊介抱　大便とは、飲食物の胃腸中に於て消化し、其榮養分を血中に吸收し去つた渣滓の肛門より排泄するものです。而して此物腸中に停まつてゐる時は、健康な人でも病になるものですから、病人に於て殊に注意せねばならぬ。

重病者又は重傷者に於ては、寒き時節なれば室内の一隅で、虎子を與へて、背後から身體を支持するのです。さもなければ清潔なる便器を衾中に入れて半臥の形でなさしめるのです。そして其量、色、臭氣硬軟、異物の存否等を調べて醫師に報告するのです。

▲放尿介抱　小便とは、血中の汚物を腎臟に於て濾し別けて、一時膀胱中に貯へおき、時期を定めて排泄するものです。殊に病者は尿通の有無多少等に注意せねばならぬ。

重病者或は重傷者の尿意を催す時は、看護者は之を介抱して臥牀上に制御せしめ、或は抱起して直立せしめ、厚毛布を以て身體を被ひ、支持して放尿さ

せるのです。そして、之も亦大便と同じく其量、色臭氣等を精しく醫師に報告せねばならぬ。

▲服藥の注意　治療介抱　水藥は藥瓶を振盪させて上下よく混和させ、定まつた用量だけを小茶碗或は匙に注ぎ移し、病者を抱き起して徐かに口中に注入するのです。又重病者が人事不省となる時は急に口中に注ぎ込まないやうにせねばならぬ。

又惡味の藥を與へた時は直に清水を與へて含漱せしめ、次に麵包の小片を嚼ましめるのです。又散藥の時は「オブラート」といふ者で包んで用ゐても宜しいさもなくば通例藥匙に移し少許の水或は茶を加へ能く攪き交せて、口中に注れてもよいのです。

丸藥を與ふる時には、先づ少許の水で以て口中を濕し、丸藥を舌上の中央に置き、更に水を以て送下すのです。

▲吸入法　吸入法とは、呼吸器即ち喉頭氣管、肺等の病に於て、藥液を細霧狀或は蒸氣となして吸へせしむる法です。

吸入藥中揮發性の者は、先づ手拭等の如き布片を濕みて、手掌上におき、藥液を滴下して、直に之を病者の鼻口の前に保ちして吸入せしめ、或は沸湯を磁碗に盛り、藥品を加へ、漏斗を以て其上を蓋ひ、其管端に布又は紙を纏きて、是を口中に銜み、徐に吸息して藥氣を吸入せしむるを以て、最も簡便の法としてある。但し餘り急速に吸引せしめる時は、眩暈を起さしめる事があるから、注意せねばならぬ。

揮發性ならざる藥液は、細霧狀として用ゐねばならぬ。爰には吸入器と名くる一種の器械を要するのです。又此法を行ふには、必ず大布片を以て、病者の衣服臥褥を被うて、其濕潤汚染を防がねばならぬ。

▲點眼法　點眼法とは、即ち流動性の藥物を眼中に點入する法であつて、點眼瓶と點眼管とで以てするのです。前者は則ち小瓶にして其栓の下部管となり、上部は漏斗狀で薄き「ゴム」を展張してあるもので、之を使用するにはその「ゴム」の所を指で押して放ち、藥水管中に滿つるを引き揚げ、再び之を眼上

にて押して、藥水を注ぐのです。後者は、筆管の如き長さ二三寸の硝子管の稍細き者を瓶中に押し入れ指で以て上口を押へ、引きあげて、眼の上へ持つて行き指を離すのです。

▲注入法及び灌注法

注入法及び灌注法とは口、鼻、耳、肛門、尿道等或は瘻孔創傷等に藥水を注入する法であつて、內部を清洗し、軟化し、或は他の目的を以てするのです。前者は少量の水液を以てする者で後者は多量の液を用ふるものをいふのです。是を行ふには水銃或は灌水桶を用ふる者で、注射力の强弱等に病症に隨て斟酌するのです、此時衣服など汚れぬや



う注意せねばならぬのです。

▲灌腸法

灌腸法とは、藥液を肛門より腸中に灌注する法です、これには灌腸器又は灌水桶等を用ゐるのですが、豫め便器を用意しておかねばならぬのです。

▲乾性溫暖法

人身の體溫は常に平均攝氏三十六度半より三十七度半にあるものですが、疾病に因りては、往々體溫が減却することがあるから、人工を以て之を調節することがあります。則ちフラ子ル、綿、毛皮鳥毛等で纏包するのです、或は又溫めたる糠嚢、鹽嚢、溫石、湯婆等を用ゐて、溫氣を附

與するのです。

▲罨法　罨法とは、寒冷なるか、或は温暖なる物品を皮上に貼し、以て病勢を緩める法で、之を冷罨法と、温罨法の二種に分ちてある。

冷罨法は、炎症の爲めに起る所の、局處の熱痛を緩解するに用ゐるので、冷水罨法、氷罨法、氷嚢罨法及び冷水纏法の四種ある、そして温罨法、温湯罨法蒸劑及び巴布の三種ある。

冷水罨法は、手巾又は他の布巾を四つか八つか幾つにも疊み、淡水に浸して、輕く絞りたるを局處に當てるのです。

氷罨法は、フラ子ル或は綿紗に碎きたる氷塊を包みて局處へ當てるのです。氷嚢罨法はゴム又は他の不透性品(牛の膀胱等)にて出來たる嚢に氷片を入れて天井より懸垂し、頭ならば頭へ輕く當たるやうにするのです。次は冷水纏法は熱病人に於て、熱症を去るに用ふるもので、先づ臥牀の傍に空牀を設け、大なる油紙を褥上に敷き、次に一枚或は二枚の厚毛布を敷き褥布を冷水に浸し絞りて、厚毛布の上に開展し、徐かに病者を此上に移し、平臥せしめ、手早く濕布を以て全身を纏包し、更に毛布で以て其上を纏ふこと十分時、而して此間に他の臥牀を裝置すること前のやうにして、數々交換するのです。これは醫師の指揮を受けてするものですが、病者の足部はよく冷却するものゆゑ、又湯婆を用意しておかねばならぬ。

温湯罨法を行ふには、適宜の綿布、フラ子ル、或は棉花を熱湯に浸し、これを乾きたる布巾に包みて絞り之を患部へ當てるのです。蒸劑とは諸種の藥劑を熱湯に加へ、或は其煎汁を布綿等に浸し用ふるもので方法は温湯罨法と同じです。次に巴布は前二者に比すれば、温氣久しく持續するものです。通例これは亞麻仁、大麥、米等の搗き碎きたるものを、適量に磁鍋へ入れて、沸湯を注ぎ、攪和せて軟き塊を拵へ、文火に上せて煮熟し、布片に包み、患部へ當てるのです。

▲擦劑用法　擦劑とは、皮膚に塗り、そして頻り

に摩擦して、藥氣を深く身體へ沁み込ますもので、玆に云ふものは油類、酒精劑、及び水劑です。擦劑中巴豆油、水銀軟膏等の如きものを塗り込むには、必ず豚の膀胱にて、綿花麻屑等を包みて球となすものを用ひ、或は手套を穿めて擦入するのです。そして、一體擦劑を用ゐるには、必ず先づ藥瓶を温湯に浸し、藥品の稍々温かなるを俟ちて、之を手掌に移し、或は直に皮膚に滴下し、一定時間平等に摩擦するのです、酒精劑及び水劑はフランネル等に浸して擦入するのです。

▲塗藥用法　毛筆或は綿球に浸して、患部に塗敷する沃度丁幾の如き者を塗藥といひます。これは塗る部分の廣狹、藥の量等は醫士の指圖に從ふべきものですが、一回分丈けを小皿に取り分けて塗る方が宜しい。そして、其筆は用後一々洗つておき、塵埃に汚れざるやうに注意せねばなりませぬ。返す返すも生兵法は、大怪俄の本ですから、醫者の指圖を待つのが肝要です。

當季食品

女子職業學校
割烹科教員　岡野をり江

和洋とりませて當季の食物、一寸うまさうなものをしるして見ますれば

▲キウカンボロ、(胡瓜)サラダ

胡瓜の皮を剝き薄く切り、此分量三人前にて三本にて、鹽、胡椒をふり、清き布巾につゝみ、皿へ入れその上にまた皿二三枚をかさね壓とします。食するまへに水をきり皿にもり、スープ匙に酢一杯鹽ひとつまみ、胡椒、サラダ油半杯まぜてかけます。これは魚のフライのつけ合せにもなり、また冷肉のつけあはせにもよろしうございます。

▲豌豆のスープ

豌豆をゆで(ハムの骨など適宜に加へて)ゆでおがりしとき豆をさり、まへのスープをそろ〳〵加へてのばし、水嚢にて漉します、鍋にバタ大匙一杯を入

れ、尚米利堅粉一杯を加へ、これにまへの豆のすり汁を入れ、鹽、胡椒にて味をつけます。パンを賽形に切り、ヘットにて狐色にこがし、右豆のスープを盛りし中へこのパン十個ぐらゐ浮かします。
豌豆は新には限りません、古いのでもよろしうござゐます。

▲沖鱠

松魚の皮をさき、小口から三分ぐらゐに切り、鹽を一寸ふりて十分間ほど置き酢につけて直に用ふ、味噌は裏漉にかけ酢、味醂(乃至砂糖)を加へかきまはし、これを前の魚の外に茗荷(こまぐ\)生姜(せんうち)いづれも酢洗ひをし大根おろしざつとしぼりたるを加へ、さらに紫蘇のこまぐ\にしてふりかける。
味噌のなかの粒豆をひろひとりて景氣にふりかけなどすればさらによろし惣菜には無用でせう。

▲鰺の鹽燒

鰺を鹽燒にし(骨をとりて褄折にするもよし)蓼酢をたべるのは季節には至極よろしうございます。
蓼酢とは蓼へ鹽少々加へてよく摺りこれへ飯粒を摺りませ、酢と味淋を入れて裏ごしにしますのです。

▲竹の子、鞘豌豆、蕗

いづれも煮びたしにして、木の芽でもそゆればナマジの腥ものよりよろしうござゐます。
煮びたしはなるべく鰹汁を惜まず且つ汁が煮物の上に越すほどにびた〱にしてすればうまゐのです。

▲燒豆腐、雁もどき

敷笊をつかひ、汁をたつぷりにして煮あげます、汁は酒に砂糖、鰹汁に醬油適量でよろしうござゐます

▲折衷芋赤貝

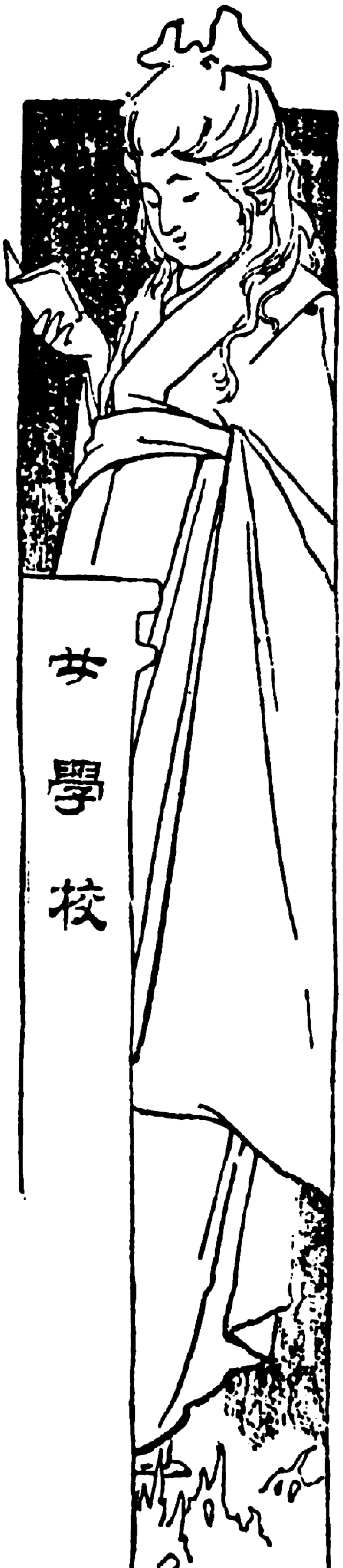
ジャガ芋を鹽ゆでにして裏漉にかけて置き、これへ鰹汁をすこし加へ火の上にて固め、どろ〱に煉りこれへ赤貝をへぎしを鹽であらひ、生醬油にて味をつけ水にてわらひたるを、前のジャガイモの中へ煉りませ、靑豌豆のゆでたるをませて丼へ盛る、色どりがよろしうございます。

豊橋高等女學校卒業式

浦月女史（投）

私は女子敎育といふことに興味をもつて居りますので、各地女學校の卒業式參觀などは、最も喜ぶのでございます、それで、此度旅行の途路豊橋に數泊致しましたが、本月二十三日には、當地高等女學校第一回の卒業式があるといふことを、承知いたしましたから、ある方の紹介によつて、當日の臨席を願つたところが、當校では、早速プログラム卒業生氏名校歌感謝の歌等を高尙に配附された中に、數片の櫻花を優美に散らされた招待狀を下さいました、實に當日は待かねた甲斐があつて、豫想にもすぎて忘れがたい記憶をのこしたのでございます。

かくて二十三日はをしげもない晴天を以て明けはなれまして、私は定める時をまつて、二三の人々と共に學校さして參りました、大旭日旗を交叉した門を入つて多くの樹木の中に、尤も目にとまつたのは、第一回卒業生の紀念樹の今日をはれと勢ひよくたのもしい姿なので、正面入口には、黄金八花の地に眞白く祝の一字を盛つた額を頂いて居るアーチが作られてあつて、其左右には、數名の生徒がならんで、居られて、親切に迎へられました、案內の生徒さん



について進む廊下の柱は、幾十本ともなく悉く滴るばかりの綠葉もて飾られて、旭日の旗はその間にいさましくひるがへつて居りました、案内につれてはいつた室は接待室で、入口の綠葉裝飾の上には、扇形の額の地の白いのに、黑く歡迎と浮かせたのを高くかけてありました、相對した室は、卒業生とその父兄との接待室なさうで、その入口にも綠葉裝飾の上の方に、配合のよい額が見えました、やがてこの廣い室も、來賓で一ぱいになりましたが、生徒さんたちは、たえずかひがひしく接待の勞をとられました、室内の一方に黑板がありまして、その面には美事に春げしきをうつしてあつて、はるか相對した一方には、立派な盆栽をおかれて、中央の白布でおほひました長いテーブルの上には、花瓶や花籠などがならべられてありました。

九時といふに式場に導かれました、綠葉かざりは式場入口までつゞいて、なほ入口には、卒業式と織りいだした趣きある大額が見えました、さて式場の裝飾は四方ともたゞ眞白に見渡される其正面一段高く絨氈をはりつめた上の方には、敎育勅語の額を奉置して、其左右大旭日旗を程よくこきわげられ、なほ室の兩隅にはレモンの大きな盆栽をおかれてあつて、その姿その香私などには一層珍らしうございました、正面のテーブルには一段低く卒業修業證書を積みかさねられ一方にならべられた二臺のオーガンの上には、大火方圓を交へた花瓶の配置などが、いかにもめでたく、特に天をもつかんばかりの竹の巨幹に、さしそへた下葉さへよしありげに見えて、何となく奥床しく感じました。

知事閣下旅團長閣下をはじめ、來賓を以て滿たされた式場の、正面近く靜かに進まれて歡迎の辭をおのべになつたのは、本年二月新任の本間校長で、つづいて君が代の合唱は滿堂にひゞき、勅語の奉讀、勅語奉答の合唱聲靜まつて、卒業證書修業證書の授與となりました、さて名譽ある卒業證書を頂かれたのは二十九名でございました、次には校歌『堅き覺

悟』を高く低く誠心こめて歌はれましたのは、見るさへ愛らしく、きくさへたのもしくおもはれました。

次に熱誠あふれた校長の御訓辭は、滿堂たゞ肅として承はりました、それから常識ある婦人たれとの縣知事閣下の告辭、有益な郡長町長の祝辭が了つて來賓の祝辭などありました、又内務書記官青野法學博士は折よく來縣中であつたので、臨塲になりまして祝辭とともに有益な御講話がありました、つづいて段上にのぼられましたのは、在校生總代の生徒さんで、次に卒業生席の一端から進みでられたのは、卒業生總代として答辭をのべられんとするので今しも感謝の情がわきかへつて居られる胸のほどを順序よく朗かに詞でのべられたので、一般の學校で文章を前以て用意して持ちて出るのとは、趣がかはつて、おもしろく承りました。

やがてプログラムの紹介に應じて、まづ卒業生の風琴連奏、次に國文朗讀それが了ると間もなく、一聲高くうたひだされたのは、生徒一同の唱歌で、活氣があつて誠におもしろうございました、次には國文朗讀、英文朗讀、最後は卒業生一同の作歌感謝といふので、紹介とともに、卒業生中のある方がオーガンの前に進まれ、卒業生一同はうるはしくたのもしくうたひだされました、卒業式は、これで了りをつげましたが、これでたゞ二時間しかかゝりませんでした。

式後は茶菓の御馳走に預りましたが、櫻の花の形に卒業といふ文字をあらはした見事な御菓子を見ても當日の御注意のほどが知られて感じました、それからお二階の生徒成蹟品陳列塲といふに案内をうけましたが、圖畫や習字をはじめとして、裁縫品作文地圖そのむきむきにすぐれたものが澤山でございました、建築圖食品分析表があるかと見れば生花もならんで居つて、その配置がいかにも巧なので一層美事に見えました、特に私の感心いたしましたのはある一部に、着物の積り方裁方縫方を大きな圖にあらは

して、誰にも分るやうにしてかけられてあつたのでございます、いかにもよい御教授法と思ひました、細かに拝見いたしましたなら、なほおもしろいものも澤山ありませうが、晝から他に約束がありましたので、殘念ながらこれでお暇をして叮嚀なお見送りをうけて返りました。

私は今日この式につらなりまして、最も感心いたしましたのは、すべての方面の裝飾は、在校生徒さんがた、姉さんのお祝としてわれさきにと骨を折られた結果なさうで、また式中も其前後も、先生方生徒さんがたは各々分擔で、皆様が精々と元氣よくおはたらきになります様は、いはずとも卒業生への、何よりの御馳走で、見るから愉快な心が致しました、まして二月中旬御赴任の新校長を頂かれた學校とは見えませんでした、私は諸々の女學校を機會あるごとに拝見いたしましたが、こんなにたのしく愉快に感じましたことは、まあ稀なのでございます。

○豐橋高等女學校々歌

一、夜晝やまぬ豐川の　水の流の千代かけて
たゞ一筋に勤儉の　教を我等が法とせん

二、立ちて動かぬ石巻の　山の緑の萬代に
百折不撓の名を得たる　土地の美徳を養はん

三、國には至仁の君いまし　家には慈愛の親います
忠孝二つの師の教　守て盡すぞわがつとめ

四、歷史けがれぬ三州の　婦女は婦女たる道ふみて
わが學校の榮辱を　心に忘れじもろともに

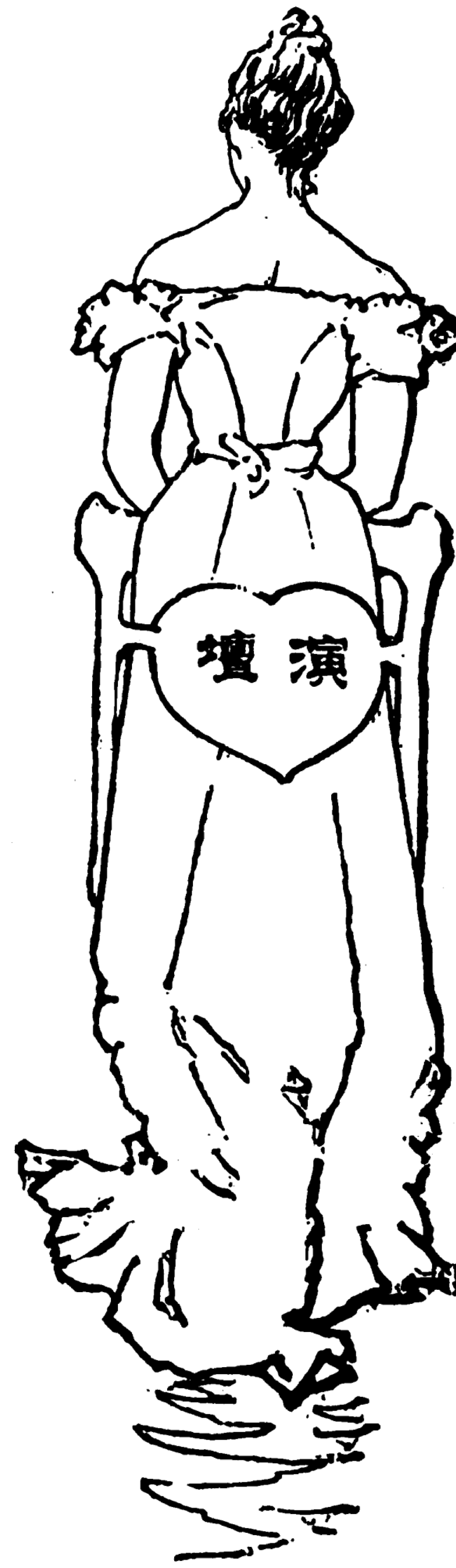
女學校の學年暦

東京市に於ける模範女學校の一に數ふべき第二高等女學校の學年暦は他校に比し完然に近きものありといへるが其中に就いて一例を紹介すれば左の如し

▲二月中旬細密檢査▲三月上旬修學旅行▲三月二十六日學年成績判定會▲三月二十八日卒業式準備▲四月六日新入學生入學式▲四月上旬會内觀櫻會江戸川春花▲四月二十日生徒病類別患者表報告▲四月下旬生徒遠足運動會▲五月二十八日皇后陛下御誕辰祝賀式▲五月中旬卒業生同窓會▲九月上旬生徒體重調査▲十一月三日天長節祝賀式▲十一月七日開校紀念式大運動會▲十一月下旬父母懇話會▲十二月五日かるた會（これは師範部寄宿生）

卒業生に告ぐ

群馬縣立
高等女學校長　鈴木雄二郎述



茲に本校第四回卒業の式を擧ぐるに當り、監督官廳其他官民貴賓の來臨を辱くし、式場の光彩を揚ぐることを得たるは、本卒業生等の光榮を感ずるは勿論、職員生徒一同の厚く感謝する所である。

扨本科卒業、及び補習科修了の諸子、諸子の本校にあること茲に四年、若くは五年、其間學び得し所は果して何事なりしぞ。

知識としては文字を知り、內外の歷史、內外の地理、及び理科、家事を學びたのである、技藝としては書を讀むの法、數學、書法、圖畫、家事の或るもの及び裁縫、音樂、體操を學びたのである、此等の知識技

藝は男子のそれと大凡異なるところなしとは云へ、其用を云へば、大に同じからざる所がある、蓋し男女は性質を異にし、職分を殊にするからである。

女子本來の性質よりして其職分は内を理むるにあり、此時に當りては、例へば歴史地理の知識は良人の奬勵者、慰籍者、同情者として働くであらう、子女の教育者たるに必要であらう、理科や家事の如きは、仰ぎて父母舅姑を養ひ、俯して子女を育て、其他一家の安寧を保ち、幸福を増すに必要であらう、習字や、數學や、裁縫の効用は、今更云ふまでもなく、圖書音樂も、晝となく夜となく家内の平和を支配し、老幼の愉快を喚起するの力があるであらう、又た實用以外に、自己の禀性品位を高尚にするのも、此等諸學科結合の力に須つ所が多いのである。

然れども、人の禽獸と異なる所以のものは、單に知識技藝に存するのではなくして、道徳てふことのあるためである、換言すれば知識技藝は道徳を完全にするに必要なのである、是を以て先哲は教育最後の目的は、道徳にありと叫ばれてある。

故に諸子は己に對する道として、一方に知識を廣め、技藝を修めつゝあつたと同時に、一方には道徳即ち修身として、人性の諸徳の修養を努めたのである、柔和なれ、剛愎なる勿れ、勇氣あれ懦弱なる勿れ、快活なれ、陰鬱なる勿れ、愼重なれ疎暴なる勿れ、敏捷なれ遲鈍なる勿れ、沈着なれ輕操なる勿れ、と凡そ人性諸徳の効用、及び其修養の法を學びつらん、又人類の一人としては、親しきより疎きに、近きより遠きに、貴きより賤きに對する道、さては敵國の人に對する心得までも學びつらん。

殊に國家に對する道としては、萬世一系の天皇陛下を戴く日本國臣民として、其忠君愛國の情は、外國人のそれと異ならざるべからざる所以の理より、憲法國法の内容、國會縣會の効用、議員の資格、納税兵役

の義務ある所以、其稅額年限、さては公務公權に對する心得等まで學びつらん、又社會に對する道として即ち慈仁、救濟の法、共同博愛、赤十字社の成立効用等のこと、更に又國際間の事、萬有に對する心得・即ち個人的、國民的、社會的、道徳の大要は、悉く之を學び、兼ては日常の作法を實習し、修身の事殆んど漏す所はない。

然れども、物理化學を實驗の學と稱し、博物を彙類の學と稱すると同じく、道徳に實踐學の目あり、實踐なき道徳、即ち知識の道徳の價値なきことは、實驗なき物理化學、彙類せざる博物學よりも甚しいのである、即ち道徳の要は行ふにありて、知るにあらざるのである、然れども内に善を喜ぶの情、即ち其實行を促すの力あるにあらずして、只勉强して善を行はんと欲するは、甚だ難き所である、故に修身敎授に當りて、引證適例として、今現に親しく耳聞しつゝある我 天皇陛下の慈仁なる叡慮、司令官の敏捷なる活動、將校兵士の忠勇なる動作等より、古今内外人の勇拔なる事蹟、及び余が年來目睹耳聞し、日夕師として其指導に從ひつゝある所のものを擧げて、之を說くに、努めて諸子の同情を喚起するの法を採り、或は偕に其正義を喜び、或は倶に其薄命を哀みたりしは、是れ諸子の感情をして善良なる方面に發動する習慣即ち仁慈を愛し、正義を喜ぶの習慣を得せしめんがためなのである、蓋し情なるものは、幼稚の時より、常に善面に發動するの習慣を得るときは、其喜ぶ所は即ち善にして、之に反するものは即ち惡なること、一一知力の判斷を待たずして直に辨することがある、且つ夫れ人に正義慈愛の情なくば人性は極めて無味乾燥にして生甲斐なきことであらう、情の敎育豈に等閑なるべけんや、故に古へ情育を以て智體と並稱せし時あるも、故なきにあらずと信ずるのである。

智は善惡を知り、情は善を喜び惡を憎むに至るとはいへ、其善を行ふの意なくんば其人や只是れ惡人なら

ざるのみ、未だ以て善人と稱するにはたらぬ、是れ人の滿足する所であらうか、是を以て意志鍛錬の必要がある、然れども學校なる小社會にては、其範圍狹くして其機會は甚だ乏しい、多くは規則約束を設け、之に從ひて行動するのみである、但し本年度は、戰爭の影響として、之を平年に比すれば、其機會を得たことが、稍多かつたのである、即ち夜半に出で丶軍人を送迎し、軍人被服の裁縫に力を用ひ、又自身の慾を制して、校友會費を以て軍人家族の貧困者に物を贈り、紀念の植樹をなし、義勇艦隊に寄附金を爲したる類、其他國債に應じ、其債券を愛國婦人會に寄附した等は則ち之れである、敎育なるものを廣く解すれば、學校敎育の外家庭、自然、社會、自身の別あり、學校敎育は、兼て自身敎育の基礎を爲すものなれば已に其の基礎を得たる諸子は、自今以後機會を捉へて意志の鍛錬を爲し、其他の事に於ても、現在の狀態に滿足せず、今日よりは明日、今年よりは來年と、日々新にして社會の進歩に伴はねばならぬ、然らざれば、進まざれば退くなりの古諺に漏れぬであらう。

今や我國家は、振古未曾有の大事に遭遇し　天皇陛下の御軫念は申すも畏し、百萬の男子死を以て國家に報いつ丶ある、而も一たび此難關を通り過ぐれば、我國勢は隆々として發展すべし、人生れてか丶る千載未曾有の時に遭う、男女となく孰んぞ勉めざるべけんや、此時に方り內を守り後を善くするの力は、大に女子に須つべきものがある、即ち內は家庭を整理し、子女を敎育し、外は男子を鼓舞し、風儀を矯正する等のことである、若も然ずして智識技藝を以て人に傲り、世に衒ひ、心を衣服頭髮の末にのみ馳せしむるが如きことあらば、何うして敎育ある人と謂ふことが出來やうか。

以上の言、其多くは平生にありて諄々反覆せし所、今日又之を云ふは、時と場合とが、更に其印象を深くするの理あるべきを思ふからである、諸子健康なれ。

女學生と英語研究法

米國 文學博士 山下彌七郎 述

英語の研究に就ては、近來皆さんが非常に注意される樣に見受けますが、まだ仲々勉强せられた丈け、又骨折られる丈けの効力が見へませぬのは、全く研究法の不充分であると云ふことに歸因すると考へます、研究の方法に付き英語を敎ゆる方には、種々苦心に苦心を加へられて、その敎授法も隨分進歩した樣に見受けますが、敎へられる方に取りては、未だ研究が積まなくて、徒らに試驗の成蹟を爭ふとか、席順の上下を競うとかいふとのみに齷齪して居るやうに思はれます、斯くては語學研究の効力の見へぬ計りでなく、却て當世流行のお顚婆ハイカラとなり、聞き囓りの英語を下女下男に向つて使つて、無暗に得意がる女子となるのみで御座いませう、此のハイカラ孃たちは、全く婦人としての天性を失ひ、終生改むることの出來ぬ惡風を養成するものですから、能く〳〵注意に注意を加へて、決して斯る弊風に染まぬ樣願いたいもので御座ります、世の中に一番恐ろしひものは半熟の學者である、夫れは物が出來上つて居りませぬから間違ひ計り多ひ、生噛りの女學生ほど實際に役に立ぬものはあるまいと思ひます、斯樣に申しますと英語の研究は、不必要の樣に聞えますが決して左樣では御座りませぬ、英語は世界の普通語で御座りますから、日本が世界の諸强國の仲間入りをし、日本の地位を世の中に紹介しますには、英語が一番必要なものであらなくてはならぬと考へます、其塲合に於ける女子の英語は、實際社交の方面に間に合ふ樣に

致して、可成科學的の英語を避くる樣に致し度ひ、究竟六ヶ敷い哲學、經濟、法律等の書物は兎も角、先づ話すことや、語る事や、又は書く事などに、上手になる樣にして貰ひ度いものであります、私は今申した英語を世界の英語とし、理屈の六ヶ敷い事に許り骨折るのを日本の英語と申したい、然るに此二つの英語には、皆癖が御座ります、例へば私の世界の英語には、唯實用と活用と云ふ方面に力が這入過ぎて、自然に文章の法格に過ちが出來る、之れに反して日本の英語と申すのには、餘り文章の法格にのみに拘泥して居て、其れが實用と活用の點に於いて甚だ心細い、私は此等兩法の内何れを可とするかと言ふことを止めて、先づ女子に向ては是非私の申す、此世界の英語を研究して貰ひ度いので御座ります。

前に御話し致しましたところから考へますと、英語が本當に出來上らぬ迄は、語も使ふことが出來ぬ、讀むことも、又書く事も出來ぬ樣に聞へるが、左樣ではありませぬ、詰り能く立派に出來る樣に稽古をせられなくてはならぬ、稽古は自分より能く出來る方に向てするので、決して自分より出來ない方に向てするものではムいませぬから、能く出來る方に向つて、英語で御話をされてもよい、英語で手紙の遣り取りをなされてもよい、則ちこれが好き稽古の方法といふものです、この方法が取りも直さず英語研究法で御座ります。

一、讀書法

讀書の要は、主に自分の讀む所のものを、聞く人に解せしむる爲めのものであつて、他に必要のなきもので御座ります、つまり日本人が英書を讀むと云ふ事は日本人に向てよりも、多く歐洲人に讀み聞かせて容易に解らしむるが眞の能事で御座ります、夫れ故發音法に、最も能く注意せなければならぬ、併し此法は、皆さんが字書若しくば其他のもので、研究が出來る樣になつて居りますけれども、實際西洋人に向て應用

して見ますと、仲々規則通りには參りませぬ、又仲々辭書など計りで、稽古の出來るものでは御座りませんから、自然に教師を撰擇せなくてはならぬ、然るに此讀書法の教師には、英人若しくば米人に限るので御座ります、彼等の發音は、我々日本人の耳には一寸聞き惡ひので御座りますが、夫れは我々の耳が惡ひので、彼の發音が正しひので御座ります、又日本人の發音は、何處までも日本風の流儀で、日本人の耳には聞き答が宜しいが、實際は讀む人と聞く人との口と耳が馴れ合て居る譯から、斯樣な事になるので此風で遣り通したのが、即ち日本風の發音で、世界の英語發音法に遠ざかるので御座ります、夫れ故へ是非英人若しくば米人に就て、讀書法即ち發音法を改正し、眞の米國風、若しくば英國風にして、所謂世界的の讀書法を學ばねばなりませぬ、素とより初めから西洋人の讀むのが解かるものでもありませんから、唯耳を馴らし口を馴らす事が、必要で御座ります、私の此讀書法と申しますのは、單に讀む事のみを意味するので、決して他の意味ではないので御座ります、若し又斯樣な教師を得ることの出來ぬ場合には、成る可く多く西洋人と交際したとか、又は長く歐米に留學して居たと云ふ樣な人に、教を受けることが善かろうと考へます。

二、和譯法

英文を日本文に譯するには、先づ其の英文の大體の意味を、日本人の先生に聞いて、極く俗に御話しをして貰ふ事が、一番必要な事で御座ります、何故と申しますと、御承知通り譯字と申すものは、澤山あるもので、理屈ぽい方になると、仲々間違つた譯をして居ることがあります、斯る弊害は、全く其文章の大體の意味の解らぬ處から出たに外ならぬので御座ります、夫れ故へ其文章の大體の意味を極く通俗に先生から御話しして貰ひ、夫れから自分で其の文句を直譯せねばなりませぬ、此場合には常に辭書を用ひて、決

して人に尋ねることをせぬ樣に致したい、自分が苦學して辭書から引出したものは、矢張り夫れ丈けの効力が見へて、容易に人から聞ひたものよりは、永く記憶するもので厶います。

右に申しました俗譯とか、意譯とか申すのは、意味さへ解ればよいと云ふ丈けのものであつて、例へば「今日はひどい寒い御天氣です」の如き類で、若し是れを直譯に致しますと、「今日は夫れが嚴しく寒き日である」となるので御座ります、此れは極く簡短な文章で御座りますが、もつと永ひ文章のも、又御話の本などでも斯樣な巧合に致されたならば、隨分益する所があると考へます、近頃ろ隨分流行して居ります彼の「フエーマス、ストーリース」など御覧の時などは、先づ先生より一通り其話しの大體を話して貰ひ、夫れから自分で辭書を以て直譯を付け、そうして一句一節を善く解し、夫れから先生の處で、自分が下調べのまゝを讀んで直して貰ふことが一番完全な方法と考へます、是れが私の和譯法で御座ります。

三、英譯法

和文を英文に直すには、其和文中に於ひて解らぬ文字だけを、和英辭書にて捜がし出し、然る後其の文章の主格を見出し、其後に動詞を据へ置き、若し目的物の要せらるゝ場合には、夫れを最後に結び付くるので、目的物が、疑問を意味する場合には、必らず夫れを主格の前に配置すべし、其他の形容詞とか、副詞とか接續詞とか、前置詞等の如きは、日本文と殆んが同一の配置を取ると思へば大差なく、兎も角最も大事な要件は配置の順序を間違はぬ樣にせられ度きもので御座ります、例へば「皆さんは彼の運動を見に御出掛けになりました」の如き和文は、先づ其配置の順を調べる、第一に主格を、第二に動詞を、第三に目的物となる、即ち下式の樣になるので御座ります。

主（皆さんは（ゼイ））＋動詞（御出掛けになりました（ウエントアウト））＋目的物（アノ運動界に（ツ・ジー

ギ、ヌホーナ)

併しもつと簡短に式をきりつめて書きますと

卅(ピイ)+四訓(サエソナ)+四字(ヌホーナ)となるので御座ります、此法式を踏んで英文を書き、夫れを日本人の先生に持て行かれまして、其實際の意味が違つて居ないかどうかを聞かれ、若し夫れが意味さへ間違ひがない様に出來て居れば、それを西洋人に見せて耳ざわりの好い様、聞き心持のよい様に直して貰へばそれでよいと考へます、私は此の西洋人の耳ざわりと、聞き心持の宜ひ方と申すのは、至極大事なことであると考へます。

四、會話法

是れは彼の讀書法と相待て稽古をして貰ひ度ひ、即ち讀書は會話の稽古で御座りますから、可成耳と口とを西洋人に付て馴らさなければなりませぬ、若し又此機會の得られぬ時には、極く容易き洋書の暗記を始むることで、是れが自然に口を馴らす基となるので御座ります、會話は何よりも習慣が大事で御座りまして、口や耳を馴らして、聞くことも語ることもおつくーでない様な習慣を付けることで御座ります、御承知の如く、前置詞の使方や、又使い分けなどは、極く面倒なもので御座ります、併し是れは西洋人には一寸とも面倒でないので、つまり夫れが習慣になつて居るからの事で御座ります、元より暗記は、意味が能く分てから、夫れを覺へることが本當のものでありますが、併し意味が分らなくても宜しい、無暗に少しづつを暗記して貰ひたい、是れが私の會話法であるので御座ります。

五、文法及び作文法

文法と、作文法とは、到底離す事の出來ぬもので御座りますから、一緒に修めた方が宜しひ様に考へられ

ます、併し文法は、唯一通り知りさへすれば、用の足るもので御座りますから、極く簡易な法則を勉強することが肝要で御座ります、其代り作文法は隨分個人々々の流儀が違ひ、又大變に上手下手があるもの、御座りますから、成り丈け上手な人の書たものを手本として學ばれ度きもので御座ります、米國などの學生は文法を學ぶと云ふことは極く小いので、僅かに二三年の間、小學校にて短簡に學ぶのみで御座ります、併しながら作文と云ふことには、餘程骨を折るので御座りますか、決して其構成の方法に付てではなく、全く其「スタイル」と云ふことに勉强するので厶います、構成法は前に御話し致した通りの事で、極り切た式があるので御座りますから、能く其式を踏んで出來る丈け其「スタイル」を學ばなければならぬ、容易き言葉と解り易き文字とを以て、意味を能く解せしめ、讀者をして、讀むで飽くこと無き樣に書くことを「スタイル」と申すので御座ります、此れを學ぶには、全く名高き人達の書かれた本を讀み、夫れを見習ふことが一番早途で御座ります。

英語を學ぶ爲めの用書は、皆西洋人の書きたるものが宜しひので御座ります、何故かと申しますと、書き工合や、流儀が、全く世界の英語風で御座りますから、成る可く此邊の消息を確かに心に止めて置くのが肝要で御座ります。

右に述べましたのは、私の久しい經驗の上から、始めて英語を學ぶ人といふ内にも、特に女學生の爲にお話したのでありますから、是まで多少素用のある男學生（女學生にても）にありては、文法も一通りではなく、深く研鑽する必要も厶りませうし、其他前に述べた方法以外に、勉强の功を積まねばなりますまいが、要するに初學者としては、本文の方法に據るのが、簡易でもあれば、便利でもあつて、謂ゆる堂に入るの捷徑であると考へます。



滿洲の婦人と演劇

於北滿州　園田紅村

奉天附近の會戰は、實に見事な戰爭で、皇軍が稀有の大捷利を得ました事は、よく御存じの事と信じます、奉天の東北二里ばかり、毛家屯の北方高地、只今では受降が岡と命名して、我西南健兒團で、碑を建てましたが、此受降が岡で、私共は敵の襲擊を受け、愈々戰死の覺悟を極めて居ました處が、辛らくも虎口を遁れて、やつと危險を免れましたので厶います。

我軍は逃ぐる敵兵を驀地に追つ駈けまして遠く鐵嶺以北に進軍いたしましたので、私共も一緒に北進して只今では、日本から見て北方に、夜な〳〵顯はれる北斗星！、左樣其北斗星の直下に、吾々は駐軍して居るので厶います、そこで肝腎の奉天城も見ることが出來ずに進んで了つたのは、如何にも殘念で厶いました、併し近々奉天に參る筈で厶いますから、何れ此次の女鑑には、面白い通信を申上げます、奉天は清朝起業の地で、其宗廟の在る所ですから、面白い材料も多々あらうと存じます。

偖て滿洲の婦人に就ては、これ迄度々御通信申上ましたが、今から考へて見ますと、稍々皮相の見であるのです、私共が只今滯陣いたして居ます處は、一寸繁華な村落で厶いまして、村落としては、這麼處は滅多にないので厶います、私共の居る家は此村の豪農で、主人は周存と申して四十二歲、其妻は四十六歲だ相で厶いますが、これに岐山と鳳山と云ふ兄弟の子供があります。

兄の岐山が二十六歲で、其妻が二十八歲、弟の鳳山

が十九歳で、其妻が二十歳、兄岐山は、女の子供を二人持つて居り、弟の風山はまだ子供は無い相です要するに、東京邊に比べますと、一般に早婚で厶います、其他親類から同居に來て居る男女が澤山ありますが、是等は皆日本兵に其家を徵發されたから、一時此家に寄寓して居るので厶います。

今日まで、滿洲の婦人は、我々を怖つて居て、容易に其姿をだに見ることが出來なかつたのでありますが、斯く大勢一緒に居て、其風俗習慣を備さに見ることの出來たのは、實に今日が初めで御座います、

私共は、東京朝日の弓削田と云ふ人、九州日々の稻田と云ふ人、それと私とで三人、それに清國人即ち此家の人と都合二十人も居りますから、中々賑やかなものです。

初めの程は、其中の處女は勿論、内儀さん迄が、何となく、怖がつて居るやうで厶いましたが、漸々吾吾の性質も了解つたから、今では中々親んで來たやうです。

此邊の女子の風俗、有夫の婦人は、大きい髷を結つて居ますが、處女は皆組で後へ垂れて居ります、そして足も尋常で、殊更に小さくは致して居りませんが、既婚者でも未婚者でも、永柄の煙管を持てるのは、可笑く感ぜらるゝのであります。

滿洲の婦人は、概して色の白いのは、不思議でありますが、其骨格容貌は、少しも日本人と變らない、まあ只々其風俗習慣が稍々異ると云ふまでの事であります、私は日本人と滿洲人とは、元と同一の先祖から出たものだとの信念を益々堅ふするのであります、扨て此家の婦人共は、朝早く起きて、顏を洗ひそれから、乾度髮を自分で結ふので厶ります、これは日本の御孃樣方のやうに、結髮の手を借らねば、自分の髮が結へぬのとは、餘程趣きが違ふ、そして炊事の仕度に掛るが、此家では、岐山と風山との妻二人で、二十人の賄を引き受けてやつて居りますが中々能く働いて居ります、食事が濟むと、小さい乳飲み兒があるにも關はらず、直ぐ裁縫など致して一

刻も休みません、又耕作の時機に爲ると、野にも出て、農業に從事する相であります、これを日本の學問を生噛りにして、いやに文明風を氣取つたお轉婆女學生に比べると、餘程優しの如うに考へます、何も滿洲婦人の肩を持つ譯でもありませんが、滿洲の婦人は、料理の數々、何でも好く遣りますが、其豆腐を造るのが、頗る面白い、これは庭前に大きな石の挽き臼が据へてありますが、大豆の浸めしたのを以て來て、驢馬の目を布で隱して、これに臼を挽かせると、驢馬は、ぐる〳〵臼の周圍を廻りますから少しも人力を勞さないで、立派に其大豆が挽けるのであります、是れを釜に入れて、ニガリを加へて豆腐を作るのであります。

俗て滿人の風俗に就いて、感心したのは、朝起きて顏を洗ふ時に、男の親には、男の子供が、水を取て遣り、母親には、嫁や娘が水を取つて遣ります、此家に岐山の娘の五歲になるのと、其妹の三歲に爲るのとの二人ありますが、これが中々好く躾けてあります、私共が此家に着いた時も、此五つになる女の子が、好大人と云つて、お辭儀を致しましたが、子供となると、犬の子でも、猫の子でも、可愛いが人情の自然、されば、此二人の子供が素敵に可愛いから時々菓子でも遣ると、必ず多謝と云つてお辭儀するのであります。

子供は男女共に、髮は前後左右四個所だけ殘して、其他は皆剃つてある、其四個所の髮は、赤い紐で根元を卷いて、其尖端には亦赤い紐を交へて、組んで後方へ垂れてあります。

雉子も蛇を喰いますからですけれど、滿洲の婦人は顏の優しいのに引き換へて、心は中々雄々しいもの、日本の婦人の如うに、神經が敏くて、直ぐ涙ぐむのとは、稍々性質が違います、所天を尻に敷くと云ふ風は、見受けませんけれど、自ら其權力は偉大なもので、男子がこれに服從して居る樣子は、確かに見えます、西太后の如うな女傑の出たのも偶然ではありません。

此邊では、學問も爲ると見えまして、此村にも秀才が二人と擧人が一人居る相です、私共の居る家の岐山も多少書を解します、併し女子迄が學問を爲るなどは思ひも寄らぬ事でムいます。

女が少數で非常に貴きに係はらず、矢張女の方よりも男の方が好いと見えて、岐山が私共に向つて、予は二人の子供を持つて居るけれども、皆女だから、ポコペンだとこぼして居ります、彼は、天照大神も神功皇后も、エリサベスも、クレオパトラも、西太后も皆女性であつたと云ふことを知らないのでせうか(大笑)詰り男の方が實際の役に立つから、いくら滿洲でも、これを尊ばずには居られないのでムいませう。

此邊の婦人は只今では、學問は無いが、これが海老茶の行燈袴を穿いて、二尺以上もある長袖を翩翻に翻へし乍ら『妾文學者は嫌で政治家が好きだわ』『そう？妾海軍が一等好きよ』なんて生意氣に高襟を氣取る時節が來たら、我は東海を蹈んで死せんのみ、など、慷慨する厭世家も追々出て來るだらう。學問は可い加減で止めて、其天眞爛熳たる性質を毀せず天晴貞淑靜婉の婦人を造つた方が可いか、それとも今日の日本の如く、生意氣な高襟式部ばかりを造り出した方が可いか、此處一番識者の考へ物だテ。

支那は流石に肩書を貴ぶ國だ、私共の居る家で、名刺を呉れろと申すから、一枚渡した處、私の名刺は國民新聞社特派員と肩書してあつて、名刺の形も小さかつたのに、九州日々の稻田君のは、九州日々新聞記者戰地特派員として傍らに熊本の文字さへ入てあり、其形も大きいから、彼等は稻田君を目して、太々的大人と呼んで、吾々以上に尊敬するのは、實に面白いです。

私の通信を讀まれる方は、重に我國の上流の子女方でありますから、私が斯く婦人の服裝や、日常の起居動作まで殘らず細々と書き連ねたのを見て、定て婦人の一擧手一投手の微に迄注意する如うな細い婦人の如な人間だと思召すか知れないが、これは職

業柄質に仕方のない事であります、詰り新聞記者は社會の活たる出來事を詳細周密に觀察して、これを批判し評論するのが其任であります、若しこれが出來なければ、新聞記者としての技倆はゼロになります、惡しからず御推量を願ひたいのです。

日本の子女が、芝居を見ることの可否は、暫く別問題と致しまして、只今は支那の芝居に就いて、私の見ましたところを御話申上げます。

支那の演劇も我國のやうに、矢張り時代ものと世話ものとの二つがあります、時代ものは、明朝以前の歷史上の事蹟を演じます、其藝題は三國史などの材料が多いのであります、それで其服裝も明朝以前のものであるから、錦繡燦爛目を奪ふばかりでありますが、今の支那服よりは、古雅な處があるやうに見受られます。

樂器は胡琴が重で、其他笛や大鼓などもありますが概して悲哀の調を帶びて居るやうに感じられる、西洋の音樂のやうに雄大な處は一つもありません、此の樂につけて、謠を歌つて問答するのでありますから丁度日本の能を見るやうです。

そこで日本の芝居のやうに、活潑ではない、其所作が如何にも緩漫であるから、腕を扼して涙を揮ふやうな點はないけれど、自から崇高な處は備つて居るのであります。

日本の演劇の方が進步して居るのか知らないが、高尙と云ふ點は、支那劇の方が餘程優つて居ると思はれます。

私が海城で見ました芝居の中に、北斗星と云ふのがありましたが、北斗の七星が出て種々の所作を爲し、謠で以て問答を爲した、其終りに至つて、此七星が一緒に集つて、我國で只今流行して居る、雪の進軍と云ふのと同じ調子の歌を唱つたが、實に高尙にして且つ面白い幕でありました。

次に世話ものに爲ると、我國の世話ものと大いした違いはないやうです、だから上流の家庭の子女などが、決して見るものではないのであります。

日本國名の由來

藤野あまき

日本もと比能母登又は夜麻登など稱へ、之には倭、和の字などを當嵌められたり、併し神代に於ては大八洲、倭嶋根、豐葦原中津國、水穂國、細戈千足國、秋津洲、敷嶋、扶桑などの如く、種々の名稱ありたれば、今本居翁の說に基き、左に其國號の起りし所以を記るさん、蓋し日本の地勢たる、南北に長く東西に短く、且つ四方に海を環らして暖流寒流常に相接するが故に、氣候概ね溫順にして土地亦明媚の風光に富み、到る處の山水崇高雅致の態に豐なるを以て、人民の氣風も亦自ら天然の感化を享け、夙に風流韻事を嗜むの性となり、之に伴へる言語文字皆何れも多少の詩的を帶ぶるに至れり、從て總ての物名、例へば地名國名等の如き、其他多くの代名詞に至る迄、諡く趣味の横溢を以て充さるゝに至れり、されば今茲に國名の由て來る所を討ね、讀者諸孃と共に、之が歷史的趣味の一半を知らんも、亦面白き事ならずや、こは啻に我國體の淵源に遡りて、日本的特有の氣質の由て來る所を知るのみならず、我が女子道の上にも多少裨益する所あらんことを信ずればなり。

▲夜麻登

こは神代よりの名にして、邇藝速日命天降りし時、虚空見倭國なる古語より出づ、一說に夜麻登は神代よりの名なるを、神武天皇の御代よりして、都の一國の名ともなれるなりとあり、蓋し畿內なる今の大和は、神武天皇始めて都を此國の橿原に奠め玉ひしより、代々の天子何れも都を此國に定め玉ひしかば自然と天下の大名ともなれるなり、書紀に、昔し伊弉諾尊此國をほめて夜麻登は浦安國、細戈千足國、磯輪上秀眞國と宣ひ、遂に此國に宮しきましければ神日本磐余彥尊と大御名を稱へ奉れりとあり、されど此御名より起りし國名と、なすものあるは誤りなり、神代紀にも大日本豐秋津洲と見えたれば、神武

天皇以後の名に非ずして、古き神代よりの名なることは疑ふべからず、さて其夜麻登といへる名に就ての意義は、諸説紛々として定かならねど、萬葉考に據れば、此國は四方みな山に依て鎖されたれば、此國に出入するには皆山門よりするが故に、山門國とは名けらるゝなりとあり、本居翁の説に從へば、書紀の神武の御卷に、天皇の御言に此國の事を、鹽土老の翁の言へるを聞くに、東の方に美き地あり、青山四に周れり云々と見え、又大已貴命は玉墻内國とも名けたまひ、又古事紀に倭建命の御歌に、夜麻登波、久爾能麻本呂波、多々那豆久、阿袁加岐夜麻碁母禮流、夜麻登志、宇流波斯とよみたまひ、又石比賣命の御歌に、袁陀氐夜麻登云々とあり、此袁陀氐夜麻登とは、楯を立並べたるが如くに、山のめぐれるさまを謂ひたるにて、此國は山の周廻れる中に在る故に、山門といひ、夜麻登は乃ち山なること論なしといへり、登は則ち處にも似通へるべく、伏處寢處、井處、(處は戸則ち伏戸、井戸などの如し)といへる如く、兎に角國家山川の形態より取れる名にして、其名稱も從て自然の風韻を帶び、多少の詩的趣味あることは、蓋し疑ふべからず。

▲豐葦原中津國

是亦神代に於ける高天原時代の稱にして、そは日本は四方海にて、其頃の海邊には、葦原繁き生茂れるが中に、國處はありて、高天原より之を見下せば、恰も葦原のめぐれる中に國見えけるが故に、斯くは名けられけるとぞ、續後紀仁明帝の四十の御賀に、興福寺より獻れる長歌中、日本乃、野馬臺能國遠、賀美侶伎能、宿那毘古那賀、葦菅遠、殖生志川々、國固米、造介牟興理云々とある如く、大穴牟遲少名毘古那二柱の御神が、國造堅めむため、葦を植生し廻らせるといふにても知らるべく、是亦美的名稱たるに背かず、豐とは蓋し褒めたゝへる詞、豐阪のぼる初日影の類なり。

▲水穗國

水穗又瑞穗とも書けり、蓋し豐葦原之水穗國と云へ

るが當れるならめ、豐は賞へたる詞、則ち美稱にして、葦原は前章既に述ぶるが如し、本居翁は、水穗を瑞穗と書くは、瑞祥などいへる意より思ひたがへたるべけれど、之れ大なる誤なりと正せり、如何のものにや、瑞穗水穗何れに首肯すべきかは、猶考察を要すべきことなり、蓋し日本の地味、當時よりして水田に富み、最も稻の豐穰に適せり、されば瓊々杵尊に下し至へる天照大神の御詔にも、豐葦原瑞穗國はこれ我が子孫の永く臨御すべきの地なり、寶祚の昌なる將に天地と窮極なかるべしと、宣ひたるにても知らるべく、啻に稻のみに非ず、其他水陸の植物、何れも好く美しく繁茂して、夙に其山水美に富みたるの一事は、猶詳細の説明を俟つに及ばず、之を以ても其一斑を窺ひ知るに足るべし。

按ずるに水は充つにて、則ち縹渺たるの意、水穗とは五穀の豐稔を意味するものにして、此國の見渡す限り美しく茂りたるを云ふならん、又葦の花の水邊に繁りたるなども、當時之を穗といひたるには非らざるか、記して大方の是正を俟つ。

▲秋津洲

正確なる書には皆秋津島と書かれたり、古事記に大倭帶日子國押人命、坐二葛城室之秋津島宮一治二天下一也とあり、書紀にも二年冬十二月遷二都於室地一是謂二秋津島宮一とありて何れも孝安帝の都の名なりしが、後ち日本の大名となりしならむ、そは我國は蜻蛉の形に似たるといふより出でたるの名なれ共、其實大和葛上郡の名なりといへり、かの神武天皇の蜻蛉の臀呫せるが如しと詔へりしは、則ち此の郡にして、孝安帝の久しく敷坐りし京都の名なりしかば、大和をつゞけて秋津島倭といひたるならむ、夫れより遂に天下の大名ともなれるなり、併し神武天皇の國狀を御覽して、蜻蛉の臀呫せる如しとたまへるを、或は日本全體のことゝもし、或は大和一國の事とする説もあれど、未だ何れとも決し難し、扨てそは何れにしても蜻蛉の臀呫せるが如しとあるは青山のめぐれるさまを形容したるにて、是れ亦美的

名稱たるに相違なし、秋津島(秋津洲)は國訓阿岐豆志麻にて、之を阿岐豆須といふは誤れり。

▲敷島

國訓師木島といふ、古事記に天國押波流岐廣庭命者坐二師木島大宮一治二天下一也とあり、書紀にも都を倭國磯城郡磯城島に遷し玉ふとありて、是また大和一郡の名なるが如し、此時代には大和の地を撰みて皇居と定め、所謂日本全土の首府なりしかば、此一國の名は引いて全國の總稱となりしこと、蓋し秋津洲などの類ならんか。

▲大八島

これ神代の名にして、其頃日本を豐葦原中津國、又は大八島國などといへり、古事記に伊邪那岐命伊邪那美命、子淡路の穗の狹別島を生み次に伊豫の二名島を生み、次に隱岐の三子島を生み、次に筑紫島を生み、次に伊伎島を生み、次に津島を生み、次に佐度島を生み、次に大倭豐秋津島を生む、かれ此八島を先づ生みませるに因りて、大八島國といふと見えたり、書紀にも生みませる次第などは、傳へうたへて異なれ共、八つの數は何れも同じくて、是に因りて大八洲の國號は起れりとあり、島は國訓志摩にて一區域の周廻に限りある所をいふなり、例へばシール、シャル、セマル、セバシなど言ふと同一義なり、一説に八は數の限りなきを示すの義、八千八嶋八百萬神、八萬億土、嘘八百などいへる如く、日本は無數の嶋嶼より成立し、就中今より數千年以前の昔に於ては、日本の形態は個々に分立したる嶋國にして、必ずしも現今の如き有樣ならざりし事は、地質の變化に依りて想像せらるゝ事にて、又地文學上の證明する所なり、啻に桑田變じて碧海となるのみならず、碧海變じて陸地を形成せる事は、先頃伊豆小笠原島附近の海中に、鳥嶋沒して別に新しき一嶋を噴出したる、卑近の例に徴するも知らるべし、想ふに大八洲とは、那岐那美の二尊が、生みませる國の數に依て、名づけられたる名なるべけれども、是れまた日本の嶋國たるを、形容したるの名なりと思

はゞ、蓋し大差なかるべし。

▲細戈千足國

細戈は知の枕詞にして、細は戈を賞へたるの義、國訓にて久波斯と讀むべし、千足とは應神帝の御歌に、毛々知陀流、夜邇波母美由とある、知陀流と同一義なり、足はたる則ち滿つるにて、戈い足るといふ意味にも非らざるべけれど、明に日本は軍國たるを、意味したるものに非ざるか。

▲日本

本居翁の説に從へば、是れ比能母登といへる名を、此文字に現はしたるにはあらで、異國へ示さんが爲に、殊更に建てられたる號なりといへり、されば古事記には此號見えず、書紀の皇極天皇の御卷までに、夜麻登を日本と書かれたるは、後に此紀を撰ばれし時に、改められたるものにして、古代の文字には非ずとぞ、書紀孝德天皇の條に日本を御宇天皇とあり、これぞ新に日本といへる號を建て、高麗百濟の使に示されける始めなり、支那歴史に依て徵するに、隋の世までは我國を倭とのみ書けるを、其後唐の世に至りて始めて日本といへる文字を記載せり新唐書に日本古倭奴國也とあり、又咸亨元年遣レ使賀レ平ニ高麗一後稍習ニ夏音一惡ニ倭名一更號ニ日本一使者自言下國近ニ日所一レ出以爲上レ名これに依て之を見れば、日本とは古代の名に非ずして、外交の始めて開けたる時代に、殊更に異國に示す爲に、附けられたる名なることは明けし、按ずるに日本といふも、日出づる國といふも、蓋し同一義にして、即ち日の本といふ意義なるべし、本居翁の説に據れば日本とは萬の國を御照しまします、日の大御神のあれませる國といへる意、又は西の諸のみやつ國より、日の出づる方に當れる故の名か、など種々に考證せられたるが、何れも皆一理ありといふべし、日本を比能母登と訓ましめずして、爾富牟と字音にていへるは、特に異國に示さむ爲に設けられたるなれば、比能母登といへるも、意は同じ義なれ共、明に區別すべきことなり、萬葉集などに、日本を比能母

登と訓ましめたる例はあり、例へば日本之山跡國云云、是等は歌の調にて野馬臺といふべきを、五音にて殊更に比能茂止と訓ましめたるなり、以上は皆本居翁の説に基く、扨て予が此日本といへる號に就きて最も深く興味を感ずるは、其名の餘りに至高の表彰を意味することにて、恰も日輪が世界萬國を照臨するが如く、日本の國威が列國に冠絶するかを覺ふなり、されば斯かる自信の充ち滿ちてこそ、如何なる強大國と戰ふても皆捷つなれ、啻に戰に強きのみならず、軈ては又世界の大文明を擔ふて、全地球の上に雄飛するに、至るやも未だ知るべからず、殊に一國を代表する所の國旗が、日の丸とて一輪の太陽就中其最も光榮ある曙光を意味するに於ては、蓋し世界無比の表號ならんかと思はる。扨て此外に日本を夜麻登と訓ましめたる例あり、日本武尊、神日本磐余彦天皇の如し、序なれば參考の爲に記し置く。

▲比能母登

日本といへる文字を其儘、日の本と訓ましめたるものか、元來比能母登といふ號は、古書には見えず、續後紀に日本乃野馬臺國とあり、比能母登、日本皆同一義にして、如上述べたる諸説を綜合すれば、自ら了解する所あるべし。

▲倭と和

倭とは唐土より日本を指したるの名にして、則ち夜麻登といへるに當て嵌めたるなり、故に彼の國にて日本を呼ぶに、皆倭奴國といへり、一説に倭奴は唐音にて於能許、則ち磤馭盧嶋なりといへる説あり、又或る説には倭奴國といふは殷馭盧嶋、おのころ嶋は丈夫嶋なりとあれど、如何なるものにや信じ難しと、本居翁は説かれたり、又和といへるは、日本自ら名けたる後世の稱にして、倭の字は唐土より附けられたる名なれば、之を忌みて更に美しき和の字を撰びたるなり、蓋し倭も和も同一義にして、只文字の上に好惡の別あるのみにて別の他の意義あるに非ず、されば釋日本紀などにも、此國の人昔し彼國に

到る、唐人問て云く、汝が國の名稱如何にと、更に東方を指して和奴國にやと云へり、和奴は猶我と言むが如し、其れより後之を和奴國といふとありて、是れ信じ難き說なれ共、大方は倭と和と混同したるなるべし、和は邕ぐにて詩の大雅に雝々といへる註に、鳳凰鳴之和也とあり、則ち和順を意味することにて、日本人の性質柔順なりといふより出づと、倭の字の本義も、順なる貌とあるによりても明なり蓋し古くは倭の字を用ひたるもの、次第に詩的思想の發達に伴ひ、文字までも美的に叶ひたるものを好むの結果、遂に倭の字を改めて、和と交換したるにやあらむ、是一事を以ても、日本人が如何に美術思想に富み、如何に優雅心に豊なりしかを知るに足らむ。

▲各地に於ける大古の國名

古と今とは國名に非常の大差あり、序でなれば左に記し置かん、但し判明したるもの丶みを掲ぐ。

●愛媛國　（伊豫の事なり）
●飯依彥國　（讃岐をいふ）
●大食作媛國　（阿波の事なり）
●建依別國　（土佐のことなり）
●白日別國　（筑前筑後の總稱なり）
●豐日別國　（豐前豐後の總稱なり）
●速日別國　（肥前肥後の總稱なり）
●奇日根別國　（日向大隅なり）
●建日別國　（薩摩、ことなり）
●天一柱國　（壹岐のことなり）
●天狹手依國　（對馬のことなり）
●天押古呂別國　（隱岐をいふ）
●二兒嶋國　（佐渡のことをいふ）
●秋津根別國　（大和河内山城の總稱）
●草木根別國　（攝津和泉紀伊の總稱）
●淡海根別國　（近江美濃の總稱）
●伊勢津媛國　（伊勢志摩尾張の總稱）
●遠津海別國　（遠江甲斐三河駿河伊豆の總稱）
●武藏津海別國　（武藏相摸安房の總稱）

わかば會

わかば會研究部規定

○わかば會研究部は、本會々友と否とを問はず、斯道に熱心なる同好者を廣く歡迎す。●わかば會研究部は、斯道の先輩大家の賛助を辱うす。●わかば會研究部加入者は左の手續に依り、歌の添删を乞ふ事を得。（當分の內短歌に限る）**一**、毎月二回（第一第三水曜日）一回毎に、五題づゝを課し、第一水曜の課題は、其の月の十五日迄に第三水曜の課題、其の月の末日までに、本會へ到達する日積りを以て出詠せらるべし。**二**、本會へ到達したる詠草は、直ちに添删して課題と共に水曜日に附郵返草すべし、**三**、前項課題の方法によらずして添删を乞はるゝ時は。一ヶ月二十首以內とす、●わかば會研究部加入料は、一ヶ月金五拾錢とし、前月の第三水曜日迄に送付せらるべし。但し郵券代用は、一錢切手にて一割增の事●わかば會研究部加入者にして、前揭の規定外に、作歌の添删を乞はるゝ時は、二十首毎に一ヶ月の加入料に相當する添削料を加へて、寄稿せらるべし。わかば會研究部に加入せんとする方は、住所氏名生年月を詳記したる名簿に、一ヶ月分の加入料を添へて、本會へ申込まるべし。●わかば會研究部は東京市神田區山本町廿三番地わかば會內に置き單にわかば會の名を以て、書信の往復をなすべし

以上

わかば會々幹　塙　忠　雄

東京市神田區
山本町廿三番地
わかば會

新奇發明
増酒資料（さけふやすもと）

壹斗の清酒は即座に倍増し(即ち貳斗)となる大金儲的釀造化學作用の一大發明新法なり、(附錄)腐敗酒直し法、醬油參倍増法、味淋酒速造法、酢速造法、新酒を古酒に變ずる法・香竄葡萄酒速造法、燒酎倍增法、味噌速造法等以上の釀造家及び請賣營業者の大有益案內：：右今回披露の爲拾萬部限り**無代進呈**す酒造家及前記載の營業者にして望の方は郵券四錢相添申込次第直に傳習手續摘要錄を送呈す速に見よ營業上一日も缺くべからざる確實**大有益**の秘訣なり是ッ非早く利用せよ驚くべき大金儲あることを確證す(注意)本館の隆盛を羨み近時當館廣告に倣せて怪しき無効の僞法を傳ふる奸者顯はれたり有志者深く注意して爲傳者に欺かるゝこと勿れ：(當館は去廿壹年の創立也)

發明 **元祖** 東京市神田五軒町拾九番地 **日本授產館**

肉體
色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白化藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓特別製分壹圓五拾錢

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

月やくおろし

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用れば二三ヶ月間滯りたる月經にても忽ちキレ!に流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて峻烈顯著なるも毫も衞生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢(注意)本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効の類似僞藥顯る深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



わきが
(腋臭症)

根治確證 新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す郵券代用必ず二增割の事(電話下谷五四六番)

以上貳藥 **專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

●吉道路彦國（上總下總常陸の總稱）
●狹依信濃彦國（飛彈信濃の總稱）
●野道路彦國（上野下野の總稱）
●道路奥別國（磐城岩代陸前陸中陸奥羽前羽後の總稱なり）
●越根別國（越前越中越後加賀能登若狹の總稱なり）
●丹波別國（丹波丹後但馬の總稱）
●出雲別國（出雲石見因幡伯耆の總稱）
●穴門根別國（長門周防安藝の總稱）
●吉備津根別國（備前備中備後美作播磨の總稱）

▲日本古代の嶋名

●アハヂノホノサワケノシマ（淡路）
●オホヌデヒメノシマ（讃岐の小豆嶋）
●タケヒカタワケノシマ（備前の兒嶋）
●オホタマルワケノシマ（周防の大嶋）
●アメノヲシヲノシマ（陸前のチカノ嶋）
●アメノヒトツ子ノシマ（豐後の媛嶋）
●アメノフタヤノシマ（肥前の天草）
●フタナギシマ（琉球）

若き未亡人

新山春子

丁度先月の一日のことでした。この日はお天氣も宜かつたが、その代り風が無上に吹いて、市中は黄塵萬丈と云つたやうに、赤く砂や烟が立つて居ました。私は、今日は久々で、木村妙子さんのお家へ伺ひ致しませうと思つて居ましたが、何分、この風この砂、とても〳〵堪つたものでないと思ひましたから、まづ〳〵是も止めにしまして、獨り書齋に閉ぢ籠り、源氏の湖月抄を披いて見はじめましたけれども、それも、あんまり氣が乘りませんので、徐に面を擡げて、障子の格子に鳥渡挾んで置いた奇麗な百合花の繪葉書を見詰めました。

すると、障子の日蔭に、庭の楓の若葉の影がそよ

吹く風にゆら〳〵と動くと見る間に、雀が二三羽、軒を離れて、田圃の方へ飛び去つたが、其影がちらちらとばかりに映つたのでした。

鳥影！　鳥影！　と私は思はず、斯う口の內に繰り返しまして、直に例の諺の夫の如くに、誰か來やすまいかと思ひましたの。丁度、私の行かうと思つてゐる妙子さんが被居るのでないかしら、それとも町田の栁子さんかしら、……いや〳〵、そんなにお誂通りに物はゆくものでない、けれども、何となく誰かゞ被入るやうな氣がする、誰樣でも宜い被入れば宜い、こんなに家外が砂ッ埃で、可厭な日には書齋で、お茶でも入れて、いろ〳〵とお話でも爲たいものだと、まあ、こんなことを考へつゝ、そこにあつた女鑑などを拾ひ讀みにして居ましたの。

すると、そこへ、下女のお竹が來まして、

『お孃さん、私是から、ちよつと池の端までお使に參りますから、どうか、お賴申します』

と、云ふのです。

『え、池の端！　どこへ？』

『へえ、たぢからやまで參ります。』

『はあ、仲町かたぢからやへ何を買ひに行くの？』

『はい、この間、奥樣が櫛をお誂になりましたが、それを取りに參ります。』

『さう、では、行つてお出！　留守は私が引き受けるからね……。』

『はい、どうか。』

と、お竹は輕く挨拶して、尙も立ち際に、

『奥樣も、もう、直にお歸でございませうよ。……お孃樣、別に御用もございませんか、なんならば例の桔梗屋で、お菓子でも……オホ……』

『さうさね、又、妙子さんでも被入つても、何もないから、あの、例の明月といふ煎餅に松葉など取り交せて、何日ほど買つて來てお吳れな。』

と、私は云ひますると、お竹はそこ〳〵に出掛けて行きました。

やがて、人力車の馳けて來る音がいたしますると

思ふと、人力車は丁度私の家の表門の前で停つた樣子です、さてこそ、妙子さんと思つて、私は直に立ち上つて、玄關の方へ出て見ましたの。すると、木戸の外に、車夫と何やら話してゐる聲は正しく女！



私は、玄關に停立んで、獨りニッコリとして女のお客――妙子さん――をお待ち受け致してゐる瞬間に、鳥影すれば人が來るといふ諺の諷なきことを思ひ出して、爭はれないものと思つたのでした。

待ちに待つてゐる妙子さん、まあ、何を愚圖〱して被居るのかしら、早く玄關まで被居れば宜いと私は、もう自烈たくなつたのでした。

、、ぽくり〱と下駄の音がだん〱近寄つて來ましたので、私は正に妙子さんと思つて、一つ洒落て見やうかと思ひまして、玄關の障子の蔭で、疊へ兩手を小笠原式について如何にも恭々しげに待ち構へてゐましたの。

『御免あそばせ。』

と、優しく云はれまするから、さて、いつもの妙子さんとは、何だか少し違ふと思ひまして、ハイと答へて障子を開けますると、それは妙子さんでもなけれ

ば、又柳子さんでもなく、年頃は三十路に近い、細面の、色白な、二重瞼の涼しげに眼付の、何處か、柳眉のあたりに聊か憂の雲を含んでゐる、そして、綠の黒髮を惜しげもなく切垂にして、氣品賤しからぬ婦人のお客樣でした。私は全く心當が外れましたので、直ぐ胸の中で「オヤ〳〵」といふやうになつて、聊か呆氣に取られたやうでしたが、故意と取りすました顏付で、今度は、冗戲でない、心から謙やかに頭を疊へ下げまして、

『被入いまし。』

と、初めて一禮し、尋て『誰樣で被入います』と云はうとすると、彼方はさも〳〵可笑げに滿面に微笑を浮べられまして、

『春子さん、まあ、そんなに固ッ苦しい御挨拶なんかは、お止しなすつて下さいまし。』

と、紅桃色の絹ハンカチをお顏へ當てられました。

私は驚きました。私は少なからず驚きました。私が全く知らぬ方から、てつきり私の名を呼ばれるのですもの。

私は、驚いて、ちよつと口を利き兼ねて、彼方のお顏を見ますると、彼方は益々打笑はれて、

『お覺えがございませんで。』

と、云はれますので、私は、いよ〳〵困つて了ひまして、

『はあ』

と、云つた限りでしたが、覺えがないかと云はれて見れば、私の全く知らぬ方と云ふのは、私の誤りで全く見忘れた方なのです。いよ〳〵私は驚きまして深き疑問の淵に沈んだのでした。

『お忘れなすつて。』

と、重ねて、お尋ねになります。

『はあ、つい、お見忘れ申しました失禮ですか、誰樣で被入います。』

と、漸く思ひ切つて云ひまするど、

彼方は、又も打笑はれて、

『春子さん、お覺のないのも無理はございません、

あなたのお幼い時に、お別れ申したのですから、……私は池田です……。』

と、云はれますので、私は思はず言を遮りまして

『はあ、お絹さんで被入いますか、貴女は？、それは〳〵實に失禮を申し上げました。どうして、まあ……よッぽどお久しいことですね、さあ、まあどうか、こちらへお上んなすつて下さいまし、さあどうぞ……。』

と、私は今は急躁しげに、座敷の方を鳥度見に行き更に此珍客をお迎へに出ますると、池田さんは車夫の持つてゐるお菓子の折のやうな包物を受取られて直ぐ、私に蹤いて八疊の客間へお通りになりました

私は座蒲團を薦めながら、更めて、まづ、

『被入いまし、まあ、お久しいことでございました私はさつぱりおみそれ申して……』

と、初めますると彼方も亦、花瓣のやうな唇開かれて、

『はい、彼是、既う九年にもなりますから、貴女のお覺のないのも無理はございません、……私も、往來やなんかでお遇ひ申しては、それは貴嬢が誰樣か、薩張り分りませんけれど、まあ、此家に被居るから、貴女だといふことが分るやうなものです、オホヽヽ、ですか春子さん、貴女の御寫眞をね、さうですね一昨年の春でしたつけ、彼の吉村のお芳さんの所で拜見いたしましたので、見覺がありましたので、直に貴女だといふことが分りました、それに、幾分かお幼い時の俤が何處となく、ちやんと殘つて居ますからね……。』

と、少しの停滯もなくすら〳〵と云はれました。

私は、この思がけない、久しい〳〵以前の、自分の姉のやうにして、姉樣〳〵と云つて、敬つても居て、又、少しは、あまえて居つたお絹さんと、今、眼の前、相對しては、何から、何うお話して好いやら、薩張り理由が分らなくなつて了ひました。それに、お母樣でも家に被居れば、談話の續ぎ穗も甘くつながるのでせうが、いやはや、妙子さんや柳子さ

んと、お饒舌するやうに、何とはなしに行きませんでした。

お茶を一つ入れてと思つても、お竹は居ませんし、眞盆からお茶から、皆、私が一人で爲なければならぬのでした。

けれども、私の胸に、大方は夫と察しましたけれど、不思議で不思議で堪らないことが、一つ浮んで居りまして、その不思議な塊がちよつと解けませんでした。――それは、即ち、お絹さんが、可惜、緑の黑髮を切垂にしてゐる夫でした。

私は今はこのお絹さんの頭髮のことが、氣になつて氣になつて、それのみに兎や角と空想を走らしてお茶は差し出しましたが、聊か茫乎としたのでした若き人の切垂、それは、大方、既う未亡人なのであらう、お絹さんの御主人は軍人ではなかつた筈、正しく文學士であつた筈だつたが、さて其懷しき良人は、夭折せられて、天命を全ふせられず、空しく今は白玉樓上の人となられたのでございませう、

噫！お絹さんのお心中、實に察するに餘あることです、是を思ふと、私の眼の縁が何となく、次第々々に重ッ苦しくなつて、ほろりとして來ましたの。

私が、この珍客を前に於て、いろ〳〵と深き想に沈んで居ますると、彼方は私の樣子の冴えぬのを既くも看破られまして、

『春子さん、貴女は何處かお加減でも惡いんですか。』

と、平氣に問はれまするので、私は莞爾と微笑を作りまして、

『何そんなことはございませんが、なんだか、あんまりお久しいことで、貴孃とお會ひ申しましたので、少し耻しいやうな、嬉しいやうな氣が致しまして、それで、それからそれへと、種々と幼い時のことなんかを考へて居ましたの……。』

と、まづ、斯う答へました。

そして、お互に二言三言押問答しますると、やがて、彼方は思ひ出したやうに、

『……春子さん、私は實はね、今度の招魂祭に出て來ましたのです。別に更めてお知らせは致しませんでしたが、實は良人が、旅順で戰死しましたから……。』

と、云はれましたので、大方は察してゐました私にも拘らず、今更ならず驚きまして、思はずも、その語を遮り、

『えッ、戰死なすつて？』

と、斯くは叫んだのです。そして、私は俄に眉を顰めましたらうが、私の兩の眼は忽ち潮のさして來るやうに涙が湧いて來ました。

『はい、戰死したものですからね、今度のお祭に出て來たのでございます。……今度は大層なお祭でございますさうですね。』

と、軍人の妻として豫て期して居られたと見えて、如何にも平然と、斯う云はれました。

私は、まさか、お絹さんの御主人は軍人でないと云ふことを豫々耳に挾んで居りましたから、

『だつて、お絹さん、貴女御主人は軍人でなかつたでせう。學士で被入つたでせう。』

と、一問を發しますると、

『はい、文學士で、藤井清と申しまして、名古屋の幼年學校の先生でございましたが、一年志願で、豫備の中尉になつて居ましたから、今度の戰爭に呼び出されたのでございます。……ハイ、旅順で、もう、一番最初に戰死したのでございます。』

これで、すつかり私の不思議に思つて居たことが明かに了解されたのでございます。このお絹さんと、私とは、舊、金澤に居りました時、家が丁度、向合つて居て、私の極々幼い時からのお友達なのでございます。それに、私の父とお絹さんの御親父様とは又至つて、別懇な間柄なのでございましたそして、今から、指折り數へれば九年前に、お絹さんのお家は、御親父樣のお勤向に依て一家を擧げて名古屋の方へ行かれたのでした、それからは、だんだん疎遠になりまして、一年に一度の年始狀を交換

する位になつてゐましたのです。そして、いろ〳〵の、まあ、風の便とか云つたやうな風で、お互に家の樣子は薄々ながら知りあつて居たといふ仕末なのです。それで、今度は、此若き未亡人のお絹さんは、まだ幼い、今年三歲の一人の男の子を、母樣のお手にお任しなすつて、わざ〳〵御良人樣の英靈を迎ふ爲にお出掛なすつたと云ふことで厶いました。

私は、なほも語を續けまして、

『まあ、こんな大戰爭の際に、男子として、身を軍籍に於きまして、國の爲め、陛下の爲に御戰死なさるのはそれは御名譽なことでございますけれどなんですね、嘸々御愁傷なことで厶いませう。』

『いえ、良人が一年志願で出ました時から、もうその覺悟は致して居りましたから、さ程にも弱りませんでした、まあ、何と申しましても仕方がないことです。鐵砲丸は、宮樣でも、大將でも誰でも厭なく中るんですから堪りません、そして、此戰爭も仲々長引くやうですが、今まで無事で居ましても、又、是から何うなるかも知れません……人と云ふものは、慾なものでして、戰爭に行けば死ぬるものと覺悟して居ましても、今度は何うか今度は何うかと、戰爭のある度每に、心配しますが、これが人情の一つでございませう。今まで良人がやられませんなら、又、これから先を幾分か又心配しまするけれども、もう早くやられて了ひましたからそれで、私も既うこれからは心配することが無くなりました。まあ、早く討死しましただけ、それだけ、私共の心配する期間を縮めましたやうなものです。まあ、靖國神社へでも神樣になつて祀られれば、此上は、それで、結構でございます。それに、陛下も御參詣あそばされるさうですが、實に、はや、勿體ないことで、三萬人の亡靈は嘸や、地下に熱い淚を溢しませうよ。……兎に角、今度は、滅多にない大祭でございますから、私は思ひ切つて、武雄(三歲の男子)を母に預けまして出て參りましたのです……。』

と、お絹さんは、相變らず、例のすら〳〵とした語調で、斯う云はれました。

やがて、そこへ、私の母も、お竹も歸つて來ましたが、母も此お絹さんの被入つたのには、太く打ち驚きまして、いろ〳〵お互に物語なされました。

私は、直にお竹の買つて來たお菓子を取り敢えずお絹さんへ出しまして、そして、又、母の命令に從つて、お竹を使ひ、いろ〳〵と此珍客を饗應すやうに盡力しました。

そして、お絹さんは、本郷のお宿に被入ると聞きましたので、母と相談いたしまして、早速そのお荷物を取り寄せ、お祭の間、右に左、私の所へ來て被居ることに仕たのでございました。

そして、その夜は父も早く歸りましたので、お絹さんを三人で圍んで、いろ〳〵と、昔のお話に夜を更しました。

私は幼い時、今の妹の靜子は居ませんし、又、姉もございません、唯の一人法師でございましたから、このお絹さんを宛然姉のやうに思つて居りまして、いろ〳〵とあまえてお強請したこともありましたが、お絹さんも又、私を大層可愛がつて下さつて、私の云ふことは、何でも大概のことはなすつて下さつたのでした。ですから、私の幼い時、他人が、貴女は誰樣が一番好きな方ですとか、誰樣の可愛がり子だとか、と尋ねられますると、私は何時でも、廻らぬ口で、お絹さんなのよ、と云つた位でした。今でも、そのことは腦髓に染み込んで居ると見えまして、ちゃんと覺えて居ります。

久しいことで、この懷しい、慕しいお絹さんが、私の所へ來られまして、共に一つ部屋に休み、朝も一緒に起き、三度の食事も入浴も皆一緒に致しまするので、何となく、嬉しさ、喜ばしさが募つて來まして、いろ〳〵追懷の情に得堪えられぬでございました。そして、私は斯樣に樂しいことは、從來、曾て覺えませんでした。そして、又、此後も斯る樂しいことは恐らく無からうと思ひました。

そこで三日には早朝からおきまして、御一緒に靖國神社へ參詣し、軍人の遺族に配與さるゝ櫻の花の徽章を二つと、その外に濱離宮、赤坂離宮、新宿御苑なんどの拜觀劵や、博物館、動物園、植物園、酒井家の植物園、美術研精會、パノラマ、花やしき、東京座なんどの縱覽劵や割引劵を幾枚となく、二日や三日で見切れぬ位多く拜受して來ました。

そして、まづ、翌る四日には濱離宮と赤坂離宮とを拜觀して、疲れて歸りました。

で、お絹さんは、早く歸らねばならぬと云はれるのですが、私と母とは、折角御出でになつたものをと、云つて、無利に引き留めまして、お絹さんの豫定よりも三日多く滯在せられ、十日の夕方、六時の汽車で新橋を發たれ、又も海山遠き人となつたのでございました。

人間の離合集散程、分らぬものはありません。來やうと思つてた妙子さんは來ずに、思ひも寄らぬお絹さんに十年振に尋ねられたのは、寔に不思議でムいます。

（をはり）

三越呉服店（つゞき）

すみれ女史

▲休憩室　三越呉服店に參りまして第一に目につきますのは、休憩室で御座います、素より有數な呉服店の事でありますから、華かで美しい事は申までも無いので御座いますが、その美しいとか、奇麗とか云ふ事よりも、飾つてあります物品がよく氣をつけて見ますると、何れも一種の意匠を有つて居りますのと、其製造品を單に見本の陳列と見へぬ樣に、一種の裝飾品と見ゆる樣に活かして、使つてありますことで、若し之を一つ〳〵に分けて見ますれば、何も貴重品や、骨董品ではなくて普通の製作品で矢張り賣物が多いのでありますが、夫れが一寸さうは見へぬので、眞に裝飾の爲めに持つて參いりましたかの如くに見へて、決して商品見本とは思はれぬのです、皆樣も御承知の通り、休憩室は同店の規摸としては餘り廣い方では御座いませんが、兎も角

も西洋風の應接所めいた室で、純子張のソファーや椅子が麗しい卓被を掛けたテーブルを圍んで、卓上には同店で發行する時好と云ふ雜誌や織物の見本が奇麗に飾られて、一方の壁の前には大姿見其前に置時計などが安置されてあります、又隅の方を見ますると、織物に織出したる東郷大將の肖像の温乎たる唇頭に笑を含んで、何か仰せらるゝかと思ふ程に能く出來て居りますのが懸けてありまして、其前に職業學校の製作品なる花束や、細工もの、手遊物を丁度雛段でも飾つた樣に面白く排列してあります、之等はどう見ても一種のハイカラ式雛飾りと申してもよいのです、之に向つて楣上に懸けられたのが、竪凡そ六尺、巾三尺もあろふかと思はるゝ目の醒むるやうな、元祿美人の名畫です、一寸見れば、筆で書いた樣でありますが、仔細に見ますれば、一種の押畫で、其精巧な事は、とても從來の押繪とは比較にはならぬので、どう云ふ物であるかと申ことを尋ねましたらば剪裁と申もので、其衣類の皺一つも一々

絹や縮緬を剪裁して調製するので、一寸した花の一枝をつくるにも、五日や六日は要ると申ことで、此精巧な大作は、何程の日數と勞力とを要したやら、實に想像以上で御座います、そして此製作は三井高信氏の手ずさみであると申ことを聞きましては、更に驚かざるを得ません、夫につひて思ひ出しますのは、同氏が先年、鴛鴦に燕子花とかの剪裁を作られて、其陳列會へ出品されましたのが、賢きあたりの御用になつたと云ふ事を承はつて居りますが、實物を見ましたのは、之が始めてゞ御座います、併大抵の觀覽者は、唯單に普通の繪畫とのみ思ふて、唯美しい繪だこと位の目を以て、見過しますは如何にも惜しい事でありますから、どうか剪裁の製法や、事譯を詳しく記して說明して、此美術上の大作を世に紹介されたく思ひます、此美人の下に配置されましたのは、色も床しき藤花の大盆栽、之も一種の造花で、其巧なる事は實物と少しも變らぬので、丁度記者と並んで、觀覽せる一紳士が美事な花だと云つて

見とれて居られました、これによりても、いかに其製品の巧緻なるかを想像することが出來ます、之は矢張職業學校の製作品かと思ひます、此の元祿美人と藤の盆栽との配合も、美しく面白く、御座いました。

▲意匠室　には元祿時代の衣服の染模樣や、當今流行の裾模樣などの見本が、回轉架上に狹まれて、一見して當時の意匠趣向を知るを得べく飾られて、其前の硝子棚の中には、光琳光悦などの手になれる蒔繪書棚料紙文庫等が陳列されてありましたが、何れも諸家の秘藏品で、殊に目に立ちましたのは、馬越氏の出品にかゝる銃器類で、好趣家の垂涎を禁じ得ぬ逸品と申ばかりでなく、此室に入る物をして慥に一般の趣好を元祿式に引きつける價値がある樣に思はれます、殊に婦人達の目を引きますのは、元祿模樣の半襟で、其向ふ側には、兼て團十郎の着用せしと云ふ靜御前の水干衣加藤清正を扮したる時の段通織の垂衣、別に美はしいと云ふでもなけれど、團十郎が着用したと云ふ爲か、毎時も其前に人足を止めさする樣で御座います、此他元祿時代の熨斗、絞等は慥に意匠家の一顧の價値のある樣に思はれます。

▲參考室　には三井男爵家の出品による緋綸子鶴の丸地紋引板染裲襠四季草花縫振袖、地黒本紋綸子吹雪引板梅竹縫裲襠、淺黄引板裲襠八掛白糀模樣雪中山水、白紋綸子縫翠簾梅振袖裲襠、緋引板帶附地黒波引板柴舟縫裲襠、花色綸子縫振袖裲襠等配列されて中央の硝子棚の中には矢張諸家の秘藏の料紙硯箱印籠等がよく配置されてありました、其他松に蔦模樣絽衣裳、柳模樣熨斗目袱に水の元祿衣裳、友染古衣裳、又香筥提重元臺手箱等貴重の品々を取集められて御座りました。

▲新柄陳列會　三越呉服店にては、春秋二期に新柄を陳列して、珍らしき織物や、染物を排列して觀覽をさせますが、同時に見切りの反物や、寄切を賣出しますので、非常な混雜を致します、記者も一寸參

りましたが、如何にも混雜を極めて居りました、入口の石造りの門は、今度態々米國から取寄せました紙の張子だと申すことで、新發明の物だそうで御座います、入口には西洋人の日本服を付けましたのや又其の元に毎時よりも多く職業學校の製作なる束髪に狭む花束など目新らしいものが、數限りもなく陳列されてあります。



肩掛、帶留、絹糸編物、羽織紐、等なか〳〵目新しいのがありました、此賣場にはふだん着ちよく〳〵着などが多いせいか、餘計に客足を止める樣であります、珍柄會は櫻花爛熳の期に應じ、二階の陳列場は櫻花の造り花もて美はしく飾られ、其下には美はしい友禪染や何かが、陳列してあるのですから、實に其美はしい事は筆紙に盡す事は出來ません。

▲友禪染　三越呉服店に參りまして目に着ましたのは元祿十種の友禪染で其雅致あつて美麗なる事は、百花爛熳たる花園に逍遙するやうで、古い模樣から其式をとられた者か、夫とも當時の模樣を基礎として考案されたものが、若し之が同店の新意匠になれるものと致しますれば、慥に意匠上の一大進歩と申てよろしからふと思ひます、殊に美はしき友禪染は早稻田の香とか申ます友禪染で、之は大隈伯の庭園の蘭の花を種々に染め出したるもの

なそうで、幾百種の蘭の花いかにも香り床かしく、眞に香はんばかりです、英國では此友禪染が貴婦人社會にもてはやされて、大に珍重されて居るとの事です。

一般の趣好を申せば時極の影響からか、趣味が昨年とは悉かり變つて居る樣に思はれます、則ち凡ての模樣ものに戰爭の趣味や武張た意匠の多い樣に見受けます、同じ友禪染でも、柄の細かい地味なものより、分明とした柄模樣が多い樣です、一寸したモスリンでも、軍艦軍旗などの模樣を多く見受けます

▲帶類　之は又一層婦人の目を引く處でつゝれ錦について厚板繻紗類皆よき柄が陳列してありまして、中でも一寸目につきましたのは、紫がゝりたる色の元祿模樣を織り出したるもの、薄茶地の海上の鶴などは實に高尙であります、又目先の變りたるものは縞天鵞絨にて、毛切ずのはな天にて縞模樣を出したもので、金花山織と云ふ札が付て居ました、之は極めて珍らしい製品かと思はれます、殊に高尙なるは臙脂、利久、錆鐵等にて古代の名物切を相良縫に致したる縞瀨地の帶地であります、夏帶として白縞瀨に古代の蒔繪模樣を銀糸にて縫ひ出したる波に千鳥の片側物なか〳〵品よく見受けました、概して一般の時好を見渡しました處では、女物には先づ元祿趣味の傾があるべく、男物に至つても一種の明治式とでも申しやうか、春着ならば對下着の二枚小袖、物質は紋御召の斜綾織とか、角通微塵類が多く流行する樣です、少し下つた處で、綾糸縞市樂等にて、縞柄は男女共凡て萬筋とか、大名縞とか云ふ樣に、縞目の判然せざる橫縞であるか、竪縞であるか、わからぬ樣なのが流行する樣であります、男帶は尤も多く供色紋博多の晝夜なきもので、色合の鐵茶などの稍々靑味を帶びたものが多いやうであります、目立ちて少なくなりましたのは紺上博多で御座います男縞羽織では、淸綾織、東花織、京花織などは極く流行する樣です、夫から新製にかゝるものは錦綾織丸帶、富强織、朝日紬、東鄕紬、凱旋紬、東緞子、東

郷花半衿、熨斗目格子半衿等であるそうです、以上の時好を昨年の今頃に陳列されたものと對照して見ましたならば、たしかに確然たる變化の跡が見られませう。

美術製作品は一番奥の小高い處に排列されてあります、綴錦や、天鵞絨、緞子製の扁額、屛風、窓掛、卓被、衝立、敷物類の中で目に付きましたのは、龍田川の刺繍の扁額にて、いかにも精巧に出來て居りました、又天鵞絨の扁額にて富士山の景色がありました、實に實景かと思ふばかりに見へました、其他婦人洋服地また附屬品等種々珍らしき品が、澤山排列してあります。(をはり)

女學生と新聞紙

早和田學士

▲女學生と、新聞紙とは、宿世如何なる關係があるかは知りませぬが、兎角女學生の事とさへいへば其の一擧一動が、みな新聞の種となるのは不思議ではムいませんか。

▲近ごろは又一層甚だしくなつて、日々の新聞に、女學生の噂や、女學生に關する事が、凡そ二つ三つ位出ない事は決して無い。

▲海老茶がだうしたの、式部がだうだとか、女ハイカラが何といつたとか、女學生のことを誇張し棒大にして書かない新聞は、紙面が何となく寂しい様な心持がする樣になりました。

▲五六年前までは、花柳界の消息を載せて、それで紙上に花を飾つて、讀者を釣つて居た新聞も、今では花柳界のことを廢して、盛んに女學界の種を搜して、紙上に掲げるのを商賣上の秘訣とするやうになつた、藝妓の艶種を一欄以上も面白く埋めるよりも五行が十行でも、女學生の噂話を記いた方が、讀者の受けがよい相です。

▲新聞の小説でも、女學生のことを描いたものでなくては、一般の好評は決して得難いのである。

▲海老茶の袴を着けなくては、當世流の女子として決して世間に通用せぬといふところから、目敏い新聞記者などは、女學生でないものにも、海老茶の袴をきせて女學生にして了うのです。

▲そこで猫も杓子も女學生風でなければ、先づ當世に賣れが惡いことになつた。

▲讀賣新聞は良家の女の寫眞を出して、御鄭寧に効能書までも加へたことがある。大阪でも毎日新聞が其の擬似をして、孃やん連の美人を撰拔いて、揭げたことがある。

▲かく多くの新聞が、女學生のことを盛んに載するのはマア好いとして、さて其の載せ方は、甚だよろしくない。

▲海老茶といひ、式部といふ詞から、已に嘲弄的意味を含むで居るが、毎日の新聞に出て居る批評は、戯言交りの惡口でなくば、冷かし半分の滑稽談で持ちきつて居るではありませんか。

▲電車の中で、横平な顔をしたといふては、直ぐに翌日の新聞で攻擊される、お喋りをしたといつては忽ち散々に批評される、自轉車で銀座の通りでも乘廻るが最後、決して其まゝには置かれませぬ。

▲少しく身嗜みに念を入れて、氣のきいた風でもすれば、お轉婆よ、ハイカラよといはれる、さらばといつて、木綿もので、眞面目らしくして居れば、女らしくないといふ。

▲全體だうすれば、よいのであるか、女學生たるもまた甚だ難い哉である。思へば眞に氣の毒に堪へません。

▲いくら學問をする身であるといつても、年頃の女である。美しい衣服もきたい、お化粧もする、三人集れは、姦ましいといふ符牒のついた女の身であるから、況して五人十人と同行のあるときには、隨分入釜しい程お喋りもしやうし、又た時としては横平な顔をするものもあらう。それを一々咎め立てをされては、だうすることも出來ない譯です。

▲何故に新聞では、さうやかましくいふのであるか

何故また世間はやかましくいふのを、歡迎するのであるか。

▲新聞の程度が低いからであるか、讀者の眼が低いのであるか。

▲新聞の品格が高ければ、高が一少女の一顰一笑までも翹々しくいふ程のとはあるまい、又た讀者の眼がマ少し肥へて居たなら、ソンな新聞記事を歡ぶ筈はありますまい。

▲然らば其罪は新聞紙と、世間とにありといふて宜かろうと思はるゝが、こゝに大體から觀察して、別に理由があるのである。

▲新聞紙も世間も、みな此の理由に支配されて、動いて居るのです。

▲妙齡の女子が、世間から注目されるのは、昔も今も、恐らく後世も、唐でも、天笠でも、西洋でも、日本でも同じことである。

▲妙齡の娘は花です。

▲花の咲いた時には、乞食でも風流心を生して、浮かれ出す。

▲賤が伏屋の簷に咲いた、たゞ一本の花でも、思の種となり、歌の種となつて、多くの風流才子を惱殺する。

▲況て百花爛熳、黄白紫紅、思ひ〳〵に咲き出る風情は、どうして世間を騷がせずに置くものか。

▲汽車の中に、一人の美人が居ると、すべての乘客の視線はみな之に向つて注がるゝ。

▲女學生といふ幾萬の女團體は、花づくしの歌のやうに、梅や、櫻や、桃や、海棠や、牡丹や、水仙や芍藥や、桔梗や、菊や、乃至は胡瓜や茄子の花までも、あるとあらゆる花が集つて、組織して居るのであります。

▲無言無情の花ですら、人目を牽くのであるのに、これは又解語有情どころでなく、字も奇麗にかく、書物もよく讀む、菫よ、星よの歌も作るのであつて春といはず、秋といはず、何時でも咲いて居るのであるから、一層の注目を値する。

▲汽車の中の美人の勢力範圍は、その汽車だけであるが、これは世間至る處、公園でも、街中でも、電車にでも、ゾロ〳〵して居るから、一般の目を牽くのは當然ではありませんか。

▲花の衣裳を着て、花の姿をして、花の歩みを運ばすのを見ては、何とか批評したいのが、人情である

▲此の人情の弱點を押へて、ヤンヤと囃し立つるのが、新聞の商買主義である。

▲それに浮かされるのが、世間凡俗の常である。

▲氣の毒なのは、女學生です。

▲しかし此の現象は、一方より見るときは、世間が確に女生の勢力を認識した結果に外ならぬ。

▲お轉婆の、ハイカラのと、嘲弄さるゝ半面には、確かに勢力が認められて居る、若し無勢力なものならば、嘲弄する程の價値はない。

▲新聞で彼れ是れいふのは、畢竟女學生といふ一團體の有力なことを認識して居るからなのだ。

▲此間の何新聞かでは『女學生でなければ、夜が明けぬ』とかいつてあつた、又或る新聞では、度々『女學生萬歲』などの文字をよく用ゐて居る、善にまれ惡にまれ、どちらにしても女學生の勢力といふものは、次第に豪くなつたと思ひます。

▲此勢で進んで行く中には、追々眞面目な批評が起ることになる、世間もまた其れに耳を傾くるやうになるのです。

▲其時になれば、女子教育は愈々盛んになつて、眞に『女學生萬歲』を三唱することになる。

▲何でも世の一大勢力となる前には、嘲笑や、迫害の時代がある、嘲笑が甚だしければ、甚だしいほど將來に望みがある、迫害が大いなれば、大いなるほど未來には盛んな實を結ぶのである、此の時代を經過して後に、初めて眞相が世にあらはれる、眞相があらはれてから、世間は始めて其の眞價を認めて、敬虔尊崇の念を生ずる。

▲輕侮や、嘲笑といふものは、受ける當人の身に取りて、勿論不愉快ではあるが、畢竟は社會が『われ』

を認めたから起ることで、輕侮の裏は、尊崇である嘲笑一たびその局面を變ずれば、忽ち敬虔となるのである。

▲『兎角今の女學生の評判は面白くないといはるゝ時代を早く通越して『女學生でなければならぬ』といふ時代にしたいものです。

▲濠洲のクインスランドでは、一般女子に選擧權は元より被選權をも與へる議決をした。女子が政治に關係する利害は別問題であるが、人として、男子と同等に認められたこと丈は悦ぶべしである。

▲此のクインスランドの女子でも、一度は今のわが國の女學生のやうに、新聞や世間から何のかのと、惡評された時代があつたのです。

▲新聞でいろ〳〵と言はれるのは、氣にかけるには足りませぬが、併し成らうとなら賞めらるる分の、惡くいはれぬ方が餘程よろしい、それには品格ある眞成の女學生風を養成することを勉めねばならぬと思ひます。

米國通信

うまのかみ

馬の頭は今歐羅巴へ參る途中であります、米國からの通信は、多分これで終りだらうと思ひます。更めて歐洲の狀況を早く申上げたいと思ひます。

アリス、ルーズベルト孃

Miss Alise Roosevelt と申しますは米國現大統領ルーズベルト氏の愛孃であります。眞僞の程は存じませぬが、歐洲某國の皇族から結婚を申込まれましたとか決定しましたとか噂とりどりです。父君に英邁な氣質を受け傳へまして、擧止すべて快活、常に手荒な戲遊を好まれ、日本の柔術などまで稽古して御出になる位です。三月二十五日に

陸軍省の公示

する所を見まするに、軍務大臣タフト氏は、此度非律賓島視察として、出張します。其同行者は前軍務大

臣ルート氏、其他各州選出の上下兩院議員等數十人です。尚ほ其他にアリス、ルーズベルト孃以下

十數人の貴婦人

が自費を以て其一行に加はり遠征の途に上らんとするのです。一行のワシントン府出發は六月下旬で桑港に着して一週間滯在の後七月一日出帆のマンチユリヤ號に乘つて出かけまして、ハワイに立寄り、横濱に立寄り、神戸、長崎、香港と通過して非律賓に着きます、そして歸路にはコレア號に乘つて、十月一日に桑港に歸着する豫定であります。ワシントン府からの報知によれば、ルーズベルト孃が横濱へ着かれまする節は、我が

陛下の御名代

が横濱まで下られて御迎へ申しますと云ふ事です、尚ほ神戸、長崎にも歡迎會の催がある筈と申します清國の

西大后陛下

より、アリス、ルーズベルト孃が北京まで訪問せられますやうに、申込みになりましたけれども、孃はおことわりになりましたと申します、近頃米國の或る國會議員で、軍事委員たる某氏は、日米間に戰爭が起つて、日本は非律賓を取るであらうと云ふ議論を持ち出しました、それは別に米國一般の人に注意を拂はれませんでした、併しとにかく左樣の考へを持つてる人もある時節ですから、此際米國の大臣國會議員等おそろひで、しかも大統領の愛孃まで御同行で、我國へ立ち寄られるのですから其人たちに充分我國情を了解させて、後來の國交上に利益を謀るやうにしたいものです、但しこれは我國の外交家政治家に對して、うまのかみが希望する所のものですが、我が貴婦人たちに對しても、ルーズベルト孃が、其一行中にあられますから殊に御盡力あるやうに希望しますのです、婦人がたの御盡力は世間の政治家などの氣の附かぬ處に大效果があらはれるであります。

記者曰く孃の寫眞は前號の口繪に載てあります。

英國大流行の日本會

林きく子

英國紳士の家庭に於ては、近頃日本會といふが、大に流行するさうです、是れは元より日露開戰以來わが同盟國として、同國人の我國に對する同情の盛んな爲めでありまして、其故を聞くと、日本武士の戰場に於ける勇ましい働き振は、恰も歐洲中古時代の勳爵士にも劣らぬ位であつて、我々は其の忠勇なる行爲を新聞紙で讀んだり、話の種にしたりして居るのであるから、賓客を招待して、饗應をする場合には、日本會をするのが、何より好い思付であつて、たゞ少計りの工風さへすれば、費用も別にかゝらぬからといふのであります、近着の英國の家庭雜誌に此會に就ての心得方が記してあつて、頗ぶる興味を感ずるやうに思います。

また其の本文を見ますると、「こゝに紹介する方法はたゞ我々の考へ丈であつて、今では皆さん日本の風俗や習慣を能く御存じであるから、これを取舍折衷するのは、御隨意である」とのことを前置きにして、それから、部屋の飾付、服裝、飲食などのことを記してあります。(以下は同雜誌を飜譯したのです)

▲部屋の飾付

先づ部屋中の道具をスッカリ奇麗に方付ねばなりません、日本の客間には、テーブルも椅子も無いことは御承知の通りであります、それから床の上に厚くて美しい清らかな絨氈をひろげるのです、もし又疊を敷くとが出來れば、尙更結構です、奇麗な色付の蒲團を其上に敷いて、御客を座らせねばなりません左もなくばお客が落付かないのです、又た壁の周圍には、日本製の袷を貼るとか、刺繍の屛風を立て、置くので、それは何處かの美術店から借用すれば宜ひのですが、借ることが出來ないから、障子(日本の家にある紙の屛風です)を製らへればよい、是れは普通の衝立とか、粗末な板など組合せた物に、白い紙を貼つて、一尺四方位の平面に、竪横の線を引

くのです、それか出來たら、室内を英國々旗と日本の國旗とで飾るが宜しい、日本の國旗の日丸は、世界の國旗中、一番簡單な旗で、白地の眞中に、赤い眞丸な布を縫付れば直ぐと出來ます、其上に櫻でも水仙でも、椿でも、藤でも、其の季節の花を、甘く飾り付けるので厶います。

▲其日の服裝

御婦人方の中でも、日本服を所持されず、又は借ることも出來ぬ場合には、紙や、形付のモスリンや、木綿などで、日本衣服の型を造つて、それを着て間に合はすのです、尤も色は上着は藍色か、藍鼠色が日本的であつて「ジユバン」は深紅色「オビ」は質の堅い色の光るものを用ゐて、背中の所へ上の方に大きく突立てた曲りを拵らへて結ばねばなりません、髮は、お垂髮だの束髮だのといふ風を止して、耳の上に十分毛を吹出させて、頭の頂上に、奇しな角の曲りを造つて高く結び上げて、それに花か、珊瑚か金銀の紐か、又は鼈甲のピンで飾立てるのです。

▲御馳走

御馳走の飲食物を出すときには、お客に一つ宛小さな盆で、持運びをせねばなりません、併し本當の日本の食物を出すといふのは間違で、第一材料に困る許りでなく、タトヒ困らないにしても、吾等西洋人には、不思議なと思ふ程忌やな味がしますから、まづ工風して可加減な料理をなし、又菓子屋から、お旨しくて奇麗なお菓子を買つて來てそれを出すが宜しいが、米の御飯だけは、どういふ焚方でもよいから、必ず焚ねばなりません、土耳古酒や、蜜柑は、此席に相當したものです、又青白まじりの日本皿と把手のない珈琲茶碗を備へて置くのです、此品は日本美術店に行けば、何處でも賣つて居ます、日本人はこんな道具で茶を飲むのです。

近隣からでも、知合からでも、集めらるゝ丈は、日本の道具類を借集めて置くがよいです、人形、扇子繪本、木の彫刻物、象牙細工などの奇怪な形をして居る物などは、尤も面白いので、お客の談話の種と

なつて、大に興を増すものです。

▲座興の一つ二つ

次に日本人のする遊戯を二つほど御紹介申します、其一は「テダマ」といつて、支那絹で製らへた、色の奇麗な小袋の内に、乾小豆を一杯容れて、口を縫ひつけたもので、此の豆袋を出來る程深山手に握つてそれを一つ宛投上げて落さない樣にするのです、日本の娘さんは、一度に六つも七つも豆袋を持て居て手品師のやうに、高く投げて面白く遣います、單純な遊びですが、やつて見ると存外に面白いものです。

次ぎは長い絹布をしごいて、その中程に輪を拵へ、その兩端を一人づゝ握つて向合つて居て、その輪になつた處を、床につく許りにして置くのです、さうして其の輪の中には、小さいコップか、豆袋か、指輪などを置くのです、この遊びをする人は、その輪の中に自分の手を突込んで、中にある獲物を取るのですが、それが却々甘く行かぬもので、絹布の兩端を握つて居る者は、手が輪の中に入るのを見すまして、その途端に、布をグッと引き締めて、其手を檎に致します、そこで首尾よく獲物を取つた者には、御褒美として、チョコレートの小函だとか、香水の罎だとか、其他成功を表する紀念物を與ふることにすれば、面白味が一層でありませう。

▲禮式と詞

主人はお客が這入つて來る度に、床の上に跪まづいて、額の床につく程頭を下げて、二度も三度もお辭儀をせねばなりませぬ、又室内に入つてからは、そのお客々々に主人自らお茶をすゝめて、丁度健康を祝する盃を擧るやうな手付で、茶碗を取上げて、お茶を飲まねばなりませぬ。

東洋風で、此の場合に使用する日本の詞を二つ三つ計り、御傳授致して置ます。

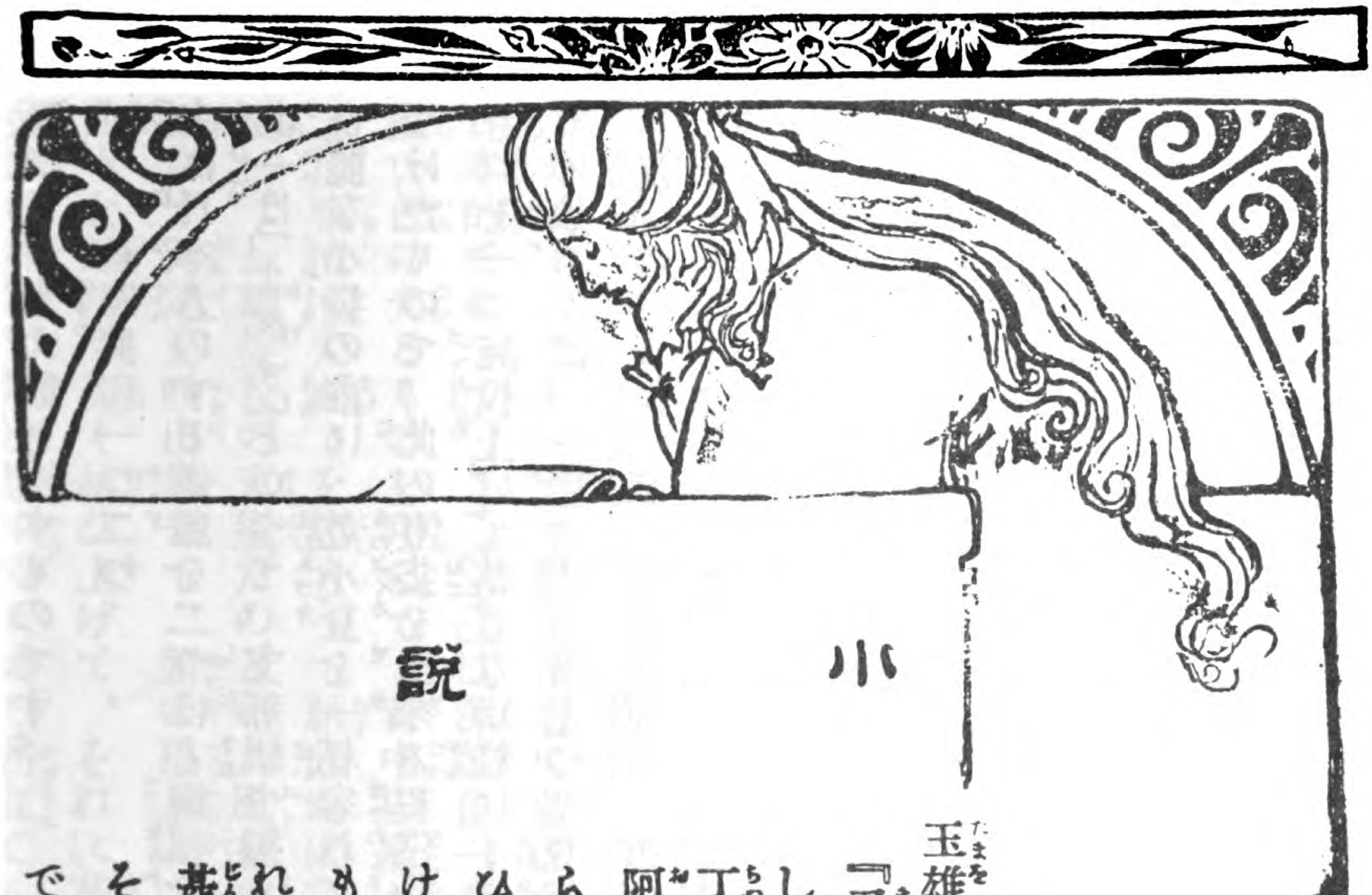
「コンニチハ」

「コンバンハ」

「ドウゾイラッシャイ」

「サヨナラ」

（おはり）



蛇籠（つゞき）

江見水蔭

四

玉雄、更に語り次いだ。

『又、私を抱へて、椿の下まで戻つた時には、阿安が何心なく眼を覺した處で……と見ると、甚五郎は、私を草の上に投出して、出刄庖丁を突然、阿安に突付けて（聲を立てるとこれだ）と云つたのです阿安は（何をするんです）と叫びました（何をするものか、魚屋だらうぢやアねえか。此坊ツちやまから先きへ料理を爲るんだ）と笑ひながら甚五郎は云ひました。（醉つてるねお前は）（うむ、醉つてるけれども正氣だ。さア如何だ、坊ツちやまの鱗を引かうか。それともお前を刺身に造らうか）危い事です、出刄庖丁を振舞はして、それからいろ〳〵押問答して、とう〳〵阿安は泣出して了ツたのです甚五郎は笑つてばかり居ましたが、其内私は投出された處から、ころ〳〵と轉がつて、畔の下へ落ちて、何んにも見る事が出來ませんでした。まアそんな騒ぎでして、私が口と手と縛られたのを阿安に

解かれた時には、最う甚五郎は串戯を止して、傍に居りませんでした、土手の上を空盤臺を擔いで、ぶら〳〵大森の方へ歸つて行く處でしたが、阿安は可哀さうです、餘り執拗く調戯れたので、酷く腹を立て、口惜し泣きに泣いて居ました」

小石の間から消えた吸さしを出して、此方の煙草の火で、點けて。

「それから、少時して、私に、今日の事を誰にも云ふのでは無い、若し人に話すと、貴君がいくら泣いて脅かしたッて、此所へは連れて來ませんよと、はい、阿安が力を籠めて、言渡しました。で、誰にも、腐れ魚屋が、保姆を苛めた事や、私を苦しめた事は、語りませんでしたが、其夜、可怪い事が有りました。例の通り阿安に抱かれて寐て居ますと、生熱かい物が顔に觸れるので、吃驚して見ると、阿安の涙なんです。大方夜通し阿安は泣いて居たのでせう」

「それからは、最う、此所へは、來ませんでしたか……」

「いえ、始終連れられて。此川端へは參りました。阿安は厭で〳〵ならないやうでしたが、私が、駄々をこねるものですから、仕方無しに……」

「魚屋はそれから如何しました」

「甚五郎ですか、屹と腐れ魚屋は來ました。一度なんかは、未だ賣殘つて居た魚を、野犬に啣へて行かれたのですが、それも知らずに遊んで行きました。阿安は最う困り切つて居ましたが、左樣、一月許して、大層玉川に水が出た時でした。例の通り醉つて居て、ひよろ〳〵しながら水を呑ふとした拍子に陷ちたのでせうか、甚五郎は水死して了ひました。それから後は大層阿安の顔色が好くなりましたが、それまでは、死人見たやうで、祖父や祖母が、能く云ひました。病氣だらうなんて……ですが、いゝえ、

然うぢやア有りませんて……』

『その阿安は、如何しました』

『まアお待ち下さい……貴郎は辨當を御遣りなさるんでせう……私は其間少し休みます、頭が痛く爲つて來ましたから……』

自分の答へも聽かず、ぷいと立上つて、川添に彼方へと去つて、一二町の間を、行きつ戻りつするであつた。

五

握米飯の盡きた頃に、玉雄は戻つて來て、又巻煙草かと思ひの他、待搆へて居たといふ體で語り出した。

『私が十六歳になりました、此時は祖父母は死んで了ひまして、兩親も外國から戻つて、閑散の地位であつたものですから、此方の別莊に住居して居りました、私は東京の某學校に寄宿して居りまして、土曜から日曜へ掛けて、歸るやうにして居ました。その歳でも未だ、此所が好きでして、其時には川を降る筏の具合が好いとか、砂利船の帆が妙だとか、兩岸の枯蘆が風情あるとか、向ふの多磨の横山が繪のやうだとか、まア、幾分か詩的に此所を味はうやうに爲つたのですね。學校から家へ歸るのが樂しみだッたのでせうか、いや、此所へ來るのが全く樂しみであつたのでした』

自分は少し急いたので。

『保姆の阿安は如何しました』

『それは未だ私の家に居りました。私の保姆としてゞはなく、お針としてゞすな』

と玉雄は答へて、巻煙草を持たぬ方の手で指折り數えて。

『其時は、阿安は三十二です。何しろ先程のお話の時から、十一年經過して居ます』

『其間に、何家かへ行きませんでしたか』

『行きません』

『三十二歳まで……緣付かんのでしたか』

『いくら父母が勸めても、嫁には行かないのです。好い口が有つても如何しても行きませんで、一生奉公をするといふのでした』

『今でも奉公して居ますか』

『まア待つて下さい……』

先きから氣になるかして、蛇籠の中の小石を頻りに出さうと急るけれど、巧く行かぬ。

『十六歳の、矢張春でした。私は一人で此所へ來て、釣をして居ると、阿安が來ました。見ると、今まで裁縫をして居たのでせう。襟に針を刺して居ます（釣れますか）と問ひますから（釣れない）と答へますと（針が惡いのでせう）と云ひました（お前の襟の木綿針を借りたら、太公望よろしくで、猶釣れないだらう）と云ひますと（直ぐな針で魚の釣れないと云ふ事が有りませうか。人の一心といふものは恐しい物ですよ）と云ひます（何故だ）と問ひましたら（針一本で人を殺すのは譯は有りません。貴郎寫眞へ針を刺して咒ふといふ事を知つて居ませう。ですから魚を釣る位は何んでも有りません）といつに無い凄い事を言つたぢやア有りませんか』

額を手で抑へて、玉雄は水の流れの方に眼を配つたが』

『阿安は突如私の手を取つて、少し話が有るからツて、それ、彼所です。椿の下まで連れて行つたぢやア

有りませんか、麥も菜も昔の通りです。虻も、蝶も、あの時のが未だ生きて居たとしか思はれません。けれども、阿安は三十二歳、私は十六歳です。見ると、阿安は眼に一杯淚を湛へて居まして（貴郞は妾の身の事に就て、お聽きでしたらうね）と口を切りました。實は父母から一寸話も有りましたが、家政上の都合もあり、又一生奉公と云ッたッて、今の世で然うも行くまいし、兎も角も相當の手宛をして阿安に暇を出すといふ、それなら私は聽いて知つて居ますから、其旨を答へますと（それで、貴郞はどう思ひます）と問ひますから（子供の內から世話に爲つたお前と別れるのは、如何にもつらいけれど、お前がいつまでも家に居るといふ事は不自然で、出來得べからざる事と思ふから、今の內、去つて、何家かへ嫁に行つた方が好からうと思ふ）と答へたのです。すると、阿安は、切放した樣に聲を立て泣出しました」

語る人の眼にも、此時、淚が浮んで來た。

『それで阿安が云ひますには（妾が嫁に行かれると思ひますか）私には分らない、嫁に行かれぬといふ理由が、如何しても分らない。私は默つて、吃驚した顏で、阿安の方を見て居ますと（貴郞は知つて居らッしやる筈です。けれども少し說明しませんと、お分りにならないかも知れませんが、妾は長い針で、釣をするのと同じやうに、氣を長く今日まで待つて居たのです。貴郞が妾の相談敵手に爲つて下さるやうに御成りなさるのを、待ち暮して居たのです。最う十六で居らッしやるから、何もお分りになりませう、妾は貴郞の五歳の時から待つて居たのです）ッて……」

知らず〳〵指の先は蛇籠の小石。

『で、私は（少し說明どころでは無い、澤山說明して貰はなければ分らない）と云ひますと（ちやア申し

ませうが、いくら留めても貴郎は、此所へ〳〵と遊びにお出でなさッたのを覺えて居ますか……妾が乾と御附き申して來ました事を御忘れでは有りますまい……然うして、或日の事、矢張、此所で、斯うして、横になつて、二人で椿の花を玩弄にして居たのを、お忘れでは有りますまい……虻が來て、蝶が來て、それから腐れ魚屋の甚五郎が來たのをお忘れでは有りますまいね）と云はれた時には、私は古い夢を二度見る樣な氣持がしました。阿安は然う云つた儘、泣伏して了ひました』

六

不意と立つて玉雄は、四邊を見廻したけれども、誰一人附近には居らなかつた。でも、何となく不安の樣で。

『樋戸さん、どうか秘密に願ひます。私は喋り過ぎて了ひました。最う仕方が有りません、何も彼も云ひませう』

云つた方が好いので、此所で中止したら、自分の想像は事實以上に走つて益々大きく事實を作るかも知れぬから。

『大丈夫です、私は誓ひます』

『で……あの、阿安が、白狀しました。阿安は甚五郎から、たび〳〵結婚を申込れたさうで。それが、つらいので、到頭甚五郎を……大水の出た時に川へ突落して、殺したのださうです。けれども、阿安は、それを罪とは思つて居りません。復讐だと思つて居ます。自分が嫁に行かれぬ樣な身に爲つた、その返報として、格別、心を苦しめなくッて、其他の方面で、大層、悶えて居たのでして・…それで……それでゝすなア……』

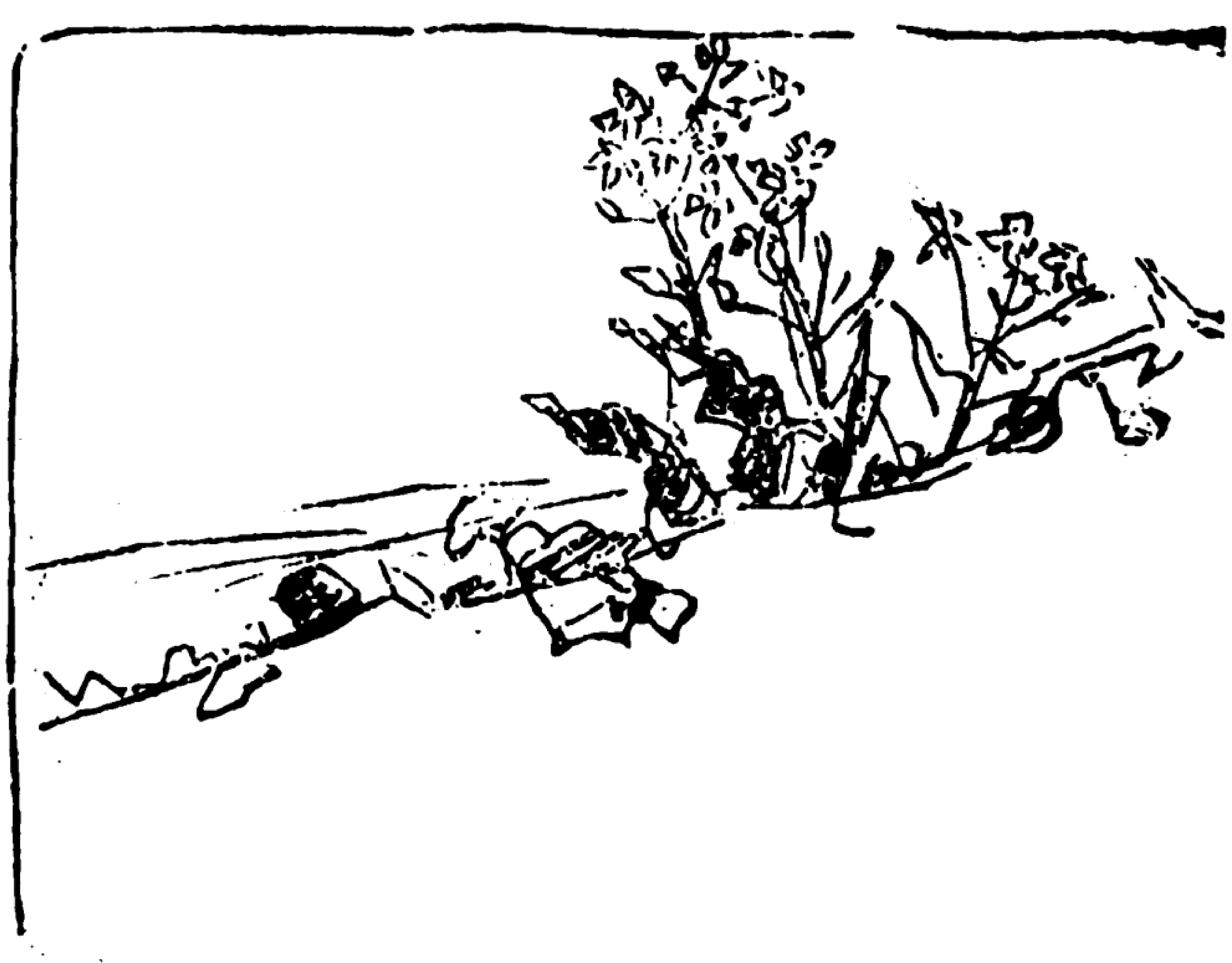
極めて低い聲を『其時阿安が私に云ひました（お暇が出るのは是非もないが、貴郎は妾を見捨てますか）とね……私は困つたのです、見捨てないと云つたら、阿安は何を其次ぎに言出すでせう。見捨てると云つたらば又其次ぎに何んと云出すか知れないぢやア有りませんか。私は默つて下を向いて居たのです。すると阿安は、不意に笑出しました（妾は、



貴郎が、出刃庖丁で殺されると思つたから、身を投出して救つて上げました。それが爲に妾は嫁に行かれない樣に爲つたのです。それを又救つて下さるのは、貴郎より他には無いぢやァ有りませんか、妾がお暇が出たら、貴郎も御家を駈出して下さい。二人で何處かで暮しませう。お厭ですか」と本心を打明けました」

思はず知らず自分は歎聲を發した。玉雄は今までよりも一層力を指の先きへ入れて、蛇籠の小石を拔取らうと試みた。が、目的を達し得ない。籠の竹を折つて了うといふ程の氣力は無いのであつた。

「……(若し、妾が、これまで待つて、貴郎が五歲から十六歲になるまで待つて、それで妾の相談敵手に爲つて下さらないのなら、妾は決心が有ます、甚五郎を川へ突落して殺した女です。針一本で貴郎を殺して見せます)斯う云つて懷中から出して見せたのは、私の、五歲から十六までの寫眞ですねえ。每歲一度宛寫して、保姆であつたのですから、其内の一枚は必らず阿安に遣つて有りました。それを纏めて、袋に入れて、肌身離さず持つて居たのですねえ、それを出して、彼の縫針を突付けて(女の一心です、咒殺して見せます、貴郎が若し不實なら)と云ひました」



玉雄は最う煙草も吸はねば、小石にも手をつけぬ、兩手を組合せて。

「此時の私の一言の返辭が、一生を過つた基でした。私は其夜阿安と共に家出をしました。それから今日まで九年經過しました。阿安は四十一歲です。何處で暮した、其間何をして暮らしたといふ事は、深

くお話し申す必用も有りませんが、要するに、私は、學校へも行かず、職務をも執らず、阿安の針の先に養はれて、唯體だけ生きて居るのです。何處へ行つても人は母子だと思つて居ます。その眞相が分りさうになると、直ぐと轉宅を仕ますから、今、お宅の近所だからッて、何時又遠方へ行くかも知れません。さアこれだけが私の精神上から死んだといふお話。何故、郊外ではお友達東京では知らぬ顔を願ひたいといふ、それに就ては未だ申しませんでした。しかし、然う長くはありません、短く申されます、私は保姆から、はい、私は未だ阿安を保姆だと思つて居ます。保姆から友達をつくる事を許されないのでして、若し友達をつくると、其友達が、いろ〳〵忠告するだらうといふ事を、非常に恐れて居るのでして……何も爲ずに、私は家に居るのです。保姆より他に語る者もなく、淋しく、淋しく暮して居るのです。前には外へ出る事をも許しませんでしたが、それでは健康を害するといふので、兎も角も日曜日毎には、郊外の遠足に出掛るやうに爲つたのです。これでも歸途が遲いと、叱られるのです。遠足先で友達の出來た事でも知れやうものなら、大變です。はい、私は、それで、一人、唯目的もなくぶら〳〵歩くのですが、でも、家に居るよりは、どの位好いか知れません。これで貴郎とお友達になれたら、どの位私は嬉しいか知れません」

語り了つて、何となく息苦しい呼吸、病後といふ風情があり〳〵と見えた。

七

不幸な人も有つたものだ。斯ういふのを野外の友にして、武藏野を一所に歩く。と、生きた亡者に取付かれたとしか思はれぬ。その生きた亡者は、生きた餓鬼に取付かれて居ると云はなければならぬのだ。しかし、最う、秘密を聽いたのである。それだのに、今更友となるのを拒絶は出來ぬ。のみ、ならず、一

層深く立入つて、所謂保姆の忌み嫌ふ、忠告すべき友となるといふ事が必用であると決心した。

玉雄とは、其夕方、行人坂で分れて、別々に家へ歸つた。

扨、郊外の古蹟調査よりも、市内の玉雄の住家探檢に掛らねばならなく爲つた。

近所だといふので、あらゆる手段で以て探索して、やうやくにそれかと思ふ家を突留めた。

其所には、四十餘歳の、肥滿した、髮の曲のある、眼の細い、其癖鋭い光の、何處となく鬼氣の含まれて居る大年增。それが、賃仕事をして居るといふ事まで分つた。

彼の女なら、玉雄の話の、阿安といふ保姆には、少し嵌らぬ樣に考へられたので。

事實を揑造して、氣の弱い玉雄を脅迫して、強て不自然を行うて居るのでは有るまいかといふ疑問。

友といふ、一種不可思議の友といふ關係を結んだからには、能く其邊の事を突留めて、あはれなる人を救うてやらなければならぬと、自分は覺悟を定めた。

次の週の日曜日には、奥澤の九品佛で落合ふ約束であつたから、其時に能く玉雄にも忠告して見て、研究の歩を進めて見たいと思つて居る。

然るに、其日は雨であつた。

其次ぎの日曜日に奥澤の九品佛へ行つて見た。

けれども、玉雄の姿は見えなくして。

石地藏の前の積石の中に、手帳を破つて、其紙片に、鉛筆で、次の如き文句が書いて有るのを見出した。

――君は余の居所を知り給ひき、而して又保姆の顔をも見給ひき。噫、君は郊外の友のみにては物足らずとし給ふならむ。余は感謝す。君の好意の、それが爲に、保姆の怒を招き、當分禁足を命じられたる

を、更に感謝す。君の認めたる家には、今朝貸屋札の張られたり、余は保姆と共に遠く去らざるを得ざるに至れるを——

實に、武藏野には種々の路がある。自分は下野毛村で踏迷うて、不思議な人に出會したが、此後は又路を違へたからとて、玉雄と稱する人の如きには、滅多には逢ふまいと信じて居る。

（完）

○父兄へ御注意（女學生の取締）

男女學生の取締に關して嘗て警視廳より訓示を發したる程なるが殊に女學生の行狀に就ては警視廳の取調べに於て驚くべき結果を得たる由女學生の多くが玆に至れるは學校其もの丶取締が不完全なるにありて只月謝さへ得れば學生の不品行などは恬として顧みざるに因るは勿論なれど又彼等を墮落せしむるは下宿生活が其不品行を誘導する傾きあり試みに下宿を窺ひ見よ一室に四五人の女傑が寢轉び嬉戲談笑の結果が名刺投込と云ふ言語同斷なる奇策を實行する由然るに近時は單に下宿生活の女學生のみならず此惡弊は監督の不完全なる寄宿生にまで傳播し其の惡風甚だしき所業あれば取締法に關して大に講究中なるが其第一着手として先日の署長會議に總監より取締法につき訓示さる丶處ありしと云ふが世の父兄たる人々宜しく注意せらるべし（都下各新聞所載）

文林

詠花下言志

久邇宮　篶子　女王

さく花よ心へたつな下陰に
立よるわれを哀とおもはゝ

御歌所長男爵　高崎　正風

ことのはの花も盛の君千代に
かくるゝ月のかつらなりけり

主殿助　中川　忠純

植置し人のこゝろやにほふらん
いまを盛りの花の下かけ

正四位男爵　藤枝　雅之

鶯も蛙もいてゝいはふらん
けふのまつりの花のこかけに

御歌所参候　植松　有經

うるはしくさけるみそのゝ花の色に
匂ひおとらぬことの葉もかな

須川　信行

いにしへのはるをあふきて大比ゑの
高ねの花のかけにうたはん

典侍　柳原　愛子

しきしまの道のたかねの位山
あふくもうれし花のこかけに

掌侍　姉小路良子

咲花のくもたつ山の下かけに
千代のむかしをあふく春哉

權掌侍　小池　道子

紀の山の春のひかりに岡さきの
花もことしは咲まさるらん

従七位　香川　景之

しきしまのみちも榮えてこのはるは
君かかさしの花咲にけり

藤原　鶴子(小泉)

おもふこといまはなしとやなき魂も

うかれゐつらむ花の木かけに　遠山　稲子

ことのはのまことの花のさくをみて
こけの下にもまゆひらくらむ　尾崎　宍夫

花により花にうたへることのはも
すなはち神のちはひなるらむ　則武　正副

大みよの春にあはすはいかてかく
色そふ花をのとかにはみむ　御歌所録事　遠山　英一

天かけるたまもうれしとみますらん
ことはの花のさかえゆく代乎　御歌所参候　鎌田　正夫

さくら花さきのさかりに敷しまの
みちのさかえをいはふけふ哉　御歌所参候　大口　鯛二

かくはしききみの心の花さくら
この大御代に咲まさりけり　御歌所参候　千葉　胤明

さく花の雲の上にもあふかれぬ
きのとほ山のたきかきしらへは　御歌所録事　加藤　義徳

大みよのはるのひかりに咲にほふ
たかねの花をあふくけふ哉　従二位伯爵　油小路　隆董

咲にほふ花の下かけわけくれに
めてゝや人のゆきかへりする　樋口　直子

栄えゆくふみのはやしのひろけれは
ことはの花も咲まさりつゝ　御歌所参候正三位子爵　梅渓　通治

神もさそよろこひまさむ此の春は
かをれるひえの山さくらはな　従三位子爵　藤井　行徳

春ことにかはらぬ花をみるわれも
匂ひを世々にのこしてしかな　同　てつ子

咲花はうつろひゆけとことのはの
匂ひはよゝにかはらさりけり　正五位　近藤　幸止

あふきみる位の山のやまさくら
花咲春にあへるけふかな　従三位子爵　唐橋　在正

うら〳〵と霞に匂ふさくら花
皇國の人のこゝろなりけり

姫松ものがたり

佐々木濱子

今はむかし、竹芝の浦に程ちかきところなる、すゞのえのやに、世をふる人ありけり、さみだれつれ〴〵と、ふりつゞくころ、ひとり文机に向ひて、何をがなと思へど、しのだの森の楠の木の、千枝にわかれて、いはんすぢなし、さはれ、このふたとせみとせ、えせものがたりをつくりて、いとにぶき筆を、ためしきつるに、ことしだにやすまば、なほやあともどりせん、龜のあゆみのおそくして、このうのとしにおくれぬとも、都鳥の筆おきをまくらにして、ねてあかさんにこそは、しかめ、とて、そこらみわたしたるに、我庭に、ひと本のいてふの木あり、過しきさらぎに、わたましせしころは、丈三尺ばかり、むげに枯木のさまなりければ、ほりいでゝ外にやうつさまし、など思ひてしを、木のめはる雨、ふりつゞくころより、やう〳〵青みそめて、この夏の若葉、こと木どもと、にるべくもあらず、門の板びさしをさゝふるばかり、葉ども扇をひろげたらんやうに、うちそよぎて、くる人ごとに、目おどろかすばかりなり、ある人この木をみていへらく「こは君が宿にとりてめでたき木なり、このいてふの葉をこそ、文のはやしのあたとする、しみをしりぞけんに、このうへなしのまもりとはすなれ、先にかゝせたまひし、机の島のしをりは、道をゝしふるのやくあるのみ、こはこの宿に、常にあつかはん、文を護衛するものなれば、栞には、はるかにまさりたるをや、おろそかになしたまひそ、といふに、いとうれしく「おほせのごとく、しかるべうこそ侍れ、とて、その人かへりたるのち、つく〳〵おもへらく、わが黄葉をよみたるうたに

山吹のくちなしいろのうすもみぢ
これやこかねのなる木なるらん

とよみたるは、少しいやしげなれど、この木の葉のちりたらん時ぞ、庭もこがねをしきうつむべく、一葉だにちらさで、ひろひおきて、文の中にもいれめ、人にもくれめ、など思ひつゝ、くるとあくとに、めかれぬものから、さて、日はながくとも、筆はみじかし、とかくもいひかねて、けふもむなしく日くれにたれば、うちふしぬ。

うこんのいてふ　（右近の橘によそふ）

（之れより夢がたりなり）

あなふしぎや、子のこく過るころより、沓のおとそゞめきて、庭のかたに、名たいめんの聲きこゆ、名のりよしあし、雨にまぎれて、よくもきこえず、餘りあやしさに、雨戸の隙よりさしのぞけば、うしとらのすみのかうらんに、たかひざまづきとかやいふ、ゐずまひをして、御前のかたに、むきぬべき、藏人の役なめり、みぎりの檜葉の木の、さつきに雨のころ、まねぶらんよりも、人のこゑをまねびて、たれ〳〵がはべるといふ、今、うこんのつかさの、とのゐ申なり、こは先に、文の護衛なりといひし、いてふの葉どもなり、桃李ものいはねば、こゝろなしと思ひて、いひてしことを、よくまもりて、名たいめんはするなりけり、ときく程に、殿上の名たいめんはてゝ、瀧口とは、軒より雨のおち口の、瀧なすわたりに、うゑつけたる、ゆづる葉にて、ゆづるつき〳〵しく、引ならしてそゞめきやみぬ。

ひとよ松の翁

「などかう、庭せばくは住ひたまふぞ、はた、何ゆゑ、名たいめんは、せさせたまふにか、といふは、みなれぬ翁なり、先のいてふにや、わかき男の、隨身のいでたちして「こゝのあるじは、いといやしきものに侍れど、勤王のこゝろ淺からず、ことに、古聖人のをしへをまもりて、常に、雪螢をあつめさふらふが、

あはれに侍り、よるは床の間に、のせたりける、文机を王宮として、文王おはしますにより、名たいめんは、つかうまつり、さふらふものなり、はたおきなはたそ、とゝふに、おきなうなづきて「さることありとやしろしめしけん、このひきたのゝ神の、おんつかひとして、まゐりしものなり、かの北野には、一夜松と申て、神のうつりたまはんとせしをり、ひと夜におひたる千本の松あり、その千本のうちのさいはての老木なり、今このぬさぶくろにこめたるは、大神の、もみぢのにしき、神のまに／＼と、よませたまひし紅葉のにしきをはじめとして、常磐の松の青にぎて、花のしらゆふ、とりかけて、よろづの木どものたねに侍り、いといやしき身にて侍りとも、君を思ひ、みちを思ひ、おもふこゝろのたねしあれば、岩にも松はおひずやあるべき、いでまきはべるべきに、そこのきたまへ、とて、みなみざまにまきたり、質にや、新田の君が、いなむらが崎に、こがねのたちを、なげいれたまひし時、汐などの引しごとく、はた山の端などのにぐるがごとく、向ひの家ども遠のきつゝ、庭ひろくなりて、前栽ども、いと多く、うゑつけられたるに、木の間の燈籠、しろくみえて、さながらまひるのさまなり、是をみて、うこんのいてふも、たゞあきれたるさまに、弓を杖にして、たゝずみたり、松の翁は、今おひたる、松の根に、しりうちかけて、ひかへたり、

ひとへのさくら（左近の櫻によそふ）

しろきひとへの櫻是もわかき人のさまにて、いできたり「さきの名たいめんにもれはべる、さこんのさくらたゞ今まゐりたるよしを、そうせさせたまへ、といふに、さきのくらうどによそへたる、木はをらず、うこんのいてふいふ「名たいめんはとくはてはべるぞ、はたその花なにゆゑ、さこんのさくらとは申たまふぞ、とゝふに「さればさふらふ、さこんの櫻よしのゝ花みなひとへにて候よし、文にみえ侍りしかば、さこんのさくらとして、君の護衞・仕りたくさふらふ、といふ、うこんのいてふ、かたはらの松の翁をみ

かへりて「翁は、この願ひを、ゆるし給ふや、とゝふに、翁「我も今まゐりの、とかくもさだめがたけれど神のみこゝろになりていはば、源氏ものかたりのうちにも、花の宴の巻は、ことにえんなるものと、何がしのおきなも、いはれたるよし、かの南殿の、花の宴は、さこんの櫻の花の宴なりといひ、この花の宴により、おぼろ月夜のないしの、おんことよりして、光君には、須磨のおんうつろひも、ありしならずやこの巻よ、ことにめでたく、紫式部が筆のあや、にしきのおんぞもやつれたまふ、黒木のおんずゞに、おん手のしろきも、なか〳〵に、はえ給ひけん、かつは、山がつめきてすぐいたまふ、おんそばにさふらふわかき人々も、みやこにかなしき人をおきて、いかに、しのびたりけんと、この巻をみるごとに、今になみだぐましう、是みな、さこんのさくらの、花の宴のとがなり、この花の宴の、なからましかばと、花うらめしう思ふなり、つくしに、飛梅あるをしらば、などおんともは、つかうまつらざりしぞ、といふに、ひとへの櫻も、いかにとも、いひとかんすべなくて、花のなみだ、はら〳〵と、うちしほたれて、おもてをえあげず、翁またいふ「さはれひとへのさくらとて、さこんの櫻とのみ　さだめがたきものなれば、つかさをのぞまず、たゞひとへに、君に、つかうまつりたきよしを、ねがひ給はばゆるさるべきに、しばしつゝしみて、この秋の、つかさめしに、また改めてまゐりたまへ、このいてふを、うこんのつかさによそへたるは、もみぢせん世の、色うこんなるをもていふ、右近の橘などいはゞ、うちわたりを、まねびたるやうにて、おそりあり、はたやへ櫻は、奈良の都にのみ、ありしを、一條院の御時、來たる人あれど、ねぢけたるものと、きゝはべれば、是もゆるさず、しき島のやまとごゝろを、人のとひはべらば、朝日に匂ふ山ざくらのやうに、いさぎよくみえたまへ、影くらきおぼろ月夜にな、たゝずみありきたまひそ、といふも、ことわりや、

花のぬれ衣

須磨の浦は、みやこより、さばかり程遠からぬところと、きゝつれど、是は花なれば、さまかへて、いと遠くも、さくら島にぞうつろひゆく、さることは、おのがみし世の、ことにもあらず、いはゞ花のぬれ衣に、ひとしけれど、我ともがらの、そしられんを、いつまでか、よそ〳〵しくも、すぎがたく、多くの花どものとがを、身ひとつにおひて、こゝろほそくも旅だちぬ、

あねはの松の娘

ひとへのさくらにゆきかひて、こなたにくる娘いろしろく、こえたるかたに、けしうはあらぬが、いづこか、ひなびたる、せにはつとめくものをおひて、近江の君のしたばやに「このわたりに、むかし男は、さふらはぬかとて、翁のまへ、つか〳〵と、ゆき過るを、よびとめて「たゞむかし男とて、たづぬともしれがたきを、名は、なにといふぞ、とゝふに、むすめふつゝかに「その名、ふとわすれたり、其昔男の、みちのくに、ゆきし時わがはゝの、くり原のあねはの松をいひわたりて、うちすてゝ、みやこにいでにしかば、うちなきていふやう、はもなき女の、梅くひて、すがりたるならば、にげなしとて、このすきものゝすてゝいぬべし、我はひなのそだちに、栗のかはを、よくも、むかでくふとて、しぶがりたる顔をみてうちすてられたるなり、とて、はてはなげきうもりて、ときはにものを、思ひはべり、松風の小琴も手ふれず、子の日の友の、さそふにもいでたゝで、秋は茸がり、賑はしき日も、もみぢせぬとみゆるは、よそめのみ、からころものいろ、むねのわたりは、もゆるばかりなる、この思ひを、つたかづらの、かゝるさまに、まぎらしても、下をれぬべき、雪と、月日をつみて、いつしか、みるかげもなき、老木となりたり、はた、このごろのことぞや、きたのゝ神のおんつかひとて、よろづの國を、はしりめぐり、めづらしき、木どもの、たねやある、とて、もとむるわらはあり、ある人、このあねはの松の、たねをあたへたり、されば、我は、その、あねはの松の子、はた、ものゝたよりにきけば、そのむかし男は、今右の馬のかみの

おきなに、なりぬるよし、はゝのあねはが、うらみつたへんとて、たづねありき侍るに、あなあしいたやとて、むかはぎなでゝあるを、松の翁、うこんのいてふを、はじめとして、このところを、ぢんやめきてつどひたる、木ども、思はずうちゑらふ、おきな「そこのたづぬる、むかし男、といふは、業平の君のことゝ思はるれど、そは、むかし男、といふにはあらず、むかし、と、句をおきて、さて、男ありけり、と、よむなり、その業平の君は、いくもゝとせの、むかし、うせたまひて、そのすゑ〳〵だにいかになりけんさるふるめいたる、ことといふは、ねおびれたるなめり、そのまつげあらひてこよ、といふに「あなみじかの、人のよや」とてあきれたるを、おきな「さればこそ、松より先に我はへにけり、とも、いふなりけれとく、くにゝかへりて、はゝのあねはに、そのことといへ」といふに「この庭の木として、おひいでたるを今更、みちのくには、かへるまじきなり、ものゝ作法など、おぼゆべきに、みやづかへせん、ところもあらば、をしへてよかし、といふに、翁あはれに思ひ「さばあなたの池どのに、住の江の、岸の姫松の、住ませたまふに、ねがひてみよ、みづしどころの、いり口はしか〳〵ぞ、をさめなどよびいでゝそのことといへ、といふに、よろこびてたつを、翁「そのおひたるは何ぞ、とゝふに「みやこのつとにいさ、とて、ははのおこせたるとりのこを、十づゝとを、いれてはべるものぞ、といふに、翁「松にすごもる鶴のこならば、姫松にみせ奉りたるのち、庭とりにかへさせよ、といふに、こゝろえてゆくみちすがら、はぎたかくかゝげたる、衣のすそおろし、松の葉のゆづゝまぐしをとりなほし、かみのみだれつくろひなどしつゝ、からうじてゆきつきぬ、

住の江の岸の姫松

池どのといふは、竹芝の浦につゝきて、いり江めく、水の面を見わたしたる、殿づくりなり、姫松といふは、としはたちばかりいろしろく、すきとほりてけだかきが、かみはくれなゐの、ものすそに餘るをひき

て、こなたにあゆみくるに、おんめのとの、松君をいだきて、わたどのにいでゝ、池のひごひをみせ奉るをみて、うちゑませたまひながら、はしちかくゐたまひぬ、めのと「まつ君はねぶたげにものしたまふ、とて、姫松のおんまへにて、しばしちをふゝまするまに、ねたまひぬ、とて、あなたの間におほとのごもらせんとや、いだきてつれまゐらせぬ、姫松は何おもひけん、いづこよりか、ひとつの手箱をとりいだし、そのうちにこめたる、ふるかゞみをとりて手ばこの上にのせ、几帳(きちやう)にたてそへ、つく〴〵とみてあり、こころにおもふやう、このかゞみはわがはゝの住の江のきしの姫まつ乃紀貫之ぬしが土佐の國より京へかへる時の船をとゞめてこひたまひしかゞみなり住吉の神は龍神なりはた岸の姫松はその龍神のすみたまふ水のきしにおひいでゝとし久しくなるまゝにおのづからこゝろもたつにゝたるなりされば、我今、かりにこの庭の木となれど、はゝぎみをしたふこゝろかの海にもおとらざれば、とくかへらまほしけれど、住の江の岸の姫松と、高砂の浦の松との、あひおひの中に、まうけたまひし、子ども多かる中に、この庭の高砂の松は、わがせうと(兄)にてものしたまへば、こたびは住の江「ならで、末の松山の、松の御むすめをめにて、御ちぎり松の」葉のこまやかなり、我には周防内侍の、春の夜の夢ばかりなる、とうたによみたる、手まくらの松の、御子を、おやたちのゆるしたまへば、かひなくたゝんうき名もあらず、よな〳〵かよひたまふまゝに、ゆめのうちにも月日へて、松君をまうけたれば、うちすてゝは、住の江にいぬべきやうもなくて、はやふたとせになりぬる、小松にひかさるゝはおやのならひ、さりとて、母君をわすれ奉る程なければ、日毎にかゞみをいだしつゝ、はゝ君ににたる我顔みるをたのしみに、みるごとに、こゝろづからや、ものすごうなりぬ、もしたつに、と、思はず、いはんとして、袖もて口をふたぎ、人のみるにも、しかみえば、いかにせまし、このはゝの、たましひいる、かゞみを、見ざらましかば、さるともなく、わがこの、今しばし、およすけぬべき、としまでも、とゞまるべし、わがこのために、おやをわすれ奉らんは、みちならねど、しばしのま、あひ奉らでも、ありぬべきかな、げに忘れ艸の、たね、とらざりしこそ、口をしけれ

とて、うちなげくらん、けはひす、さうじごしに、きくとはなしに、めのとは、何ごととも、しらず、すこし、ためらふ程に、人ありとや、こゝろづきけん、がゞみをさめて、さりげなきさまに、つくろひつ、めのとは、わざと、ゑみつくりて、おんまへにいでぬ「この程宮づかへにまゐりたる、いなばの松の娘こそ、いとをかしきことは、申なれ、めして、國のこと、とはせたまはゞ、いとまめだち、よろづに、かたはなる、物がたりどもして、みなを、わらはせはべらん、と申せば「そのものとくよびよせよ、といふにめのと、おんまへに、つれていでぬ、わたどのに、かしこまりたるを、みたまへば、あいぎやうづきて、にくからず「このみやこには、はじめてのぼりつや、とゝはせたまへば「實にさぞ、はべる、みたまふごとく、ひなのそだちにはべれば、みやづかへは、何ごとも、あないしりはべらず、とてつゝましげなるは、やゝみやづかへ、なれたるなめり「こち」とてめしよせつ、おんめのとは、行平の中納言の、立わかれ、いなばの山のとうたによませたまひし、いなばの山の、峰の松の娘にて、男とは立わかれ、子を人にあづけて、宮づかへするものなれば、ものは少しおもひしりたるなり「かの庭とりにかへさせたるつるの子は、そのゝちなほそだち行くや、とゝふに「そのことに侍り、國よりもてまゐりしとりのこは、いと多く侍るを、其うち庭とりに十かへさせ侍りしに、是はまことの鶴の子にしも侍らず、なべつるなどいふものゝ子にて侍りしかば、いと安くてみなぞかへりはべる、そのひなの、この程おやのにはとりのあとおひて、ひよ／＼となきありき侍るが、いとうつくしく侍るに、をり／＼はつばさひろげて、かへるなどのさまに、飛ならひ侍るを、をさめのさとよりとまりにきつるわらはべの、をかしがりてともしてありきながら、うたうたひ侍るに「つるよかへるよ、早ひとね、松のうれにぞ巣はつくる、わがすきまより、手をつる／＼、とつたるとりのこを、にはとりの、親やまほるらん、人やくふらん、かへるよ、よんべぞかへるつるのこの、ゑをとはん、そらとびをせで、はやとびね、人かみたらば、かへるなれ」とて手をはた／＼とうちはへるに、あはせて七やつばかりは松が枝に飛あがり、まだふたつみつぞ、かへるのさまにはべるめる、こ

の鶴のこの、わらはべが、かへるのうたにはかられて、飛ならひはべるを、いみじくをかしがりて、わらひ侍るを、をさめのせいして「かへるのことてさのみなあなづりたまひそ、むかし小野道風といひし人は、かはづの柳の枝にのぼりたるをみて、手ならひしつ、つひにいみじき手かきになりたるよし、しらぬ人あらじかし、ことに今の世は、鶴の子も、かへるの子も、へだてたまはず、鶴の子もこゝろいたらざれば、雲井にものぼりがたく、はた、かへるの子も、うたよみ手かく人にをしふるばかり、こゝろいたりぬれば、君のおんまへにも、のぼりぬべし、とて、むべ〳〵しくをしへはべるに、みづからも、このことばの、道理なるをしりはべるに、人もまなびてのちにこそ、とは、おんうたにてもしられ侍るを、思ひたまふるに、この程、宮づかへのいとまに、手ならひしはべりつ、と申を、姫松きゝて、あはれとおぼしたまひ、紙十帖をたまふとて「こはかしこきかみのしるしならねど、よくまなびて、そのつるの子にあえよ」とてつかはしつ

庭の木の露とゝもにもこぼれたる
月のかつらのたねにやあるらん

まことや竹取物がたりのかぐや姫は、竹の中におはせしを竹取の翁が手にやしなはれて、三月ばかりの程に、よきほどなる人になりたるよし、この庭の木どもは、たねまくや、すなはち、よき程なる人になりて、ことをおこなふに、はしめの程こそ、今おひたる松の根にしりうちかけ、あるはたたずみなどしつゝありしが、やう〳〵人多くなりもてゆくに、杉の木は杉きりはこび、槇の木は、はしらたて、などしつゝ、そりたるひはだや、かう〴〵しく、夜毎のゆめに、みつばよつばの、殿づくりを、はじめとして、はかなき、板屋ども、かずしらず、たちそひぬ、さはれ、ちかきまもりは、うこんのいてふ、ひとへの櫻の、をらぬあひだは、松の翁ぞ、かはりたる、かくて是まで、しみのすみかになりたる文の林もやう〳〵、茂りゆくに、いとたのもしく、なほぞ、やすきいは、ぬべかめるに、ゆめぢ遠くも、あそばゞ

や、と思へど、みしこともなき、山のすがた、岩のたゝずまひを、思ひやり、ふかき海の、そこまでも、思ひいたらんまでは、いかで、およぶべきに、あらねば、たゞこの庭のうちを、夜毎にめぐりつゝ、みきゝしつる、ことのみいはゞ、おなじ夜に、まきたるたねの、とき、おそき、ある中にも、いとはやく、住つきぬるは、住の江の、きしの姫松にて、夢にもしらぬまに、手まくらの松をかよはせ、まつ君をさへ、まうけたるなん、あやしき。（つゞく）

忍ぶの日記

和田素子

世にすぐれてさかしき婦人はをの子にもまさりしとともあまたあれども素より才もなく學もなくたからも持ぬ身の何にを世のほたしともなく只常に名所を見ることこよなきたのしみと思ひながらいまだ名高きみちのくの松しまを見ざりしことの口惜とおもひし折から風流なる友の陸に下りたまふをいかにとさそはれければこは嬉しき便りを得たりと先旅の用意もそこ／＼にて上野にいたりぬ、頃しも卯月の中の七日の夕つかた忍ぶが岡の花のふぶきを跡にみてかな路車のいと早く田端王子は束の間に過行き夜もいつしか更行まゝにねふりを催す折から白川とよびおこされて

　いきたなき夢の夜舟のさよ中に
　　うつゝに聞ししら河のさと

とよみて友なる君に見せまゐらすれば笑ひたまふて何にやらかへしごとしたまふ夜も次第に更行き車の内靜にており／＼給仕の若人が仙臺こと葉にて物言ふさまいとをかしはや春の夜の明近く東の空しらみ遠山にかすみのかゝる氣色おもしろくながめて

　ほの／＼と明行く雲のやまの端に
　　かすみがくれにからすなくなり

明方仙臺に着しぬ昨日にかはり寒さつよし先車にのりて國分町なる針久といへる宿にいたる此家の作り何となく昔ゆかしきこゝちせられまづ顔をぬ

くひ朝げをなし道すがらのことゞもかたりなどして午後より市中を見物せむと車に乘り車夫の案内にて原田の邸跡より青葉城にいたりそれより經が峰の御たまやにまうでければ御代々の國主其他の御木像などを拜し古きむかしをおもひ又こゝより宮城野を左に見なし世に名高き忠婦政岡（實名三澤初子）の墓にまうでこれこそ世に知られたる女のかゞみよとおもひ

君がためつくすまことはいまもなほ
よゝに其名のかくれざりけり

又こゝにかはりたることはいづれの墓前にも生花にあらで皆造り花をのみ立たりそれに付むかしがたりを思ひ出で

いもかつにみとせ立たるにしき木の
くちしうらみを思ふふること

こゝよりつゝじが岡釋迦堂を見物なし此ほとりは花の名所と聞しかどもいまだつぼみだになく漸く梅のほころび初夕風身にしむばかりおぼえ宿にかへりしは夕ぐれなりとく湯あみをと宿の女のすゝむるまゝ湯にいり夜食のうへ今日の事どもかたりなとして九時頃に床にいる翌十九日はとくよりおき出で午前九時半の發車にて鹽がまへ行き太田やといへる宿にいたりこゝより男の案内にて鹽釜神社へまうつこは名高き安產の神と聞ければ

此神の惠みをうけて安〳〵と
をの子女の子をもふけ世の人

此やしろより松しまを見おろせば氣色いと宜しくさて坂を下り御釜神社といへるにまうづ是はむかし此所にて鹽を燒しかまなりとて大ゐなる釜四つあり其前に小社を祭りたり又こゝに我より先に男女二人連の見物旅人有りいつしか言葉をかはしたるに東の人にて本鄕片町に住たまひ姉弟のよしこなたは一人なれば松島見物の同船せんと約しそれより宿にかへりわりごをさせ此浦より共に船出して八百八島を見物なし船頭の案内にて物いふさまをかしさにたがひに顏を見合うらゝかなる春の日を波の上に暮し扇が谷といへるに舟をとめ坂をのぼりてしばし休らひ又船に乘りてこぎ行それより松島にいたり松島寺へまうで又五大堂を拜し船にて鹽がまへかへりしは夕四時頃なり宿へよりて停

車場へいたり仙臺へ着しゝは六時ごろなりやとへかへり湯あみをなし夕食をすまし明日は立んと何くれと仕度をなし十時頃にふしとにいる

翌廿日九時發の汽車にのり海岸線を行くこは思ふにまさるたのしきにてわれすぎつる頃やまひのため須磨に行き保養院といへるに泊り明くれ浦の氣しきをながめしも思ひ出られあらひ上たる砂地に松の枝をかしきさまいとよくにたりなど友なる君とかたりしほどになこその關にいたりぬ

おとに聞くなこその關は名のみにて
しるしばかりにのこる櫻木

こゝなむ名高き關ながらいまは其あとゝしもなしまた行ほどに水戸の停車場より見わくれば咲おくれたる梅の白紅にかをりゆかしく今しばしとめてよと思ふまもなく車はしりて早夕ぐれに土浦に着さすが名にそむかぬ霞がうらの氣色えもいはれず

眞帆しらほおぼろにみえて波の上も
かすみが浦のゆふぐれのそら

はや夕ぐれにもなりければ外面の氣しきはさだかならず只くるまの内にてさまぐ\物語りなどしてついにかはたれ時に上野に着しければこゝにて友なる君とをしきたもとをわかち家路にかへりぬ

待つ人もあらぬ身ながら何となく
こゝろせかれて歸へるふるさと

五月五日宮中月次御歌會御通題

社頭藤

くれてゆく春やたむけし神垣の
さかきにかゝるふちのしらゆふ　高崎　正風

みやしろにけふまふできてふち波の
花のさかりをあふきみるかな　水野　忠敬

春日山かみにゆかりの色ふかく
さきこそ匂へふちなみの花　宮地　嚴夫

みやしろの軒端のふちの花かつら
しらゆふかけてなひくたふとさ　小杉　榲邨

みつえさすわかかへるてに藤波の
花もかゝれりかみの瑞垣　鎌田　正夫

かみかきのとりゐのみしめ紫に
かけあらためてふちの花さく　大口　鯛二

神垣にひきわたしたるしめ縄に
さきかゝりけり藤波の花　千葉　胤明

まうてきてぬかつく袖にこほれけり
神のいかきのふち波の花　遠山　英一

從二位男爵黒田清綱先生撰

松下禪尼

（代撰者池武則先生）

天

千代八千代うつり行く世も殘るらん
この松下の庭のをしへは

東京青山南町七丁目二番地　森千里子

地

つくろひし紙の一重はくらからぬ
庭のをしへとなりにけるかな

東京京橋區五郎兵衛町廿番　高橋珍子

人

やれまをもつゝりし紙は家まもる
をみなの道のかゝみなりけり

東京麻布區東町四十七番地　林環子

甲

清き名はちよに流れてくむ　ひとのいまもたえせぬ松のしたみづ
東京　岡田柳子

世を守る人のかゞみとなりにけりうすき紙にもあつきこゝろは
肥後　徳永康子

すきまもる風をふさぎしかみにこそ　一重に庭のをしへとぞなる
東京　松本くす乙子

いまも猶よにこそのこれいましめの　紙よりあつき君がこゝろは
東京　駒澤定子

世の母のみちやくもらむ曇月夜　かまくらやまにきみしあらずば
大阪　船越小仙子

乙

つくろひし障子の紙は風ならぬおごりを　ふさぐをしへなりけり
三河　永井さい子

ただ一重紙のふすまのつくろひはよよの　敎へのかゞみとぞなる
肥後　徳永蓀子

東京　林艶子

ものみなはあてなきそへる今の世に君か手業をなしへてしかな
秋田　古瀬性子
かけたかき松のいほりの下すゝみいかにふすまや嬉しかるらむ

（以下到着順）

丙

東京　杉田繁子
陰たかき松の下ゆくましみつはひとのかゝみとよにてりにけり
東京　松本まつ子
ちりひちもこかねのはしとつみためて國のみ爲となせし君かな
呉　和住千鶴子
てつからに障子の破まつくろひて子をいさめけんいにしへの母
陸前　前田河みさを子
身を忘れよにもはかなきみなし子をめつる君こそたふとかりける
肥後　佐々小琴子
さし櫛のあかき心をさにつゝふいろにいださぬすがたたかしも
三河　榊原てる子
しめされし君かをしへは今も世に傳へてとはにかぐはしきかな
越後　外山かつら子
世をへにしみをもさとせり小障子のやれ間おとなう松の下かせ
伊豫　さゆり子
松の葉のこまかき心あらわれて千代に八千代にいろまさりゆく
伊豫　菫子
子をさとす厚き心はひとときれのうすきかみにゝしられけるかな
伊豫　せゝき子
匂ふ名はきゆる世あらじ踏だにもあだになさじの松のしたかげ
秋田　細矢はる子
この爲めにうきよの風を痛めはゝ障子のやれはつくろひにけん
薩摩　松原みれ子

つくろひし障子の紙のひとへにも千重の情けはこもりこそすれ
麻布　中村田鶴子
家まもる道よこのみちやれふすまこと〳〵につゝろ手わさは
和泉　稲原菫子
子のためとみ敎たるゝ柞そ葉のはゝそのもりのをしへたふとし
肥前　藤松りか子
みだれゆく末つよぼろにこれやこの障子つくらふ君もなきかな
神戸　今西みさを子
歌によみ文につつりて君かわさ世のかゝみともなりにけるかな
東京　田中都築子
まこゝろのみ諫め千代ののちまてもかみの此の世にいや尊ばる
岐阜　中島もと子
後のよのかゝみとなしてつくろひし君か障子はいまもあかるし
長野　細野美露子
君が手につくろはれたる薄き障子原襖より子はあたゝまりけり
肥後　佐々有隣子
世のひとの鑑とこそはうつし見れ千代松したのあまかふろまひ
北見　中川伊代子
夫と無子をいましめしこゝろこそよろつ代迄のかゝみなりけれ
日向　岸上はる子
時頼のきみのほまれもうべなれやこの母きみのおほせしものを
伊賀　佐々木まさ子
うすかみの破間つくろふこゝろより出でしはあつき敎なるらむ
備後　牟田榮子
尼きみのふかきこゝろは千代ふともとふとくあふく松の下かけ
岩代　菅野利子
まかつみもちいさきひまに發ろぞと敎へし人のしたはしきかな
肥後　徳永而有子
行ひはかみ一重をも世にあつきひとのこゝろのかゝみとぞなる

岡山 小山松枝子

天か下なひくおきても子をおもふ ふすまの紙にうつしおきけむ

尾張 後藤のぶ子

生の子のおしへくさにとこゝろして かみの破をつゝろなりけり

埼玉 横田秋子

としをへし老木のつゆのかゝりなは 世にしらるへき松のわか苗

大和 栗山多嘉子

松かえの一きはいろのまさりけりかゝみ とのこるきみか言の葉

大和 栗山俊子

つゝりたるへたての紙は うすけれとあつき敎はのちの世までも

肥後 千々波橋子

はりかへしつつりの紙はうすけれど まことの心厚くもあるかな

秋田 古瀬とよ子

子の爲にをしへみのりの岩しみつくむ 人ことのかゝみとそなる

津 神田みよし子

破れたる障子のかみのきりはりに物をつくろふみちをしへけり

熊本 吉住艶子

うるはしき千草も生ひぬしかすかに これのはゝその森の恵みに

熊本 田代綾子

はゝそはの露のめくみの深きより 枝葉しけくもなりにけるかな

埼玉 横田すま子

なさけある人とやいはんふかみとり 松の老木のきみのみさをゝ

信濃 羽入田常子

みどりなす松の木かげにせみころも 艶しき面に眞こゝろそ見ゆ

陸前 前田河千年子

千よろつと年はふれとも松のねのめくみのあとそ今もにほへり

東京 小坂みさを子

足ることをしらせんためのやれふすまいぶせく おくる松の下風

羽前 木村旬子

かまくらの木の下草のしけりしは庭のおし へのめぐみなりけり

百合

天

熊本市東寺原町 田代綾子

夏草のなかにまじりてなつかしき 花こそみゆれゆりの一もと

地

和泉國泉北郡深井村 福原菫子

夏草のしげみかうちにまじりても 姿ゆかしきひめゆりのはな

人

陸前栗原郡若柳町 前田河みさを子

家つとに折てやゆかん山ゆりの 花のいろかのあかぬあまりに

甲

東京 林艶子

まくさかる賤もゆかしと思ひけむ 鎌をのかれしひめゆりのはな

埼玉 横田すま子

夏くさのしげる野なかに咲そめて ひとりめにたつ姫ゆりのはな

吳 和住千鶴子

くさ深き野澤のみづにかげ みえてひとりさきつる姫百合のはな

生ひしげるちかやの中に咲きにけりひとりゆかしき姫百合の花　伊豫　薑子

乙

ふる雨にぬれてそにほふ姫百合は世のうつくしのきはみなり鬼　東京　林　環子

賤の男も花に なさけやかけつらんかりのこしたるゆりの一もと　秋田　古瀬りく子

露ながら手をりてゆかむ夏くさのしげみかなかのひめゆりの花　薩摩　松原みれ子

姫百合に鬼百合ましり咲きにけりこゝは名におふ花遠野のはら　大阪　船越小仙子

そよと吹くかぜにもこゝろおかるゝは咲けるさゆりの花の上露　能登　金森かの尽子

（以下到着順）

丙

生しげる草にましりてひともとのさゆりの花のゑみこほれたる　東京　松本まつ子

乙女子かなやめる影と見ゆるかなあめふる野路の姫百合のはな　東京　駒澤さだ子

なつ草のしげみかなかに 咲きいつるさゆりの花そ床しかりける　神戸　今西みさを子

生しげる下草のなかにめにたちてひともとにほふ姫ゆりのはな　岐阜　中島もと子

朝露のにほひこぼるるひめゆりの花のすがたのなつかしきかな　肥後　佐々小琴子

朝つゆをふくみて笑める白百合は天つおとめのやどりますかと　兵庫　山内勁峰子

たさなとちてうえし庭の姫百合にかすみに蝶もまよひきてとぶ　能登　松岡繁子

やれ庭に咲ゆりのかたうたいよる胡蝶のはねににほひこほるゝ　上野　井上滋子

たがみてもいとし心のひめゆりやさゆりにならふおみなごの道　福島　三森須磨子

夏草のしけれる中のひめゆりはよにたくひなくさきいてにけり　東京　山口琴子

ちりがなか染まらぬ心白百合やけたかく笑めるすかたそゆかし　金澤　北　隆子

白百合のつゆおもたけにうなたれてさくも床しきませ垣のうち　神戸　清水蕭子

あれはてし庭の垣根もうつろいぬ花かたぶけてさけるひめゆり　金澤　八島みつ子

誰かすさひあとも ゆかしくみゆる哉すかたやさしき床の姫百合　東京　辰巳末子

佐保姫の花のころもはいろあせてこずゑに老ひぬうぐひすの聲　群馬　竹野ふし子

おひしよりすがた優しき姫百合のさきのさかりは誰手折るらん　長野　田島みよ子

夏木立しけれるかきにしほらしく一もとにほふひめゆりのはな　大和　栗山多嘉子

すゞしさを露にふくみて筑波根になつをよそなる笑のゆりはな　東京　田中都榮子

八千草のしけれる野へに打まちりやさしくさける姫百合のはな　陸前　前田河千年子

露しげき小草が中に さきいでゝにほひこぼるるひめゆりのはな　肥後　徳永廣子

やさしさの姿にもにす百合の花競ふものなきそのかほりかな　東京　松本くす尽ふ

肥後　徳永而行

ただひとり千草がくれに咲いでて 人まちがほのひめゆりのはな
肥後 徳永萬壽子

道のべに草ふか百合の花さきて おもはぬ野べのなつかしきかな
三河 永井さい子

おく露にはゆもみだれぬ姫百合の花は ゆかしきすがたなりけり
備後 幸田榮子

しげりあふ千草の野べに色さへて 見るも笑ましき姫ゆりのはな
尾ノ道 片山松子

そこはかと夏の山路をわけゆけば 草ふか百合はいまさかりなり
岩代 菅野和子

おそろしきなにしはあれど 鬼ゆりのひめにもにたる心やさしも
東京 瀬藤らよ子

うらゝけき畑にゆかしく咲き匂ふ 白百合のはなに蝶のまゐくる
能登 高森以知子

あまつちのなさけにえみぬ百合の花 姿やさしきがもたえにして
伊賀 佐々木まさ子

わが妹の手植のまゝに生ひいでゝ ひともと咲ける庭のひめ百合
麻布 中村田鶴子

夏草のまつはる中にひめ 百合のひとりそ立てるすがたゆかしも
肥前 藤松りが子

時ならぬしもやおけると見る までにすゞしくさけり白ゆりの花
神奈川 菊子

けふ一とひ山にあそびししるしにと手折てゆかん 白百合のはな
神戸 今西美木子

筑波根のふもとに生ふるゆりの花 また一しほのながめこそあれ
埼玉 澤田房子

うゑおきし庭のひめゆり咲つらむ 見るひとなきを恨みながらに
日向 岸上はる子

白百合にやどる朝つゆなきゝみの魂やこもると 女手にうけつゝ
長野 細野美露子

朝露をおけるやさしき 白百合は鬼神もあはれ女神と化せむ
埼玉 澤田榮子

軒はくち垣はやれたる賤が庭に こゝろみたさぬゆりの一もと
和泉 中江なほ子

たをやめが姿もおもひあわされて手折らまほしきゆりの一もと
肥後 佐々有鄰子

ひめゆりの花のさかりは 朝な夕な蝶のにほひもなつかしきかな
三河 榊原てる子

踏はれしまがきのもとにゆかしくも露おもげなるひめ百合の花
越後 外山かつら子

ふるさとの庭のつきやま荒たれとひともとにほふ姫百合のはな
北見 中川伊代子

世の中のけがれし塵をよそにして香もゆかし ひめ百合のはな
秋田 細矢はる子

刈草をうしにになはしわらへらがいへつとに せん山ゆりのはな
東京 岡田春子

ふみわけてゆく方もなき夏くさの しげみが中のひめゆりのはな
東京 横内みはる子

たが爲めにひとり香ふやゆりの花 うきよはなれて岩のはざまに
岡山 小山松枝子

夏くさのしげみが中になつかしく ひともとさけるひめゆりの花
尾張 後藤のぶ子

こゝろなき 賤の男の子のかりのこすにほひすゞしき姫ゆりの花
東京 高橋珍子

翠のれのもれて 立にきそてがきに色香ゆかしきひめゆりのはな
肥後 千々波橘子

いひしらぬにほひなりけり夕立のなごり 露けきひめゆりのはな
能登 中江美子

野あそびの清き流にかげひくは乙女に似たるひめ百合のはな
埼玉　横田秋子

夏ふかきなす野の原を来てみれはむかしおほゆる鬼百合のはな
秋田　古瀬とよ子

姫ゆりのさける山べはうぐひすのはつねきゝえしところなりけり
熊本　吉住艶子

家つとにもちかへるらん山がつがましはにましろきゆりのはな
牛込　瀬藤きよ子

庭の面につゆをふくみてひめ百合の花重げにも咲き亂れけり
津市　神田正子

朝露のをきいてゝ見れはゑみひらく色なつかしき姫百合の花
津市　神田みよし子

をとめ子がふみよむまとの友なれや瓶にさしたる姫ゆりのはな
埼玉　横田やな子

色ふかき野へのひめゆり花咲てつゆもあはれのすがたなりけり
秋田　古瀬惟子

鬼おさみ茂れるなかにたゞひとりさくもやさしき姫ゆりのはな
愛媛　高橋茂子

ゆくみづにかげをうつして岸たかく一本さけりやまゆりのはな
大和　粟山倹子

一もとをともにおくりていさみせんすがたやさしき姫百合の花
東京　杉田繁子

まくさかる賤もをしとやのこしけん夏のにゝほふ姫ゆりのはな
東京　小坂みさ子

しげりあふ夏野の草のはがくれにしのびて匂ふひめゆりのはな
奈良　天野照子

夏草のしげみがなかにまじれどもすがたやさしきひめゆりの花
名古屋　満佐子

なんとなく床しかりけり白百合のきよきすがたの水にうつるは
久留米　田中まき子

しら露もかゝるゝ垣根のさゆりはな優しき乙女がかざしなるらん

●投稿定規

一女子は何人にても投稿する事を得
一用紙は文章及新體詩は半紙、和歌今様は半紙半裁又は端書を用ふべし
一題異なるものは必ず用紙を別にし、二葉に渉るものは必ず紙捻にて綴り置くべし
一題目の下には必ず住所姓名を明記すべし
一文字は必ず楷書にて句讀點を施し鮮明に認むべし
一文章は一行十五字詰にて兼題ものは四十行以内短文は二十行以内に限る新體詩も亦廿句以内の事
一兼題文章及短文今様新體詩等總て一人一篇づゝに限る
一兼題和歌は一題に付一人一首、短歌は一人二首に限る、但上下句中二音の漢字三字を入れ他は悉く平假名にて認むべし
一投稿宛名は國光社女鑑編輯局とすべし
一原稿〆切期日は雜誌發行の廿日前即毎回前月十日迄とす
一〆切期日に後れたる兼題は總て其撰に入れず但短文短歌今様新體詩は次號に掲載すべし
一右の規定に違ひたるものは總て採用せず
兼題當撰者には文は天一圓、地五十錢、人三十錢、歌は其半數に當る計算を以て代價相當の書籍を呈す

華族女學校教授　井上賴國先生撰

綠陰に書を繙きて

地

大阪市南區惠美須町貳丁目六六三番屋敷　船越小仙子

散りゆく花に春を惜みし衣の袖をぬぎかへて、今はた青葉の陰に時鳥を聞く、うつりゆく世のあわたゞしさ。この二日三日は針にのみ親しみし身の疲れを會心の歌集に忘れむと、折しもの若葉の風をなつかしみ榻を綠の樹陰にはこばせて讀む。

讀むは王朝以來の歌人、鎌倉右大臣の集なり。讀むにつけても思ひぞ出づる卿の事、あはれ、この卿よ、淸和源氏の嫡流に生れ、鎌倉將軍の職にありて、心のまゝに振舞ふべき身を、外戚のため左右せられて、やるせなき心の不平を海外にまで伸ばさむとせし一代の雄圖も、船浮かばねば空しくうたかたの泡となりてそれも叶はず、果ては今宵死ぬべき生命とかねて知りつゝ、一縷の髮を後の紀念にとゞめて鶴岡社頭の露と消えうせたまひぬ。おもへば世にも稀なる數奇薄命の生涯を、いかなれば武勇は父にも兄にも劣りて蹴鞠に耽り文弱に流れ以て源家の滅亡を招きしなど、あらぬ謗りをうけたまひしぞ。鎌倉の風、心あらば、などて世人に卿が心を傳へざる。かく思ひつゞけて卿の歌集を讀めば、一首一首に卿の精神あふれて、さながら胸の血は湧きたつばかりなり。あはれ世に歌集はあれど、卿の集ほど身に沁むものはあらじかし。綠の樹陰、青葉を渡る夕風に鬢の後れ毛ふかせつゝ、けふも暮れゆく空を斯かる思ひに耽りぬ。

人

肥後菊池郡城北村　德永廣子

野に山にあこがれし花染衣の匂ひさへ忘るゝばかり身もかろき夏衣の今日となりては風かよふ若葉の蔭も

いとなつかしくて庭の木かげに牀机などもち出して一人たのしく見さしし女鑑第十五年第四號のいとゆかしき菊子君の戰死せる軍人の未亡人に贈るといふ文は、しみ〴〵心しむる心ちして、くりかへし默讀せしに、窓うつ霰の音にも、ふきくるかぜのさむさにも、遠征の君のしのばれ候をりからの御文章、げにげにわが身の上にまねきし心せられぬ。まいて妾がはらからも遠征の人の數につらなり侍ればおなじ心の思ひにいるぞかし。いといと心やられてよみくだす程に時ならぬ時雨の泪をもよふしぬいく人ともしらぬ未亡人は、しげ木がもとの三どり兒をかげとして、さびしき月日をおくりたまふらん。かく若葉すずしき日とてもかかる君にはひたすら二葉の上におく露のみしげからんと、人の上をもおもほえて世のありさまをしのびつるをりから、さつとふく風に靑柳のなびくひまより立花のほりもゆかしきをりから、郭公さへ名のりいでなばいかにあはれもふかからめやはと、一人かこちつるしのび泪をしぼりぬ。

柞葉のをしへの露のたふとさにむすぶこのみも千代にかくはし

人

北海道札幌　笠原まき子

隙行く駒の足早み昨日けふと暮れゆくまゝに、あらがねの土も熔けなん斗の夏は來にけり。あはれ夏とし云へば、氷水よ削氷よと、其のかたの設ありても、猶ほたへがたく打ち亂るるをまいて身を、おくばかりなる草の庵は、せんすべもなく困じければ、とくのがれて涼しき影もとめんにしかじと、近きわたりの木立生ひ茂れる處にハンモックつり。身を横ふれば靜けき風の聲も吹きつたへて涼しさに蘇生りたる心地しぬ斯くてたづさへ來し書をひもとけば、先に覺束なかりし節々もおのづから釋けていと嬉し。心ばへ深きくたり〳〵は、いとゞしみ〴〵とおぼへ大方に見過しゝ一言も細かに思ひ知らるゝに愈々おもしろく、わからめもせで見もて行けば、遠き昔の人もさし向ひたらん、心地せられて實に實にとうべなはれ、あるは

有るまじき言もとき腹立しくいとほしく涙もはふり落ちぬ。あはれかなしくも、ねたくもあるかな。ふとねぐらに急ぐ鳥の聲に驚ろき見やれは、終日下界の人々を苦しめたる、日の光は早や山の端に、かくろい空は暫し夕やけに、深紅の色に彩られぬ。

世に樂しみと言ふ事いと多かり。花に月にあるは音樂など、いへは、總て人の嗜好にかなへるものなり。されど此は皆一時の耳目を喜はしむるに止るのみ、誠の樂しみと言へは、實に夏の暑さを鬱蒼たる木影に避けて波立つ芝生の上にそよけき風を身にあびつゝ、清き心もて書をひもとくにあり。

人

岡山縣御津郡一宮村　小山松枝子

霞の衣花の袖などいへる春の日もいつしかすぎゆき、庭の木立一入色そひつゝふかみどりぬれたるさまもいとゆかしくて、例の書とり出し木かげにうちくつろぎてひもとく嬉しさ、そよ〳〵と若葉をわたる風さへ涼しきに、さても名高き博士の說、あるは見ぬ世の人のをしへなど、あふぎて心のちりまではらひぬ。あはれこゝちよき綠陰よな、大氣淸くわたり靜に、ちとせふるもみさをかはらぬ松の下になつかしき書を友として夏をよそなるたのしみ、何事かこれに及ばん。

されど、わらはらのかく安く日を送るを得るは、大御代の御惠と勇壯なる大和益良雄のたまものとなり。今や幾十萬の同胞は海外に艱難辛苦を犯して、國家のためつくしつゝあるにあらずや、かのやくばかりの暑さをものともせず矛とれるみいくさ人の身上を誰か思はざらむ。まいて朝に夕に父や夫を慕ひ子を憶ふ家族の心やいかに、そをおもひやれば大和民族たるものいかで安逸に過すべきや。淸涼なる氣をうけて天地ひろく自然の景も佳なり、つとめて心をみがき身を健全にやしなひ、戰捷國の國民たる名をけがさゞるやうなさでやは。

備後 片山松子

あらがねの土も裂けなん水無月の頃は綠の陰こそ殊に懐しけれ。我は烈しき暑の堪へ難きまゝに、好める書物とも取りいてゝ築山さして上り行きぬ御空を聳ゆる杉の並木のあたりは、流石にするどき光りも洩れで、芝生の上に腰おろせば、木の間を透りサヤ〳〵と吹き來る風の心地よく面を拂ひつゝ、讀み行く時のすか〳〵しさはげに此世の外の思ぞしける。かくて文机にて解け難かりし疑の雲さへ今は自ら晴れゆくにぞ、嬉しさの餘り遂に讀み終へぬ。あはれ涼しき綠の陰哉と思ふ折しもけたゝましき鈴の響に打驚きて暫し忘れし滿州の空の再び思ひ出られてはうたゝ、此身のかく安らかに文見る事の何となく心苦しく覺えてやう〳〵胸は曇りそめぬ。

越後 外山かつら子

日をへし雨も今朝は麗かに晴渡りてそこゝ庭石の窪みには、景色斗り雨水殘りて濡亘りし青葉の早乾きて、打そよげたるえも言はれず涼し。ふと心付て、取出たるは、京の兄上より送りこし玉へる小包なり是。何ならむと披き見つれば、妾が好む歌集と釣床となり。其嬉さ何にかたとへむ。急き庭下駄すべらせつゝ、楓と梧桐とにかけて乘りふしゝに、その心地よきこと限なし。さて歌集は何艸とか呼びて、某の會の才媛達の作なりとか、涼しき風にひらかせて讀みもてゆくに、長きもの短きもの、取々に面白く、思を述たる、月花をかなしべる、各も各もなつかし、あはれ、同じ人、かはらぬ女なるを、如何にして、かくもめでたうものさるゝならむなど、獨ごちつゝ、果は思ふ儘、ものゝ學びなし得ぬ、わが身を恨めば、慰るとにや、將たいさむるとにや、下枝のわく綠葉を傳ひて、冷たき雫ほろほろと頰にこぼれ、美くしき蜻蛉の二つ三つ襟にとまりぬ。

東京 岡田柳子

咲く花に厭ひし風も、新樹の蔭に慕はるゝ頃とはなり、暮れゆく春を惜みし心も、櫻ならねど散りゆきて、庭の木立、綠滴るばかりになりぬ。今しも村雨さと降りそゝぎて、懸れる塵を洗ひ、折々玉なす雫さへ落つる、楓の蔭いと懐かしきに、

讀みさしの太平記を手にして、そゞろに立ちよりぬ。快よく吹き通ふ風のいひ知らず床しきに、いつしか心は書中にさまよひ入りぬ。卷を開けば、世に孝子の譽高き、阿新丸のくだりなり。折も違はぬ若葉の頃の、まだ浦若き齡にて、住み馴れし都をすてゝ　人も通はぬ佐渡か島に、父君を尋ねゆき給ふ愛き旅路の露けさや、如何ならむと、そゞろに落ちくる袖の涙は、村雨の雫よりも、増りてなん。哀れ斯迄に長途の勞を厭はで、來給ひしものを、情なや一度も逢ふ事叶はで、父の卿は、そがさ月の末つかた、遂に討たれ給ひぬ。哀れこをきゝし阿新丸の心の中や、如何なりしならむ。さしかはす若葉の繁き物思ひ、重ねし御身に、尚ふりかゝる涙の雨は、いかや上にも君が袂をぬらさんとてか。悲しさ哀れさ身にしむ折柄、心ありやなしや楓の露のはら／＼と　書の上に滴りたるいよ／＼其かみの忍ばれてなん。

愛媛　高橋茂子

さまで厭しとにはわらねど、青葉しげりて、夏を外なる我庭に今日も好める詩集繙けば、親しの妹の小學讀本手にして來たり、聲を合すもいとおかし。互に讀みつ教へなとして、やがて例のお話をとせかまれぬ。弟はハンモックに之れも樂しく、いつしかうたふ唱歌の聲や聞えけん、祖父さまも笑顔にいでましぬ。何をもかなと、のたまひければ、新しき戰記を取り出でゝよみ聞え參らすに、ほく／＼と喜び給ふ嬉しさ、されど年老いし君の長くは之絶えたまはで、またを約しぬ、妹やいづこハンモックの屋や如何に聲なし。わたり森として青葉をわたる涼風に心すが／＼しくさえづる鳥も讀書を促すに似たり。あゝ愉快。思へばなか／＼の幸の身にこそ、さてもうつり變りは、世のならひとは云へ、わて人はいざ知らず、昔は男子すら奥深く學びの道を極めしもの數少くましてや女子の身の今更云はずもがな。さりとはうたてき限りにこそ。さればすゝみにすゝみし今の世のうれしさはた樂しさは、また如何ばかりぞ。我先に文よむは更なり、昔は思ひもよらざりし、をみながらも避暑旅行をみ山に試み、晝なほくらき綠陰に諷咏の聲をきゝ、如何にまた牛かひはらべも聞の

べの木かげに文見てよねんなし。げにつく〴〵と昔と今のけじめの甚しさを知るにつけても、なほ〳〵すゝみゆく世につれ、いよ〳〵夏木立のみどりも深く、文の林にわけ入らめでやはと、のぞみ多くもまた〳〵讀書をつゞけぬ。

岩代　菅野和子

月日の流れ行くは疾くて、矢丸も及ぶまじ。思へば未だ隣の里さへ踏み見ぬ身の、心のみはやりて、兩親に請じ遊學の事許されて夜一夜泣き口惜がりしは、はや四年の昔となりぬ。來む年の此頃は、業をへて、桑に機に父母の助けに忙しからん。而かも社界の一員となり、如何に辛酸を嘗むべきか、世は怒濤も啻ならずとか如何に航路の難きか、觀じ來れば、僕は將來の夢を辿りて、未了の書の同じ行りを繰返し〳〵てぞ、身は「ハンモック」に釣られたるを忘れたるもおかし。アゝ、此木陰も此歸省限り、いつまでか幼心に過されむ。昔の友垣は皆嫁げり。子寶儲けし人もありと聞けば、いかに樂しかるよ縱し我は口辯なき古郷にかへるとも、ゆめ學び得し才能を、したり顔なる擧動には出すまじ。家にありては專ら家業にたづさはり兒女の養育に勉め、團欒の「ホーム」をつくらば、天賦の幾分を全ふするならんと、勇んでまた、讀み續けば、夕日は森々たる綠樹を漏りて、希望の光を射ぬ。

前橋　林廣子

晴れ渡りぬる今日の空いとめでたし。親しき樂子様も來まさでつれ〳〵に淋しきものから我が愛するハンモックつらんと片手に書を持ち、林下に歩を進めき。こゝは、いと靜の地にて人通もいとゞ稀に、四邊は松の木立茂みて、吹く和風も心地よく、これに和してか遠く聞ゆる風琴いとゞ、節面白ふなん。兩の枝につり、身を横へて手にする孝女白菊が歌、さても榮枯定りなく、浮沈常ならねば、人世の姿沈み果ぬる悲慘薄命の一少女世の戰亂につれ父には別れ、母は死し兄は怒にふれて家出せり。後に殘るは年まだ淺き白菊只一人よみもてゆけば自らたきつ涙はせきあへず、ぬぐひもあへぬかな。操も正しき白菊婦女の鑑と歌はれて今にその名は、香はしき……」再び三度くり返しよみつ終れば隣もれる風琴の音も、いと、うすくとだえ〳〵てさながらに、浮世の外の心地すなり。あゝ讀書の快樂はそも何を以てか之に比すべきか。

和泉　鶴原益子

今年の水無月は、わきて雨さへ少なく、照りはたゝく暑さのいと耐へがたう覺ゆるなりから、はやくも夏期休業となりければ、急ぎわれは故郷の和泉に歸りぬ。なべての人は、あるは箱根、あるは伊香保なとへものして、おのがじゝ、さま〴〵の業して、日毎に遊び暮すめれど、われは永き日影を徒らに過ごす事の、いと飽ぬ心地のせらるゝに、さればとて、かこかなるわが室のむし暑ければ、生ひ繁れる木陰でよけんと、朝とく起きいでゝ文机など取り運びて、綠したゝる若葉の下に、席をうつすなど言ふ許りなう涼しげなり。木々を渡る風さへ樂しく、自ら心浮き立つものから、ふみひもときて、いとむつかしげなる節々も、例よりは容易く解き得られて、いよゝ讀みもて行くに、さながら、古の忠臣孝子貞婦なとに、まのあたりさし向ひたらんつゝ覺えて、心地とみに澄み渡りきて、いよゝさやに學ひの道を忽に、すべからざるてふ事さへ深く心に響はるゝもうれしきや。實に物學びせん人は、あたら夏日を湯治などに費さで、清々しき綠陰に書を繙かんことをこ

そのぞましけれ。

能登　高森以知子

いつもながら乳母の優しき心ずかへに、姿は背物片手に庭下駄ひつ懸け、初袷の裾軽ふ裏庭におり立ぬ、築山のほとり、松櫻柳さては桐などの、青葉若葉の小暗きまでにおひ繁り、枝を鳴らさぬ涼風のそよ〳〵と、見るからに清々しく春にもまして好ましき緑の木陰、兄のわざなるかちよ木の陰に、ハンモック釣りあるに獨りほゝえまれて、姿はそが中に讀みさしたる女鑑を繙きぬ。若菜てふ小説、美ちやんと呼ばれし可憐なるまゝし子の、下婢までに苛酷まれ輝だになきを、あやまるいぢらしさ目のあたりに見る心地して、同情の涙に袖を潤し、諸姉君の敷島の道にたけ給へるを羨やみ、はた美しの文など拜しては巳が才なきを悲みぬ。朝な夕な見なれし我庭ながら、此美しき景色みては氣も浮き立ち、いよゝ聲高らかに、一のよどみなく水の流るゝが如く、讀みゆく事の心地よさよ、別天地とはかゝる處をや云ふならむなど思ひ、はては常てもなき空想に耽りゐし時しも妙なる、木履の音して「姉さん母様が呼んで御出るぜ」と、可愛ゆき妹が聲、あはれ、床しき此處緑の木陰去るに忍びざる思ひなせしも、母君の召し給ふと聞き、後の日を約して母屋の方に足を運びぬ。あとには又一しきりの涼風、アゝなつかしき青葉の木陰!アゝ樂しき緑陰の讀書!!!

東京　杉田繁子

水無月の初めつかた、ちりばかりの雲もなく、照はたたく日影に、単の袖も、おもく、針とる業さへ、物うければ、庭の木かげをたどりて、文にても讀まばやと、文箱より何かと取出し、日に焼けし、敷石ふみつゝ、木深き下陰に行き、簀にやすらふ。えならずにほひたりし、花の梢も、今は、緑の露したたらむばかりの、青葉となりて、葉がけに實の、赤く、黒く、結べるさまおかしきに、池の中なる、蓮の浮葉の、ゆら〳〵と、吹くる風にうちゆるぐも、また一きはの眺なりけり。しばしして、文をひもとくに、源氏、常夏の巻にて、いとあつき日、ひんがしの釣殿に、大殿の君達、あまた侍ひ給ひて、高欄に、せなかおしつゝ、打とけて、すゞみ給ひ、おかしき御物語有しも、折に合たる一節とて、ことにゆかしう、妓に親しき友もがななど、さう〳〵しうさへ覺ゆるに、家なる使人の來りて、母君の呼び給ふと告るに、何にかは知られど、彼の釣殿より歸りゆく、君達のおぼされし、さまにも似て、夕べにもならましかば、風のいかばかり、すゞしからむと、立去がたくてなむ。

奥　和佐千鶴子

さすがに目もあやなるまで、けはひせし佐保姫の心づくしし、行く春は、關路にも止まりあえず今は、見渡す梢の色も淺みどりして日の光さへ夏めきぬ。小田の蛙にさそはれて降る雨の一たび毎に色まさり、蟬さへきなかん心地こそすれ。かゝる時なき家居にこもれるは本意なし。いでや彼の木かげに書よみてんと、愛讀のふみとり出でゝ庭におりたちぬ。うちあふぐ木々には、一片朽葉もなく、皆一色に見わたされ、庭もせみれば、よべのはゝきめ、あとゝめて、ふみわくるさへ惜しき心地す。よみもてゆく古のかしこき姫たちの、行ひのいとも、たふとく、さながら今もえそめし若葉のごと、清きその名は、後の世までも打かをりぬるにぞ、そゞろ見ぬ世の昔しのばれて、あくがるゝなりしも、そよ〳〵と、びんのほつれ毛ふく風のさながら、そのかみの事さゝやくごとくおぼえて、身は塵ひぢの中にありても、心は遠き仙郷にはせゆきぬ。あはれこの若菜と共に君が恩の露にうるほひて、いや生におひ茂りて、土さへさくてふ三伏の夏の日を行きかふ人にたゝへらるごと、われも勵みて緑葉の、それにもまして國のため、世の爲せちにつくさなむ。

群馬　竹のふし

漫歩きの路すがら友垣よりの使に出逢ひ、書物を寄せられしまゝ

そな手にして、猶もそこはかとさまよふに、足はいつしか亡き母君の奥津城に向ひぬ。去れど思ひ設けぬ墓參の事とて、花も携へねば香もなし、折柄傍に咲亂れし野菊一本手向けて跪きぬ。仰げば上は老木の楠に掩はれて、空も見えぬ迄茂り、邊りに人も無くいと靜なる儘、先の書を繙きぬ。さはれ書は見れど讀めず、目は走れど其意の解せぬは、如何なる理ぞ、あゝ思へば亡き母君の病重り給ひし枕邊に、其物語讀みて、徒然を慰めまつりしも、かく青葉茂りて邊り小暗き頃なりき、母君には甚く喜び給ひ、久々にて病のうさを忘れつる、さはれ是れ亦よみの土産となるならん打しほれ給に、妾も共に袖絞りぬ。それより幾程もなく、其月十九日と云ふに歸らぬ旅に赴かれしなり。去を今日計らずも母君の墓前且時も同じ青葉の木陰に、書を繙く、如何に思出多き事なるよ、今はあらん限りの聲立てゝ讀み參らすとも詮なし、あはれ母上よ、何処の土産ものたまうも泣かじな、一言いらへ給へかし、と念ずる折しもかなたの鐘樓の屋根に鳴く鳩の聲ぼろ々々といと淋し、あゝ。

東京　星野千代子

あらがねの土も。裂くる許り、日の神の、射給ふ、棘矢の烈しき、若葉に萌ゆる草も、木も、みな醉ひ伏してために眠れるが如く、其火炎の立ちのぼりて、空に打ちけぶり、門田の稲に、いさゝかの、そよぎもなければ、獨り暑さに堪へ兼ねて、讀みさしの、書物携へつゝ、後手なる小山に登り、大樹の下の、自然石を椅として腰打ち掛けぬ。後は繁き林、左の裾は、せうがきの、清く流れて、潺湲たる響の、いと心持よく、谷間をぬふて、吹きくる風も、冷かにして、肌を洗ふが如く、氣も、心も、澄みて、うれしければ、例の歌集取り出して、讀みもて行く。自ら打ち誦づれば、様々の、おかしき景色の、前に湧出して、あはれ古への大宮人の月に吟し、花に歌へる、秋の浦和の、さびしき夜すがら、草枕に、あかし兼ねたる、なぐさめ難き寒夜の思ひを、茲にやりつるなど いとどしのばれて、目を閉づれど、あはれ物狂ほしや、涙こぼれて、我が心も茲ならず恍惚として打ちながめらるに、眺むれば色も無きものを、思ひ入るまゝに、徐々深く、彼所の山、此所の湖 遠き京の空までも、只見る前に現はれつ。心の駒の行きつ、戻りつ、果ては何所にさ迷ふらん。茫々たる、滿洲の大野原、見渡す限り、夏霧深くかゝりて、馬蹄の塵の、空を蔽ひ、風陣一度、吹き起りて、なる神の、一時に、落ち來るやう、おどろ〱しく、天地も爲に、裂けなん計り、恐しき軍の、現じ來りて、思はず、身の戰慄けど、やがて我に歸りたり。つらつら思ひ廻せば、實におほけなく、扨も有り難き御代かな、去年二月の初より、二年かけて、打ち續きぬる戰の今や、皇軍の、勝利に歸して、彼の天に逆ひ、强を侮り、弱をは虐たぐる、暴逆なる、勁敵も、遂に挫けて、雨後の白露に於けるが如く、日の光の、さしそひて、匂ひ目出度旭の御旗の、靡かぬ限も、なきに至りぬること、誠に、君の惠みならずや、其の恩德の廣大なる、外は巨弓の大敵を受けながら、しかも、内地の此の靜けさ、九重の、雲深きあたりも、申もかしこし、賤が藁屋の、こけむす軒に至るまで、朝に起き、夕に寢れ、各々其業にいそしみつ、小鳥は枝に飛び、胡蝶は花野にたはむれつる、皆其惠みをうたはぬぞなき、況して、文の林に、分け入る、我等が、身の、いとゞうれしくて、今日は一しほ、此木陰のなつかしさに、衣の袂も濕ひぬ。仰げば夕陽西に落ちて、名殘の空の美しう、早や木々の末葉も、生き返りておかしき露の白玉、はら〱と、こぼれかゝりぬ。

信濃　羽入田常子

餘りの暑さに、身體の疲勞を覺え涼しき風の群に、誘はれたき心地す、急に家を出で、草青々と、左には、清き小川の流あり、靜々と行くみちすから、土橋を左に渡れば、高き所に神社あり、其傍に楠の巨木見ゆ、側に行き見れば、幹に大きの穴ありて、はやさめの降りきし時なぞは、二三人の凌ぎは充分ならん、

この葉の陰は、涼風ふきて、身にしみ〴〵愉快を感じぬ、四方を眺むれば、はるか向には線路あり、後には山をひかへ、汽車は北より來りて停車しぬ、此の汽車を見るに付けても、良人の乘られし室は、あれなれや、又これなれや、そゞろに其の室の戀しく、妾も同じ室に乘り、滿洲の野にある、戀しの夫の側に、送られよと、願めど、氣早の汽車は、汽笛一聲早我が里は離れたり、良人の出立の時なども、此の一笛が、睦まじく握りし手を別ちけむ、おりからかたへにありし詩を繙き、見れば、中程に、戰地にある良人を慕とあり、我も同意なれば、何となく、なつかしく覺ゆるまゝに、繰返しては讀み、又繰返し、古の事の忍ばれて、戀は益益烈しく、友あらばぐちも聞かせ、胸晴ることも、あるべきに、思へばやるせなき心地して、暫しは顔は上らず、體は崩れけり、をりから耳元に、誰か我名を、よぶ者あり、顔をもたぐれば、軍服の筋つけたる、可愛の蝶の、右に左に、さまよふ樣の、あいらしく、今迄胸にとざゝれし、雲も、今は一斑の雲だになく、清天の如くなんとなふ、戀しき人に逢ふ心地して、袖引き、姿のかたにとまられよと申せど、こたへはなし、

日も早暮んとすれば、名殘は未だ盡ぬれど、又の逢ふせをたのしみに、胡蝶に別れをつけぬ、

東京　山口孝子

春の花もいつしか夢と過て、草葉のみとりのうへに、むしろなとしきて、ちりを打はらひつゝ、文ともさま〴〵ひもときなとして日々に三度我身をかへりみるとあるに、おのが心をさとされて、うれしう、文なかりせは、心のやみもいかてはらさん。をしへおきし千代のふる道くりかへし、なかれをくむもうれしかりけり、長きひのくるゝもしらてなむ。

三河　佐野信子

長閑なる春の、名殘を留めて暮れ行く程に、暑き夏には近きて、今日は朝より晴れ渡りて、太陽の光はいとも強く暑く此の下世界を照らすなり、小窓の下に單坐して文讀むことの、苦しければ、纏き居たる女鑑をば片手に取りて、つと立ちて庭にぞ出てなん、あたり靜かに見廻せば、彼處に背梨しけりてわだかまりたる樹の下幸ひかげりてこそあれ、嗚呼よき處得たる哉と、直ぐ飛石を一ツ二ツ亦三ツ踏みて、身をは木陰にやつしてぞ、亦も女鑑を繰り返したり、斯くて五枚十枚と讀み下せばやがて懸賞文も終りぬる左らば續きて短文と見れば不幸なる友と題ある此の一節に、妾が身の上心にかゝりて、扨ては今迄己が氣まゝに日を送り今も今とてかゝる我がまゝ思へは、過去の行ひのはづかしく亦此の行く先きは如何ならん、

短文

わが務

豊橋高等女學校卒業生　後藤いさ子

文運駸々皇威赫々軍國多事、これ我が國今日の状態なり。實に我等國民の光榮此上なきと共に其責任の重大限りなき時ぞかし。

抑々おのれ此校に入りしはじめは物の理人の道のかたはしだにわきまへ得ざりしを、師の君たちの厚き御敎によりて、いつしかおぼつかなくも勇みて、世の荒海にこぎいでん覺悟をさへさだめ得つるぞうれしき。

今やわが忠勇なる將士は、血潮流れ風なまぐさき滿州の野に、命をかけて戰はれつゝあり。內農夫は、雨風はげしき朝夕も、鋤をはなたで粮食をつくるに餘念なく、商工また、其道に一身をさゝげて國の富を積まんとして止まず。

あゝ、御代の惠、師の惠、國民の惠を限りなくになひて、文明國の女子として、戰捷國の婦女として、世に立たんとするわが身、如何にしてか此等の大恩に報い、かの大なる責任を全うする事を得ん。たどるにともし火あり、行くに杖ありし今日迄の月日は、かの軍國に一身をさゝげらるゝ軍人の、かたき心を身にしめて、たゞ力の限り師の君たちの御敎を守り學びの業にいそしみしを、げに明日よりは、大海に楫なき身となるをいかにせん。

あゝたゞ、かねて心にさだめつる覺悟をばいよゝかたくし、日頃學び得し知識をばいよゝひろめて、學びの業を、世の事家の業に活用し應用せばや。おもふに、一國の發達は、一家の健全によらざるべからず。一家の健全は、主婦の才德にまたざるべからず。然るに、今日我が國の家庭、特に其主婦の務こそ、なほ改善を要すべきもの多けれとは、人ごとに說く所なり。然らば、我等の責任重きと共に、また我等のとるべき務多しといふべく、我等のつくすべき道遠しといふべし。いで、此覺悟の下には、千苦をも犯すべく、此つとめのためには、萬難をもしのがん。かくてこそ、せめて御代の惠、師の惠、はた、國民同胞のなさけのかたはしに報い得めと、心にさだめつる一ふしを諸人の前にちかはんとてかくなん。

學びの業

豐橋高等女學校卒業生　山口芳香

はてしなき學びのわざも、師の君たちの御惠によりて、今やその一しきりはわたり終へつ。凡そ、人そ智をみがき、その德を修めんとせば、學によらずしてあたふべしや、まことに、身體の保全は食物により、精神の發達は、たゞ此學びあるのみ。さればこそ、學びの業、終りなくして、身體つき精神亡びて、こゝにその終りを告ぐとはいふべきなれ。

あはれ、かくも大切なる學びの業も、明治の御代のそのかみは、女子に害あるものとすてられ、此大御代となりてすら、なほ、女子に要なきものと思ひなされしことのくやしさよ。あゝ、誰かこを學びの眞價といふべき。これたゞ、學ぶものゝあやまれるにより、をさむる女子のあしきによれるのみ。

今日、わが日の本は、世界の文明國としてたち百事日進月歩の勢にて、やむことと知らぬ大御代となり、學びの業はいたるところにひろまりて、高くも遠くもおもふがまゝに、わけ入らるゝ世とはなりたれど、靜かに考ふる時は、女子の學びのみは、今なほ、そのあゆみゆるきが如し。

今や、軍國多事の一面には、刻々わが國光を世界にかゞやかしつゝあり、從て、わが帝國の責任は、いよゝ重きに至らむとす。

此時にあたりて、われ等婦女子のつとむべきは何事ぞ、近くわが身のつくすべきは何事ぞ、今やおのれらは定めの業をゝへて、明日よりは、黒き赤きたゞ心一つに分てとの都の空に、いやふかき文の林をわけんとす。あゝとるべき楫、おのづから定まれりといふべく、さだむべき決心おのづから明かなりといふべし。

いで明日よりは、わけ入らむとする文の林は、如何ならんとも、たゞ一すぢにつとめはげみて、志す方に達すべし。かくて、その道けはしく、はた、雨にうたれ風におそはれんは、もとより期することなれど、たゞ如何なる折も、如何なる時も常に、わが國婦女子の特性として、古來外つ國人に、ほこり來し女の道をば、ふみたがふことなく學びの光によりてこそ、いよゝ其美を、あらはさめと心がくべし。あはれ、かくてこそ、今日わが國家の急務たる女子の學び、女子の教育を、いよよ隆盛ならしむるかたはしともなり、せめて限りなき御代のみ惠、師のみ惠の、千々が一にもむくいまつり得べきかと、おもひさだめつる一ふしをかくはものしつ。

初夏

和歌山市屋形町三丁目八番地　高内さくら子

年たちてより、いつしかとまち渡りつる花のさか

りも、一度逝水に送られてより、木々の若葉はいよ〳〵繁りてあはれ雪とまがひし花の梢も、立ちならぶ、青柳とひとつみどりになりはてぬ。時を得がほの卯の花は、木の間をもれし夕月の、かげかと見えてをかしく、深山がくれに殘んの花を見出しては、そゞろに春の名殘の惜まるゝ折しもうぐひすならぬ時鳥の一聲二聲高くなのりて、いづち行きけんすがたの見えずなりにしこそ、又なくあはれにおぼえしか。

靖國神社祭禮に於ける諸感の一つ

石川薰子

何處から此樣に人が集まつたのか、動く事も退く事も出來ず、進退谷りて立て居た。胸の銅製の櫻花の徽章を付た人を見る度に、實に何とも云へない悲感が起る。若き美敷人の黑髮おしげもなく切り下げ、頸うなだれて逍遙して居るのを見れば、其心根や如何ならんと、同情の念は涙となつて我頰を濕すので、有憐れ憐幾萬の戀しの夫いとしの愛子は、神となつて此處に祭れて居るのだ。木綿黑紋付毛繻子の帶草履ばきの田舍の老夫婦が「有難え事だ、常は神樣に成たゞよ、廣い家で友達を居るだから、淋しい事もない、ア、常のお陰で、天子樣も拜まるのだ、有難い事だ」と老父は感極まつてか目が濡で居た。然し老母は一言の答なく玉霰の如く、兩頰に傳る涙噫知らず彼老母の熱胸にはそも何物の潜むにや。

吾に從へ

麻布　孤峰　哲

▲吾汝等に告げん、汝等蜂に學ぶ所あれ。蜂は花より得る所あり、花を助くる所あればなり。

▲吾汝等に告げん、婦女を目して腐敗せるものなり、墮落せるものなりとして排斥する莫れ、如何なる有德の君子も、婦女の產出する所なればなり。

▲神は天國に在り。天國は近きに在り。悔い改めよとは汝等の旣に聞ける所ならん。

▲吾汝等に告げん、天國は宇宙に徧滿せり。而して神は、宇宙の精神にして、又た汝等の形に隨ひ居る事を。

▲汝等彼の活潑なる娘子軍を見ずや、彼等の跳ね廻る所必ず彼等を陥し入る可き穴あるを知らざるが如き事を。

▲吾汝等殊に娘子軍に合せん、賢母良妻たらんと欲せば、汝等の脚下にある神に從屬せよと

▲汝等夜會服を着て演會に入る事は大象の蜂巣の穴に入るよりも難し。

▲汝等夜會服を着て演會にのみ出入せんと企圖し居る僞善者を見しや、彼等は大なるコートを著けたり、彼等は其の衣の中に私生兒を抱き居る事を

▲汝等蝮の裔よ、身を膨らし、名利を以て腹を脹らし、金錢名譽のために、池上に匍匐へる彼の僞善者に習ふ勿れ、雲雀の如く彩霞を踏みて、碧空に翱翔するに習へ。

▲汝等彼の陽春の爛熳たる花を見しや、盛夏の炎炎たる暑さを知れるや、秋の四山紅葉する事を見しや、又冬の白雪皚々たるを知れるや、若し果して知りなば、汝等既に神を知れるなり。

▲吾汝等に告げん、男子門を出づれば七人の敵ある事を、然れども汝等は、門を出でざるも既に百千の敵あるなり。

▲汝等煩悶せよ、煩悶の後には必ず燦たる光明の汝等が心を照すあればなり。

▲吾汝等に告げん、僥倖は眞に神をして邪界に誘惑せしむるものなる事を

▲自己の身に光榮あれと願ふものに告げん、眞實の光榮は他より來らざる事を

▲吾汝等薄志弱行の從に告げん、忍耐は能く一切の希望を遂ぐるものなる事を

▲吾汝等に告げん、死を恐るゝ勿れ生を悦ぶ勿れ生を悦ぶものは永眠し死を恐るゝものは長へに生ずればなり。

▲汝等憐れなるものに告げん、颶風渡れば諸竅虚となり一念起つて萬境の現ずる事を。

▲汝等吾に從へ貧しきものに幸福を與へん。

▲汝等吾に從へ迷へるものは大悟するを得ん。

▲汝等吾に從へ天國に逍遙せしめん。

▲汝等吾に從へ不老不死の妙藥を與へん。

月にむかひて　　下野なほ子

澄み渡る鏡のやうな月の面に見ゆるのは、平和の影ではあるまいかと思はれる。月は庭の櫻の木の上に宿つて居る。樹下に彳む身分はよい月だと思ふ刹那、思ひは遠き滿洲の野へとんだ。腥風みち鮮血淋漓たる戰後の野戰屍横はる山間彼我の夜營亦十字の天幕皆平等に暗黒なる戰場を照らすのもこの月であらふ。鴨綠江沙河

の川水に破けては何か戦秘なさゝやくのであらうとまで想像すると物淋しい、思はず二三歩かけ出してふりかへると月は自分のすがたを地上に濃く印してあった。

夕の思　　　　さつき

今しも夕日は谷間に入りて、遠き山寺のかね淋しう哀れにひゞき渡り、青葉がくれになく不如歸の一聲、血をはく如くきこえて、いよ〳〵思は千々にみだれ、糸のつゞらんすべもなく、落つる涙をおさへつゝ、そらを仰げば、三日の月かすかに、眉のごとく中天にかかりて、此寂たる世をてらしぬ。白く細く見つる峠道を、草刈籠を背負し里の童、牛を追ふ賤の男、いづれも覺束なげに横ぎりて、何方にか影はきえ、小歌を唄ふこゑのみ、幽かにきこえて又なくさびしくおぼゆ、あはれ此寂漠たる夕、たれか哀と思はざらんや。われは悲しの思胸に滿ぬるを。

笛の音　　　　ふぢ子

夜はいたくも更けたりけむ、四面は寂として人影だになきに、獨り破窓の下に、文讀める我を慰藉せんとにや、遙に聞ゆる笛の音の餘りに妙なるに、思はず耳傾けぬ。何處のみやびをにや小夜更けて唯一人朧月夜を友として笛吹く人の心の床しく聞く程にやうやう近くにつけ其調の高く低く或は緩に或は急に其すさびの巧なる事げに驚くばかりなり。あはれこその昔、たゝかひ起りし初つ方艦上遙に「鬱の山さしでの磯にすむ千鳥」を吹き給へる英雄ありときく。其音をきゝしあまたのますらをの心の内やいかなりけむと思ふにつけ、ゆかりもなきあだ人のさすびさへこよなう床しく聞えて、遠く笛の音の消え行きし後までも、尚我胸の中には彼音をくりかへしたりき。

勇士　　　　下野なほ子

出征軍人某を送るとの長旗幾流、春風にゆるくひるがへり、全村の人は忠勇なる士を見送るべく、老若男女山なし、幼兒は手に日章旗を打ふりつゝ萬歳の聲高く坂をなり來る時しも。手づな引〳〵獨り坂を昇りくる正服の軍人、行違ひざま馬上の兩勇士相かへりみて耳のほとりに手をあげて打過ぎぬ。兩者とも帝國の軍人一は左眼を白布もて覆ひし名譽の負傷者、一は戰場へ出づべく今しもふるさとを後に駒にむちうつ勇者、路傍の我とをと思はず萬歳。

女鑑に寄する文　　　　岐阜　中島もと子

片田舍に住める身の、文書くことも、いと覺束なくて、何か能きしるべもがなと、おもほゆる折から、友とちの勸めにより、さいつ頃はからず君の優しき文の庭に入り、務の隙もて繙きまたなき師の君ともなして愛でつるに、たま〳〵おほけなくも、三十一文字をつゞりたる、腰折ものして、寄せまゐらせしに、態なるみ筆をさへそへさせられ、なほみ心をこめ給ひし御賜物、げに女の玉梓のかゞみとも覺えて、いとうれしうおし戴きぬ。あはれ是よりは、獨いそしみ諸先生のみ教の流れをくみて、名にしおふ女鑑の千代萬代も、盡りなき光り輝く日の本のみ軍も、やがて、勝ち續きたる高き譽と共に、敷島の女ふりをも、いかで外つ國人にしめさばこそ、ひたすられきまつるになむ。

別れ　　　　群馬　筆のふし

學びの園に教草を摘み競ひ、遊びの庭に手をくみ交して、親しみし妹の無二の友雙子孃には明日此地を後に他國に赴く事となり暇乞に來給ひしを、妹は常の如く手を取りて庭に出で、鬼事に隱遊びに花園を廻り、麥畑をよぎり、さては菜の花陰に身を潜め、頭も肩も黄なる花粉に染まれつゝ、餘念無く嬉々と遊ぶ樣は、如何にして

も明日はかたみに袖分つものとも思ほえねど、そを忘れしにあらねは、遊びの折々に「若し又他へ轉じ給ふ折は、必ず知らせてよ」はた妾の住處記し參らせしに「など父君の名の下に様をつけ給はぬや君のにもつけ給へ」等と笑ひ興するにても知らるゝなり。さても暇乞とて坐の悲しき様はなく、却りてお別れの名殘りに心行く迄遊び樂しむ實に涌山數限なり。

前橋　林　房子

夕げもはやかたふき初れば、夕陽は西山にかたむき、四邊は薄墨色の如くいとさびしくなりぬ。折しも年若き一人の婦人、片手に四季袋を、片手にはおだまき草を持ち、とぼ〳〵と龍海院の大門をくゞりて、未だ墓標も新しくはあれど、遠く幽にて記せる文字しかとはわかれども、愀然として跪き、手にせる香花を手向け、潸々然としてなきつ。あはれ何處よりか吹き來りけん。物思はしけに、さゝげし花のちり〳〵に、そが衣手にふりかゝりぬ。たち昇る香烟縷々として淡し。さはれいつの世に此の名殘やたへやらん。

今様

世田ヶ谷　紺　さ　と　子

夏の月

琴の調をうちやめて
はたととまりて松枝に
さかんとすれば笛の音も
ひとり冴え行く夏の月。

さ　つ　き

ちる花

とばかり匂ふ櫻花
さはらぬほとの朝風に
花のさかりのはるすぎて
哀れはかなくちりにける

散花

浮きくろ花のかをたづね
そよふく風にさそはれて

下谷　月　姫

水上とほゝさまよへは
ゆくへな迷ふ花ふゞき

國の爲

く
命をまとに
いさみたゝかふ
都の春を
つとめよはけめ

本郷　日　暮　郁　子

國のため
ますらをよ
よそにして
くにのため

大和魂

國のためとて益良夫が
彈丸雨飛のその中に

神奈川　菊　子

なれし故郷をふり捨てゝ
亟す心のけなげさよ

遼陽陥落を祝ひて

ひろき野原におく露の
かゞやきわたる日影には
大空たかくまひあがり
うち懲したるますらをが

肥後　千　知　波　橘　子

ひかりは玉をあざむけど
もろくも消てちるならひ
上みぬ鷲を一矢にて
名譽のほどぞいさましき

出征中の夫君の夢を見て

祝へや君は目出度も
よろこぶまさへ木がらしに
枕にちかくなくむしに
まことなりせばいさぎよく

肥後　德　永　多　瑠　子

かちどきあげてかへりしと
うれしき夢ははやさめぬ
いとどさびしさまさりけり
かちどきあげてかへりませ

新體詩

春の暮

本郷區　星野千代子

二ひら三ひら又ちら〳〵　つれなの嵐に誘はれて
雪とみだれて降るはなを　あらと見止て乙女子の
漆の如きくろかみを　風に吹れてゆら〳〵と
花の後追ふろふたさよ　花は胡蝶か白ゆきか
こぼれてにほふ草の上　かりのま夢や結ぶらん
又も吹きくる花ふゝき　あえなく散て降る花は
裳すそにうれし綾模様　ふむも惜やと乙女子の
縫ばり持ちてはなびらを　ぬかんとぢつと打ち守る
すゝしの眼めぐき手よ　さゝんとすれば座ろ飛ぶ
飛び行く花の其か中を　あとなく追ひてつき山や
芝生の上をかけめぐり　取り集めたる一さしは
心もにほふ花の輪

夏の旅

さつさ

都のすまひ住みわびて　思立ぬるたびごろも
夏なほ寒き深山邊の　木の下陰を歩み行
目なれぬ里やしらぬ里　情けをかくる人もなく
こよひも草のまくらして　露にぬれつゝ伏にしを
みじかき夏の夜半なれば　ねむるほどなり山寺の
曉つぐるかねの音に　夢は儚なくさめにけり
露にしをれし我袖は　有明月におくられて
山又山をたどりゆく　旅路の身こそ物うけれ

少女の心

長野　田島みよ子

ねえ母様よどうしたの
十萬億土のかなたより
あたいの家に花を見に
雨しよぼ〳〵と降つた晩
いつお歸りと母様の
母様あたいを抱き締めて
涙こぼして泣きながら
何ぜ父様は春きても
母をせがむろ乙女子の
春になつたら父様は
吹く春風につれられて
御出なさると去年の秋
まだわすれません父様は
秋に細つた其の時に
どうなされたか知らないが
御話しなされた其れだのに
花が咲いてもきまさぬと
心のうちぞ愛度氣なし

春の思出

板橋　田中都紫子

しばしうき世の旅路なる
小舟ゑがくやまきて行く
かくて親しむ一年を
過し故鄕の春呼びて
ちいさく萠し若草の
人の世そゝぐ川波に
櫻木陰の逍遙に
笑みに萃るを仰ぎ見る
悲歌の君よ友もなき
愛の惡もたらちねの
かすみか浦のあさ夕に
筑波おろしのわびしさよ
なまろ少女のひなうたに
夢となかろゝ櫻川
葉のかげの冷けく
浮へる鐘のはたさびし
醉ひて罪なき里人も
露におしなき花やたれ
呪ひの國をされかしと
永久のみ愛にまちまさむ

希望

能登　金森かのゑ子

沖の汐風吹きあれて
夕陽かげをかくすとき
導く月の光あり
むぐろの中にかへる時
卵のほたしの解くる時
導く神の御言あり
海に命の舟うけて
浮世の波の仇騒ぎ
思ひはらよの花にかほる
流るゝ川に言葉あり
燃る焔に理想あり
人の心に希望あり

大波くだけて玉と散り
空のあなたに我舟を
長き此の世の夢さめて
胸のもだえの終る時
墓のそなたに己が魂
辛きわずらいなやみをば
夢にも泣くか鹿の聲
雨風如何にあらくとも
港入江も春告げて
空行く厂に啓示あり
夜の嵐に津試あり

菖蒲

下野　金子とし子

青葉繁れる沼尻に
水にうつりし姿をば
黄白紫紋取とりに

蛙鳴く日の菖蒲草
よその姿と思ひてや
競うて咲ける美しさ

ある夜亡弟をしのひて

石狩　加藤桂子

我に子供のなきゆゑに、
堅五郎もてつかせんと、
よろづに慈加へつゝ
敷にいれしはかきかそふ、
彌生の空もすぎ去りて、
我の庭に幾千もと、
色香高しと世の人の、
わが家嗣の花にして、

わが家つきはおとゝこの、
いまだをさなきころよりぞ、
育みひたし學び舎の、
その七年の春なりき、
夏しも來れば瑞枝さす、
咲たる中に一しほの、
愛はやすなるなでし子は、
うるはしき實を結ばんと、

月かげ清き秋の夜も、
雪ふりつもる冬の夜も、
年月かされ今はしも、
我もうれしきこゝろより、
せんは口をしそれよりも、
身にうけさせて花の香の、
はるばる遠きみやこ路に、
六とせ昔しの春なりき、
いともしたしき名は武、
内務省てふ官房に、
弟は更なりわれさへも、
つとめはげみてひと度は、
歸り來りてはらからと、
まちつるものをいかなれば、
雁の便りに聞しかば、
心も空にみだれつゝ、
枯野の声の面やせて、
誠にふかき姉上の、
心の花もいたづきの、
實をも結ばずわりなくも、
ひとへにゆるし玉はれと、
げにことわさにいふたとへ、
まゝならぬこそ浮世なれ、
老のたのしみ是のみと、
漸く咲しそのはなも、
まさに枯なん冬木立、
くすりをすゝめあるはまた、
野邊に遊びて氣をはらし、
こゝろの儘にゆるせしが、

まなびの窓にふみよませ、
火桶によりて文かゝせ、
十餘り八とせとなりければ、
せまけき里の埋れ木に、
あづまの空の朝日かげ、
いよいよ高く咲せんと、
旅立せしはあはれあはれ、
その身の幸は都べに、
白仁の君の惠みにて、
つとむる身とぞ成にける、
こよなき事と喜びぬ、
錦まとひて故郷に、
むつみ語らんそれのみと、
たゞかりそめのいたづきと、
都のかたを打ながめ、
うれたく思ふ折からに、
歸り來れるわがいろと、
情の露に咲そめし、
あらしにちらん身となりて、
わが家に歸るはづかしさ、
涙ながらにかこちけり、
月にむら雲花に風、
千々に心をくだきつゝ、
朝な夕なにやしなひて、
うしや實もなくいたづらに、
とはいひながらくさぐさの、
草木の芽ぐ春の日に、
その身のこのむ何事も、
たゞいたつきのおもりゆき、

いまはふし床によこたはり、
窓にとひ來る燕の、
病はいよ／＼はげしくて、
此世の名殘夕日かげ、
日の若みやにたび立ぬ、
よるべ渚の捨小舟、
ともに消んとおもひしを、
いそしみはげみしかひありて、
杖よはらしと行末の、
みどり子なきをくゆるなり、
みては弟をおもふなり、
見ては弟をおもふなり、

奈良八景

春の光のほの／＼と、
けふ九重の牡丹よし、
跡なき雲の消えはて丶、
今も昔をそのまゝに、
にぬりおばしま雨晴れし、
長き日影をすきかてに、
玉の小柳枝たれて、
音なき水にあこかれて、
光さやけき秋の月、
池、空明にますかゝみ、
夕つく日影たゆたへは、
くまなくさえし晩翠の、
春日の社は神さびて、
あしとくすぐの夕立は、
蟲橋の行人は、

床にいけたる花ながめ、
啼音をきゝて日をふれと、
五月の二十日その日をば、
かけうすらぎて久かたの、
跡にのこりしわが身こそ、
綱手はきれてたのみなく、
おもひかへしてなりはひに、
いまはたのしき身となれと、
老の身のよるわか松の、
同じ若葉の學友を、
同じ若葉の人とちを、

本郷　西岡古代

かなるも床し八重櫻、
奈良の都の跡いづこ。
あはれはかなき人の世を、
見るもたふとし八の景、
南円堂の藤の花、
見るも床しやふさ／＼と。
靜雅にふけし佐保の川、
螢ちりかふ影すゞし、
影をやとせは猿澤の、
むかふ心にくもりなし。
雲の三笠そうつくしき。
み空を高う鳥も見ゆ、
安らにねむる鹿の群、
繪にも似たるか雲井坂。
三人五人うちつれて、

平和に酔へる大佛の、
鐘一つ／＼にうすれゆく。

短歌

出征軍人に　　愛媛　高橋茂子

我身にて我身にあらぬ君か身そ暑さ寒さをよく／＼いとひませ

葉さくら　　和歌山　高内さくら子

青柳とおなしみとりになりにけりゆきとまかひし花のこずゑも

古寺鐘　　和歌山　高内さくら子

つく／＼と物おもふ身にひゞくかな横河のおくの入相のかね

戰死せる人の親を想ひやりて　　長野　田島みよ子

君がため命すてし我子はまれなりと くちにはいへとめに涙あり

古き頃よめる歌とものなかに　　下野　井上尚子

さひしさに友のかたみの琴ひけは 名なき小とりのきてはさへつる

梅雨久　　東京　田中都紫子

ひめ君の緋牡丹みいるかけみえて日はしつみ行く春のおはしま

春の野に遊ひて　　大和　栗山俊子

さみたれの雨にこもれる 我いほはとなりも遠きこゝちこそすれ

松原みれ子

春風になかきふりそて吹かせつゝすみれさく野に遊ふたのしさ

待時鳥　　さつき

ほとゝきすなとなかさらんうの花も つき夜もなつの色のみえしを

新樹　　茨城　西野春萩子

島との丶燈火きえて舞ひめのそてのみ見ゆる夏のよのつき

小　　肥前　藤松りか子

むら雨のふるはこぼれて うふすなの森のみとりのかけそすゞしき

螢　　世田ヶ谷　紺そと子

つきゝよき川面わたる夕風につゆとこほれてほたるとふなり

[illegible]　　伊豫　金田春子

春ことに友とめてにしまなびやのひともとさくら花いかならむ

花を見て　豊後　佐藤家子
さきにほふ庭の櫻の下かけに友とあそびし春をしそおもふ

新樹　札幌　小山松枝子
隣より呼ふ聲のみはきこゆれどすかたも見えすわか葉しけりて

あやめ　秀子
池みつにうつろふ影のあやめくさゆかりのいろのふかくもある哉

靖國神社の大祭禮なるをきゝて　野乃露子
國のため仇のあらのに果し人をまつろけふこそかしこかりける

薔薇　福島　三森須磨子
まさかりの日をゆひをりてまつわれをさとりかほなるはらの初花

蛙　和歌山　谷井濟子
雨そゝく野澤の水にこゑそへてかしましきまでかはつなくなり

無題　茨城　中村たか子
さらぬだに思ひ出てゝはかなしきを笑めるみすかたさらに戀しき

滿洲の叔父の許へ　土浦　琴軒女子
吹くたびにかたり聞せむと思ふなりこの風ゆかなもろこしの野に

花見して　伊豫　さゆり子
花見かへる友かりとひてわかたなん袖にも身にもあまる色香を

親友の文を見て　伊豫　さゆり子
眞心のあふるみ文てにとりてくりかへしみて袖をしぼりぬ

同情　伊豫　せき子
背を思ふ君かみ筆の露けさにいよゝ衣手ぬれまさるかな

山に遊ひて　伊豫　灘子
我庭にすえて見まほし山深き谷間になしき石のかず〳〵

躑躅　神奈川　たつ子
夕まくれ山の下庭そま人がかさしてかへるにつゝしの花

夢　神戸　今西みさを子
なつかしきわか古里の春の野邊夢に見てさへうれしかりけり

雨中新樹　岐阜　中島もと子
ふる雨になみきのやなき李のくもしける下かけかはつとふ見ゆ

曉水鷄　岐阜　中島もと子
有明の月にもまかふ卯のはなのかけほのくらく水鷄なくなり

人に牡丹を送るにそへて　日向　岸上はる子
賤かやにちりもはてなははつかくさいかになけきて吾たうらみむ

春月　和泉　中江なほ子
我屋との櫻のはなにつゝまれておほろに見ゆる春の夜の月

水邊藤花　能登　金森かのゑ子
水えかく影もやさしき藤の花なかれゆたかに春ぞ澄み行く

名所春霞　同　同
こゝろなき人に見せしとはるかすみ二見か浦を立かくすらん

待郭公　津市　神田みよし子
ねもやらで今宵もまちぬ心あらば一聲ならせ山ほとゝぎす

落花を惜む　長野　春ひさよ子
うつくしくさきにほひたる櫻花ゆふへのかせに散るそはかなき

愛國婦人會に加入して　肥後　佐々有鄰子
國のため女なれとも千萬に心つくして仕へまつらん

時局　三河　榊原てる子
まち〳〵し南の海にいさましきほつゝのひゝき今きこゆらん

若草　紀伊　白蘭女史
白雪の消ゆるまに〳〵もえ出てゝむら〳〵青し野路のわかくさ

岸柳　本所　三坂きやう子
程ちかき渡しまつまもかわかせにみたれてかゝるきしの青やぎ

鶯宿梅　赤坂　新瀬うめ子
はるされば梅の梢をやとゝしてゆうくれことにかへる鶯

冬月　東京　桑原小松子
小夜更けて淋しく冴えし月かけもたれ訪ひよらん人とてもなし

失題　麻布　壽川瓊妃
うれしくもさきにほひける梅の花ひとえだ手をり雛にさゝげん

雛祭　麻布　桑原糸子
雛祭るいへのこにはにもゝさきてはるをかきりの花かせそふく

同　麻布　小田ゑひ子
今もなほ昔しのなごりとゝめつゝ雛まつりするいへのありけり

同　麻布　高張ちよ子
わかそのにさきそめにける桃の花いさやたをりて雛にそなへん

野遊　東京　茂々代
けふもまた野邊にひとりを暮さなん菫つばなを摘みはやしつゝ

竹　埼玉　戸田折香
淸くしてすぐなるふしの吳竹を學びの窓の友とこそみれ

軍旗をさゝげて立てる鬼大尉の繪を見て　三河　榊原てる子
たをるとも君がいさほは朝日さすみはたと共にかゝやきにけり

雨中柳　肥前　藤松りか子
ふる雨はいとはれぬれど靑やぎのいとをつらぬく玉のゆかしき

鶯の初音きゝて　三河　榊原きく子
鶯のなくねうれしと下りたしば梅のひとひらそと散りにけり

寄梅戀　肥前　藤松りか子
こゝろなき人にみせばや年ふれどかはらでにほふ梅のいろかを

折にふれて　愛媛　高橋茂子
友はみないくさの庭のはななるを一人われのみふゆ枯れにけり

深山冬の月　下野　井上滋子
さよふけていとゞ冴えたる深山路の月にさけぶかおほかみの聲

星　京都　竹下すえ子
ともすればなみだ溢ふるゝ此夕へみ空の星のまたゝきにけり

老松古幹を題に　下野　井上尙子
ふかみどり奇しき松が枝あめつちの史をひめてや幾代へぬらん

出征軍人の首途に　神田　山田ふみ子
やがて世に香はしき名のあらはれむ君のかどてに梅さきにけり

兵士の遺骨分配式　夕張　小山春枝子
たけび夫の靈魂添ふらむ骨のあたり居並らふ殿子しはたき多し

名所春月　長野　山本民年子
大空はくもるともなくはるの夜はさくらの山にかすむつきかげ

遠征の士を想ふて　長野　小泉みつじ子
きびからをしきれの夢やいかならん血もこほるてふもろこしが原

若菜　廣島　宮本之江子
さげ髪の乙女手に手をとりがはしつむやわかなの雪はらひつゝ

初春海　牛込　石井貞子
和田の原波しづかなる初はるのかすみをわけてお船こぐなり

富士の山　群馬　廣子
名にたかき山てふやまは多かれどけにふじかねのいやたかき哉

水仙　京都　竹下すえ子
なき毋が手植えのまゝに咲き出ていいしくもかほる水仙のはな

折りにふれて　東京　北村妙子
みいくさのたゝかふことに勝つ樣をこゝろありけに梅も笑みけり

大和心　築地　北郁楓子
今年こそさかりをきそへ山さくらまごゝろあかきますらをの血に

初春池　播摩　横田春枝子
あつ氷とけてたゞよふいけのおもに春風ふきてさゞなみのうつ

時雨　和歌山　高内さくら子
小夜深くしぐるゝ音にねさめしてゆきにし人のいとゞこひしき

胡蝶　松山　たけ子
はなの香を袖でにしめてすゝな畑かなたこなたを飛ぶ胡蝶かな

常に思へる事共を　薩摩　松原峯子
嬉しきにはた悲しきにこひしきはとしふる里のちゝはゝのうへ

梅盛　肥後　德永萬壽子

たつれよる人の袂ににほふかなきみがのきはの梅のさかりは

新年松　　肥後　松村綱子

新玉の年のはしめは見なれつる松のみとりもいろまさりけり

梅盛　　肥後　德永而有子

雪とのみあやまたれけりみ園生のもゝ木のうめの花のさかりは

同　　肥後　澤田春子

春ことによはひのばさん庭の梅八重もひとへもいま盛りなり

同　　肥後　松村綱子

みなれつるわが庭なれど今さらに梅のさかりはあかすもある哉

同　　肥後　千々波橋子

梅の花さきのさかりをきてみれは袖もたもとも香ににほふなり

同　　筑前　廣瀬花子

盛りなるうめさくやどをとふひとのかさす袂も香ににほふなり

おりにふれて　　信濃　吉田落葉子

みいくさのにはに立たすも國の爲ともに盡さんをみなながらも

春寒　　岐阜　中島もと子

うめの花たをりてさせしかめの水溝こほりしてさむくもあるかな

人々の提燈行列とてにぎ〳〵しくちまたやちまた戦勝のことほぎの運動するをみてよめる　　埼玉　横田秋子

世の人のこゝろの光りかゞやきて君か代いはふよるのにきはひ

自轉車　　札幌　小山かく子

やみをぬふ星かとまがふ自轉車に乘り行く少女さてもいさまし

折にふれて　　淡路　春海玉枝子

父こひし母なつかしとたびそらに雁をながめてふるさとしのふ

海邊霞　　大和　栗山高子

夕日影なみちのすえにいりはてゝかすみこめたる沖つしま山

還暦の賀を祝して　　愛媛　高橋茂子

ひなつるも齢かされてあそふらん千と世をちきる松のこすゑに

蝶　　肥前　藤松りか子

春かせのわたるすゝなの花の上にいとおもしろくまふ胡蝶かな

姉妹碁を圍みて　　愛媛　薫子

何事も睦ひかわせるはらからも圍碁のすさひはゆつらさりけり

出征中の君へ　　愛媛　さゆり

心こめて捧けし御旗をまの當きこしめす日やいつにかあるらむ

丸山文次ぬしの輜重隊に入營せらるゝを送りて　　長野　山本民年子

さま〳〵の擔ひものより大君ののりことをこそ重しとおもほえ

暮春雨　　上總　飯田かつの子

暮てゆく春をしみてなかむれはゆふへをかけて雨さへそふる

夜櫻　　三河　榊原きく子

大空のつきもかすみにおほろにていつくともなく梅か香そする

茨城縣女子師範學校長兼水戸高等女學校長從七位本田嘉種君は妾が父の舊門生なり明治三十七年十二月茨城縣女子師範學校及水戸高等女學校の年末終業式に於て本田校長の演說の筆記を見て　　肥後　佐々有鄰子

寶劍鏡のひかりみかけよとをしへみちひくことばたふとし

旅順陷落　　東京　大塚里子

かちときにくがもうな路もゆるぐらん旅順の城に御はたさゝけて

投稿募集

歌

七月（夏月。魚。）……郭公をきく

八月（掬泉。老人。）……避暑旅行

九月（草花先秋。古寺。）……日記の一節

文

短文　短歌　今様　新體詩　其他隨意



慰勞天幕へ恩賜

日本基督敎靑年會にては軍人慰勞の目的を以て昨年五月鎭南浦及安東縣に慰勞天幕なるものを開設して新聞雜誌の閲覽より各種娯樂の設備を爲し又無料理髮、紙、筆、墨の供給より書簡の代筆を爲し折々は宗敎道德其他士氣を皷舞すべき講話等を爲し以て出征の軍人を慰勞しつゝありしが意外の好結果を奏せるより漸次鳳凰城、大連等各處に增設し我同胞が彈丸雨飛の間に辛酸を甞めつゝあるを慰問し來りしが今回右の事實上聞に達し去月六日　兩陛下より同會へ金一萬圓御下賜の御沙汰あり依て江原素六、米國公使館譯官ミラー兩氏宮内省に出頭して恩賜を拜受せし由同事業は米國大統領、英國皇帝其他歐洲各國の君主にも賛同せらるゝ向き少からず曩には屢々我が皇族方よりも御下賜金等ありしといふ

出獄人保護所へ恩賜

東京出獄人保護所は去る明治三十年一月英照皇太后崩御の際大赦にて出獄せる囚人にして便るべき無き者を收容し之に職業を與へ自營の途を得せしむるの目的を以て創立し以來今日に至れるが右の趣き上聞に達し去月十三日　聖上皇后　兩　陛下より特に金千圓御下賜の御沙汰ありたり

兩殿下の御仁慈

常宮、周宮兩内親王殿下が萬事に御仁心深くわらせらるゝことは屢々報じたりし所なるが倘漏れ承る所に依れば御養育主任佐々木伯微恙に付去る十五日還啓の供奉を免ぜられしは兩く全殿下の御仁慈に出でたる者にて伯は推しても供奉せん事を再三願ひ出た

るも「老年の事なれば十分攝養すべくばゞ（伯爵夫人の事）も差置きて宜し」との有り難き御辭わりたれば伯も座ろに感涙禁じ敢へず兩三日滯在する事と爲り伯夫人に萬事を托して供奉せしめたる次第なりといふ

義勇艦隊婦人部組織改正

帝國義勇艦隊婦人委員部にては遠からず其組織を改め舊藩主、師團長、鎮守府司令長官又は府縣知事の夫人をして各一府縣を擔當せしめ之に朝野名望家の夫人令孃等を附屬員として支部を組織し常務掌理の外、中央本部派遣員或は支部員其他と共に頻々巡回講話を爲さしめ以て大に一般婦女子の海事思想を奬勵し併せて同艦隊製艦金募集事業の完結を取急ぐ事にすべしと云ふ

篤志看護婦人會の證書授與式

篤志看護婦人會にては去月十四日午前十時飯田町の赤十字本社に於て第八回修業證書授與式を行ひたり本會總裁閑院宮妃殿下並に名譽會員伏見宮久邇宮、梨本宮の妃殿下御臨場あらせられ會長鍋島公爵夫人先づ修業證書授與式を擧ぐる旨を告げ專務幹事修業證書受領者を呼び出し順次總裁殿下より御親授あらせられ終て松方社長の演述あり右終りて殿下御退場次で各員退場休憩所に於て茶菓の饗應ありたり修業證書授與人名左の如し

松本貞子、田中鱗子、三坂たつ子、塚越久賀子、徳岡飛佐子、山本三喜子、大谷かち子、濱田琴子、梅田とよ子、岡澤千枝子、山川操子、侯爵夫人黒田清子、岸田倫子、江副靜子、男爵夫人毛利正子、比志島雪子、西村日出子、鈴木英子、海保なゑ子、井上勝子、鍋島清子、豐島延子、瀧谷知和子、伯爵夫人松平明子、高木千嘉子、仁杉うた子、子爵夫人鍋島貴子、大野うの子、伯爵夫人小笠原貞子、金子たつ子、三井榮子、横田武子、[illegible]田孝子、栗田ふじ子、落合米子、酒匂治子、渡邊いね子、川上春子、奈良光子、山之内關子、增野京子、子爵夫人細川同子、末吉いし子、合計四十三名

英國公爵夫人の好意

在東京、英國人ボビル孃より多數の虎列剌豫防用腹卷に左の書狀を添へ我出征軍人へ分配方を大本營堀

内中佐に依頼し來たる由
拜啓在英國の妾の一友人及び其叔母に當るクラフトン公爵夫人は共に日本に同情を表し出征軍人に何か有益なる品物寄贈致度希望罷在候處今般英國産フランネルの大包を送り越し候に付嚢にヒューム中佐夫人より出征軍人へ寄贈の爲め貴下に御送附申上候腹卷の型に倣ひ別包の通り虎列刺豫防用腹卷調製の上御送附候間可然御分配被下度多少御用に相立候へば幸甚の至に御座候尚右フランネルを荷造りしたる英國一商店の賣子は同品の行先に付き興味を感じたるものと見え一小紙片を附着し左の如く記入有之候間御笑草にも相成んかと茲に書加へ候拜具

『イヨウ!!!日本萬歳萬々歳』

五月五日　ローラ、ユー、ホビル

カーネギー夫人の書面
(日本軍人遺族費に就いて)

プレザー夫人が紐育交際社會夫人協贊の下に日本軍人遺族費募集の爲め演藝會を催ふすに付き協贊人の一人たるエリオット夫人がカーネギー夫人に書を送りて協贊を求めたるに左の答書に接したりと同夫人の書面を意譯するに

拜啓陳ば貴婦人の御計畫に就き御書面請取申候へども同御書面はとても御相談相成兼候人にあてたるものに候半カーネギーと余とは全然同主旨に反對せる考に出でたく存じ候私共は神聖なる原因によりて起りたる戰爭を除くの外は戰爭には極力反對するものに有之候て容易に戰爭を開くをさけしめんが爲め人をして戰爭の爲め來たせし慘々たる有樣を覺らしむるは誠に有益のことゝ信ずるものに有之候へば軍人の遺族が他人の憫みを受けざれば生活する能はざるを知らしむるも亦宜しからんと存じ候又如何なる場合にせよ交戰國の一方にのみ盡すべきものにあらざることと存じ候

十一日　ルイス　バブリユー　カーネギー

此書面は十四日に催したる演藝會の委員會に於てすら公にするの好からざるを以て發表せざりしが内田夫人は其書面のことを聞き其寫を得之を内田總領事に示したり内田氏の該書面を得たるは十五日の朝にして氏は直に是を高平公使及び日本より特別のミッションを得て來り居る金子男爵に示したるに何れも其紙面に驚きて之れを飜譯し日本の各新聞に送ることに決せりとニューヨークタイムスは報じぬ

米國婦人四千圓を寄附す

紐育サンの記する所によれば此程一人の米國婦人總領事内田定槌氏を訪ひ予は日本の同情者也予は日本に對して我が力を効さんことを思ひ居るも多分の事は爲し得ずとて懷中より二枚の手形を出しこれ予の微意なりとて内田氏に與へければ氏は其芳情を感謝し領收書を呈する爲めに姓名を明されんことを乞ひたるに婦人は予は領收書を要せずとて立去りたる由なるが該婦人の寄附額は四千圓にして内三千圓を戰死軍人の寡婦孤兒の發育費に宛て殘る一千圓を赤十字社に寄附する筈なりと

澤野いと子の篤志

過日兵庫縣廳に於て芳川内相に引見され尙親しく其の工場に臨みて種々奬勵の詞を受けたる神戸市中山手通二丁目澤野いと子の篤志の事業を聞くに同女は相當の資産を有し愛國婦人會の特別會員にして洋服の裁縫を業とし家に數多の練習工女を置き其の接遇懇切にして奉公の志厚く開戰以來軍隊の神戸驛を通過するや晝夜に拘らず必ず自ら徒弟を率ゐて之を犒ひ國旗、團扇、ハンカチーフ、煙草、卷紙又は夫妻意匠を凝らして自ら調製したる煙草入に煙管を添へ贈るなど各種の物品を餞して其の行を壯にし專心送迎の事に從事し又新聞紙及び輕量の物品を郵送して遙に出征軍人の勞苦を慰むる等今尙異ならず其の費すところも頗る多額にして今日迄に寄贈せし國旗の數のみにても四萬以上に達し郵税の如きも每月數

十圓を費し其の熱情に感じて戰地より受くるところの謝狀は日々絶えざるを見るも其の一斑を知るべし又出征軍人家族遺族の救濟に關しても亦深く意を注ぎ老幼婦女子を奬めて自宅工場に集めレース編を授け稍其の業に熟したる上は相當の賃銀を與へ或は他に紹介を爲す等種々生業の扶助に盡力する折柄第四師團第十師團軍用被服等調達の請負を爲すに至るや之に要する職工は成る可く軍人家族遺族を使用することゝし其の多き時は男子の使役夫を除き女子百五十餘人の内其の過半を占め其の賃金も普通よりは增給し其の製品も亦大に佳良なるを得たり殊に陸軍より材料の交付を受け襯衣袴下の請負を爲せし際の如き服地に少からざる餘剩を生じたるより更に請負數以外に調製して納付し又自己の所有家屋の賃貸を止めて軍人家族遺族を同宿せしめて裁縫の便宜を與ふる等其の篤志洵に感ずべきものあり其の職工亦感化を受け自己の賃錢中より救護費中へ寄贈を申出でたるもの三十餘圓に及べりといふ洵に篤志家といふべきなり

婦女新聞社の園遊會

婦女新聞發刊第五周年紀念園遊會は去月十四日午後一時より向島花月華壇に於て開かれたり同社長福島四郎氏の開會の辭、三輪田元道氏の演說、其他新體詩獨吟、薩摩琵琶、蓄音器の餘興あり鮨、菓子、牛乳などの饗應もありて青葉若葉の綠の滴らん許りなる邊を徜徉しつゝ吹く薰風に髮梳らせながら同新聞に緣故ある女學生子供連れの妻君、又は紳士など數百人の其處此處に打連れて談話に遊戲に餘念なく一日を樂みしは最と面白かりきとぞ

○婦人夏衣さま〴〵　花も何時しか青葉となりて照る日の影さへ早や夏めくに至りしかば松屋呉服店にては參考の爲め當季の賣出しに大江戶繁華の頃殊に文化文政年間に於ける婦人夏衣裳の染模樣を寫して優雅の品を陳列したり左に其の種類を記さんに

△派出模様中形の十種●●●●●●●● 千代田織綾り鼠地に早苗色石目繋ぎの蔦模様（三圓五十錢）同匹田崩し大輪の菊に村雨の織出し（二圓七十錢）與岡のお納戸地へ舟ずれの蘆に秋の寂びの見せたるもの（一圓五十錢）同縹い地に白茶の絞り（一圓六十錢）同鼠地薩摩格子に櫻貝（一圓六十錢）紅梅織鼠地の木目模様（二圓二十錢）同鼠地に中色匹田崩し大形の菊水（一圓六十錢）綿絽織中色の瀧縞の匹田の蔦唐草（二圓）木綿縮お納戸地に簾越しの葉柳（二圓）同若葉色細格子に今年竹の影（二圓）是等は皆江戸時代の模様を今の流行に移したる中形にして殊に梅雨晴れの端居珍らしき頃、俗に云ふ夏の取付きより三伏の暑さ川中扱は夕涼みと其季節に當篏め何れも風流の染模様なるが中にも千代田織石目の蔦唐草、絽織の瀧縞などは人の悅ぶ新柄なるべし

△上席向きの中形十種●●●●●●●● 紅梅織淡色の路考茶紅葉に時雨の模様（四圓）萬歳織空色霞の地に海邊の模様（二圓七十錢）同中色蔦垣の模様（三圓四十錢）絽織白地に淡香色の夜の竹（二圓五十錢）同白地に路考茶の龍田川（二圓）縞瓦斯織お納戸淡色鳴門の水模様（二圓二十錢）木綿縮淡色縹の瀧模様（一圓九十錢）同利休鼠地棚に蝙蝠（一圓六十錢）同白地藍染の麻の葉に蔦散らし（一圓二十五錢）同白地に藤色染めの七草模様但し三種ありて何れも趣きを異にせり（一圓五十錢）此中形は皆上品向きにて柄も模様も優美なり中にも藤色染めの七草模様は辻が花と呼びたる昔の御守殿模様を寫したるものにして令嬢向きには頗る好し又絽織の夜の竹是れは諸太夫の奥向きに愛でられし上品の柄にて涼風は袂より通ずるとかや

△帶地の種類●●●●● 厚板織、焦茶と路考茶の織分、中央に金糸と色糸を以て鳳凰の影を浮織にしたる片側ものの（八圓五十錢）博多織、地白に紅霞の熨斗目織、霞の中に金糸を以て鷺、澤潟の丸く縫取したる令嬢向きのもの（八圓五十錢）霞織、地色裏葉金糸の浪模様（廿九圓五十錢）鹽瀬織、素鼠色の地に金糸と

色糸にて嵐吹く三室の山の織出し模様（三十五圓）白羽二重地に香色一筆書き羽鶴（廿二圓）絽織、雲形の龜甲の浮織、地色漣素鼠雲形は白上り（十四圓）同薄路考茶白上りの漣模様（八十圓）同栗梅地若竹の透し織、竹の葉は浮織（二十二圓）同銀鼠地深山の秋色、瀧の模様は白茶、楓は白上り（二十圓）幽谷織、眞弓の地色、韓紅に水くゞる和歌の意匠、紅葉は色模様龍田川の水は濃く淺黄（二十二圓）此帯地は何れも蟲干の外人の目に觸れぬ昔し模様を普く蒐めて眞美を寫したる松屋が自慢の品なりとぞ

△風雅の男羽織 ●●●●● 絽織白茶の金通し、裏は山水の密畫、（價三十圓）黑絽紋付の羽織に此種の工夫を凝したるもあり（價十五圓以上三十圓）尚ほ御召の單衣、絽の襲ね、浴衣地の江戸模様は束髪向きの新柄ものと共に近日陳列すべしといふ

◎婦人持物と櫛簪　近來は何品に依らず元祿流行にて特に櫛、簪、煙草入等は最も元祿形の流行せる折柄なれば當季の同品も一般其の意匠を凝らしたるもの多し櫛は木地に黑鼈甲を用ゐ形は元祿時代の櫛を其儘當世向きに縮少し模様は柳、櫻、雪月花、浪に片輪車等の蒔繪を置きたるもの十七八歳より三十歳位迄の間に行はれ價は四圓より六圓、簪は元祿寫し團扇形にて木地は柘植に蝶貝、金銀箔の押地へ色漆にて五節句の模様又た表に菖蒲、裏に杜鵑を見せて高尾を利かせたるもの形は大中小あり價は一圓五十錢以上二圓位、派手向きなれば象牙の撥簪にて忍ずり、夜の雨等を青貝或は蒔繪にしたるあり形は大小あれど價は一圓五十錢位、持物としては懷中煙草入の地質は鹽瀬の友禪縫箔入にて形は花見小袖の仕立、模様は勿論元祿模様にて烟管入は共切に同様の模様、價は二圓位、夏持として適當なるは白鹽瀬白絽、明石等の地質最も善く之に墨畫を施したるなど隨分凝つたものなり價は大差なく一圓五十錢より二圓、令孃向き提袋は鹽瀬地友禪の縫にて浪に小槌車の疋田、市松疋田等面白く年頃十三四歳より廿三三歳位迄の間に行はる其價は四圓五圓位なり

新刊概評

▲太郎は如何に教育すべき乎　爰に『我子の惡徳』を著はして、世に歡迎されたる大村仁太郎の譯補にして、原著者は獨逸博士ア、マチアス氏なりといふ、譯者の言に曰く『我國の教育は今や其大體に於て整頓せるも、然かも其根蒂たる家庭の教育に於ては、讀者の滿足を購ふに足るもの尠なし』と洵に然り、此書の如きは此の欠陷を補ふに於て、大に裨益あるを信ず、子女薫陶上、必讀すべきは、實に此類の書に在りといふべし。（定價六十錢、神田區表神保町同文館發兌）

▲新編裁縫科教授書　裁縫教授を以て有名なる東京裁縫女學校長渡邊辰五郎及び同校教師渡邊かなる瀬氏の校閲修補したるものにして、名古屋裁縫女學校長楫川[illegible]式氏の著はすところなり、裁縫教授の方法を秩序的に編述せる此書の如きは、恐らく他に其類少なかるべし。（定價參拾錢、本郷區竹町東京裁縫女學校同窓會發行）

▲佐々木伯爵時局談（續篇）　日本魂の出處由來、其の靈妙なる活動等を、古今に渉りて例證し、丁寧に講述せられたるものなり徒らに自尊自大の風を養成するは、今の世に處するの道にあらずと雖も、日本武士の精粹は之を千載の上に求むべく、之を萬年の後に傳へざるべからざれば、其の眞面目を發揮したる本書の如きは、何人も熟讀すべきものなるを信ず。（定價未詳、麹町區飯田町五國學院發行）

▲革命婦人　女子は主動者にあらずして、主動者の使用する便利なる一の器械なり、器械に使はるゝ女子は寔に哀れむべきにあらずや、犯罪の裏面には婦人在りとせば、革命の下にもまた必ず婦人なかるべからざるは千古の眞理なるべし、著者は曰ふ吾人は溫良貞淑なる日本婦人に向つて、直に之に倣はんことを求むるものにあらず、世には斯の如く熱烈なる勇猛なる愛人の念に充ちたる婦人あるを見て聊か感奮する所あらんことを希ふのみと、著者の意果して此にあらば、彼の戀愛小說に泣き、輭文學にあこがるゝ女性達に向つて、寧ろ活火炎々燃ゆるが如き此書を讀まんことを勸むるに躊躇せざると同時に、平民社一派の人々に對しても、下らぬ戀愛の理など說きて、さらでも、ラブの何のと立騒ぐ妙齡女子の戀情を鼓吹するをばサラリと止めて、かゝる熱誠なる女丈夫の傳記を公けにし婦女精神の修養に心膽の煉磨に貢けんことを望まさるを得ず、文章平易にして活氣あり情馳せ筆到るの妙は、流石に平民社一流の長處なれば、何人も讀んで倦むを知らざるべし。（定價十二錢麹町區有樂町二平民社發行）

▲食物に於ける謬見正解　雜誌「實業界」の臨時增刊にして、歐米諸學者の經驗說及び之に關する多くの著作を參考として編纂したるものなりといふ、肉食を以て、最良の食物なりとする今日の議論を駁し、菜肉共に用ゆるの必要を說きたるところなど、確に一讀の價値なり、其他食物に於ける世上一般の誤謬を指摘して吾人をして首肯せしむるもの多し。（定價十八錢、京橋區元八丁堀博學堂發行）

▲日本の家庭　我國固有の優美善良なる家風を基とし、時勢の進歩に適する健全なる家庭を理想とし、殊に家庭の教育には尤も意を注ぐものゝ如し、紙の立派なる、印刷の鮮明なる、處々に寫眞版を挿めるなど、一見極めて華美なる月刊雜誌なり。（定價一冊八錢、神田表神保町同文館發刊）

寄贈書目

書名	號數	所在地	發行所
をんな	五ノ五	東京	大日本女學會
女學世界	五ノ七	同	博文館
大日本婦人教育雑誌	一七四	同	同教育會事務所
慶應義塾學報	九〇	同	慶應義塾
教育公報	二九五	同	帝國教育會
教育	六三	同	茗渓會
家庭のしるべ	一一	同	白木屋呉服店
大八洲雑誌	二二六	同	大八洲館
小學科講義録	毎號	同	大日本中學會
廿世紀の婦人	二ノ五	同	北海道婦人同志會
時好	三ノ五	同	三越呉服店
精神	一ノ五	同	精神學會
商家の友	三八	同	時事新報社
國學院雜誌	一一ノ五	同	國學院事務所
六合雜誌	二九三	同	ゆにてりあん弘道會
裏錦	一五〇	同	尚絅社
婦人と子供	五ノ五	同	フレーベル會
五月鯉	一ノ一	同	久良岐社
成功	六ノ五	同	成功雜誌社
直言	毎號	同	平民新聞社
婦女新聞	毎號	同	婦女新聞社
家庭週報	毎號	同	櫻楓會
愛國婦人	毎號	同	愛國婦人會
向上主義	毎號	同	久友社
東京經濟雜誌	毎號	同	同雜誌社
東京感化院月報	毎號	同	東京感化院
日本の家庭	三	同	同文館
女子の友	一六七	同	文友社
日本婦人	六七	同	帝國婦人協會
正教要話	六ノ四	同	教要社
體育	一三八	同	日本體育會
婦人世界	四七	大阪	浪華婦人會
新編裁縫科教授書		東京	東京裁縫女學校
太郎は如何に教育すべき乎		同	同文館
佐々木伯爵時局談		同	國學院
革命婦人		同	平民社
食物に於ける謬見正解		同	博學堂

定價

一冊 前金弍拾錢
三冊三ヶ月分 前金五拾七錢
六冊半年分 前金壹圓拾錢
拾弍冊一年分 前金弍圓拾錢

全國無遞送料

廣告料

五號活字廿三字詰一行 金三拾錢
半頁三十二行 金八圓
一頁六十四行 金拾弍圓
表紙一頁 金拾六圓

(色刷は特に御相談に應ず)

御注文規定

一切前金の事(但郵劵代用一割増の事)●前金領收證は差出不申本誌の到着を以て代金領收と御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に參錢切手御送附ありたし●爲替受取人は東京市京橋區築地貳丁目貳拾壹番地國光社と御認めありたし●振込局は東京築地郵便受取所へ●御照會の件は返信料御添附あるべし

明治三十八年五月卅一日印刷
明治三十八年六月一日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人 渡邊紫一

東京市京橋區築地二丁目二十番地
印刷人 河本龜之助

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所 株式會社 國光社
(電話新橋二六三九番)
(電話 新橋 特八八番)

女子及家庭必讀の書

三輪田女學校長 女子大學講師 三輪田眞佐子女史著	◎女子の本分	菊判和装全一冊	定價金廿五錢 郵税六錢
西村茂樹翁序 三輪田眞佐子女史著	◎女子處世論	菊判洋装全一冊	定價金三十錢 郵税四錢
高等女學校長 [illegible]女史著	◎女禮叢話	菊判和綴全一冊	定價金三十錢 郵税六錢
皇后陛下御歌 [illegible] 御詠 [illegible] [illegible]編	◎坤德鑑	菊判和綴全一冊	上製定價金卅五錢 並製定價金廿五錢 郵税金四錢
伯爵副島種臣題字 新泉堀内文麿編	◎家庭の鑑	菊判洋装全一冊	定價金十八錢 郵税金四錢
諸名家撰述 女鑑[illegible]編纂	◎新撰ひめかゞみ	菊判洋装全一冊	定價金二十五錢 郵税金四錢
澁谷愛著	◎萬國女子風俗	四六版洋装全一冊	定價金廿五錢 郵税金四錢
新泉堀内文麿著	◎少女讀本 雪の巻 月の巻 花の巻	菊判洋装全三冊	定價各冊金十八錢 郵税各冊金四錢
子爵福羽美靜序 下田歌子校定 指原乙子女史編纂	◎女子文章軌範	菊判和装全一冊	定價金三十錢 郵税金四錢
生田目經德編	◎標注 雅文消息集	菊判洋装全一冊	定價金二十五錢 郵税金四錢
伯爵東久世通禧題字 杉谷正隆編	◎家庭訓話 修身百首	菊判洋装全一冊	定價金二十錢 郵税金四錢
堀内新泉著	◎家庭小説 女樂師	菊判洋装全一冊	定價金三十五錢 郵税金六錢
幸田露伴編	◎小説 四季物語	袖珍形クロース 銀地型押美装	定價金九十錢 郵税金四錢

發兌元 東京築地 株式會社 國光社

第五回内國勸業博覽會

賞牌并に褒狀受領

壽美禮おしろい

登錄商標

五二會品評會功勞綱牌

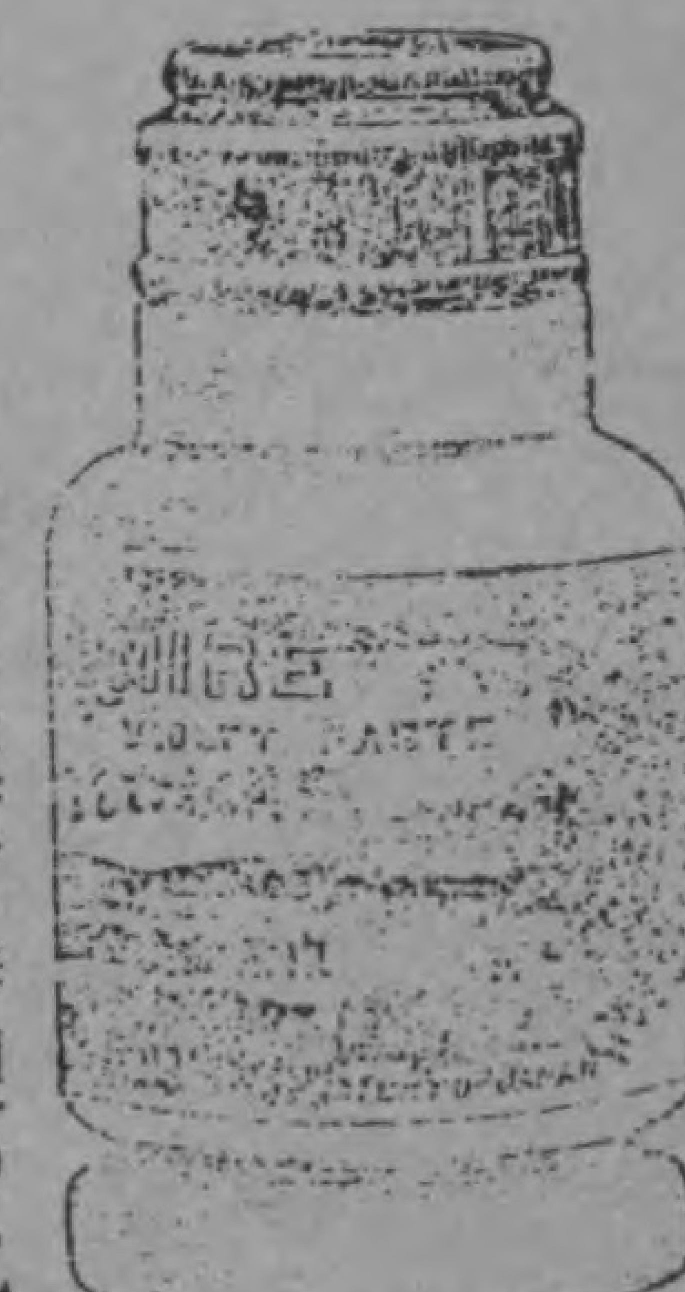
THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE

ヴァイオレツト煉製
錫蓋附乳白硝子器入
壽美禮おしろい

壽美禮おしろい

れり製 定價 大壜 二十錢 小壜 十二錢

水製 定價 大壜 二十五錢 中壜 十五錢 小壜 十錢



ヴワイオレツト水
スミレ水白粉



鍋栓附乳白硝子壜入

すみれ白粉は歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭が素の新成蹟機等を以て配劑したるを以て皮膚を艶麗ならしめ芳香馥郁として長時間保續するの特性あり『壽美禮白粉』は常に用ひて御顔肌等の色を白變せしめきめをこまやかに、にきび、そばかす、あせも等を生せず容肌へを滑々しく天然の白色きに至るべし『菫おしろい』は芳香馥郁長く保つが故宴會觀劇舞踏の場所に臨て諸々の惡臭を退け不淨を拂ひ心氣を清爽快活ならしめ衛生上有益無比の逸品なり『壽美禮白粉』は高等優美にして其意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方今東京横濱に於て上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

皮膚艶白劑

壽美禮あらひ粉

罐詰 六錢五厘

緑、藍、紅彩蝶畫ひボックス入三錢

袋入 壹錢

(一) 弊舖製造の壽美禮洗粉の義は方今歐米諸國に專ら賞讃する香料及弊店新製の原料を用ひて製せし物なれば朝夕此洗粉を御用ひ給へば漸々皮膚の色を白くし美くして艶を出しきめをこまかに常に御肌を清々しくなし總而皮膚の患ひにかゝる事なし

(二) 常に髮洗ひに用ひ給へば毛の拔る病を豫防し毛のくせを直し美くして艶を出し髮のねばりを取り油あかふけ等を生せず又絹綿布等に用ひて能く污垢を落す總て物を漂白する性あり

(三) 使用法は普通あらひ粉の半分にて能し水又は温湯に溶し又はぬかに混ぜ入浴の際用ふるを良とす

登錄商標

西洋色白くなるあらひ劑

SUMIRE.
WASHLNG IOWDER.

壽美禮あらひ粉



製造本舖

東京東兩國(兩國橋際)元町

伊勢吉壽美禮堂謹製

賣販所は全國到る處小間物店化粧品店賣藥店其他各物工場各劇場運動場に有り

明治三十八年四月一日發行　毎月一回一日發行　第拾五年第六號　明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可